
魔法少女リリカルなのはStrikerS EX【 , Us】

白金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers EX【'Us】

【Nコード】

N68620

【作者名】

白金

【あらすじ】

物語は、いつも突然始まる。どこまでも自由に。

白銀の腕輪をつけ、異世界から飛ばされて来た少年と、少年が出会う仲間たちが織り成す物語。始まりはイレギュラー、しかし、ある意味それは必然だったのか

語の【門】が開く

お気に入り登録、感想、

質問、リクエスト、メッセージなどは随時大歓迎！作者のやる気に火がつきます。

そして、この作品のオリジナル主人公が大活躍する原作、*Uroboros*【再の章】も面白さでは負けていないので、応援よろしくお願いします！

はじめに【要必読】【2/6更新】

はじめまして作者の白金です。

今回、作者のオリジナル小説とリリカルなのはを合わせた二次創作小説を作らせてもらうことにしました。

当作品には多数のオリジナルキャラやストーリー、世界観や設定が多数盛り込まれるので、そういうのが苦手な方は申し訳ないです。

作者は素人ですが、精一杯頑張っていくので生温い目で見てやってください。

3

感想、質問、アドバイス、お気に入り登録ら大歓迎。評価などはそのまま作者のモチベーションに直結してます。

メンタル面が非常に弱い作者なので特に【感想】【お気に入り登録】【評価】が増えると作者の更新スピードが上がります。

この小説が一人でも多くの人に楽しんでもらえればクリエイターと

しても嬉しいです。

それでは、魔法少女リリカルなのはStrikers EX【U
S】が始まります。

プロローグ『ダイヤモンドとエンピツの差』(前書き)

はい、ようやくプロローグが完成しました。まだシステムの使い方がよくわかってないので、苦労しました……

普段書いているところではそれなりのページ数になるんだけどこっちは割と少ないのかな？

イマイチまだ掴めてないけど、とりあえず本編をどうぞ！

ブローグ』『ダイヤモンドとエンピツの差』

帝国内のある場所、街から幾分か離れ草木が豊かな丘の上に建っているのは何てことのないごくありふれた普通の二階建ての家。

その家のある部屋、広さ十畳程度の部屋の中には最小限の物しか置かれていない。

机にベッド、それに一際目立つのが設置型の大きなクローゼット。

机には何やらビッシリと細かい文字やら図形が書き込んであるノートと基になっているであろう本が乱雑に置かれている。

「ん……あああッ…」

椅子の背もたれにおもいつきりもたれ掛かりながら伸びをするのは普通より少し長めの黒髪に深海を想わせる蒼色の瞳。

容姿はどことなく中性的な少年。

外出して帰ってきてから着替えていないのか服装は黒のジーンズにラフな上着、その上からは朱と黒が混ざった幾何学な生地が薄いローブのようなコート。

左腕には誰が見ても高名な職人が造ったであろう白銀の腕輪が陽光に輝きを放ちながら付けられている。

「どーすりゃいのかわっかんねえ！」

クルクルと椅子に座りながら回転する少年は悩みの元凶たる代物に視線を向け唸りに唸る。

少年がこのようなことを言い始めてからはや二時間弱、簡略するならば少年は帰宅してから着替えもせずに二時間弱、こんな状態が続いているのだ。

そもそもの発端は、こんな会話のやり取りから始まった。

「あ……悪りいな、コイツは買い取れんわ」

「……………は？」

「だから、コイツは買い取れねえんだって言ってんだよ」

すべてはこの会話から始まったといっても間違いではない。

ここは帝国の中でも辺境と呼ばれるくらいに端にあるとある街で、少年の住み処からはかなり離れている。

何故に少年はこんなにも遠い街にまで足を運んでいるのか、それは今いる場所に関係があった。

治安は最高に良く、はっきり言ってしまえば事件らしい事件などここ百年ありもしない平和すぎるこの街の路地裏のさらに奥にヒツソリと開店しているのは、オブラートに包むならば一般の市場には決して流通できないであろう『訳あり』な品物を扱う店。

ただし、品物とはいってもそこはプロ中のプロ 簡単に足がつかよようなヤバイ物は決して買い取らないのがその店のポリシーでもある。

当然、そんな店だから看板も無ければ店名などもありはしない、外見からはただの民家にしか見えない　いわゆる玄人向けの店と
いったやつだ。

ならば何故に少年はそんな店にいるのか、答えは簡単。

少年は売りに来たのだ。明らかに一般市場などでは売れないであろう一品を。

ただ、お分かりのように少年は現在、持ち込んだ品物の買い取りを拒否されている。

「な、なんでだよ!」

当然のこと少年からしてみれば「はいそうですか」などと引き下がるわけにはいかない。

少年の住み処から此処までの距離は相当なもので、わざわざ遠いところをハルバル来たのは絶対に足がつかないためで、ここで引き下がるということはハッキリ言ってしまうと“無駄足”になるからだ。

まあそれも少年の側の都合で、店のほうには一向に預かり知らぬ

もの。

「あのなあ……いくらうちが訳ありの品を買い取るっていつてもなあ、何でもかんでも買い取るわけじゃねえって知ってたんだろ」

「なんでだよ、あきらかに高そうだろ！なあ頼むよ、ワザワザ鼻屑にしてんだからさ ……このとおり！」

手を合わせ拝み倒しにかかる少年にため息をつきながら店主はアイ・ルーパーで少年の持ち込んだ品物を鑑定するも、さらにため息を吐きながらもカウンターにそれを置く。

「だいたいお前さん、コレが何なのか分かるのか？」

「何って、宝石かなんかを含んだ原石かそんなんじゃないのか？」

「なんだ、本当に知らないのか……」

さらにため息まじりに店主は呆れた様子で少年に説明をし始める。

「いいか、こいつは宝石なんかじゃねえよ。こいつはな、『契魔石』っていう鉱石だ」

「『契魔石』…なんだそれ？」

「お前さん、年齢的に使い魔は…まだいなかったか」

「ああ…」

「そうか。こいつはな、使い魔と契約する時に異世界の【ゲート門】を開くための鍵として使われる鉱石だ」

「……………つまりは…」

「ああ、お前さんの想像通りだ。使い魔召喚の儀式には専門の設備が必要で、かつ、儀式を行えるのは魔法に携わる人間。回数は例外を除いてたったの一度だけだ。」

つまり、コイツには価値なんざ殆ど無いそこの石ところ同然つてやつだな」

「そんな…馬鹿な……………」

「そうだな、こいつは純度も高そうだからな、お前さんが三百年く

らい昔の人間なら高値で売れたかもしれんが、今となつちやあ使い魔はそいつ自身の魔力と素質に惹かれるって証明されちまつてるからなあ」

残念だったなあと豪快に笑う店主にうなだれる少年。

確かに営利を目的にするということは価値の無いものには金など付くわけもなく、ただただ無駄足という散々な結果が確定した瞬間でもあった……

「ま、待て待て！つてことは…まさかこれも！」

「そういうことだな」

店主はカウンターに置かれている少年が持ち込んだ二冊の分厚い本のような物に視線を向け、金色の方を手取る。

「こいつはな、『絆の書』っていつてな、まあ簡単に言えば使い魔と契約した時に使う専用のアイテムってやつだ。

ちなみにこつちのは召喚獣用のほうで『盟友の書』という。

両方とも使い方はそんなに変わらん。契約の証であるカードを窪みにはめるだけ。ああ、召喚獣のほうはサインが必要だったか…

まあ、使い方はその中に書いてあるから暇つぶしに読んでみる。

ちなみにこの二冊も広く出回ってるからな、買い取る価値はないんだがな」

「ってことは……完全な無駄足ってことか!!」

店内に少年の魂の叫びが響く……

こうして、何の成果も無いままに疲れきった少年は自分の住み処に戻り現在に致るというわけだ。

「くっそお……あんなところに大事そうに保管してあったんだ、普通誰だってお宝だと思っだろう……」

あッ!……どうにかしようにもコレ、どーすりゃいいんだよお!」

目下、少年の悩み。それはコレらの処分方法である。

元々がコレらは少年がとある依頼の最中に偶然、ついでに手に入れたもの。

価値があるものならと換金を考えたが結果は散々。

有効利用したいところだが会話から得られた情報からはどうやらそれも難しく、外見新しいが、このままでは本当に無意味なガラクタでしかない。

「……やるしかない……」

ふと、少年の思考はある結論へと至る。

「いや寧ろやってやるうじゃんかよー!」

確実に言えるのは、いま少年が考えていることは間違いなのは言うまでもない。

ただ、少年からしてみればそんなことはもはや問題ではない。

これは意地、プライドなのだ。

「このままじゃ負けた気がして何か嫌だしな」

技術？設備？関係ないね、無理だっていうなら不可能だっていうならそれを可能にできなくて何が誓約師だ、と。

早速少年は準備にかかる。

貴重品をいつも通りに仕舞い終え、危険だと思う物は片付け、必要だと考える書物を開き、作業へと没頭していく。

ただ少年は知らない、知るよしもない、この選択が少年を司る運命を本来のモノとは異なる方向へと導く自業自得な行為であることを……。

願わくば、この偶然が必然であらんことを……。

プロローグ『ダイヤモンドとエンピツの差』(後書き)

さて、プロローグ終わりました。この回は主人公(まだまだ名前できてませんが……)の少年の登場話でした。

どうでしたかプロローグ。編集がかなりキツインですよね……

感想とか送ってもらえるとテンションが天元します！

第一話 く『イレギュラーは予測できないからイレギュラーなんだ』

く(前書

どうも、白金です。いやくようやくシステムにも慣れてきたかな……

いまさらだけどこの小説…かなり長くなるかもしれない…

ストックに余裕はあるけど、そのストックですら、Striker
S本編に入っすらないなんて…

まあ、適度に自分のペースでやっていきます。

それでは本編、どうぞ！

第一話 、『イレギュラーは予測できないからイレギュラーなんだ』

「じ……これはいつたい……！」

新暦74年、とある日の夜更け。聖王教会の理事を務めるカリム
「ロシアは連日連夜仕事に追われていた。」

一番最近でゆっくりと休暇を過ごしたのはいつになるだろうか
……かれこれ随分と取っていない気がする。

ただでさえ多忙を窮めるのに加え、妹のような存在である親友を
バックアップする身である彼女には休暇をなど取っている暇もなく、
今日も深夜まで案件の処理に追われることに。

しかしこれだって特別珍しいことでもなし。さて、大分遅くなっ
たが気持ちを切り替え夕食でもと自室を後にしようとしたその時、
異変は起こる。

彼女の希少技能【レアスキルプロフェーティン・シュリフテン】がいきなり
発動したのだ。

彼女は古代ベルカ魔法の継承者で、その能力は詩文形式の予言能力。

二つの月が重なる年に一度しか発動できず、さらにその予言は難解な古代ベルカ語であるが故に様々な解釈が可能で、その的中率は彼女曰く「割とよく当たる占い程度」。決して使い勝手が良いというわけでもない。

ただ、その彼女の能力が突然何の前触れもなく勝手に発動したのだ。

彼女としてもこんなことは初めてのことでゆえに驚愕しかできないでいた。

「騎士カリム！ ツ…これは!？」

「シャツハ！」

すぐに異変を察知し、部屋に飛び込んできたのはシャツハ「ヌエラ。カリム」グラシアの秘書的な存在にして聖王教会の修道女。

まばゆい光がおさまり、シャツハはカリムに駆け寄る。

「騎士カリム、いったい何が!？」

「私にもわかりません…突然【プロフェーティン・シュリフテン】が発動したのです…」

とにかくすぐに解読を、それとクロノ提督と騎士はやてに連絡を。

これには絶対、大きな意味があるはずですから……」

「わかりました。すぐに」

足早にシャツハが退室し、室内にはカリムだけが残る。

「……………」

今は何を考えても憶測でしかなく、彼女は解読の結果を待つしかないが、この不安は正直隠しきれぬものでは無かった…。

「フームフムフム… ……よっっし! まあこんなところだろ!」

場面は少年に戻る。

部屋の床にはには幾何学模様の図形が紅い紐のようなモノで描かれ、側には数冊の書籍が無造作に開かれている。

「それじゃあ最終確認。魔法陣にミスは無い…契魔石も準備完了。あとはいつでも始められる、か」

「いったい少年は何をしようとしているのか ……そう、少年は余程悔しかったのだらう、自らの手で使い魔の召喚契約の儀式を行おうとしているのだ。」

たしかに遙か昔には現在のような高度に専門な設備が無くても使い魔の召喚契約はできたのだが、それでも難易度は最高に高く、召喚術を専門にする高位の誓約者が数人がかりで行い初めて成立するもの。

一人では到底できないものなのだ。

ただ 少年のやる気はみなぎるばかり。

賽は投げられ、誰にも止められない。

「なにになに…なるほど、設備が無い場合は詠唱が必要なのね……手順は……」

よし、それじゃあ始めますかね」

少年は書物に書かれている専門の設備を使用しない手順通りにこなす。

指先を少しだけ切り僅かな血液が滲んでいるのを確認し、契魔石を握り精神を集中させる。

深く…

深く…

そして紡ぐ。

悠久の時代より変わることのない誓いの言葉を。

「我、に………
………
…たる
…
ッ！」

「やばい！なんだかわかんないけどこのままじゃやばい！ ーこう
なったら儀式の強制破…」

こんな危険な状況で儀式もなにもあつたもんじゃない。もはや取
れる行動はたったの一つ、儀式の強制破棄しかない。

瞬間的に判断し、儀式の強制破棄をするための手順を執行しよう
としたのだが、少年の目には信じられないモノが入ってくる。

【^{ゲート}門】。

文字通り世界と世界を繋ぐモノ。

ただし、明らかに普通ではない。

なぜにそう断言できるのか…：…簡単である。

少年の詠唱はまだ【^{ゲート}門】を出現させる前の段階の詠唱の途中なの
だ。

それなのに、詠唱が途中にもかかわらず【^{ゲート}門】が天井に現れた。

しかも追い討ちをかけるように悪い事態は重なる。

それは

「う…わ…わわあぁ…あぁ…あっ!？」

ガゴンと何か鈍い音がした次の瞬間、突然少年に妙な浮遊感が襲い掛かる。

「^{ゲート}【門】が勝手にひらってどわあぁ…っ!？」

咄嗟に少年は身を低くし、近くの設置型のクローゼットに手をかける。

【^{ゲート}門】は勝手に開きただけではなく、部屋のモノを手当たり次第に吸い込んでいるのだ。

当然に部屋にあるもの、机や本棚、書籍やベッドなどは次々と【^{ゲート}門】の中に消えていく。

そんな中、少年は未だに踏ん張っていた。

少年がクローゼットに施していた地震対策がこうじ、なんとか踏ん張りをみせている。

(このまま門が閉まるまで耐えれば……)

こうなれば持久戦。このまま【門】^{ゲイト}が閉まるまで耐えると意気込み手に力を入れるのだが、それは少年の力の問題で。

「な…：ちよっ…：マジかわああああッ!？」

しかし、クローゼット側の事情はまた別だったりする。

地震対策を施していたといっても所詮は簡単なモノでしかなく、【門】^{ゲイト} 驚異的な吸引力に耐えられなくなるのは時間の問題だった。

吸着力の無くなったクローゼットはゆっくりと浮き上がった瞬間、【門】^{ゲイト} の内側に姿を消してしまう。

なす術の無くなった少年と共に……

「……………ん…んう… ……こじ…は……………」

なんだろう、頭がクラクラする…少年が最初に感じた感覚である。

ぼおつと最初は視界が定まらないのが徐々に解消されていき、少年の視界が戻る。

「なんだ…こりゃあ…」

目に広がるのは空間。

ただ、わかるのは普通ではないこと。

少年は酷く歪んだ空間にいるのだ。

上下左右は定まらず、少年自身、自分がどんな状態なのかわからない。

少年の周りには自分の部屋にあったであろう物が浮遊している。

ベッドに机に書物などなど。それぞれが逆さまだったり位置が自分の頭上にあつたりと、もはやメチャメチャだ。

唯一の救いなのが自分が最後まで離さないでいたクローゼットに自分が無意識のうちにしがみつき続けたということだろうか、大きな支えであることには違いないだろう。

「さて、と。それでここはどこ……ってそうか、たしか俺は【ゲート門に吸い込まれたんだっとな……」

そう、忘れがちなのだが、少年はただいま非常に由々しき事態なのだ。

「マッズイなあ……」

ハッキリ言ってしまうば少年には打開策などありはしなかったりする。

なぜならば少年は知らないのだ、【ゲート門】の内側のことはもとより、脱出方法も。

そもそもが世界と異世界を繋ぐ【ゲート門】に吸い込まれるなど聞いたこともないのだから。

「これは…もしかしなくても相当ヤバイ状態なんだよな……」

あまりに非日常的な事象ゆえ、中々思考が追いつかないのは仕方ないこと。ただし、このままの状態が良いはずはない。

「……………やつほ……………ツ!!」

とりあえずは全力で現実逃避を試みる。

が、当然に反応などあるはずもない。

それでも、だ。

「やつほ……………ツ!!」

それでも全力で現実逃避を試みる。

「ハアツ…ハアツ…やっぱ、無理なんですかねえ……」

合計五十回ほど全力で現実逃避してみたが結果は語らずもだ。

息も乱れ乱れだが、それでも諦めるわけにはいかない。

このままわけのわからない空間で空腹による餓死コースなんて、いくらなんでも格好悪すぎるし悲惨すぎる。

絶対に願下げなのだ。

肺に空気をこれでもかと貯め、腹に渾身の力を込め

「やっほ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ッ！」

今絞り出せる最高の全力の現実逃避を声にあらわす。

「……………なにやってんだろ…俺……………」

ただ、残念ながら結果は変わらず。

これは本格的に万事休すかも……

少年が目を閉じかけたその時だった。

「　　ッ！？今なんか聞こえた！！」

たしかに少年は何かを感じた。

一瞬のできごとだったし、なにより現実逃避のしすぎでの幻聴な可能性のほうが大きいのだがこの際そんなものは関係ない。

全神経を集中する。

「……………ッ！？」

やはりだ。ハッキリとはしないものの何かを感じる。

「まさかこれって……………」

そう、この奇妙な感覚に少年は覚えがあった。

まさに身近なところで、だ。

「……………念話……………」

「ッ!？」

聞こえた、ハッキリと。少年が口にした次の瞬間、空間にパチンと指を鳴らしたような音が聞こえた。

のだが……………

「な　　今度はなんだああっ!？」

パチンと指を鳴らしたような音が響いた次の瞬間、空間が大きく揺れ始める。

咄嗟に少年はクローゼットにおもいつきりしがみつき直す。

どうにか状況を把握するために周りを見るが、直ぐにわかることになった。

なぜなら

「オイオイオイ……夢なら夢だっっていつてくれ……」

空間の遙か彼方から光が空間を呑みこみながら自分がいる方へ来るではないか。

光はまるで空間を消滅させるように拡がり続け

「ど……どおなってんだよおおおおッ！」

遂にはクローゼットにしがみついたままの少年をも呑みこんでしまっただった。

第一話 〽『イレギュラーは予測できないからイレギュラーなんだ』

〽(後書

どうでしたか？いや〽まさか、なのは原作キャラで最初の登場が
カリムとシャツハとは……

自分で書いててなんだけど、ホントにこれでいいんだろうか(〇r
z…

レビュー、感想、大歓迎です！

それではまた次回！

第二話 〱『一難去ってもピンチは続く!』〱(前書き)

編集キツイ!どうも白金です。いやあ〱〱ようやく編集が終わりま
した…

なにせ一萬文字を超える編集なんて初の試みなもので……

とにかく苦労しましたが、今回はようやく主人公の名前が出てきま
す!長かった……

そして、原作キャラの方からはあの方たちが……

ではでは本編をどうぞ!

あ、感想とかスゴイ待ってますから!

第二話 く『一難去ってもピンチは続く!』く

「……………ん……………んあ? ……」く……………は……………」

眠っていたのか気を失っていたのかはこの際どちらでも良いことだが、少年は目を覚ました。

最初に目に入ってきたのはひび割れた床。所々に穴が開いたり酷い有様なのがわかる。

床だけではない。壁も天井もかなりボロボロ、焼け焦げたケープルや痕などもある。

もう少し視野を広くすると、少年は自分の周囲がすごいことになっているのに気付く。

自分の物であろう書籍や書物が大量に散乱し、愛用の机やベッドなどはさらに悪いことにバラバラになっていて、再起は不能のようだ。

唯一、無傷ともいえたのは少年自らがしがみついていたクローゼ

ツトのみ。こんなこともあろうかと少年が施していたのは地震対策のみならず火災水害にも備え対策を施していたのが幸いだっただといえよう。

もちろん中身を確認するが同じ。破損物はゼロ。

とにかくだ、現状自らが置かれている状況をもっとよく知るためには情報が必要だと感じた少年は自分の身体に異常が無いことを確認し、身につける装備を整え、貴重品や必要であろう品を一式それなりに大きいキャリーバッグに詰めこみ、簡単な空間操作魔法を使い別空間にしまい込み、室内を後にする。

「この壁とか床、材質は普通 ……とりあえずはだ、少なくともここはどこかの古代遺跡なんかじゃない。」

ゆっくりりゅっくり慎重に歩を進める少年が得たのは、まずはじめに自分がある場所が物騒な場所ではないということ。

少年が一番危惧していたのは、ここがどこかの古代文明時代の遺跡であること。

経験上、そういう類いの場所には遺跡の機能自体が死んでいたとしても、侵入者撃退用のトラップは高確率で生きているもので、もしここがそのような類いの場所であれば少年としては、現状自分の装備ではかなり苦しいものがあつたりすると感じていたのだが、幸いにしてどうやら違うようだ。

それがわかったただけでも成果はある。現に少年の心には余裕が生まれつつあり、さっきまでは見えなかつた新たな情報が次々と入ってくる。

「ここは……もしかしたら廃墟か何かかもしれないな……」

至る所ポロポロなのだ。建物としては倒壊とまではいかないものの再利用となれば流石に厳しいレベルなんだろうと感じつつ歩を進めていくと ……

「オオオツ！？」

なにやら視線の先からは光りが漏れているではないか。

察するにこの建物の出口なのだろう。ようやく薄暗い廃墟から出られると思うだけで少年の歩は自然と早くなり、ついに建物の外に

出る。

「まぶつしい…… うわぁぁぁ……」

建物から出た少年の目には空が映る。

見事な青空。

天气的には晴れ。

吹く風が少年の少し長めの黒髪を靡かせる。

「いやあ、こりゃあアレだな。完全に廃墟な感じだね」

見た感じは完全に廃墟。おそらくは何か纏まった地域か何かなんだろうが、原型は先ほどの廃墟と同じく中々に留めていない建物ばかり。

「ここら一帯がデツカイ火災にでもあったのか？でもなく、最近そんなニュースあったっけ？」

少なくともまだ、ここ最近のニュースで帝国領土内でこれほどまでの大規模火災は無かったはずだと記憶している少年にとある仮説が浮上する。

「もしかするとだ…俺、他国にでも飛ばされたか？」

思考する。充分に考えられることだ。

事実、廃墟や道路であった道などは見覚えはないが材質は同じ。

ということとはだ、使い魔たちの世界に来たというわけではなさそうだ。

いや、可能性としては無きにもあらずではあるが限りなくそれはない。なぜなら【^{ゲート}門】に吸い込まれはしたが、【^{ゲート}門】から出た感覚は無いからだ。

となればだ、考えられる可能性としては少年は【^{ゲート}門】に吸い込まれたものの、何らかの内部暴発が原因で再び無理矢理に【^{ゲート}門】から

押し戻された。

、ただ、莫大な魔力エネルギーにより押し戻された際に偶然にも長距離転移魔法が発動してしまい、帝国にいたはずの自分は国境を、運が悪ければ大陸を超えてしまったのかもしれないというのが現状では最も有力な説といえる。

もし少年の予想通りならば少年からしてみれば不幸中の幸い。いや、奇跡としかいえないほどラッキーである。

大陸を超えたといってもだ、帝国に戻るまでに多少の時間がかかるだけ。むしろ、あのままわけのわからない空間で八方塞がりなままのほうがそれは恐ろしいことなのだから。

そうと決まれば話しは簡単だ。ここがどこかはわからないが先ずは人を見つけて助けを求めよう。

そのあとはどうとでもなるさと。ここまでポジティブにいけるのは少年が旅慣れていることが幸いする。

旅をしていれば当然イレギュラーな事態もある。もちろん少年は何度もイレギュラーを経験している。そうだからこそ、対処法も心得ているのだ。

幸いにして廃墟で整えた装備で何とかかなりそうな感じだしと。

ただし、イレギュラーはイレギュラー、そう簡単にいかないからこそそのイレギュラーなのだ。

「　　ッ!？」

気配を感じ少年が左方向に横っ飛びした瞬間、何かが少年の横を通過し、瓦礫が砕ける。

「なんだ!？」

そのまま身を転がしながらも状況を把握するために何かが飛んで来た背後をみると

「……………なんだあれ？」

縦に長い長方形のような金属のような物がフヨフヨと浮いているではないか。

中央には黄色い円形のレンズのようなものが。

「巡回型の警備システムか？いや、それならまずは警告してくるはずだ。それが無いってことは…」

恐る恐る確認。数は5。そこまで確認できたのだが、

「のわあッ！魔法！？いや、こいつは魔力エネルギー……ってことはトラップの類いか！？」

ピュンピュンと結構な早さで攻撃してくる謎の物体に少年は瓦礫から瓦礫に移りながらなんとか避ける。一発一発の威力が低いのが救いといえば救いである。

「この程度ならッ！」

このままいけばギリ貧。それならばと少年は背中のガンホルダーから二挺の黒くてゴツイ銃を取り出す。

銃身が普通の倍あり、ゴツイのは少年のハンドメイドのせいである。

左手の銃はそのまま、クルリと右手に持つ銃を返し銃身を握り、カチリと突起の部分を押すと、なにやら弾倉部分から鋭い突起物がカチンと良い音を響かせながら出る。

「フッ！」

呼吸を一息、少年は魔力の光線が飛んでくるなか物体めがけ走り出す。

当然、謎の物体も応戦するために数にモノをいわせる形で光線をとめどなく撃ちまくる。

「ハッ！」

ただ、所詮は機械か、パターンが一定なうえに精度もまるで低い。

あらかじめ少年は魔力による身体強化魔法を施し、さらには足元に魔力を集めステップを踏む。

身体強化魔法とは単に物理的にも魔法的にも防御を強化するだけではない。魔力を身体に纏うことにより言葉通りあらゆる身体機能を強化するのだ。

もちろん少年にとっても、魔法を使う者にとってもこんなことは常識。戦闘中は常に身体強化の術式はもちろん、常時障壁も展開するのは当たり前のことなのだ。

ただ少年は身体強化の術式をイジリ、普通ならば身体の外側だけに魔力を流すだけで十分な効果が得られるのだが、魔力を身体の内側にも纏っている。

少年いわく、万が一に備えてとのことだ。

身体強化魔法に加えて脚に魔力を集めることでスピードを爆発的に強化している少年に、ただでさえ攻撃精度の低い謎の物体の攻撃が当たるわけもないのは素人でもわかること。

「フツ……」

そのまま少年は急接近。一体目に銃での打撃。突起部分が謎の物体に打撃で一撃。そのまま動きを停めることなくほぼゼロ距離から銃をフルオートで数発弾丸を側面から撃ち込む。弾は殺傷能力が低い衝撃弾。

それでもほぼゼロ距離で撃ちこめばそれなりには破壊力はある。

残りの四体も身体を反転させ一体目と二体目同様の動作を繰り返して、完全にすれ違いを終えたところで謎の物体は爆発音と共にその機能を停止したのか地面にガラガラと落ち完全に動かなくなった。

恐る恐るながら少年は謎の物体が動かなくなったのを三度ほど確認したところで地面にヘタリこんでしまう。

「あッ、まったくなんなんだよぉ〜……」

謎の物体に恨めしげな視線を向けながら片方の銃を背中の中のガンホルダーにしまい、残弾数の少ないほうに衝撃弾を補充しつつも再度いきなり何の警告もなしに攻撃してきた謎の物体をマジマジと観察する。

「なんだかなあ……」

魔力で運用している機械なんだろうが、パツと見る感じは正直な感想から言えば、かなり雑な造りだと少年は感じる。

構造もさることながらどうしても未完成な気がするというか、お粗末というか、そんな感じがしてならない。

しかし今はそんなものは放っておこう。またいつ同じのが出てこられても正直困る。

それにだ、多分偶然この近くには古代時代の遺跡があり、行き場を失った侵入者用の警備プログラムが遥かな時の流れの影響で誤作動を起こしたんだろう。

、そう考えるのが今までの経験からして妥当なところだろうと自己完結させ、少年はマガジンに衝撃弾を補充させながらとりあえずは人を捜すために歩き始める。

のだが……

今日の運勢はトコトンまでに最悪らしい……

「とまりなさい！」

空耳か幻聴か　意味は同じだが、とにかく少年の耳に届いたのは凜とした澄んだ声だった。

しかし残念なことに、だ。少年の背後から聞こえるであろうその声にはあきらかな警告の色がこめられている。

やれやれ、今日の運勢は ……というか、気まぐれな運命の女神さまは今日はやけにご機嫌ナメなもんだなと、少年は吐きたくもない本日何度目かのため息を肺から吐きだす。

しかしため息を吐いたからといって状況が良くなるわけでもなし………寧ろこの瞬間も悪くなってしまっていると考えたほうが無難なのだろう。

ヤレヤレ、向きたくはないが仕方が無い。本当なら人と遭遇することというのは自分の状況が好転するための第一歩として喜ばしいことのはずなのだが、経験上、今回のケースはどうやらソレには当て嵌まらないらしい。

さて、気まぐれ印な運命の女神さまがどう転ぶことやら…

大人しく両手を挙げ、抵抗しませんよアピールを全開に少年は声のする方向へゆっくりと身体の向きを変えるのだった……

「管理局です。いますぐその手に持っているものを地面に捨ててください」

ゆっくりと少年は後ろを向くが、そこには誰もいない。

「はて……」

少年は首を傾げるが疑問はすぐに解消する。

「……………」

「……………」

声の主、正確には二人だ、少年はすぐに気づく。

こいつらは魔法が使えると。

なぜなら声の主たる二人はゆっくりと空から降りてきたのだから。

魔法を使う者にとって浮遊魔法や飛空魔法は魔力の消費が激しいことや難易度こそ高いものの、高位レベルな者に使えない道理はな

い。

少年からしてみれば燃費がわるいことこの上ないこの類いのものを使う人物が少ないことを知っている。

だからこそ少年は察知する。

こいつらは相当な使い手だと……

「……………」

この時点では情報が少な過ぎる少年は取りあえず二人を観察にかかると決める。

向かって左側の女性は腰まである金色の髪をツインテールに纏めている。容姿は整い今は緊張感を持っているだろうが、普段は優しいのだろう。非情に徹しきれていない。

紅い瞳を持ち、服装は白のマントに黒を基調とし、手には何やら物騒な長い斧のような武器を持っている。

対する向かって右側、こちらも容姿は左よりもよりクールなピン

ク色のポニーテールを風に靡かせる美人さんといったところか。

こちらは切れ長の目付きに戦闘には非情になりきれそうな、服装はといえば白とピンクを基調としたイメージとしては騎士がシックリくるそんな感じだ。

左の腰にチラリと見えるのは間違いなく剣だろう。抜剣はしていないが彼女の威圧感を倍増させている少年にとっては何とも迷惑な代物である。

はてさてどうしたものか、少年にとっては最悪といってもいいだろう。

相手は強い。それもとてつもなく、だ。

いまの少年には真っ正面から戦いを挑んだところで勝てないことは確実。

ならば

「……………」

捨てるしかない。少年は左手の銃をポーンと地面に投げ捨てる。

と、僅かだが金髪の方はホッと安堵の表情を浮かべた気がした。

しかし、となりのピンク髪の切れ長な方は依然として警戒の色を解かない。

「私は管理局本局魔導師、執務官。フェイトⅡテストロツサⅡハラオウンです。」

「こちらは私の仲間のシグナム」

「……………」

金髪、フェイトと自己紹介をした女に促される形でピンク髪、シグナムと呼ばれた女は目だけを少年に向ける。

「お名前、教えてくれるかな？」

「……………」

フェイトに質問されるが少年は答えない。

単に少年は怯えていたのだ。

となりにいるシグナムが何時でも斬りかかってきそうで、とてもではないが自身の警戒を解いて和気あいあいな自己紹介などできるわけがない。

「シグナム……」

「ム……そうか、すまないな……」

少年の心理に気付いたのか、フェイトはシグナムを一步下からせる。

もちろん、剣にあてていた手も下げさせる。

「じゃあ、これで教えてくれるかな」

優しげに微笑みを浮かべながらフェイトは少年に再度同じ質問を

する。

退路を断たれている少年としては質問に応じるしかない。

「……ヒロ＝ラインハート……」

「ならヒロって呼ばせてもらうね。それじゃあ質問、ヒロはその質量兵器、どうして持っているのかな」

少年、ヒロにはフェイトの言っていることの意味がわからない。

「自衛のため、だる普通は」

「でも質量兵器の所持、携帯は禁止されているよね。つまりはヒロは法律違反をしているんだよ」

「まただ、ヒロは首を傾げる。」

さっきから何回か耳にする質量兵器という単語。

「あの…」

「なにかな？ああ、私のことはフェイトでいいよ」

「じゃあフェイトさん」

「フェイト」

「フェイトさ ……」

「フェイト」

「フェイト フェイト……」

有無を言わさないフェイトの雰囲気にも負けたヒロは本人の希望どおりに呼び捨てにする。

かなり抵抗感があるものの逆らう度胸が彼にあるはずもない……。

「ん。なにかな、ヒロ」

笑顔のフェイトに困惑しながらも仕方なしに質問をする。

「その、さっきから出てくる質量兵器っていうのは何なんですか？」

「えっと……………」

今度はフェイトの時間が止まる。

静寂が襲いかかり、沈黙が支配しかけたとき、

「えっと、ヒロはミッドのどこ生まれなのかな」

「ミッド？それはどこですか？」

「あの、生まれはどこ…かな……………」

「えっと、生まれは聖王国です。今は帝国だけど。それでミッドってどこの国なんですか？今まで聞いたことないけど…」

それとももしかして俺、やっぱり大陸超えちゃったんですか？

そうだ、そのミッドって地図でいうところの辺なんですか？」

「……………」

「あの、フェイトさ …… フェイト？」

「フム、どうやら決まりのようだな。テストロッサ」

「そう…ですね…」

静観していたシグナムは警戒を完全に解きながらフェイトの隣に並ぶ。

まったくついていけないのはヒロで、そんなヒロの肩にフェイトはおもむろに手を置く。

「その…おちついて、気をしっかりもって聞いてほしいんだ……………」

「あ…………… ああ……………」

あまりに真剣すぎるフェイトの表情に果てしなく嫌な予感しかヒロは持てないでいた。

意を決するようにフェイトは口を開く。

「キミは……次元漂流者……なんだ……」

「じげん……ひょうりゅうしゃ？」

「簡単にいえば何らかの事故で次空間を突き抜け別の世界に迷い込んでしまう人のことを言うんだ……」

「……………はあ……………」

あまりに唐突、というよりは自分の予想など遙か斜めをぶちやぶる現実に言葉が出ない。

良くて国境越えか、わるくてもどこかの別大陸だろうと思っていたのが実は次元を超え時空を突き抜け全く異なる世界に飛ばされてしまっていたのだ。

ただ、ヒロの思考はなぜか落ち着いていた。

「だ、大丈夫だよ！私たちが時空管理局のお仕事にはヒロミみたいな次元漂流者を元の世界に戻すっていうのも含まれているから。次元世界は広すぎるけど私たちが絶対にヒロミの居た世界を見つけるから！だからきつとすぐにか ……」

「あ、別に捜さなくてもいいです。帰れなくても全然構わないので」

「そうそう帰れなくても全然構わってエエツ！？」

「……………！？」

さすがのフェイトもこのヒロミの発言に驚きを隠せない。それはシグナムも同様で、彼女も驚きで目を見開く。

「だって、いままでの感じから察するに、別に帰りたくなければ帰らなくてもいいんですよね？」

「それはその……たしかに帰る帰らないは本人の自由だし、実際に帰らない人だっているし、管理局のお仕事の中にはそういう人達を全面的にサポートすることも含まれているよ」

「なら全然問題ないですね。じゃあ俺は帰れなくても平気なので」

なんともあっけらかんと言つてのける口には悲壮感など微塵も感じられない。

フェイトやシグナムも決して多くはないものの次元漂流者がとなものか知っている。

皆が皆そうではないがたいていは自分の世界に帰れないことに絶望する。

だからこそ、不思議で仕方ないのだ。なにがそう言わさせているのか……。

「なにか、理由があるのか？」

「……………」

我慢できなかったのは意外にもシグナムだった。

「そうですね…たいした理由じゃないかもしれませんが、あえていうならば気分転換、ってやつですかね」

「『……………』」

ますます意味がわからない。

「でも、ヒロは自分の世界に大切な人とかいるでしょ？きつと心配するよ……………」

「まあ、たしかに。でも、だからですかね……………」

「『……………』」

一瞬　ほんの一瞬だけ苦笑いを浮かべたヒロをフェイトとシグナムは見逃さない。そして悟る。

これ以上は何故か聞けない、聞いてはいけない気がした。

自分達も同じだから。

大きさは違えど、心になにかを背負いながら今を生きているから。

フェイトとシグナムは直感的に感じた。

この人も何かを背負ってる、と……

一時、変な空気になってしまったが、気を取り直したフェイトはヒロに質問をしていく。

質量兵器についても、ヒロは色々と聞いた。

質量兵器とは魔力を使わない武器のことをいうらしいが、ヒロが自身の銃について説明し、フェイトとシグナムが実際に検査したところ、ヒロの銃からは火薬などは検出されず、弾は殺傷能力が極めて低いため質量兵器に該当するかどうかは正直、微妙らしい。

幸いにも普段から実弾を持っていなかったため、取りあえずの自衛の手段としての携帯を許された。

と、ここまではきわめて順調そのものだったが、問題は急に発生する。

「とりあえずヒロの身柄は管理局で保護することになるんだけど、大丈夫かな？」

このフェイトの発言が発端である。

「……………なにかするんですか？」

「そ、その…心配しなくていいよ。もう少し落ち着いた場所で詳しくお話し聞いて、今後のことを相談するっただけで、別にヒロのことを捕まえて牢屋に入れようってわけじゃないから……………」

「……………」

「その、酷いことなんて絶対しないし、させない。約束するよ？」

「……………」

「……………」

今までの距離の倍近くの距離をヒロは離れる。

「明らかな警戒心を纏いながら。」

「ヒロ……ヒロ……どうした……の？」

「……………」

「え……………なに……なに……かな……………」

「テストロッサ……………」

「申し訳ないですけど、その申し出は承諾できませんね。」

「……………！？」

ハッキリとヒロが示したのは拒否の構え。

事態についていけなくオロオロするフェイトと静観の構えをシグナムは見せる。

「そもそもが、よく冷静になればおかしな話なんですよね。そんな都合が良すぎる慈善団体のような組織があるわけない。

所詮組織なんてのは大きければそれに比例するだけの裏があるのが絶対です。」

もしもこのまま馬鹿正直に着いて行って、行った先で次元漂流者というだけで非人道的行為を受ける可能性だってある。

そんな物騒なところに行くなんて御免こうむりますよ」

「管理局はそんな酷いこと」

「絶対にしない、なんて断言なんてできませんよね……」

「ッ!？」

感情を削ぎ落としたかのような何処までも冷たいその視線にフェイトは怯んでしまう。

たしかに彼女は管理局の裏の顔を少しだが知っている。

『時空管理局』という組織は大きくなりすぎたのだ。

圧倒的な武力と権限、それを傘にし、末端組織に潜り込み非人道的行為をしていた同じ管理局員を彼女は逮捕したこともある。

その時の歪んだ顔の管理局員を彼女は今も忘れていない。

そんなものを無くしたいと現在も執務官として地道な活動を続けている。

だからこそ、折れるわけにはいかない……

「私は……ヒロの味方だから……」

諦めるわけにはいかない。

「ならどうしますか？俺はついて行きたくない ……フェイトとシグナムさんは連れていきたい、このままだと双方平行線のままですよっ。」

「……………簡単なことだ……………」

同時にシグナムは腰を低くし、構えにはいる。

「なるほど、力づくも厭わないと……」

「フツ…すまん。私は古い騎士だ。その古い騎士ゆえに行動で現すほうが得意だな。」

ラインハート、お前を力づくで連れていく。無論犯罪者としてではない。私やテストロッサが貴様の味方だと知ってもらうために、

腰にあるデバイス、レヴァンティンの柄に手をかける。

『シ、シグナム！』

『まあ待て、言いたいことはわかる。だがなテストロッサ……忘れてはならないのはラインハートがたった一人で五体のガジェットを倒していることだ。やはり詳しく話しを聞かなければならん』

『そうですけど……』

『それに、だ。テストロッサ、お前は興味が湧かないのか？ たった一人で五体のガジェットを倒している謎の次元漂流者、ヒロ＝ラインハートがどれほどの力を持っているのかを』

『……気になります……』

『フツ…ならばこれ以上は野暮というものだろう。　　もっとも、お前が興味があるのはそれだけではないだろうがな』

『　　ッ！？シグナム！？』

『フツ……さて、お喋りはここまでだ。　　気を引き締める』

『……………はい！』

シグナムとフェイトが念話でこのような会話をしているなど思いもしないヒロ＝ラインハートは非常にピンチな状況に置かれていた。

（予想外デス……）

某携帯端末企業のCM（初期）を彷彿させるように。

柄にも無く、ちょっと威圧っぽい口調で言ってしまったのも、あわよくばそのまま立ち去れるかなという期待があったからこそ。

そう、単にヒロ＝ラインハートは目立ちたくないのだ。

巨大な組織なんて連れていかれるだけでも目立つだろう、『平和』『平穩』『ティータイム』などの言葉が信条な自分にはどうにも性に合っていないと食わず嫌いな認識をしていたりする。

このまま街とかまで連れて行って貰うだけで感謝感激。あとはノンビリと行動していけばいいさと会話の中で計画していたのに、だ。

なにをどうすれば管理局などという巨大な組織に足を運ばなければならぬのだ、と。

ヒロ＝ラインハートはこの手のケースは非常に厄介かつ面倒な方向に転ぶのが確実だということを経験上、身を持って体感している。

何より本日は気まぐれな運命の女神さまがご機嫌ナナメな御様子だし、やはりこのままついて行くのはハッキリ愚策。

野性のドラゴンの寢床でダルマさんが転んだをするくらいの無謀っぷりだ。

さて……どうすれば回避できるのか……そうだ、少しキツめに彼女たちの組織を批判してみよう。そうすれば自分達の所属している組織を悪く言う輩だ、嫌悪感から立ち去るに決まっている。

い……い
こんなに親切な人なのに申し訳ないなあとは思うものの致し方ない……

そんな感じだったのにだ。

彼の思惑はコナゴナに砕けたばかりか、なんと力づくで連れていくなどという暴挙に出るなどと言言したではないか。

「……平和の使者が罪の無いひ弱で善良な一般人に武力を行使するんですか？」

「私の目から見てラインハート、お前はひ弱な一般人には到底見えないぞ？」

（どっからどうみてもひ弱な一般人ですから！いや一般学生ですから！あもお、なんか剣の達人的なオーラ出ちゃってるし！）

なんとかしなければ……このままいけば確実に武力衝突コースが確定してしまつ。

ならばとなりの良識人さんにヒトカケラ程度ではあるが賭けるし
があるまい。

「そちらは二人、こちらは一人、流石にアンフェアだと思いますけ
ど？」

「うっ！……その……」

僅かに困惑を見せるフェイトに『いよっしゃあ！』とヒロは心
中でガッツポーズをかます。こちらから崩しにかかれば回避は充分
に可能

「なるべく痛くしないからッ！」

……武力衝突コースが今確定した……

「……………ッ……………」

「『!?!?』」

右足を一步後ろにずらしヒロが右手を後ろに廻すと、瞬間的にフ
ェイトとシグナムも構えを固める。

まさに一触即発。

瓦礫の廃墟区に緊張だけが張り詰めていく。

「ッ!」

先に動いたのはヒロ。背後に廻していた右手をフェイトに向け、
振る。

「テストarovツサ!」

もちろんフェイトは反応できているが

《プロテクション》

自身の長年の優秀な相棒であり絶対の信頼を置くインテリジェン

トデバイス、バルディッシュが障壁を展開する。

それはなんてことのないいつも通りの動作だった。

しかし ……

「なっ!?!」

「えっ!?!」

ヒロがフェイトに振った右手、正確には投げ付けた物体をバルディッシュが障壁で防御した瞬間、投げ付けられた物体からは黒煙が霧散し、あっという間にフェイトとシグナムの視界はほぼゼロになる。

「これは…!」

「煙幕か、小癩な。こんなも」

《緊急バリア発動!》

「『！？』」

黒煙をシグナムがレヴァンティンで薙ぎ払おうとした瞬間、バル
ディツシュとレヴァンティンは障壁ではなくバリアを展開する。

当然、フェイトとシグナムには訳がわからない。何故バリアを
発動させたのか問おうとしたときだった。

チツ…と光がおこった瞬間、黒煙が爆発を起こした。

「なっ!？」

「チイツ……」

しかも一度では収まらず、誘爆に誘爆を繰り返す。

「これは……」

「粉塵爆発か!」

《マスター、これは粉塵爆発ではありません》

「どういうこと？バルディッシュ」

《たしかに現象としては粉塵爆発に限りなく酷似していますが、この爆発には衝撃以外には特になにもなく殺傷力が認められません》

「つまりは……」

片足をついていたシグナムは立ち上がり

「目くらまし、時間稼ぎだ！」

「ハアッ…ハアッ…ヒイイイ……」

瓦礫で足場の悪い道を走る走るとにかく走る。

どこに行けば正解なんてものは少年、ヒロ＝ラインハートにはわ

からない。

彼はいわゆる次元漂流者なのだから。

それでもヒロは走りに走る。

ただいま絶賛逃走中なのだ。

そう、全ては最初から仕組んでいたこと。

あれほどの使い手を二人も正面きって闘いにいくなど正気の沙汰ではない。

彼は“自称”ひ弱な一般学生で、間違っても戦闘狂バトルマニアではないのだから。

「ハアツ…ハアツ…ヒイイツ…ハアツ…」

いまは余計なことなど一切考えずに脚を動かすことだけに専念する。

いくら隙をついたとはいえ、彼女たちほどの使い手を長い時間足
止めできるわけがない。

「ハアツ…ハアツ……ん？」

脚を動かし走り続けるヒロの耳に何か遠くのほうから本能的に身
震いしてしまう怒号のような叫びが聞こえたが、恐いのでヒロはそ
れを全力でスルーする。

本当ならば身体強化魔法でスピードを出せばいいだけなのだが、
現在彼は自身に何の術式も行使していない。

逃げ出す直前、彼は見たのだ。彼女たちの持っている武器がまる
で自ら判断して自分の投げたモノを防いだのを。

そこから考えるに、ここにいるのは自分と彼女たちの三人だけ。

魔力を索敵される可能性も無きにしてもあらず……ゆえに魔力は使
わない。

生体反応だけではどうしようもないが、そこは見つかる前に人のい
る場所まで辿り着ければあとはこっちのもの。人の中に紛れ込めば
いいだけのことだ。

顔を見られたのは痛い、まず再び会うことはないだろう。もし万が一にでも会うことがあってもそれはそれで何とでも言い訳が可能だ。

とにかく、この完璧な計画が成功するか否かは全ては時間との勝負になってくる。

ただ、ヒロの考えは詰めが甘かった。というよりは重要な事柄を忘れていた。

「見つけたぞ！止まれ、ラインハート！」

「ん……ゲエツ！？」

最初、彼女たちは空から現れた。つまり彼女たちが自由に空を飛べるということ……

「レヴァンティン！」

《了解！》

「な、なんだあ!？」

いきなりのことにヒロは何事かと驚くのは無理もない。

シグナムの指示にレヴァンティンからは何やら銃弾を装填するかのような音が二、三回したかと思えば、レヴァンティンの内部から薬莖が排出されたではないか。

さらに驚かせたのは薬莖が排出された次の瞬間、目に見える勢いでシグナムの持つレヴァンティンの刀身に炎が螺旋状に渦巻き、纏う。

「紫電……一閃！」

「どわああっ!？」

空から高速でヒロめがけて突っ込んでくる。

炎を纏うレヴァンティンの強烈な一撃をほとんどマグレで避けることに成功するものの、背後にあった瓦礫は木っ端みじんに。

「フム……今の一撃を避けるか……」

「な、なにすんの！？当たったら大怪我じゃすまないんですけど！
！」

「心配するな……しっかり峰打ちで一瞬で終わらせてやる」

「……なんでだろ……すごい納得できないんですけど……」

ニヤリと嬉しそうな表情をみせるシグナムに、ヒロが恐々としな
いわけがない……

しかし、そんなことを思うほどの余裕はヒロにあるはずがなかつ
た。

シグナムが破壊した瓦礫により起こった土埃。

その土埃から姿を現したのはフェイト。

バルディッシュから葉莖が排出され金色の魔力刃が形づくられる。

「ハアアアッ！」

空中でおもいつきり振りかぶり、力まかせに振り抜く。

「ちよっ　　ハアアアッ!？」

なりふり構わず、こちらもおもいつきり横っ飛びをかます。

なぜならフェイトがバルディッシュを振り抜いた瞬間、金色の魔力刃がヒロメがけて飛んできたからにはかならないからだ。

「避けれた!？」

「避けられた!？」

「『えっ!？』」

おもわず互いの時がとまってしまうのは御愛嬌。

一瞬のおかしな間はあったものの、すぐに距離を取り直す。

しかし、勝負は意外な形で決着を見せることになる。

「ハアアアッ！」

「のわあッ!?!」

シグナムによる高速の剣技をよけることに専念するあまり瓦礫に脚をとられ、体制を崩してしまふ。

もちろん、見逃すわけもない。

「テストアロツサ！」

「はい!」

「えっ んぐあっ!?!」

僅かな隙を見逃さないフェイトはバインド魔法をかける。

当然、そんなものなど知らないヒロは逃げる余裕もなく、フェイ

トのバインドに捕まってしまっ。

かくして一方的なイジメにも見えなくない闘いは意外と簡単に終わりをみせるのだった。

「……大丈夫？…苦しく…ない？」

「……そう思っんなら解除してください…」

「それは無理な相談だな。外せばまた逃げるだろう？」

「逃げませんよ。逃げきれなんてももえませんし」

「信用できんな」

「あ……あはは……」

フェイトの苦笑いだけが妙に印象的な、第三者から見て、なんとも締まらない光景でヒロ＝ラインハートの逃走劇は幕を閉じた。

第二話 〽『一難去ってもピンチは続く!』〽 (後書き)

【スペシャル・コメンタリー】

白金「はい、始めました〜!今回からあとがきでコメンタリーをしてみようと思います。まあ…完全にノリで始まった企画ですが…

どうでしたか本編? …いやまあ、大幅にカットしたのは認めます…ハイ…

と、とにかく!今回の話しは主人公の名前がようやく出てきましたよ!

ではここで主人公、ヒロ=ラインハート君にお話しを聞いてみましょう!」

ヒロ「ど…ど…も〜…」

白金「えらくテンション低いなあ〜…どうしたよ?」

ヒロ「いやいや!イロイロツツコミどころ満載よ!? 突然ピンクと青とオレンジ色のキツネのキグルミ集団にバインドで捕まえられてワケわからんところに来させられたら誰でもテンション低くなるわい!」

白金「……………」

ヒロ「無言の圧力!？」

白金「いやだって………これからこういうのしょっちゅうあるし、それにワケわからん集団じゃないから。あれはキツネのフーと愉快な仲間たちですから!」

ヒロ「まさかのバテスって!？」

白金「まあまあ落ち着きなさいよ。これはコメンタリーなんだからさあ、リアクションは画面には映らんし疲れるだけよ? それじゃあ本編について色々聞くけどさ、なんていうか…お前強い? 弱い?」

ヒロ「さ…さすがは23世紀レベルのアヤフヤ作者……ってかオレの力量が一番聞きたいのはオレ自身ですから! だいたい作者! , Urobrosシリーズでだってオレの力量はハッキリしてないじゃん! あっちはあっちで強敵ぞろいなのにそもそもそこらへんはどうなってるんだよ!」

白金「のーこめんと」

ヒロ「こ…このゆとり教育世代が…自分にとことん甘くできていやるが……あれか! ?都合の悪いところは全部大人の政治家発言ですか! ?」

白金「人が世界を創るんじゃない…世界が人を創るんだ……(キリッ)」

ヒロ「なに名言みたいなこと言ってるの! ? ってか真顔でテキストすぎだろ! ?」

白金「ほお……ヒロ＝ラインハート君…そんなことを言っ…いいのかな？」

ヒロ「な…なんだよ……そのカモネギ見るような目は…」

白金「この私が支配するこの絶対空間で、君ごときが私に意見を言えるともいうのかな？君のプライバシー数値がゼロ以下のこの空間で……」

ヒロ「は？いや、なにが？」

白金「フツ…気付かないかな？…ならば懇切丁寧に教えてやろうか…」

私は知っている……お前が今回の話しの中でずっとフェイトさんのバリアジャケットの胸元に目がクギツケだったという紛れも無い真実を……！」

ド　　ン！！（効果音）

ヒロ「なにiiiiiiii!?!」

白金「それだけじゃない…お前はシグナム姐さんが紫電一閃で振りかぶったときに上下に激しく揺れたお　ぱいに目がクギツケになって、おもわず鼻から鮮血のジェットエンジンが点火しかけたことも、フェイトさんがバルディッシュを空中で振りかぶったときに見えたラッキーパ　チラを脳内メモリに最大1500万画素数で瞬間32連続保存したことも知っている！」

ズギヤアアアン！（効果音）

ヒロ「風評被害だわアホおおおお！」

スパーン！（ハリセン）

【作者暴走中のため、しばらくおまちください】

白金「……一部画面と音声に乱れがありましたことを……つつしんでお詫び申し上げます……」

ヒロ「まったく……ストーリーの初っ端から主人公の品位をおとしめてぶっするよ……」

白金「うむう……」

ヒロ「まあ今回はここまでで良いんじゃないか？」

白金「チツ……まだいじり足りないけど、まあ一理あるか……それにこれから更なる地獄に突き落としてやれるしね！」

ヒロ「腐ってる……この作者……心底腐ってやがる……」

白金「それでは今回のコメンタリーはここまで。」

ヒロ「また次回、お会いしましょう！」

白金&ヒロ「『ぼ〜〜〜い〜』」

第三話 、『逃走失敗、敗者のささやかな反撃と金色の閃き』(前書き)

な、なんとおおっ！初めての感想が届いていました！

アークさん、ありがとうございます！

そう言っていただとスゴイテンションあがりますよ！

え〜〜さて、今回の話ですが、完全な繋ぎの話なので凄く短いです…

最初はこの話しも前話に組み込もうか悩みましたが、あえて別の話しとして作り直しました。

それでは本編、どうぞ！

感想など、随時お待ちしています！

第三話 、『逃走失敗、敗者のささやかな反撃と金色の閃き』、

ヒロ＝ラインハートが逃走に失敗してから約十分が経とうとして
いる。

金色のバインドで身体を奪われたヒロ＝ラインハートは見
事なまでに敗者のオーラを纏いながらボーっと空を見上げていた。

(あ……あの雲、微妙に曇りマークっぽい……)

などと、現実逃避紛いのことを繰り返しながら視線を少し
変えてみると、少し離れたところでは何やら神妙な顔つきで相談し
ている人物が二人、目に入る。

その二人こそヒロ＝ラインハートを現在の状態にした張本人に外
ならない。

どうやら会話を聞くかぎりは多分自分のこれからの移送先なのだ

ろつとヒロは予測しながらヒロはあることを思い出した。

「あの、」

「なんだ？」

「ここを離れるならお願いがあるんですけど…」

「えっと、なにかな」

捕縛されているため上手くバランスが取れないヒロ「ラインハートは瓦礫に腰掛け、どこかに連絡を取っているフェイトとシグナムに話しかけてみる。」

「えっと……あ、あの建物の五階だったかな…そこに俺の持ち物があるんで、ここから移動するならなんとかしてもらえませんか？」

「わかった。シグナムさん、お願いできますか？」

「了解した。現場検証のチームも要請しよう。ラインハート、もしも質量兵器だと疑わしい物が見つかった場合、検証の為に押収させてもらうが問題はないな？」

「うん……問題ないです」

若干の間をあげ思考。持ち物のなかに別に見られて困るものは特に無かったなと記憶していたので、ヒロは了承する。

「わかった」

了承の返事を聞いたシグナムは再度、どこかに連絡を取りはじめる。

「それでフェイトさん」

「え……あの……」

「どづかしました？フェイトさん」

「あ……あの……呼び方……」

いきなり“さん”付けに戻ってしまったことにフェイトは困惑してしまいが、ヒロは追撃の手を緩めない。

「ああ、気になさらないでくださいフェイト“さん”。俺は今犯罪者みたいなものですから。」

やっぱり平和を守るエリート執務官様と、どごその訳のわからない次元漂流者とは身分に雲泥の差があります。

ですから、区別は必要かと思しますので「

「あ……………うう……………」

どんどん涙目になっていくフェイト。

戦闘力ではフェイトに敵わないであろう（本当のところはよくわからないが）ヒロのささやかな仕返しのだが、それにしただってセコいことの上ない……………。

援軍が期待できるバルディッシュに視線を向けるものの

《マスター。残念ながら現在の状況下ではヒロ殿のおっしゃることを否定できません……………》

「……………」

正論なだけに援護も反論も不可能だった。

「さて、俺はどこに連れていかれるんですかね…時空管理局本局魔導師、フェイトIIテストロッサIIハラオウン執務官殿」

さらに警戒心たつぷりな感じで接するヒロの態度に、もはや為す術のないフェイトはライフがほぼゼロになりかけるが、それでも気力を振り絞る。

「その…行けばわかる…から… だからその…さっきみたいな感じに戻してくれないかな…」

「善処します。執務官殿」

口では言いつつも、美人さんが涙目なのだ。若干ながらヒロに罪悪感が生まれたのは言うまでもない。

フェイトが何とかしてコミュニケーションをはかるうとするものの、相変わらず警戒心全開な態度なヒロ、それを受けて涙目になりながらオロオロするという光景を何度か繰り返す。

世の中の犯罪者たちにとってフェイトは「テストロッサ」「ハラオウン」といえば世間からは「管理局のエースオブエース」、『不屈のエース』などと賞賛される反面、犯罪者たちからは『管理局の白い悪魔』、『魔王』などと絶対恐怖の念をこめられ呼ばれている人物と同等クラスの知名度を誇るほどの有名人。

事実、犯罪者たちは遭遇するだけで絶望の色を浮かべてしまうほどで、フェイトとしてもかなりショックだったりする。

「悪魔じゃないもん！魔王じゃないもん！」

…などと、どこからか悲痛な叫びが聞こえなくもないが……

もちろん管理局の白い悪魔と呼ばれる人物にとっても非常にショックなことこの上ない。

犯罪者たちを震えあがらせるほどの恐怖の対象である存在は今、一人の次元漂流者によって涙目にさせられているこの光景を、もしも犯罪者たちが知ったらどうなってしまうのだろうな…と、こちらもまた管理局では『烈火の将』として名が知れているシグナムは苦

笑っていた。

要請していた応援部隊が到着し、シグナムは引き継ぎをすませると、どこからか用意させた一台の普通自動車にバインドで捕縛したヒロと万が一にも逃げ出す可能性を考慮し、フェイトと一緒に後部座席に座らせ、シグナム自身は運転席につく。

「本当なら私の車のほうがいいんだろっけどその…私の車二人乗りだから……」

「そんな！執務官殿の車など恐れ多いですよ、こちらで充分満足です！」

「うっう…シグナム…」

たまらずフェイトはシグナムに助けを求めるもの…

「フム…ラインハート、こう見えてもテストタロツサは傷つきやすく繊細なんだ。あまり虐めてやるな」

「シ、シグナム!？」

どうにも分が悪い。

《マスター、私がついています。共に頑張りましょう》

「バルディツシユウ……」

そつこつしているうちに車は走りだす。

当事者であるヒロ＝ラインハートが行き先を知らないままに。

「……………」

「……………」

「……………」

私ことフェイト「テストロッサ」ハラオウンは現在、この重い空気に押し潰されかけている……

車は廃棄市街区を抜けミッドチルダの首都クラナガンに向けて現在進行中。

となりに座っている私と同年代に見える男の子、ヒロは窓の景色ばかり見ている。

…なんだか私にすごくよそよそしい……

最初はあるなにお喋りしてくれたのに、今はどんどん距離を取られてしまっている……

それにお仕事でも次元漂流者は保護しなければいけないって決まってるし、例えば私が管理局に入っていないなかったとしても今と同じこととしてたと思う。

でも、やっぱり力ずくなんて強引だったのかな…もっと粘り強く説得したほうがよかったのかな…力ずくなんてしちゃったから嫌

われちゃったのかな……

ああ…なんだかどどん思考がネガティブな方向にいつちゃうよ…

考えてみれば嫌われて当然かもしれない…だってヒロは何も悪いことしてないのに無理矢理連れてこられてるわけで……

そもそもがいきなり違う世界に来ちゃったんだよね……

ただでさえ右も左もわからないで混乱してるよね…不安だよね……

それなのに、いきなり身動きとれなくされたら怒るよね……

「あの……バインド、苦しくないかな…緩めることもできるよ?」

「心配なさらず。仕事に専念してください執務官殿」

うう……ホントに泣きたいかも……

でも私は執務官、泣きごとなんて言えない!なのはにも、はやてにも笑われちゃうよ!

考える…こつこつとき、なのはなら…はやてならどうするか…私
はどうしたいのか……

そつだ！これならいけるかも！

「シグナム、行き先を変更してください！」

第三話 〽『逃走失敗、敗者のささやかな反撃と金色の閃き』〽（後書き）

【スペシャル・コメンタリー】

白金「え〜はい、今回も始まりましたねスペシャルコメンタリー。今回は短いから製作サイドで中止かと議論がありました、作者は手を抜きませんよ！」

だって、このコメンタリーがストレス発散の場になりつつありますから！」

ド　　ン！（効果音）

白金「……とまあ、こんな始まりなんだけど……」

ヒロ「いやどんな振りだよ！？ていうか、この空気わかるか！？見るよ製作スタッフのみなさんのドン引き具合……！」

白金「いやさあ〜最近×切りキツイのなんのって……さすがに掛け持ちとかキツイよね…アイデア出ないっての……」

ヒロ「…随分急かされてるもんな…ま　まあ、あれだ！筆が進む方を優先させたほうが新しいアイデア出るかもしれないしさ！変に重くなるなよな！まだまだ認知度低いとはいえ、Uroborsシリーズの内容を評価してくれる読者さんたちはいっぱいいるんだからさ！」

白金「ここはやはりもっとヒロを精神肉体両方で追いつめたほうが……」

ヒロ「労りの心返せよコノヤロ〜〜!!」

白金「じゃあこのシーンについてだけど」

ヒロ「スルー！？オレの発言無かったことに!？」

白金「医　田のイメトレシーン、わざわざ上半身裸になる必要があるのか？」

ヒロ「本編ぜんっぜん関係ないよ!？」

【作者の現実逃避がヤバイ領域入ったので、鎮静化するまでしばらくおまちください……】

白金「まったく…なにをいうてんか やんは…ほかあ落下型ヒロイ
ンのみならず、メイド軍人巫女さん婦警、シヨタコンツンデレチア
ガール、ヤンデレドジツ娘ロボットむすめ」

ヒロ「 髪発言はいいわ！」

白金「チツ…ゆーもあのわからんやつめ…まあいい…じゃあ本編だ
けど…お前、死ぬぞ？」

ヒロ「鬼 ネタはもういい！」

白金「いやわかってないなヒロ君や…残念ながらこれはネタじゃな
いよ」

ヒロ「え？いや、意味がわからないんだけど…」

白金「君は今回の話しで何をしたのか覚えていないのかね？」

ヒロ「なにを？」

白金「……………おそれおおくも…フェイトさんを涙目にしただろう…

…」

ヒロ「……………あ…」

白金「まったく、ようやく思い出したか…。つまりはだ、おまえは今、ミッドチルダ いや、全次元世界のフェイトさんファンクラブの最重要ブラックリストの仲間入りをしかけているといっても言い過ぎじゃあないぞ?」

ヒロ「ぜ……………全次元……………まさか…いくらなんでも…」

白金「少なくとも管理局のフェイトさんファンクラブの面々の逆鱗に触れたのは……………まちがいないな……………」

ヒロ「……………」

白金「月が無い夜は背中に気をつけるんだな」

ヒロ「ノオオオオオ!! どうすりゃいい作者! ってか作者のシナリオだろぅが! 何とかしてくれよ~~~~~!」

白金「フツ……………世話のやけるポーズだな…安心しろ。今回ののはしっ

かりと根回ししておいたからな、あちらさんも広いココロで許してくれてるぞ」

ヒロ「マジか！ホントか！ありがとう！恩にきるよ！」

白金「どういたしまして。作者としては主人公を護るのは当然の義務だからな！（こいつ…アホすぎる…もはや管理局異端審問会にかけるのは時間の問題なのにな…だって！シナリオは既に完成してるし！あんな展開やこんな展開が繰り広げられるのは確定事項なんだよね！）」

とにかくだ、君は本編に専念するんだ。いいね？」

ヒロ「オレ、精一杯頑張るよ！」

白金「フフツ…君の活躍、作者として（色んな意味で）全力でバックアップして（いじり倒して）あげるよ（邪笑）。

それじゃあ今回のコメンタリーはここまで。また次回に会おう」

ヒロ「感想とか随時お待ちしてますから、よろしくお願いします！」

白金&ヒロ「『ばいばい…』」

第四話 、『事情聴取？いや、その展開は理解不能デス…』 （前書き）

さて、ようやく編集ができたので早速投稿をしようとおもいますが……皆さまどうか覚悟してください…

作者自身書いててこれはアカ〜ン！と思いましたたよ実際……

だが、だがしか〜し！これから先執筆していくにあたって、この程度はハッキリ言えばまだまだなんですよね！

是非皆さまの感想をお待ちしてます。特に作者が今後執筆するにあたって、ノーブレーキで行っていいのか…これ以上のギアを入れてもいいのか…とか…

それでは本編をどうぞ！

第四話 、『事情聴取？いや、その展開は理解不能デス…』

「なんだこりゃああああッ!？」

往来、しかも道のド真ん中でヒロ＝ラインハートは絶叫をあげてしまっ。

原因はすぐ目の前にある。

車中でフェイトが発した謎の発言でどうやら行き先が変更になったらしいところまでは何とかヒロにも理解できた。

どこに行くのかは知らないが、もはやどう転んでもこれ以上に悪い方向に転ぶはずはない。たとえ気まぐれな運命の女神様だろうとそこまで無慈悲ではないはずだ。

そう信じたかったヒロ＝ラインハートのささやかな願いは見事なまでに裏切られた。

現実を受け入れるしかないとわかってはいるものの、どうしても背けたくなる現実はあるもので。

目の前に悠然と立ちはだかるのは、見上げてもてっぺんが小さくしか見えない高すぎる建造物…世間一般でいうところの『超高層マンション』というのが一番シックリくる。

「つかぬことを聞きますけど……」こちらが……」

「えっと…私の家、だよ……」

「……………」

眩暈がした……

そんなヒロの気持ちを察したのだろう、シグナムが懇切丁寧な説明をしてくれた。

管理局の仕事は常に危険と隣り合わせに加え、犯罪件数の増加につき万年人手不足に陥っている。

優秀な人材は特にらしく、世間一般でいう労働基準法などというものは飾りと化している。

ただでさえ優秀な人材は一般水準よりも高給取りなうえ、超がつく残業により支給額は常に限度額一杯。加え、休暇などはろくに取れず、取れたとしても事件に人手不足の為に強制的に駆り出される……

ゆっくり時間をかけてお買い物 など、そんな時間などあるはずもなく、加え管理局は福利厚生も異常なほどの好待遇で、全員が衣食は全て支給され、希望すれば住居までも支給される。

つまりは、使えない給料だけがどんどん貯まっていくというわけなのだ。

一見、良いことづくしな天国に見える管理局のだが、忘れてはいけない。仕事は超超ハードワーク、身体を壊し、再起不能はもちろん、中には過労死や仕事中毒ワーカホリックなんてのも珍しいことではない。

追い討ちをかけるのは希望退職者が後を絶たないことだろうか。

そんな負のスパイラルが一見華やかに見える管理局の隠せない実情の一つなのだ。

さらにシグナムが言うにはフェイトは管理局で働くようになってから約8年、それだけ働きに働いていればこの程度（超がつく高層マンション）を買うことなど造作もないことだと。

終始頬を赤らめ恥ずかしかるフェイトだったがヒロとしてはドン引きである……

管理局という場所と、自覚が無いであろう仕事中毒なフェイトに。

「あの……申し訳ないんですけどもう一つ……」

「どうした？ ああ、そうだな。ここまできれば逃げるなどということは考えまい。テストロッサ」

「あ、はい」

同時にヒロを縛っていた金色のバンドが消える。

「あ、どうも　ってそうじゃなくて！」

バンドもそうだが、肝心なのはそこではない。

「なんで執務官殿の御自宅に俺を連れて来たんだってことですよ！」

ヒロとしてはまったく理解できなかったのだ。

そんなヒロに対し、フェイトは笑う。

「最初に言ったよね。私たちはヒロの味方だって。酷いことなんてしないしさせないって」

「あ……いや、そういうことじゃなくてですね……」

どうやら確実にヒロの考えとフェイト、シグナムの考えにはズレが生じている。

ただ、事態はどんどん進む。逃げようにも前にはフェイト、後ろにはシグナムがいるのだ、逃げられるわけがない。

フェイトとシグナムはデバイスを展開しているものの服装は管理局の制服に戻している。

場所が場所、首都クラナガンの一等地なため、バリアジャケットや騎士甲冑では目立ちすぎるためだとのことらしい。

「……………」

そうこうしているうちにオートロックが解除され、エントランスホールを抜けエレベーターに乗せられ、一気にかなり高い階まで昇っていく。

最上階が32階らしく、三人が降りたのは28階、気にする余裕などは微塵もないが、辛うじてヒロがわかったこと、それはこのマンションが幾つもの高度なセキュリティに護られている女性に絶対安全であるということ。

そして、高級リゾートホテルばりに豪華だということだ。

「あの、ちょっと散らかっているかもしれないけど、気にしないでほしいんだ……………」

顔を赤らめるフェイトだが、それを返すだけの余裕などヒロには無い……………」

とある部屋のまえで止まり、フェイトは懐からカードキーを取り出し、それを重厚そうな黒いドアに翳すとピピツという電子音が鳴り、ガチャリと二度ほど鍵が開く音がした。

そこからさき、リビングに通されるまでの記憶はなぜか欠けてしまっ。

あれよあれよという間に通されたりリビングはこれまた広く、来るときに言っていた散らかっているというのはどこが？と聞きたくなるほど綺麗にされている。

普段から掃除をし続けていなければこんなに綺麗さを保つのは不可能だ。

さすがは若くしてのエリート中のエリート、シグナムの説明によれば執務官とはやはり超がつくエリートとのこと。

そのエリート様は家事もこなせる超人らしい。

室内はなんとというか、大人な雰囲気満載で、黒や白、ウッド調といった、落ち着ける配色の家具で纏め、照明などが柔らかな暖か

みのある光でアクセントになっていた。

「あの…その…あんまりマジマジ見られると…恥ずかしい…よ…」

「そつだぞラインハート、初対面の女性の部屋をマジマジと見るのはマナー違反だぞ」

「ッ！…すいません！…」

べつじやら過度に見すぎってしまったようだとして口も自重する。

「さて、まずは先ほどの繰り返しになってしまつが質問をさせてもらつが何か問題はあるか？」

「答えられる範囲でなら」

「わかった。」

白のソファーに向かい合う形でヒロとシグナムは座る。

この部屋の主であるフェイトはといえば、今はお茶を入れている。

さすがにそれはと断ったのだが、長くなるからとやんわり却下されてしまう。

新しい拠点、昼のうちに早く見つけたいのにな…などと内心ヒロは焦っていたが、ここまで来てしまったのだ、諦めるしかないと腹をくくる。

「ではまずは名前と年齢だな」

「はい。名前はヒロ＝ラインハート、年齢は15」

「ほお…15歳にしては落ち着いたものだな…テストロッサのほうか？」

「あ、はい。そうですね」

トレイにカップやらポットやら色々載せたフェイトが答える。

「そうだったんですか。なら、別段敬語を使うのはおかしくは無いですね、執務官殿」

「あうう…」

「ラインハート、そろそろ元に戻してやれ。でないと本当にテストロッサが泣いてしまっぞ?」

「わかりましたフェイト」

「あ……」

「よかったな、テストロッサ」

「は、はい!」

本当に年下なのだから敬語のほうが良いのではと尚も口は思うが、あまりに嬉しそうなフェイトを見てしまつとどうにも言えない。

ついでに敬語も直すように言われてしまつが、いきなりは無理な

話しなので徐々にといいことで徐々にながらも納得してもらった。

「よし、では次は…そうだな…この世界に来る前に何をしていたか話せる範囲で構わない、話してくれないか？」

「わかりました。そうですね…なにから話せばいいんですかね…」

フェイトに出された紅茶を口に運ぶ。良い香りと程よい苦みが口に広がる。

「そのまえに聞きたいんですけど、こつちの世界には魔法が存在するんですか？」

「そうだな…魔法は存在する。現に我々の身体の中にはリンカーコアという目にはみえない第六臓器が存在し、そのリンカーコアが空気中の魔力素を取り込み魔力をつくりだしている。」

「なるほど…リンカーコアってのが何なのかはわかりませんが、魔法があるってのはわかりました」

「ちょっと待って、ヒロにはリンカーコアが無いの!？」

「さあ…俺はそのリンカーコアっていうのがどんなのか知らないから……」

「どうやら、俺の世界とこちらの世界の魔法ってのはかなり違うのかも知れないですね」

「そうかもしれんな……ではまずは、ラインハートの世界の魔法について話せる範囲で構わない。話してくれ」

シグナムの問い掛けにヒロは頷く。

「まず、俺の世界では誰でも生まれたときから必ず、魔力を持って生まれてきます。あくまで仮定になりますが、こっちの世界でいうところのリンカーコアは残念ながらわかりません。」

ただ、魔力元素は心臓が精製し血液と共に身体を循環し、加え大気中に漂う魔力を取り込み自らの魔力と結合させていると理論付けられています。

もちろん人それぞれが最初に持っている魔力は違いますが、俺たちは鍛錬や経験を積み、魔法を使い続けることで魔力の絶対量を増やしていくんです」

「なるほどな…血液とは絶えず体中を循環し続けるもの、例え怪我をしようとも血液は増やすことができる。なにより体内で魔力を作っているんだ、筋は通っている。」

「私たちが持つリンカーコアは生まれで大体の魔力保有値が決まってくるから、少し羨ましいかな……」

「ああ、誤解がないように訂正しますけど、魔力の絶対量なんてただやみくもに魔法を使い続けるだけじゃ増えないですよ。」

魔力を増やすには鍛錬もそうですけど、経験やメンタル面も大きく関係してますから」

「つまりは、魔力を増やすためには本当の意味で心技体を鍛える必要があるというわけだな？」

「そのとおりです」

やはりこの反応からすると、自分の世界とこちらの世界の魔法が根底からしてかなり違うのかもど、推測しながらヒ口は続ける。

「こつちの世界では教育機関としては初等、中等、高等、と段階を踏む教育システムがあります。そうですね……魔法に関係しないところの小学校から高等学校になりますかね……」。

本格的に魔法を授業のカリキュラムに取り入れるのは高等教育、15歳からの四年間になります。もちろん全員が全員そうではなく、将来魔法関係の進路に進みたい者ですが、まあそれだって教育制度の自由のために言っているだけの飾りで、現実にはほぼ義務教育的な感じになりますね」

「それはなんとというか、随分と徹底しているのだな……」

「まあ、そうとれなくもないですかね…もちろんその次にも高度専門教育なんてありますが、よっぽどの研究者タイプでもなければ行くことはないです。別に研究なんて場所も年齢も関係なく自由にできますし、ね」

「じゃあ、ヒロは学生さんだったってことでいいのかな？」

「うん…まあ、学生ではあるんですけど……」

悩む仕草を見せる。

どう説明すれば良いかわからないので、ヒロとしてはスルーしたいのだが…。

フェイトが聞かせてほしいと頼むため、結局は手探りながらも続ける。

「えっと…俺たちの世界の人間は生れつき誰でも魔力を宿してはいるけど、誰でも自由に魔法が使えるわけじゃないんだ。」

否。寧ろ、使えないとヒロは断言する。

「難関と呼ばれる魔法教育機関の試験を突破するのが第一関門。魔法教育機関での“正式な儀式”を経て、魔法について勉強を始め、最終的には世界共通の資格である『国際誓約者ライセンス』って資格を取らなきゃいけない。」

まあ、これは年齢なんかは関係なく、魔法についての知識や実技なんかが一定水準以上なら普通に取得できる。

ちなみに授業のカリキュラムなんかで必要だから最低ランクを取るだけなら、だいたいは十歳前後で取るのが多いかな…。

もちろん、なにも受けなくても高等教育修了時に最低ランクのライセンスが発行されるわけだけど、そんなケースは聞いたことがない」

「なるほど。自由に魔法を使うには誓約者ライセンスという資格を取らなければならない…聞けば聞くほどに徹底しているな…。」

「ええ、自分の世界ながら本当に徹底しているなと思います。とにかく、誓約者ライセンスを取得した時点から『誓約者』と名乗ることができません。」

この時点から魔法関係で働こうとおもえば働けますね」

「なんだか、労働基準法なんてまるで無視、だね……」

「ああ…もちろん制限はあります。働けるといいうのは普通の会社ではありません。普通の会社なんかは労働法なんかのとおり高等教育修了後です。」

働けるっていいうのは主に『ギルド』という専門機関に登録できるようになることを指し、こっちは完全に実力の世界。『ギルドランク』に応じた仕事ができるってことです。」

「待て、先ほどでてきた誓約者ライセンスというものにもランクがあると言わなかったか？」

「いい質問ですね。まず誓約者ライセンスは個人の総合ステータスになり、簡単にはランクが高ければ高いほど誓約者としてのキャリアが高くなり、就ける職業の幅を広くするだけでなく、民間の企業なんかだと高待遇を受けるんです。」

つまりは、魔法関係を専門にする職業については誓約者ライセンスのランクが高ければ高いほど信用度は高く出世しやすく、逆にそ

れ以外では殆ど意味を成さないというだけですな」

「なるほど…それはそうだな。そうしなければ無法地帯になりかね無いし、な……」

「はい。だからこそ高等教育の次があるんですよ。」

次にギルドについてですが、こちらは知識などは完全に無視。魔法や戦闘なんかの実力があれば直ぐに上を目指せる完全実力主義ですね。もちろん難易度の高い依頼は報酬も桁が違ってきます。

まあ、難易度が高ければそれだけ命を落とす確率も高くなるのは説明は不要ですね。

ただ、それだけ危険なわけで、誰でもギルドに登録できるわけはありません。

ギルドに登録するにはたいいてい、それぞれのギルドでそれぞれ独自の實力試験があります。

有名なギルドや人気のギルドなんかは勿論、試験の難易度は高くなるのは実力主義なんかでは仕方のないことでしょう。

話を戻しますが、先ほどの誓約者ライセンスってというのはあくまで一般的に言うなら登録するための最低条件、というわけです」

「なんていうか、徹底したシステムが確立されているんなんで…ちよっと　ううん…かなり驚きだね……」

「テストロッサの言う通りだな…　ということとはだ、今までの話しからするとラインハートは誓約者ライセンスを持っている誓約者であり、ギルドでも自由に働いていたということになるが…どうなんだ？」

「まあ、そういうことになりますね」

「そうか、なるほどな…では本題に入ろう。ここに来る直前、何をしていたのだ？」

「えっと…それは何か関係が？」

「我々があの場所に赴いたのは、あの場所付近で一瞬だが『次元震』を観測したからだ」

「じげん…しん？」

「えっと、そうだな…次元震っていうのはヒロのような次元漂流者が何らかの事故で世界を超えたときに起こる現象なんだ。」

「これには色々原因があるんだけど、付近にガジェット…ヒロが壊した機械って言えば思い出すかな？」

「ああ…あのいきなり攻撃してきた…」

「そう、それだよ。次元震と一瞬にガジェット反応が確認されたから私とシグナムさんがあそこに行くことになったんだよ」

「そのガジェットとかいうのは……」

「うん…この世界や管理局が管理する世界に大昔から存在している危険物っていろいろのわかりやすいのかな……」

名称は『ロストロギア』」

「ろすと、ろぎあ……」

「ロストロギアについて詳しいことは追い追い話すから、今はガジェットについて。ガジェットはロストロギアに反応して自動で搜索、回収するって性質があるみたいなんだ……」

「つまりは次元震と一緒に、そのガジェットとやらの反応が出たか

らロストロギアが関係してるってことが予想されて、フェイトとシグナムさんがあの場所に来たと……」

「そついうことだな」

腕を組み、満足そうにシグナムは頷く。

「まあ、次元震は執務官のお仕事にも入るから、どのみち私たちが出ることに変わりはないんだけどね」

などと、フェイトもウンウンと満足げに首を縦にふる。

127

(つまりは……最初っからこの展開は決まってたってことなのね……)

対するヒロとしてはアンラッキー以外の何物でもなかった……

ああ……やっぱり変な意地なんて捨てて、あんなことしなければよかったと激しい後悔に駆られてしまう。

まさに自業自得なのだから。

「それでだラインハート、ここに飛ばされるまえ何をしていたのだ？」

「……………」

言いたくない…というか言えない……

「えっと、何か事件にでも巻き込まれちゃったのかな……………」

うつむき様子がおかしいヒロをフェイトは心配するのだが

「……………」

まさか、手に入れた物を買取り拒否されたから腹がたって、その場のノリで本来なら専門の設備が必要な儀式を完全に見よう見真似で試してしまったなど、格好悪すぎて言えるわけがない。

ただこの状況、黙秘という選択を許してくれるとは到底おもえず、かといってソレっぽい嘘が思い浮かばない……

それに相手は人を見るプロだ、即席の嘘が通じる相手なわけもない。

仕方がない、格好悪すぎて恥ずかしいが、ここは覚悟を決めて話すしかない……

口を開きかけたときだった。

ピンポーンという音が 鳴り響く。

当然ながら部屋の主であるフェイトはインターホンで相手を確認しに行く。

「あつ！ ……」

「……………」

「ムッ……どうしたんだラインハート、顔色がすぐれないようだが……」

リビングから出ていくフェイトをヒロが視線で追っていると、心配したのかシグナムが話しかける。

「あの……来客みたいですし、俺はそろそろおいとましたほうが……」

「なんだ、そんなことか。そんな心配など不要だ。何故なら今来たであろう人物たちは私とテストアロツサが呼んだんだからな」

「えっと……その…誰を？いや、そもそも“たち”って……」

「すぐにわかる」

そう言うと、おもむろにシグナムは立ち上がる。

一体、どうすればいいのだろうか……。

そもそもが何故にこんな状況になったのかわげがわからない……。

「あ、楽に、もっとリラックスしてくださいね」

困惑を隠しきれないヒロの正面に座っている独特の発音で喋る茶色のショートカットの女性。

シグナムと同じ制服に白いニーハイソックスを履いている。

「……………」

そのソファアの背後で…三編みの赤みがかつた俺ンジ色な髪、どうみても背丈が少女であろうその少女がまるで視線で射殺さんとはかりにヒロを睨みつけている。

「いらヴィータ、そんなに睨んだらアカンよ」

「だってはやて」

「そつだぞ。ただでさえお前は相手を畏縮させてしまう傾向があるんだ、気をつける」

だって舐められるわけにはいかねだると少々口が悪い。

「そうudahayete、なのはは?」

「それなんやけどな、やっぱりいきなり仕事を抜けるんは難しいみたいでなあ、逢わせるんわ後日改めてってことになりそうや」

「そう……」

「……………」

なにやらスルーしたくない単語が出てくるが、とてもじゃないが口を出せる感じではない。

「あ!このクッキー美味しいですう」

「よかった。実はお気に入りなお菓子屋さんなんだ」

「あっ、ほらリンちゃん、お口拭いて」

「ちゃんとぶける?」

「大丈夫ですう」

どうみても小人という言葉しかでてこない銀髪に蒼い色の瞳の30センチ程度しかない女の子が自分より大きいクツキーを頬張りながら悦に入っているところでフェイトに口を拭くように促されているのだ。

その横では金髪のショートカットな優しげな女性と、

「……………」

どうみても大型犬にしかみえない青い狼が行儀よくおすわりしているではないか。

なんとというか、率直な感想は何でも在りということしか持てない

……………

「ごめんなあ騒がしくて。」

「いえ……その……」

「はは、無理せんでもええんよ……さて、」

はやてと呼ばれた少女の顔が引き締まる。

「私は時空管理局特別捜査官、八神はやてといいます。階級は二等陸佐です。以後、よろしゅうな」

「……丁寧にありがとうございます、はやてさん。ヒロ＝ラインハートです、こちらこそこの度は……」

「ああ、そないに堅苦しくなくてええ。私はフェイトちゃんの親友や。そやから私のことははやてでええ」

「わかりました、はやてさん」

「ん……本当は敬語もやめて欲しいんや。なんか仲良おなれてへんみたいで私としては嫌や。そやから徐々に敬語はやめてな？」

「………努力します」

「よかったわあ。ほんならお話ししよか。まずは現場検証の結果からや。シグナムと現場チームの報告から、ヒロ君の所持品の中には質量兵器に該当しそうなものはとりあえずは無かったよ」

「はやて、本当？」

「安心せえフェイトちゃん。私もちゃんと見たけど、着替えや洋服の類が多かったよ。」

ただな…あのクローゼットの中の物でいくつか持ち主の魔力が認証キーになってるものがある、こちらとしても一応は禁書の類いやら、小型の質量兵器として調べんといけへんねんけど……中身だけでも教えてくれへんか？」

部屋じゅうの視線が一気にヒロに集中する。

「じゅん……」

「ヒロ……」

考えこむヒロを見るフェイトの表情は不安げそのもの。

「……わかりました。書物の類いは中身は俺の世界の魔法に関する書物です。」

「こつちの世界の魔法とは理論やらが根底から違つみたいなので、たぶん意味は無いかと」

「へえ。そのヒロ君の世界の魔法とやらはどんなもんなんや？」

興味津々なのは、はやてだけかとおもいきや、どうやら違つみたいで、フェイトやシグナム、シャマルやザフィーラ、興味がないふりをしながらもチラチラとヒロの方をみるヴィータが。

「じゃあそうですね……フェイト、コップに水を入れてくれますか？」

「わかった。これでいい？」

「充分です」

そのままヒロはテーブルに置かれたコップを持つ。

「まず、これはさっきフェイトとシグナムさんにも話しましたが、

俺らの世界では誰でも必ず魔力を持ち産まれてきます。

産まれながらにして備わっている属性を『先天属性』。成長とともに開花する『後天属性』があり、生れつきの才能や運にも作用されますが、複数の属性を持つ者もいれば『先天属性』のみしか持たない者と、その様は千差万別といえます。

補則になりますけど、先天属性に無属性を持つ者には後天属性が発現しないことを付け加えておきます」

ヒロはそこで一旦話しを区切り、コップの水に魔力を干渉させる。するとコップの中の水はまるで生命を持ったかのように立ちのぼり、龍のカタチに変化をみせる。

これには他の全員が声を挙げ驚きをみせた。

特にヴィータの表情などはまるで少女のようだ。

魔法など見慣れているだろうにとその姿をみてヒロが心のなかで苦笑したのは絶対に内緒だが。

「ということはや、ヒロ君は水の魔力変換資質を持つってことか？」

「魔力変換資質…なんですかそれは」

「ああそやったな。魔力変換資質というのは簡単に言えば魔力を自由に特定の属性に変化することをいうんや。私らの世界じゃ魔力はあつてもそれを変化させることができる人間は少ないんや。」

ちなみにフェイトちゃんは金色の魔力光、電気の魔力変換資質を持つとつて、ヒロ君の世界で言うところの雷属性、シグナムが炎熱の魔力変換資質、火属性になるかな」

「なるほど……」

「どうやらこの世界の魔法のことがヒロも少しだがわかることができた気がした。」

同時に興味も湧いてくる。

「それで、どうなんや？ヒロ君は水しか使えへんのか？」

「そうですね……まあ、そこらへんはご想像にお任せしますよ」

「むう……教えるとマズイんか？」

「まあ俺自身、誓約者としての自らの手札を簡単に晒すわけにはいかないのよ」

回答を聞くはやては少々不満げな御様子だが、そこはやはり若きエリート。

彼女も魔法に携わるということがどのようなことが充分に理解しているのよ、ここは一旦おさめる。

「そやね。なら話しを戻そか。ヒロ君の所持品の魔力で鍵かけてるモンの中身、教えてくれるか？」

「まあ、別にかまいませんよ。あそこに置いてあるものは俺が作った試作品のマジックアイテムです。」

ちなみに無理に壊して開けようとするればトラップが発動するので扱いには気をつけてくださいね？」

「さよか…いや、ええんや。ただの確認やからすぐにヒロ君に返すから心配せんでな」

「まあいいですけど」

「なら次いつてみよかあ」

「……………」

どつやらと口が開放されるのはまだまだ先のようである……

それから約一時間程度、はやてたちからの質問は続いた。

しかも太刀が悪いことに全員が全員真面目に聞いてくるだけに口としても中途半端に応えることができないことだった。

「お疲れ様。次が最後なんやけどな。これは質問　というかもう決定事項なんやけど聞いてくれるか？」

「えっと……………なんですか？」

「じゃあフェイトちゃん……」

「うん、ありがとうね。はやく……」

「じゃあ私たちは今日は仕事に戻るから、また明日会おう！」

「じゃあな！」

「また明日ねえ」

「明日ですう」

「テストロッサ、ラインハート、また明日な」

「……………ウム……」

意味深な言葉を言い残し、はやくとヴォルケンリッター、リインは出ていく。

はやくがフェイトのそばを離れようとした時、なにやらボソボソ

と眩き、こっそりと封筒のようなものを渡したのを辛うじてヒロは視界に捉えることができた。

(なんだろう…これまた嫌な予感しかしないんだけど……)

リビングに残されたのはヒロとフェイトの二人だけ。

ただフェイトの表情は真剣そのもの……反論や口を挟む余地すら与えてくれそうにない。

室内の雰囲気は段々と張り詰めたものになっていくのをヒロが感じたその時だった。

「ヒロー！」

「は、はい……！」

フェイト「テストロッサ」ハラオウンが動いた……。

もしかしたら私、いままで生きて来たなかでトップ3に入るくらい緊張してて、それと同じくらい普通なら変人扱いされそうなことを言おうとしてるのかもしれない……

でももう決めたんだ…

そのために、はやてに根回ししてもう殆どの手続きをしてもらった。

根回し……なんかいけない言葉だ……

それにしても緊張する……ほんとならばはやてや皆にいてほしかったのに……

「ちゃんと後でレポートとして報告してな。もちろん仕事用とは別に、な？」

うっ…なんにも去り際に言わなくても…

ヴィータとかリン、シャマルもニヤニヤしてたし…

シグナムは何だか冷静すぎる…

せめてザフィーラには残っててほしかったな…

なのは…今からでも来てくれないかなあ…

ああ、ダメだダメだ！こんなネガティブなのはダメだ！

そうだよ、こっちにはもうはやてのお陰でほぼ全部揃ってるんだ。

それにリンディ母さんもよく言ってる。

女は強いって！

でも…

なんだかはやてが出ていっちゃったことでヒロが警戒しちゃって
る……

ううん…大丈夫。

よし、言おう！

「ヒロ！」

「は、はい！？」

わっ！？

声大きすぎた！？もういいや、このまま言っちゃえ！！

「一緒に暮らそう!」

「……………はい?」

文字通り、空気が凍りつく。もちろんヒロだけの…………。

「ってハイいいいい!?!」

そして絶叫。いや寧ろこの状況でしないほうがおかしいだろう。

「まてまてまてまてまててください…………おちついてれいせい! ヒロ=ラ
インハート…………頭をクールにしようじゃないですか…………」

おもつきり動揺を見せる。…………というよりは心の声がダダ洩
れになっている。

「えっと、それって誰が誰と…………どこでってことですか…………」

「私とヒロがここで、二人で暮らすんだよ」

「えっとあの…………なんだか言ってることがさっきと違っつていつかそ
の…………」

、なんだかもう決まってるみたいな言い方に聞こえるんですけど…
…そ、幻聴ですよね？」

「幻聴じゃないよ。現実だよ」

そう言いながらフェイトはさっきからずっとヒロが気になっていた封筒を手に取り、テーブルの上に置く。

「なん…ですか…これ…」

「ヒロはなんだと思う？」

質問返し。ニツコリと素晴らしい笑顔なのだが、いかんせん状況があまりにもよろしくない。

しかし事態はシツカリと進む。フェイトは封筒から何枚かの紙を取り出し、テーブルの上に置く。

「えっと、やっぱりヒロの世界の文字とは違うのかな」

「文字…えっと、ああ…まあ形がちょっと違うのがあるけど俺の世界の文字とほぼ同じですね」

「ホントに？なら話しは早いね。実はこの書類、私とヒロが一緒に暮らすための書類で明日までに提出しなきゃいけないんだ。」

だからヒロにはここに名前をフルネームでしっかりとサインをしてほしいんだ」

「あ、そうなんですか。一緒に暮らすための。それなら早く書かないと…… ってイヤイヤイヤ！違いますよ!？」

「あれ？どうしたの？」

「いやどうしたのじゃないですよ何ですかいきなり一緒に暮らすって!?! いやそもそもその発想おかしくないですか？」

「ムウ……気づいちゃった……」

「いや誰だっけ気付きますよ……」

本日すでに十回以上はついでであるうため息をヒロは吐かざるをえない……

「サイン、してくれないのかな……」

「いやそもそも何故そんな事態に？俺としても自分のことだし、ちやんと聞かないと……」

至極当然な意見である。

「えっとね……」

どうやら少し冷静さを取りもどしたのか、フェイトは解りやすく説明をし始める。

「つまりは…次元漂流者にはしっかりと身元引受人が必要だと……」

「うん。そして私なら管理局の執務官だし、私が身元引受人になれば色々動きやすいんだ」

「なるほど、監視目的ってやつですか……」

「う、ううん！それは違うよ！他の人はどうか知らないけど私はヒ口を監視したりなんかしないよ！」

これにはフェイトは即座に反応、否定をする。

「なら別に一緒に住む必要はないんじゃないかな」

「ダメ……かな……」

「ウツ!?!」

必要はないと言おうとしたが、それは途中で言葉を強制的に消される。

涙目なのだ…しかも、泣く一歩手前なほどに…

「いやでも、いきなりろくに知りもしない他人、しかも同性ならともかく男の俺と一緒にするのは一般的にみてもよろしくな」

「ダメ……かな……」

「ウウツ!?!」

ダメだ……涙目に上目づかい……完全に幼児化してしまっている……。

「その…ちゃんとした理由があればその…」

ああ…隙ができちゃったなあ…と、ヒロは猛烈に後悔するが、もう遅い。

「さみしいんだ……」

「………はい？」

フェイトは語りだす。この部屋を買ったのは通勤にも便利だし、なによりセキュリティがしっかりしているからだ。

ただ、住みはじめて気付いたのが自分一人で住むには広すぎるということだ。

実はフェイトは今までは管理局が用意した所にずっと住んでいたものの、仕事がハードなこともあり、管理局の住居にいると何だか仕事から開放されていないなと感じるようになっていた。

いつしか、このままだといよいよ精神的にマズイと自覚するようになったという。

だから一念発起していざ引越してみたものの、ここは彼女には予想以上に広がった。

救いになるのは、忙しいなかハラオウン家の面々や八神家、なのはが暇をみつけては遊びにきてくれるおかげで何とかなっているもの、やはり賑やかなところから急に一人になるのは元々が淋しがり屋な彼女には堪えるらしい。

「あ…いやその…」

「お金の心配はいらないよ。私、管理局の執務官からね！家事だつて私得意だよ！」

「いや、そういう問題とかよりも以前にですね……」

困った…非常に困ったことになったぞ…

まさかの理由にどう対処していいのかヒロはわからない。

ただ、フェイトがこんな無茶苦茶ことを言い出したのにはもう一つ、理由があった。

「それに、初めてヒロの目を見た時、…なんだかヒロ、生き急いでるように感じて…心配になったんだ…」

「!?!」

「も…もしかして何かマズイこと言ったかな…」

「いえ…そんなことは…」

気付かなかった…と、自分の心臓の鼓動がバクバクいうのをヒロは自覚する。

もしかすると自分は焦っているのか…

そんなことを考えてしまう。

まったく…まだまだ未熟だな…と、ヒロは内心苦笑する。

「フェイトは物好きな人ですね……」

「あっ……」

書類を確認する。疑うわけではないが、やはり目を通すのは礼儀だろうと。

少し形がちがうものがあるが幸運にも文字や文法は自分の世界の標準言語とほぼ同じ。

内容を再確認していく。中身はたしかに次元漂流者と身元引受人で間違いはなく、本当に身元引受人がフェイトであることを決めるためだけのもので、全てに目を通すがヒロの権利なんかを制限するとは一言も記載されていない。

ごく丁寧に内容がまったく同じものが二組あり、一方が提出用で、もう一方が控えなのだろう。

どちらにもフェイトの署名が先に印されている。

サラサラとヒロは自分の名前を空欄に記す。

「これからよろしくお願いします、フエイト」

「……………うん！」

こうして恐ろしく不自然ではあるが、ヒロ＝ラインハートのミニドチルダでの新生活が今、幕をあけることになった。

優しく純粹無垢な金色の少女の柔らかな笑みとともに。

第四話 、『事情聴取？いや、その展開は理解不能デス…』 、『（後書き）

【スペシャル・コメンタリー】

白金「……………」

ヒロ「ど　　どうした作者…そんな普段は滅多に見せない真剣な顔して……………」

白金「とりあえず…死んでくれ……………」

ヒロ「いきなりの存在否定!？」

白金「当たり前だ、なんだ今回の話しは!!どうしてこうなったんだよ!？」

ヒロ「それはオレが一番聞きたいわ!!なんだよ今回の話しは!?!急展開にもほどがあるだろうよ!その……………まさかの……………」

白金「ええ〜い言うな！わかってるんだよ！何度も思ったさ！けどな……巨大なチカラには…逆らえんのだよ……」

ヒロ「信じられない……いくら心底性根が腐りきつてるとはいえ、全てを仕切ってる作者が逆らえない相手か？ そんなのホントにいいのか？」

白金「フツ……ヒロ君…私もまた弱き人間の一人なのさ… では登場してもらいましょうか…」

管理局が誇るエリート執務官にして今回の発端、フェイト「テストロツサ」ハラオウンさんです！」

フェイト「あ、ど、どうも……」

ヒロ「フ フェイト！？な、なんでここに！？」

フェイト「よくわからないけど、ピンクと青と」

ヒロ「バ テス再び！？」

白金「おなじみ、キツネのフーと愉快的仲間たちだな」

フェイト「それより作者さん…その…」

白金「ああ、そうだったね。それ、ぼちっとな」

ブイン！（床が消える音）

ヒロ「へ…のわあああああああ~~~~~」

ピュー…（ヒロ落下）

白金「今回の出演条件な、お前がいると恥ずかしくて話せないってフェイトさんがおっしゃるんな。今回はもう帰っていいぞ？」

フェイト「…もういないよ？」

白金「ん？おお、そうか。それじゃあ始めましょうか」

フェイト「ええッ！？あの、ヒロは大丈夫なの！？」

白金「ん〜…まあ、大丈夫でしょ。一応は主人公だし、そこら辺

は補正はいるからさ」

フェイト「な…なら大丈夫…かな？」

白金「ダイジョブダイジョブ！この程度でどうにかなるほど、やわなキャラでもないからさ。

それじゃあ今回のコメンタリーは私白金と」

フェイト「あ、そうだ台本…えっと 読者のみなさんはじめまして。時空管理局本局魔導師、フェイトⅡ テスタロツサⅡハラオウ ン執務官です。

こういうコメンタリーに呼ばれるの初めてだから緊張してるけど…精一杯頑張るから！よろしくお願いします！」

白金「ま…真面目だ…台本以上に真面目だ…」

フェイト「エエツ！？あの！白金さん、何かまずかったかな？」

白金「そんなことないです！むしろ御手本、言うことないですよ！ただその…このコメンタリーはお堅いニュース番組じゃないからさ、もうちよっと肩のチカラ抜いて気楽にいこうじゃないか」

フェイト「が…頑張る…」

白金「うんうんその調子その調子。それじゃあ本編についてだけどさ、その… フェイトさんは意外に大胆なんだね…」

フェイト「あうう……」

白金「（顔が赤トウガラシ並に赤くなる人を初めてみたよ私は…）
で、でも、普段大人しいフェイトさんがあんな大胆な行動に出たんだから、やっぱり理由があるんだよね？」

フェイト「その…ヒロのこと初めてみたときなんだけど…なんだか
ヒロが…生き急いでいるように感じたんだ…」

なんていうか、躊躇しないっていうか…その…昔の私と似てる気が
したんだ…」

白金「それは…ジュエルシードの時の、ですか？」

フェイト「……………」

白金「フェイトさんの心配は…まあ、当たってるかな。私が言う
のもなんだけどアイツは自分の目的に関係することに関しては無茶

を無茶とは感じないし、実際無茶やらかすからなあ……」

フェイト「やっぱりそうなんだね……。なら……」

白金「そう。もしもの可能性はあったのも事実だね。だからそうだなあ……ある意味フェイトさんの行動は極論からいえば『アリ』なのかもね」

フェイト「白金さんはその……ヒロが無茶するのとか、心配じゃないの？」

白金「そうだねえ……まあでも、今までアイツは何だかんだで色んなトラブルに巻き込まれてきて、そのたびにちゃんと解決してきてたし。」

それにだ。今アイツの隣にはフェイトさんがいるからさ、わざわざ私が出る幕は無いだろう？」

フェイト「……大丈夫……ヒロのことは絶対私が護るから……まかせて！」

白金「（フツ……ヒロ君……この私に砂糖を吐かせた罪は重い……君が異端審問会にかけられる日がこれでまた早まったね（邪笑））まあ、貴重な話しが聞けたことだし、今回はここで綺麗に終わりにします

か。

え〜、今回のコメンタリーは私白金と

フェイト「あっ！フェイト！！テストロッサ！！ハラオウンがお届けしました。」

白金「感想なども随時お待ちしてます！それでは……」

白金&フェイト「『ばいば〜い！』」

第五話 〽️『できるならば 』〽️(前書き)

さあて、完成しました。イロイロと難しかったんですよこれが…

完成したやつを編集して読み直して、ここはどーなんだ？とかおも
っては手直しして…そんなことを四〇五回ほどしてようやくの投稿

……

それでは本編をどうぞ！

第五話 』できるならば 『

私、八神はやては今、私の家族と一緒に本局に向かうためクラナガンの道路を車で走行しとる。

運転はシグナム。助手席にはシャマル。私とヴィータにザフィーラは後ろの席や。

ちなみにリインはただ今お昼寝中。

あ
お腹いっぱいでお眠くなったやなんて、やっぱりリインはかわええな

「いや〜あの巨口って男の子。え〜感じや」

「はやて〜ちょっと趣味悪いんじゃないか？」

「わかってへんな〜ヴィータは。パツと見は大人びた感じやけど所々で出てくる歳相応な感じがええギャップや。」

私とは三つしか離れてへんし……全然アリ、フェイトちゃんには悪いけどむしろアリや」

「なっ!?!はやてマジかよ!?!」

「マジもマジ大マジやよ。私の勘が告げるんや。あのこは天然フラグマスターやでえ!」

「主はやて、それは憶測が過ぎるのでは……それと鼻血が出ております……シャマル……」

「はいはい。はい、はやてちゃんティッシュ」

「あ、ありがとうな〜シャマル」

アカンアカン……あまりの妄想で鼻血が出てもった……

「わっかんねえなあ〜……あんなにひ弱そうなんだぜ?どこがいいん

だよ」

「ふうむ…たしかにあんまりひ弱なのはアカンかもな……」

そや、色んな意味でひ弱なのはアカン。

まあ、それならそれで私好みに仕立てるだけなんやけど……
ってアカンアカン、想像したらまた鼻血が出そうや……

「じゃあそこはシグナム、実際はどやったんや？」

「そうですね……」

運転しながらシグナムは何かを思い出している。

「おそらくですが…ラインハートには、かなりの実戦経験があるか
と思います」

「あんな弱そうなやつにか!？」

「グイータ、シ〜〜……………そないな大声やとラインが起きてまうよ

「？」

「あ…ゴメンはやて…」

「うっん、ええよ。」

シュンってなるヴィータも可愛ええ〜！カワイイは正義や！

「でもシグナムの報告にもあつたけど、ヒロ君は魔法使わんでただ逃げただけやったんやろ？」

「たしかに、私とテストロッサの時は初めから逃げるだけのようでしたが…シヤマル、六番の映像を再生してくれ」

「六番って…これね。はい、再生するわね」

コンソールを叩き、シグナムが言う六番の映像が再生される。

「これは……」

「マジか……」

私とヴィータはもちろん、シャルやザフィーラも驚いてる。と
いうよりかこれは予想以上や……

「シグナム……この映像、私らの他に見たのはフェイトちゃんだけ
か？」

「私とテストロッサは実際に遠距離から見ていたので、映像を見せ
たのは主はやてとここにいる者だけになります」

「さよか……」

思わず巻き戻し再生、さらにスローにして再生を数回繰り返す。

「ガジェット五体を一瞬で……か……」

「奴は否定すると思いますが私とテストロッサはこれがラインハ
トの全力だとは思っていません。」

それに主はやてたちが来る前にラインハート本人からラインハートの世界のことを少しだけ聞いたのですが、ラインハートの世界ではこちら以上に魔法というもののシステムが完全な形で確立しているようです。

聞く限り、ある意味では一つの完成形といってもよいほどでした」

「ふむ…」

ホンマに予想以上やで…

「シグナム、会話のログはあるか？」

「はい、レヴァンティンに」

「そか。なら後でこの映像データのバックアップ、最低二つ記録して、会話データと一緒に私に持ってきてな？」

「了解しました」

「さて、冗談抜きでこれから忙しくなりそうや……」

「ち、どくにするの？」

「いや、どくして……」

はやてが車内でなにやらヒロにとって、あまりよろしくない計画を練っていたのと同時刻。

ヒロはフェイトに一通り、マンション内部を案内してもらい終わっていた。

本当に、何故一緒に暮らすことになってしまったのか……。

意気地無しでチキンハートなヒロは未だに後悔していたりする。

次元を超え、異世界に来たことですら非現実的なのだ。

それがいきなり年上の、しかもとびきりの美人さんと知り合ってから二時間もしないうちに半強制的に一緒に暮らすことになってしまった。

こんなことありえないだろ！ と現実逃避を決め込みたいのだが、残念なことに紛れも無い現実で、反論の余地も、機会すら与えられず決定してしまった。

となればだ、当然ながら一つ屋根の下で暮らすわけで、当然の流れでフェイトはヒロにどの部屋を自室として使うか聞いてくるのだが。

「まさか部屋がこんなにあるとは……」

「えっ……普通じゃないかな……」

「いや、マンションとかかなりのレベルでもせいぜい三つ程度だから……」

「そ……そうなんだ……」

まさか4LDKだとは……しかもフェイトはそれを普通だと思っている。

どつやらトコトン一般なヒロとは少々感覚がズレているようだ。

そして、どの部屋も家具やらベッドやらテレビやらがしっかりと完備している。

いったいどこぞの高級ホテルですか……とため息がヒロの口から自然と漏れた。

「その…ゴメンね…どの部屋も同じ感じで……」

「いや、むしろありがたすぎて恐縮しちゃいますよ……」

結局ヒロはフェイトの部屋の右斜め向かいの部屋を自室に決めた。

どこもほとんど同じだし、ヒロ自身そこまでこだわりなどが無いためだ。

「じゃあ、今日からここがヒロの部屋だね。自由に使ってくれてい

いからね」

「ありがとう」

「えっと、それじゃあ後は……そうだ、ヒロは最初から荷物とか持ってなかったけど、もしかして服とか着替えははやてが回収した所持品だけなのかな」

「ああ、それなら問題ないよ」

軽く人差し指で宙をなぞる。

「あっ……」

次の瞬間、フェイトの目の前に何やら空間に亀裂のようなものが現れると、そこから黒い大きいサイズのキャリーバッグが姿を現した。

「日用品と服、あとは貴重品ですね」

「ずいぶん量が多いね」

「まあ…最初はこんな展開予想もしてなかったですし、とりあえずは不測の事態も考えて、ね。」

「そうなんだ。で、今も魔法なのかな」

「そうですね。空間操作系の初級魔法、基礎的な部類にはいる魔法です」

便利なんだねとフェイトは感心する。

その後、ヒロは自分の荷物の整理をする。何故かフェイトも手伝うと張り切っていたが突然呼び出し音のようなものが鳴り、空中に画面が現れる。

技術の面ではパツとみた感じはヒロの世界とそんなに大きく変わらないがそれはあくまで一般的。管理局の技術は次元世界を管理するだけのことはあるのか、そこは一般よりも高い技術力があつた。

ともあれ呼び出しを受けたフェイトは申し訳なさそうに仕事だと

ヒロに告げるのだった。

「あうう……」

「どづしたんですかフェイト。呼び出されたんだから早く行かないと怒られちゃいますよっ。」

玄関でお見送りするヒロだが、フェイトは中々行くつもりがない。

どづしたんだろつと不思議に思っていると、なにやら「ニョニョニョ」と小さく言葉を発していた。

「……いなくなったり……しないよ……ね……」

「えっと……」

頭一つ分くらいフェイトのほづが背は低いせいで、自然と上目遣いになってしまう。

が、フェイトの意識無意識など関係無しに破壊力は抜群。

「私が出かけてる間にいなくなったり…しないよね……」

彼女が恐れていることは自分の留守の間にヒロがいなくならな
か、ということだった。

「大丈夫です、いなくなりませんから。だから安心してお仕事頑
張ってください」

結果として、ヒロ＝ラインハートは文字通りに完全敗北させられ
た。

ここまで来て逃げる度胸など、臆病で意気地無しなヒロにでき
るはずもなかった……。

「絶対の絶対だよ？」

「わかってますよ」

「なるべく早く帰ってくるから！」

「はい。いってらっしゃい、お仕事頑張ってくださいね」

「あ……うん、いつてきますー！」

もしもこの光景を見知らぬ誰かが見ていたら確実にこう言っただろう。

なんなんだこの甘ったるいシチュエーションは……と。

フェイトをお見送りしたヒロはリビングに戻り、自分取るべき行動について思案する。

「さて、どうしますかね……まあ、地理がわからない以上は外に出るっていう選択肢はないから……」

とりあえずは荷物の整理の続きかな……」

結局は最初のとおりになるのだった。

「ヒロ……ほんとになくなったり……しないよね……」

通信で呼ばれた私は管理局本局に向かうため愛車を走らせ移動している。

いまの仕事は好きだ。けど、こういうときは管理局の深刻な人手不足を実感させられる。

「……………はあ……………」

でも、改めて思いかえしてみると…私かなり大胆で恥ずかしいこととしてる……………

だってあれはまるで…

《マスター。さきほどのマスターとヒロ殿のお二人の姿はまるで新婚夫婦そのものでしたね》

「バババルディッシュユ!? わわっ!?!」

あ、危ない!?!動揺しすぎて一瞬ハンドルミスしちゃった……………。

「バルディツシュ…スリープモードじゃなかったの？もしかして…
ずっと見てた？」

《申し訳ありませんマスター。あまりにマスターが嬉しそうだったので入りこめなかったのです……》

「私…そんなに嬉しそうだったかな……」

《映像を記録していますのでマスター御自身で確かめてくださ
い》

そう言われると本当に映像が再生される。

またすぐにハンドル操作を大幅に誤ってしまい、あやうく事故を
おこしかけてしまった……

なんだか今日のバルディツシュは意地悪だ……

《しかし、まさかマスターが男性相手にここまで大胆な行動に出ら
れるとは思いませんでした。

私がマスターに出会ってから初めてといてもいいでしょう。だからこそでしょうか、嬉しそうなマスターを映像に記録したくなりました」

「……………」

言われてみればそうだ……………」

私、男の人相手に……………そもそも今まで男の人と付き合った経験もないのに……………」

彼女、フェイトは良い意味で健全すぎた。

さらに言っならば自身の恋愛面に関してはとことんまで疎い。

もちろんそれにはフェイト自身が元々人見知りに加え、引っ込み思案なのが原因のひとつなのだが。

それでも中学時代は何度が告白なんてものもされた経験もある。

当時から抜群の容姿を持ち、抜き出していた彼女には当然といえばそうだろう。

ただ、彼女はそのどれにも首を縦にふることはなかった……

理由は恋が、付き合い方ということがどんなことかわからなかったからだ。

もちろん成長した今でも知識としてはあるものの、そういう感情はイマイチ理解できていない。

それに管理局での彼女はといえば、抜群の容姿とプロポーションは確かに男性局員の目を引き付けるが、彼女の知名度が大きすぎる故に誰もそのような風には見れないのが現実だったりもする。

強すぎる力、大きな知名度は畏敬の念しか生まないということは頭のよい彼女も十分に理解していた。

「バルディッシュは……ヒロのこと、どう感じた？」

ふと、私は私もそうだけど、バルディッシュがヒロのことをどう思っているのか気になった。

《私はマスターと共に多くの人間を見てきました。私のようなデバ

イスに長年の勤という言葉は当て嵌まりませんが、あえてそれを引用するならば、ヒロ殿は危ういという印象を持ちました《

「……………」

さすがは私の相棒だけあるよ……

なんでだろ……私もヒロにはバルディッシュと同じ“危うさ”を感じる……

昔の私とは違う“危うさ”……

探してる……

あの時ヒロはそう口にしてたけど、ヒロは何をさがしてるんだろ……う

でも探してるそのものが危うさの基じゃない……

もっとなにかがう……

《マスター、そろそろ目的地に到着します》

バルディッシュの声で思考が現実よりに戻るのだが、それでもフ
エイトは心ここに在らずで、モヤモヤを抱えたままに本局への転移
ポートへと向かうのだった。

ヒロ＝ラインハートは少々悩んでいた。

なぜか…

荷物の整理はすでに終わっている。装備なども外した。さて、こ
れからどうやって時間を潰そうかと考えていたそんなとき、彼は気
付いてしまった。

彼は良くいえば楽道家。悪くいえば鈍感で、ピンチな状況になっ
てから時間が経ち、事態が収拾した段階で初めて自分がピンチだっ
たことを知るなどということが現在に至るまで少なからずあり、残
念ながら今回もそんな最悪なケースに該当していた。

「そっか……携帯端末の類は全然ダメなんだ……」

時間を潰す ……というよりは、自分がこれから住む世界のことを少しでも知る必要があるという結論に至り、そつだ！携帯端末ならばネットワークに繋がればかなりの情報が獲られるだろうと、意気揚々に自分の携帯端末を開いてみるが、無情にも表示されたのは見事に圏外のマーク。

そこで彼は本格的に自分の置かれている状況を実感し始める。

そつだ、少し考えれば誰だってわかること。

自分は世界を、次元を超えたのだ。

異世界で異世界の情報機器が使えるわけがない。

「とりあえずこのことはフェイトが帰ってきてきてから相談するとして……ん〜…どうやって時間を潰そつか……」

手始めにテレビの電源を入れてみる。

「…………ダメだ…………どれが面白いかなんてわかるわけない…………」

あっさり断念。すぐに消す。

「そういえばフェイト、何時に帰ってくるか言ってなかったけど…」

先ほどの会話を思い出す。

管理局に労働基準法など飾りでしかないと言っていた。

もしかしたら遅くなる可能性だってあるかもしれない。

「…………4時…………か…………」

いつの間にかリビングの窓からはクラナガンの夕日が見えていた

…………

「いよっし、それなら…………」

思い立ったら即行動が信念のヒロはさっそく行動を始めるのだっ

た。

「まさか事後報告だけでこんなに時間がかかるなんて……」

時刻は夜の7時。フェイトはバタバタとマンションの廊下を早歩きで歩を進めていた。

「ヒロに帰る時間、伝えてなかった……」

などと呟きながらも部屋の前に到着する。

いつものようにカードキーを差し込み、扉を開けて中に入る。

「ただいまあ。ゴメンヒロ、おそくな……」

「ああ、フェイト。おかえりなさい。とりあえず着替えてくれば？」

もう少しで終わりますから」

「えっと……」

一瞬、目に飛び込んできた光景にフェイトは呆けてしまった。

目の前に広がるのはテーブルの上に並べられているのは鮮やかな料理の数々。

和洋中の料理が量は二人分だが種類が豊富に並べられているではないか。

「ヒロ、料理できたんだ……」

「あ、食材勝手に使ったらマズかったですか？」

「あ、えっと……違うよ！むしろ自由に使って全然良いから！私が言いたいのはその」

「あ……やっぱり似合わないよなあ。料理してる姿なんて……」

「……もしかして、意地悪してる？」

「まあ、少し……」

フェイトは不満げな表情をするが、驚き半分嬉しさ半分だった。

ヒロは約束を守ってくれたのだ。

いなくならないという約束を。

ただそれだけのことがたまらなく嬉しかった。

自室で着替え終わった私はヒロと対面する形で食卓の席につく。

なんだか不思議な感じだ。

初めて会った少年とその日に一緒に暮らし始めて、その少年が作った料理と一緒に食べようとしているのだから。

「あの…その…いただきます………」

「はい、召し上がれ」

まずはオニオンスープから口をつける。

「あ………美味しい………」

甘いオニオンの香りと、オニオンの風味を損なわないちょうどいいコンソメの味付け。

「おお…よかったあ」

なんていうか、ホッとさせるような…

毎日飽きない家庭的な味って表現がしっくりくるなあ…

次に手をつけたのはオムライス。こちらもスプーンで割れば半熟トロトロ卵が中から溢れて、チキンピラフに良い具合に混ざり合う。

「美味しい…美味しいよヒロ！」

口いっぱい広がる卵とバター風味とコクのあるチキンライス。

なんか、ホツとする……。

「それは何よりです。一応食材なんかが同じだったから作れるものは自分で。あとはあそこにあつた料理本を見ながらだけだ」

「それって、この中華のことかな？」

「はい。」

「でも、すごく美味しいよ。ヒロは料理作るのは慣れてるんだ」

「そうですね。流石にプロの料理人には敵いませんけど、まあ嗜み程度にはって感じですね。旅なんかもよくしましたから。」

なんだか……楽しい。

家族って、こんな感じ……なのかな……

そんなことを思い、談笑しながら楽しい夕食、そして夜はふけていった。

時間も遅くなり、フェイトが先に風呂に入り次にヒロが入り終わる。

風呂から出たヒロはリビングに戻るが、フェイトの姿はない。

と思われたが

「あのお〜……フェイト？」

「……………んう……………」

猫のようにソファーに丸まりながらフェイトは静かに寝息をたてていた。

「管理局の仕事……………キツイって言ってたしな……………」

本当ならば帰れないことも日常茶飯事だろう。すぐにヒロは、フェイトが無理して帰ってきたのがわかった。

「お〜〜い……………フェイト……………ちゃんとベッドに寝ないと……………」

「ん……………」

「それにしても……………」

ギャップが激しいというか、年上なはずなのになんだか妹に見えるのは本人には内緒だ。

「管理局の若きエリートねえ……………」

とりあえずは自室からかけるものを持ってきてそれをソツとフエイトにかけ、ベランダに出てみる。

「……………」

夜風が靡き、目の前には首都クラナガンの夜景が広がる。

「ホントに……………異世界に来ちゃったんだね……………」

我ながら柄でも無いと感じたヒロだが、同時にこつこつも思っ。

「……………絶対意味、あるんだよな……………そうだろ……………？」

どれくらいの時間が経ったのだろうか。

ふと、クラナガンの夜景を見ていたヒロは、背後に立つ人の気配

に気付いた。

「……………ヒロ？」

「……………ゴメン、起こしちゃいましたか？」

「ううん…自然に目がさめちゃっただけ……………」

ケットを肩に掛けたフェイトだ。

「ヒロ、まだ敬語抜けないんだね……………」

「いや、これでも頑張ってるんだけど…まだ時間かかるみたいです……………」

「なるべく早く無くしてほしいな」

「……………努力しま ……するよ」

「…？」

そのままお互いに沈黙してしまふ。

クラナガンの夜景を見ながら沈黙を先に破ったのはフェイトだった。

「明日……って今日になるけど、もう寝ないと。今日早いんだし……」

「わかった」

「ん……」

短い言葉を交わしフェイトはパタパタと自室へと行くのだが。

「ん？あれ……今の会話……おかしいぞ……？」

イマイチシツクリこない会話に首を捻りながら口はそこから少しの間動けなかった……。

「……………」

現在朝の六時半…私は昨日から一緒に暮らしている少年の自室の前に立っている。

ただ、私はノックを躊躇っていた……

理由は簡単だ。どうしていいかわからない……

思い返してみれば男の子の部屋なんてクロノの部屋くらいしか入ったことがない……

でも、このままだと朝ごはんの時間が無くなっちゃう……

本当は寝る前のあの時に言わなきゃいけないかったんだけど……

「ッ！？」

だ、ダメだ……今思い出しても恥ずかしい……

あの時、月あかりに照らされながらクラナガンの街を見ていたヒロには……なんだか言える雰囲気じゃなかった……絶対に！

それでも

「……ヒロ……」

意を決しノックする。もちろん返事はな……

「フエイト？どうぞ」

……あつた……。

ここまで来たらもうしょうがないよね。

一つ、大きく深呼吸をした私はドアノブに手を掛けた。

(もう…朝か……)

初めての異世界の夜に柄でもなく緊張していたのか、ヒロは浅い睡眠しかとることができなかった。

意識は浅く、半分起きていた。

そんな時だった。足音が聞こえてきたのは。

備え付けの時計に目を向ければ時間は六時になる数分前。

フェイトは随分と早起きさんだな、自分なら絶対無理だね ……
などと本格的に覚醒したところまではよかったものの、何故か足音は急に止まってしまった。

(はて、どうかしたのかな……)

扉一枚隔てた向こう側には、確かにフェイトの気配は感じるし、

気のせいかな時折、何やら酷く焦っているような声も聞こえてくる。

結局、フェイトが扉をノックしたのはそこから30分経った後だった。

「お……おはようヒロ……その、朝……はやいんだね……」

最初に顔半分を覗かせたフェイトに思わずヒロは苦笑してしまう。

「いや、ただ単にあんまり眠れなかっただけです……本来の俺は朝はスゴイ弱いんですハイ……」

「そう、なんだ。なら朝起こすのは私の役目だね」

嬉しそうなフェイトをよくよく見ると、フェイトは管理局の黒を基調とした制服を着ていた。

「フェイトはこんな朝早くから仕事ですか。管理局ってのは大変なんですね」

「そ……それなんだけど……」

「?」

「とにかく、朝ごはんにしよ。詳しい話しは食べながら話すから」

「あ……ああ……じゃあ洗顔済ませてすぐに行くよ」

「わかった。じゃあ先に行ってるから」

わけもわからないままとりあえずヒロは洗面所で洗顔をすませリビングへ向かう。

リビングのドアを開けると、良い匂いがヒロの鼻孔をくすぐる。

昨日とおなじ食卓にはフェイトが作った朝食が並んでいた。

「おお……」

「ゴメンね……簡単なものしかつくれなくて……」

「いやいやいやスゴイ美味しそうです。食べていいですか？」

「あ、うん。もちろんだよ」

「いただきます！」

言っかないや早速ヒロは食べ始める。

香ばしく焼かれたベーコンエッグに色彩鮮やかなサラダ。キツネ色にこんがり焼けたトーストに湯気が漂うミルクと、普通の家庭でよくある普通の朝食。

その普通を毎日食べるのが一番落ち着くのだ。

「いや、ホツとするな。それでフェイト、話しているのは何なのですか？」

「あ、そうだ。えっとね…実は今日、ヒロには一緒についてきてほしいところがあるんだ」

「えっと…どっか？」

「昨日話したはやてのことは覚えてるよね」

「まあ、昨日の今日だしもちろん」

「はやてがね、“お話し”したいんだって」

「フェイトも同席するんですか？」

「うん」

「まあ、話しくらいなら全然構わないですよ」

「よかった…それなら準備して早めに出よ。朝のクラナガンの道路は結構混むんだ」

「わかりました」

その後、手早く朝食をすませ、食器は水に浸けておいていいとフェイトに言われたヒロはその通りにして歯を磨き自室に戻り上に黒いアウトターを重ね、用意をすませフェイトを待つ。

フェイトも時間はそんなにかからず歯を磨き軽く身なりを確認するだけで二人は肩を並べながら一緒にマンションを出た。

端からみれば新婚イチャラブ夫婦の甘ったるい朝のヒトコマにか見えないのは、おそらくは気のせいだろう。

道中はたいした混乱もなく順調そのもの。ただフェイトの車が黒いスポーツカーなのはヒロはかなり驚いた。

クラナガンの街中を進み見えて来たのは

「ここが今日の目的地。陸士108部隊だよ」

「これはまた……」

目の前に現れたのは、広大な敷地とデカイ建物の数々。

慣れた様子でフェイトが受け付けをすませ建物の中を進むと、目的地なのか、とある部屋のドアのまえで止まる。

「それじゃあ、いくよ」

フェイトがドアをノックすると

「おう、早かったな、入ってくれや」

中から洪い声が入るように促された。

「失礼します」

「失礼します……………」

フェイトの後に続く形でヒロがドアを潜ると、ソファーに腰かけている中年の男性が一番に目に入り、その男性の向かい側にはヒロの知った顔があった。

「おはようさん。よかったわあ〜ちゃんと来てくれて！」

「時間前行動とは関心だな、ラインハート」

昨日も会話をしたフェイトの親友、八神はやてと、彼女を護るようにソファーにも座らずはやての後ろで腕を組むシグナムと

「おお、お嬢。久しぶりだなあ」

渋い声の中年男性がそこにいた。

「ご無沙汰しています、ナカジマ三佐」

「いやあ、それにしてもお嬢はまた一段と色っぽくなったなあ。どっかの色香のカケラもない奴には是非とも見習ってほしいわな」

「そ…そんなことないです…」

敬礼をするフェイトに中年の男性は親しげに笑い、これまた知り合いらしいフェイトもタジタジになりながらも笑みを浮かべる。

「ナカジマ三佐、その色香のカケラも無い奴ってひよっとしたら私

のこと言ってますか？」

「ほお、自覚があるのか？」

「いえいえとんでもない。私の溢れんばかりの色香が効かないのはナカジマ三佐の仕事のしすぎが原因です」

対するこちら、はやては対等に言い合う師弟関係のような感じか。

「まあ、うちには色気よりも食い気、花より団子なのが二人もいるわけ。　　ったく、年頃の女のくせに男のウワサーつないとは…
…こりゃ孫を抱くまえに死んじまつかもしれねえな」

「まうたそんなこと言つてえ、ギンガに怒られますよ？」

「スバルにもだよ」

など、笑いながら中年の男性は茶をすする。

「んで、そいつか八神。昨日言つてた奴は？」

「ええ、そうです。本当なら本局でできればいいんですけど……」

「まあ、お前は陸で研修中だし、それにこっちのほうは施設なんかはすぐに使えるからな」

「よろしくお願いします。それとさっきお願いした話しも」

「わかってる。話しは通しておく」

「ありがとうございます〜」

「さてと、少年。ちょっと座ってくれや」

「は……はあ……」

いきなり座るように促され、わけのわからないヒロだがとりあえずは、はやての隣に座ることにした。

「俺はゲンヤリナカジマ。階級は三等陸佐で、八神が新人時代からの指導係みたいなもんだ。少年、名前は」

「えっと、ヒロ＝ラインハートです」

「ほお…良い名前じゃねえか。歳はいくつだ？」

「えっと、15です」

「となりやあ…あいつらと同世代だな。この八神から話しはどこまで聞いてんだ？」

「いえ、まだなにも」

「オイ……」

呆れ顔のゲンヤはため息を吐きながら弟子を見るが、どうやら最初から仕組んでいるようだと感じた。

「とにかくだ、まずは全部話せ。言っておくが本人の意志が最優先だからな？」

「……わかりました。ほんならミーティングルーム、お借りします」

「おう、好きにしな。まとまったらここに帰ってこい」

「よっしゃ、ほんならいこか！」

「えっ……は？エッ？」

わけもわからずいきなりヒロははやてに手を引かれながら部屋を後にさせられる。

その際フェイトとシグナムに助けを求めるものの、気の毒そうにゴメンねポーズをするフェイトと、無情にも首を横にふるだけのシグナムがそこにはいた。

はやてたちが出ていき部屋に一人残されたゲンヤは一気にお茶を飲み、ソファーに背を預ける。

「まったく、あのラインハートとかいう坊主も気の毒なもんだ……あのチビダヌキに眠つけられるなんてよ。……さてと」

通信画面を開きコンソールを叩く。

「お呼びですか？」

「ああ、訓練が終わりしだいギンガを呼んでくれや。前から会いたかったやつが来てるぞって言やあわかるからよ」

「了解しました」

通信が終わり画面が閉じる。

「さて、と。つつかあいつも物好きだよなあ…スバルとその相棒。名前は…ティアナ…ランスター。魔導師ランクはC、階級は二等陸士…か」

手元にある書類には二人の少女の詳細なデータが記されていた。

わけもわからず半ば強制でヒロが連れてこられたのは、ごく普通のミーティングルーム。

はやて、フェイトが並ぶように座り、はやての後ろにはシグナムが立ち、対面する形でヒロは座っている。

「ほんならお話し、はじめよか。初めに言うとかとな、私はサプライズは大好きやけど腹の探り合いは大嫌いや。だからズバツと言わしてもらっわ」

「はあ…なんですか？」

「ヒロ君…管理局に入らへんか？」

「またいきなりですね…もしかしてフェイト、事前に連絡とかもらってた？」

「ゴメン。実は朝起きたらメールが入ってたんだ…本当は言いたかったんだけどその…言うタイミングがなくて…」

「ああ……」

ヒロは今朝のことを思い出す。どうやらフェイトは説明するため早く起こしに来たのは良いものの、立ち往生したせいでその時間が無くなってしまったのだ。

「どうかな…私もヒロと働きたいな…」

小動物のように紅い瞳で上目づかいで見てくる。

「ガツチリ管理局に縛るなんてことはせーへん。形式は『管理局嘱託魔導師』や」

「嘱託魔導師？」

「局員待遇の民間協力者ってのがシックリくるかな。簡単な試験はあるけどそもそもこっちからスカウトするわけやから給料や報酬、福利厚生なんかも並の局員よりずっと高待遇にするよ？」

シグナムがファイルを取り出し、ヒロの前に置く。

ファイルを開き中を見るが、これがどうして中々なモノ。こっい

った書類というのはビッシリと字で埋め尽くされているのが相場なのだが、書かれていることはいたってシンプルそのもの。

一つ、嘱託魔導師ではあるが、管理局の身分では一尉とする。

一つ、給料、賞与、昇級、昇給などについては全てにおいて一尉から始まるものとする。

一つ、福利厚生についてはその全てを管理局局員と同じものとする。

一つ、その他の報酬については働きに応じ請求することを認める。

一つ、万が一の事態、事件事故、その他全てに巻き込まれた場合、その全てを管理局が保証する。

一つ、管理局はヒロ＝ラインハートについては不利益な束縛などを一切せず、独自行動を認める。

などなど、簡潔にしかもわかりやすく丁寧に、ヒロに不利益なことなど一切書かれていない。それはもう不自然なほどに……だ。

「……なにか裏があるんなら今のうちに全部話してもらえると有り難いんですけど」

疑うな、というほうが無理だろう。いくらなんでも異常な条件提示である。

「この内容で疑うな…とは言えへんよね。まあ、最初っからキミを囑託魔導師にしようと思論んでたのは事実や。フェイトちゃんとシグナムから連絡をつけたときから、な。」

もちろん条件については普通の囑託魔導師と同じところからのスタートやったんやけど…

すぐに変わったんや……これを見て、な」

「ッ！？これは……」

「そや。キミがミッドにきてすぐに戦ったガジェットドローンとの映像や」

開かれた画面にバツチリ映し出されているのは紛れも無いヒロとガジェット五体との戦闘映像だ。

「ちなみにフェイトちゃんもシグナムも囑託魔導師のことは知った

のは今日の朝。

それを作ったのは私で、作った時間は昨日の夜中や」

「なるほど…まあ、そうでしょうね……」

映像を記録されたことについてヒロは別段なんとも思っていない。

「昨日私たちから聞いたやろ？管理局の人手不足は今や緊急を要する。特にある一定以上の能力を持つとる優秀な魔導師なら尚さらや」

「それなら優秀な魔導師とやらを育成すれば話しはすむんじゃないんですか？」

「たしかにそのとおりや。ただな、犯罪はこっちの成長なんて待つてくれへん……現実問題、ミッドチルダと管理世界での凶悪事件は年々増加してるしな。」

優秀な魔導師の殉職者も少なくない…成長中の魔導師なら尚のことや…

せやからな、優秀かつ確実な実力がある者に管理局は例え民間協力の囑託魔導師であろうと条件に糸目はつけへん」

「そして、それが管理局員たちの刺激剤になる…ですか…」

「そや。もちろん嫉妬やねたみもあるのも現実や。でもそこもフォローできる環境があるから心配いらへんよ」

「……………」

はやての真摯すぎる眼差し、フェイトとシグナムの表情もはやて同様真剣そのもの。

さて、どうしたものかと、ヒロは考える。

「考える期間は」

「残念ながらあらへんよ。条件についてなら後々でも上げることができるよ」

「下げることはなんですか？」

「もちろんあらへん。確約する。一切の嘘も不当なことも無しや」

「……………」

ならば探らせてもらつたしよつか…と、ヒロは口を開く。

「フェイトとシグナムさんを退出させてください。ここからは一対一で話しをしたいと思いますから」

「そ、そんな！」

「ええんよ」

「主はやて」

「ええんや。二人とも、ちょっとだけ外してくれるか？」

「……………うん……………わかった……………」

「承知しました…」

本当はなにか言いたかったのだろうが、真剣な表情のはやてにフ
イトとシグナムは渋々ながらミーティングルームを出ていく。

「それで、ワザワザ二人つきりにして、何を話すつもりや？」

「……………」

無言のままにヒロはポケットから黒く小さいケースのようなモノ
を出し、それを開ける。

「ッ！　これは…」

刹那。はやての表情は驚愕のものへと変わり、それを見たヒロは
ニヤリと笑みを浮かべる。

「さすが、女性ならよくわかりますよね」

「……サファイアやないか……」

黒いケースからでてきたのは蒼く輝く宝石。サファイアだった。

「この価値、いくらだと思えますか？」

「えっ……それは……」

意外な問いかけに、はやてはたじろぐ。

「まあ、レートしだいですけどどんなに悪く見積もっても300以上の値がつきます」

「ち…さんびや…」

「もちろん嘘偽りはありません。実はこれ、用事が終わったらフェイトに場所だけ教えてもらって一人で鑑定しに行く予定だったんです」

高値がつけば即換金します。やっぱり現金は必要ですからね……と付け加え、続ける。

「ハッキリ言っちゃうと俺は特定の組織には入りたくない……何故だかわかりますか？」

「いや…その…」

「それは、危険だからです」

「ッ!？」

「おそらくはシグナムさんから聞かれているとは思いますが、俺の世界にはギルドと呼ばれる団体が数多く存在し、そこには日々様々な仕事舞い込んできます。」

難易度が低いものから高いものまでそれぞれ様々です。

そもそもギルドで稼いだお金のほとんどには税金はかからず非課税です。なぜ非課税なのか、それは命を賭けなければいけない事案が多いから。

ギルドは俺みたいな十代のガキんちよでも、実力に見合ったのを何度か成功させるだけで大金が稼げるんですよ。

つまりは何が良かったかといえば、死ぬ危険性がある欠陥だらけの組織に入るよりも実力に見合った個人の活動のほうがずっと安全で魅力的だったことです。

そうは思いませんか？」

「そ…それは…その…」

「ギルドに舞い込む依頼は多種多様。その中でも自分の実力に見合った依頼を選び、こなすことは生き続けることができるという意味を持ちます。」

管理局の仕事とか、その危険性がどんなのかはこっちの世界に来てまだ二日目の俺には想像もできません……。けど、それでも命を失う者が少なくないと聞けば、俺は第一に身の安全を考えます。初心者ですからね。」

もちろん俺を保護してくれたフェイト、シグナムさん、はやてさんの顔は潰したくはない。」

ここに書いてある内容、本当に異常なほど素晴らしい。普通なら迷わずに即受けるでしょう。」

ですけど、俺は自らの命に係ることを即決することはできません。もしも俺を交渉の席につかせたいならば、給料は最低でもこれの倍は出してもらわないと」

「ば…倍……そ…そないなこと…」

あ、アカン…全然予想とちゃう展開や…

しかも私が圧倒されとる…。

もしかして事前にフェイトちゃんとシグナムを外したんもこれを聞いたらシグナムが暴走することを予感してか！

それにや、主張に穴がない…。

一見、お金儲け第一主義にも聞こえる発言やけど、実は自分の命を第一に考えてるし、しかも提示した金額は自らの命を賭ける仕事にしては安いってこともちゃっかりアピールしてる。

なにより頭が予想以上にキレる…

交渉の場数も相当踏んできてるみたいやし……

パツと見はのほほんしとる感じなのに　これは益々いい感じや
…ゾクゾクする！

しかも年下　…ホンマにアカン…フェイトちゃんには悪いけど、
なにしても欲しくなってきたわッ！

(さて、どうでてるか……)

互いの視線がぶつかる中で、さらにヒロは続ける。

「さ、ここまでこっちはさらけ出したんです。いい加減、はやてさんも白状したらどうですか？

俺なんかを囑託魔導師として引き入れようとした本当の理由を。

管理局、八神はやて二等陸佐としてじゃなく、八神はやて個人としての感情を」

ヒロの言葉に、はやては目を閉じたままフツと笑う。

「……なんやホンマに…完敗やね……」

フーッと大きく息を吐き、はやては伸ばしていた背筋を少しだけ緩める。

「わかった、かなわんなあ。給料はこれの倍の額スタートで何とか掛け合う。でも、これでもかなり厳しいんやで？」

「まあ、組織の中でたった一人に出す条件としては破格ですし、相当の苦勞があつたことはわかります。」

それに管理局は一種の国家公務員とか軍みたいな感じですし、予算は税金が相場。当然に行き過ぎれば批判が起こる…普通なら、難しいですよね」

「なんや…そこまでわかつとるんやつたらあんまり意地悪言わんといてや……」

「すみません。だけど、ここまで腹を割らないとはやてさんも俺を信用しないし本心を喋れる間柄になれないでしょ？」

「そやね……ならここからは私の本当の気持ちや。
近いうちに私が部隊長を務めることになる新部隊が設立されるん
や」

「新部隊？」

「そつや。管理局本局遺失物管理部、通称『機動六課』」

「機動六課……」

「一年間の試験部隊やねんけどな、仕事や評価によっては本部隊に
なるかもしれん。私の長年の夢なんや！」

「はやてさんの夢……」

「そつや。自分の眼で選んだ優秀な人材を集めたよりすぐりの精鋭
部隊。本当は正式な局員枠で推薦したいんやけど、諸々の事情があ
って無理やった…」

「せやけど！私はどうしてもキミと一緒に働きたいんや！」

「そのためには限界はあるけども気持ちは条件に糸目をつけへん！」

「キミなら絶対に変えてくれるってあの映像を見て確信した！」

それにはこれから実績を積む意味でも囑託魔導師として捜査とかにも参加してもらわなきゃいけない…

もちろんキミの予定とか気持ちも無視できんのも十分にわかってる。

でも全部わかっててワガママ言わせてほしい！

囑託魔導師になって私の夢と一緒に現実にしてください！理不尽な想いをするひとを一人でも減らすためにチカラ貸してください！
お願いします！」

はやてはぶつけた。想いのすべてを。

ごまかしなど一切ない自分の理想と夢を……

「……まいったなあ……」

元々がチキンなガラスハートなヒロがそこまでストレートに言われて断れるわけもない。

「ッ！！ほんならー！」

「ただし、給料は記載の倍スタートを忘れずに。あと、はやての署名と人事担当者の署名、そしてはやて以上の高官三人の署名を付けてください。念のためです」

「わ、わかった。もちろん了解や！ほんなら早速必要な検査。それが終わったら試験始めよか！」

「ハアツ！？今日すぐに!？」

「善は急げや！用意だけはすませてるんよ。書類なら心配せんでも試験してる間に仕上げるからな！」

「いや、そもそもが試験内容は!？」

「そこも話しはつけどる。本来なら筆記と儀式魔法、模擬戦の三つなんやけどな、筆記は話し付けて特例パス。儀式魔法は本局の設備が予定ギツシリで特別免除。模擬戦が全ての評価の対象になるけど心配いらんよ全然OKや！」

「儀式魔法って召喚術ですよ？俺たちの世界で召喚魔法が使えるの16からなんだけど……」

「ならええやん。ラッキーラッキー！さあ忙しくなるでええ！」

「ああちよっ……行っちゃった……」

呆気ちとられるヒロを残し、はやては猛烈な速さでミーティングルームを出ていく。

「あっヒロ…はやてが凄い速さでシグナム連れて走っていったけど、もうお話しは終わったの？」

はやての入れ代わるようにミーティングルームに入ってきたのは、フェイトだった。

「まあ…」

「それで、どうなったの？私としては一緒に働ければ最高なんだけど…」

「囑託魔導師の件は少し条件を変えたけど受けることにしたよ。これから検査と模擬戦の実力試験だつて」

「あれ？模擬戦だけ？囑託魔導師試験は筆記と儀式魔法もあるはずなんだけど……」

「諸々の事情で免除だって…模擬戦が全ての評価材料みたいですよ…」

「そっか…でも、そのほうがわかりやすいよね。結局筆記とか儀式魔法はオマケみたいなものだし」

「……………」

「な、なんか…疲れてるね…」

「はやてさんと話していると敬語がさらに抜けてつつあります……………」

「わ、私はそのほうがいいな！」

「善処し　するよ…」

実力試験を受ける前にライフがゼロになりそうなのヒロであった……………

第五話 』できるならば 』(後書き)

【スペシャル・コメンタリー】

白金「どうも。はい、そういうわけで今回も始めました。いやあ、今回も難産しましたよ実際！」

ヒロ「おい…この外道作者…」

白金「ホオ…あの空間に落とされても無傷とは…これはますます叩きのめしがいがあるってもんだよねえ」

ヒロ「ダメだこの作者…早くなんとかしなきゃ…」

白金「まあまあ。そのぶんちゃんと飴もあげたでしょう。どうだい？フェイトさんのギガ甘ラブラブ同棲生活は？」

ヒロ「…」

はやて「なんやねんその不名誉すぎるランキングと紹介は!?!?!?」

白金「事実というよりは現実ですよ乳揉み子狸二佐殿。ちなみにこれがデータの詳細(原本)と、今までの悪事の数々の証拠データですよ」

はやて「うええっ!?!?なんでこんな　これ!絶対だれにもバレてへんはずなのに何故や!?!?」

白金「どうしてって?.....あなたも、だれかに見られてたみたいですよね?」

はやて「だれかがみてる.....っつて、まさか佐　さんか!?!?!?」

天「う~~~~　っはる~~~~!?!」

初　「キヤアワアアアアッ!?!?」

佐　「おお~~~~っ!今日も見事に　春っぱいパンツでアタシは嬉しいよ~~~~!?!」

春「キヤアワアアアアッ〜!?めくらないでください〜!」

はやて「チイッ!まさかそっちに佐さんと春さんがいるとは…

天さんの流行センサーと初さんの頭の花を甘くみすぎてたかあ〜!?!」

白金「フツ まったく…所詮は子狸レベル…子狸は緑のたきにはなれんのだよ!」

はやて「くううっ…こっとなったらもうヤケや…夜天の主のチカラ…その身に叩き込んだるわ!そんでもってその証拠、全部チリにしたる!」

白金「フッフッフ…君が思っているほど世界は君に優しくはないんだよ?まあちょうどいい機会だしね…

まずは君のその幻想をブチす!」

ザザッ…ザーッ…(カメラ破損)

初「というわけでえ〜、白金さんとはやてさんの超次元戦争が勃発してしまったので、申し訳ありませんが今回のコメンタリーはこ

「こまでになりましたあ。」

佐 「いい歳して大人げないよねえ。そういえば 春、これから御さんと白さんがウチくるって。もちろん初も来るよね？」

春 「それじゃあ 坂さんと 井さんの分のいちごおでんも買って
いかないですかね!？」

天 「今日の初 のパンツもいちご柄だしね！」

初 「それは関係ありません！」

佐 「そ〜れ〜に〜初 のスカートめくりもサービスの一環かな
あってさあ」

初 「意味わかんないですから!？」

天 「アツハハア〜ゴメンゴメン!それじゃあそろそろ締めよつか。

お相手は捜査は足が基本だよな!なピンチヒッターの佐 涙子と」

春「あ、感想とかは白金さんの作品の更新速度にも影響あるかも
ですから、どんどん送ってあげてくださいね！」

最近のマイブームはいちごおでん！のピンチヒッター、初飾利
でした〜」

佐 & 春「『ばいばい〜〜い！〜い！』」

第六話 、『試験と騎士と出会いと ……』(前書き)

さて、来ましたよバトルパート。今回は描写が難しかったですハイ

……

そしてこれは次回になりますが……いよいよ、アイツが ……登場
しちゃいます！

なのはキャラではありません……ごめんなさい……

もしもここにモゲーの住人がいて、有り得ないとはおもっけど…
モゲーで白金の作品を読んだことがあるツワモノ読者様がいるな
らばわかるとおもいます。

そうです。こっちでもモチロン出てしまっんです！

まあ、それは次回なんですけどね……

なににせよ本編ですね！それではどうぞ！

感想とか待ってます。

第六話 、『試験と騎士と出会いと ……』

「まさか……ホンマにリンカーコアが無いとはな……」

「うん……検査してた人もビックリしてたよね……」

幾つかのメディカルチェックや検査を終え、検査結果を見るフェイトとはやては驚きを隠せない。

ミッドチルダ 管理局やその管理内世界の魔法文化において絶対の常識ともいえる目に見えない第六臓器 ……『リンカーコア』。

空気中の魔力素を取り込み魔力を精製する目に見えない第六臓器がヒロに存在していないことは、およそ常識から外れていた。

リンカーコアが存在しない者は確かに存在する。

それこそ数にすれば持っているほうが圧倒的少数になる。

リンカーコアを持たない者には魔力が存在しないというのが常識なのだ。

しかし、ここで問題なのはリンカーコアを持っていないヒロが体内で確かに魔力を精製することができているということ。

もちろん、リンカーコアを持っていないわけだからリンカーコアを対象にしている魔力測定機器での詳細な魔力保有値を計測できるはずもなく、結果は……

「データの結論：魔力保有値、不明…【Unknown】」

「いや、逆に俺は誓約者っぽくていいと思いますけど？」

「でもな〜……さすがにこれは前代未聞やで……」

今日は驚いてばかりだとはやては頭をかかえる。

リンが定期メンテナンスの日で本当によかった、もしいたら今

頃目をまわしていただろう……

容易に想像できる光景に、はやては苦笑いを隠せない。

「こうなったら魔導師ランクだけでも正確なデータを取らないとアカンな〜……」

「それで、これから実力試験ですよ〜？どこで誰と闘つんですか？」

「私も気になるな…相手が誰なのか」

「ああ。ここだよ」

三人が着いた場所は陸士108部隊屋内訓練場。

室内に入ると待ち構えていたのか、そこにいる人物は声を発した。

「来たか、ラインハート……」

「ようやくおでましか…ズイブン余裕じゃねーか……」

待ち構えていたのは二人。

どちらもはやての守護騎士たる人物で『烈火の将』シグナム。『鉄槌の騎士』ウィータである。

「えっと、これは…」

「見てわかるとおりや。この二人のどっちかと戦ってもらおうや」

困惑するヒロにはやては無情の宣告を下す。

「は、はやて!?!」

すぐさまフェイトは異を唱える。

「なんやフェイトちゃん」

「だってその……」

シグナムとヴィータの魔導師ランクは共にオーバースを誇り、管理局でもその実力は広く知れ渡っている。

フェイトやなのはといったエース級ですら実力は拮抗するほどだというのに、ろくにミッドチルダの魔法をみたこともないヒロが勝てるわけがない。

「まあまあ。それじゃあヒロ君、始めよか…どっちがええ？」

「そう…ですねえ…」

少し考え結論を出す。

すでにヒロたちが来る前から準備していた二人は騎士甲冑を纏い、全ては万端。

特にヴィータの鼻息が荒い。グラフ・アイゼンを担ぎながら今か今かと足踏みをしているのだ。

「……………」

「……………」

「シグナムさんで」

「なんでだよ！」

「うわっ!?!」

当人からしてみれば思わぬ誤算なのか、担いでいたグラーフアイゼンを振り回しそうになるが寸前のところでシグナムに抑えられる。

「この　はなせ！恐いのか!?!アタシと模擬戦するのが恐いのか
コラァ！」

ジタバタとシグナムに抑えられながらヴィータは悪態をつくのだが
…ヒロが発した次の言葉でヴィータのジタバタはピタリと止まる。

「恐いのかって?もちろん恐いですよ。だって、　えっと……」

「ヴェータだ、鉄槌の騎士、ヴェータ！」

「ヴェータさんですか。こんなにもカワイイヴェータさんが、そんな大きいハンマー振り回しながら攻撃してくるなんて恐怖ですよ恐怖」

「なっ?! ななななッ!? かわ…カワイイ…だと……」

この発言には言われたヴェータもそうだが、はやて、シグナム、フェイトも目を見開く。

ヴェータは知っていた。男ってやつはプライドの塊だと。

ちょっと挑発しただけでも激昂してそれに載ってくる。

自分の実力を過信し、相手の実力を測れない馬鹿なやつばかりだった。

しかし目の前の男はどうだろうか。こんなにも侮辱し、プライドすらへし折るほどの勢いで言ったにも関わらず、こっちの意図する反応とは掛け離れた反応を見せ、あげくはカワイイなどと言いやがるではないか。

予期せぬ反撃に完全にノックアウトされたヴィータは顔を真っ赤にしながら俯くだけしかできない。

その姿　歴戦の猛者というよりは、ただの口の悪い美少女にか見えない。

「ふう…ならばラインハート、降りるとするか」

「わかりました」

「ほんなら私らは二階で見てるからなあ」

「ほらヴィータ、しっかり歩いて」

「……………」

ヒロとシグナムは階段を降り訓練場の中央へ、他の三人は観戦ルームへと向かう。

はやてたち三人が観戦ルームに入り下を見るとシグナムはレヴァンティンで素振り、ヒロは軽めのウォーミングアップを始めている。

ちなみにヴィータはまだ自分の世界から還ってこれないでいた……

「あ、ここにいましたか」

そこに突然、観戦ルームの扉が開き女性の声ははやてたち二人の耳に届く。

「お久しぶりです。はやてさん、フェイトさん」

「いやあ〜ひっさしぶりやねえギンガ。確か研修以来やったか？」

はい！と明るい声でギンガと呼ばれた女の子は応え、フェイトの

ほうを向く。

「お久しぶりです、フェイトさん。えっと……」

「本当に後輩になったんだね」

「覚えていてくれたんですか!？」

「もちろんだよ。あの空港火災で、しかも自分が助けたんだもん。それにさつきゲンヤさんとの会話で出てきたからね」

「うれしいです!」

自然に出て来た涙と笑顔をギンガは浮かべる。

ギンガはナカジマ。陸士108部隊に所属している魔導師。階級は陸曹、魔導師ランクは陸戦Aとかなり優秀である。

腰まで伸ばしている濃い青の髪とアクセントのリボン。陸士部隊の制服を纏う見るからにしっかり者な感じが印象的だ。

実はギンガ、そのかわいらしい容姿と日頃からストライクアーツで鍛えたプロポーション、そして性格の良さから陰ではけっこう隠れファンがいたりもするが………父であるゲンヤの懸念どおり恋愛方面にはかなり鈍感なようで、ファンの存在すら把握していないらしい。

「ナカジマ三佐から私らが来てること聞いたんか？」

「あ、はい。ですから挨拶に……あの、ヴィータさんはどうおかしんですか？」

「ああ……気にしなくてもええよ。すぐに復活するから」

「はあ……」

はやてがそういうならとギンガは気にしない方向でと視線を変える。

「あ、もしかして下にいるあの人がそうなんですか？」

「それもナカジマ三佐から聞いたんか？」

「そうなんですけど、ここに来るまで結構話題になってて耳に入ってきたんです。」

「何でもリンカーコアが存在しないのに魔力を持っている少年がいるって…」

「そんなこと、ありえるんですか？」

「有り得るもなにも…」

「事実、目の前におるしなあ……………」

三人の視線の先には知らぬ間に噂されている当事者がノンビリと背伸びしてたりする。

「彼 名前はヒロ♡ラインハート言うんやけどな、ヒロ君はフェイトちゃんとシグナムが保護した次元漂流者なんよ」

「ッ?! ……そう……なんですか……………」

「ギンガ、そんな顔をしなくてもヒロなら大丈夫だよ」

「でも……………」

フェイトに言われるもののギンガも管理局の魔導師。次元漂流者がどんなに不安定か知っている。

「ギンガが心配してるのが何なのかは大体わかるけどヒロなら大丈夫。どちらかといえば今の状況を楽しんでるみたいだから」

「たの…しんでいる…次元漂流者なのに…」

「ちなみにや、そこにいるヴィータをそんなふうにしたのはヒロ君やで？」

「それは…なんていうか…大物ですね…」

ギンガの意見にフェイトとはやても賛同していると、ウォーミングアップを終えた両者が中央部分で対峙する。

「えっと、もしかして囑託魔導師試験の実力試験の相手ってシグナムさんなんですか!？」

「ん？そやよ」

「あの…いくらなんでもそれは……」

無謀なのでは？…フェイトと同意見なギンガはそう言いかけるの
だが、はやてはニコニコしたままだ。

「二人とも落ち着いてや。あくまで合格の基準はシグナムを倒すん
いうことやない。実力を見たいんや。」

これは私の勘なんやけどな、ヒロ君はどっかで加減する癖がある
んやとおもつ。

なんていうかな、相手を生け捕りにするっちゅうか……とにかく
や、シグナムなら絶対にヒロ君を追い込める。

その状況でどこまでやれるか見てみたいんや」

「『……………』」

はてさて、自らを追い込まんとする者の思惑などまったく知るよ
しもないヒロはウォーミングアップを終えたのか、訓練場の中央ま
で歩く。

「あ〜はやてさん」

「なんや〜」

「こちらの声は聞こえているのだろう。スピーカーからはやての声が返ってくる。」

「どうすれば確実に合格とかってありますかあ〜？」

「そやね〜、もちろんシグナムを戦闘不能に出来れば言うことないんやけど」

「無理です〜」

「わかつとる〜。けど男の子なんやからもうちよつと考えてな〜。そやね〜、とりあえず実力みせてな〜。時間は10分、手段は問わんよ〜」

「じゃあ〜武器なんですけど〜、俺昨日の衝撃弾入りの銃しか持ってませんけど〜？」

「それでええよ。こちらで検査確認したけど、とりあえず殺傷能力は規定値以下やったからね。」

「わかりました。」

今のヒロの服装は、はやてに着替えるように指示され陸士部隊のトレーニング服を着ている。当然、ガンホルダーも背中につけているが、とりだした自前の改造銃はガンホルダーには収めていない。

「そや、ヒロ君は空を飛んだりはできへんのか？」

「えっと、飛べることは飛べるんですけど独学だし魔力消費が激しいので使わないですむなら助かります。」

「そか。なら今回は陸戦。空戦は陸戦の内容見て決めることにするな。」

「なんかものすごく適当な感じがするんですけど。」

「このくらいならなあってもなんねんよ。二等陸佐の権限を甘くみるといてや。」

あきらかな職権濫用な発言にヒロは呆れるものの、シグナムやフイトなどは慣れているため、苦笑いしかない。

そんな中でヒロは何やら新しい人物がはやとフェイトの隣りで自分を見ていることに気付く。

これまたやりにくいなと感じるのは自然な流れだった。

「シグナムさん」

「なんだ？」

「質問なんですけど、何でも有りっていうのは当然、魔法やマジックアイテムの類いなんかも使用しても構わないんですよね？」

「もちろんだ。それも実力を見るうえで重要な部分だからな」

「わかりました。聞きたかったのはそれだけです」

「そうか、お前の力、じっくりと体感させてもらおう」

「あ、それなんですけど……」

ニヤリとシグナムが笑みを浮かべるが、ヒロはそれを遮る。

「始めに言っておきますけど、俺は別に人外無双な無敵キャラじゃないですから。あくまでも人間の。しかもごくごく普通レベルなのであんまり過度な期待はしないでくださいね？」

「私はお前の等身大の実力を判断するだけだ。己が慢心することも相手を美化、卑下することもない……」

「それならいいんです。よろしく願いします」

一礼をし、訓練場に引いてある所定の位置につく。

シグナムも同様についたところでタイマーがセットされた。

「ほんなら始めよか。囑託魔導師試験実技試験、はじめ！」

はやての合図と共にブザーがなりタイマーは一つずつ減り始める。

「さあ、いつでもどこからでもかかってこい！」

レヴァンティンを鞘から抜き、シグナムは上段に構える。

「……………」

対するヒロは両手に愛用の銃を持ち俯いたまま。シグナムからヒロの表情を伺うことはできない。

「動きませんね……」

「動かないね……」

「動かへんなあ……」

観戦ルームは三者が同じようなことを口にするが、一人だけそれに異を唱える。

「アイツ……やっぱできるぞ……」

ようやく復活したヴィータだ。

どういふことやと、はやては問うが、「見てればわかる」彼女はそれだけ言つと鋭い視線でヒロを見るのだった。

(どうした…なぜ来ない…様子見か？それにしては俯いてばかりで
おかしすぎる……)

タイマーはすでに十秒が経過しているというのにヒロには一切の動きが無い。

「こないのならばこちらから行くぞ！」

シグナムは踏み込む足に力をこめ、高速ステップでヒロの側面を

とり

「ハアアアアッ！」

そのままレヴァンティンを一気に振り下ろす。

しかし

「なにつ！？」

ガギンと鈍い衝撃音だけが響きわたり、シグナムの攻撃はヒロの銃の弾倉部分に完全に止められる。

「……………」

「フッ！」

ならばと横屈ぎに振るうものの、それは銃身部分で止められる。

一撃二撃と攻撃を繰り返すものの完全に見切られるシグナムだが、流石は古代ベルカの騎士。これくらいでは平静を崩さずにしっかり

と観察を忘れない。

（なるほどな…ラインハートのあの銃はクロスレンジに対応するた
めだろう、外装甲の強度はかなりのもの…

よくよく見れば銃そのもの …いや、身体全体に魔力を纏わせ
ているのか…フィールド系のバリアとは違うようだ…が…ッ!?)

仮説をたてながらのシグナムは目を見張る。

「……………」

鋭い眼光、感情を限りなく削ぎ落としたかのような眼差し
のヒロ
「ラインハートがそこにいた。」

（これがあのラインハートなのか…この雰囲気…さきほど いや、
最初に会った時のとはまるで別人ではないか……………!)

しかしシグナムにとっては絶好のチャンス。しっかりとヒロの実
力が拝めるのだから。

「フッ……………いくぞおおッ!」

彼女は騎士ゆえにいつでも正々堂々の真っ向勝負。レヴァンティンで斬りかかる。

「これはビックリやね……」

「な……何者……なんですか……いったい」

はやてとギンガは声にだしてしまっ

気がつけばクギツケになってしまっているのだ。

「ヴィータ……シグナム、手加減なんかしてないよね……」

「シグナムが手加減なんてするはずねーよ……本気の本気全開じゃねーけど、あの剣筋はマジもんだ……」

「そ…そうだよね…でも、それでもヒロ…シグナムの攻撃を正面から受け流してるよ……」

「だからアタシも驚いてんだよ……」

ここにいる四人全員、シグナムの性格も実力も十分知っている。だからこそ驚きなのだ。

シグナムと一対一で正面からぶつかり合っているヒロの姿に。

「ギンガは確かシューティングアーツ、クロスレンジ得意やったよね。」

「どうや？シグナムの剣、あんなふうに一歩も動かずに何度も正面から…完璧に見切れるか？」

「いえ…私はまだまだ未熟者ですからとても…でも、シグナムさんもまだまだ全力でもなさそうですし…」

ギンガはフォローを忘れない。

まさかシグナムが負けるなどは万が一にも考えられないが、それでもこの模擬戦は見ていて興味がつきない。

どちらかといえば彼女、ギンガも武闘派。見ていて自分も…と、血が騒ぐのだろう。

自然とシグナムの位置に自分を置き換え自分ならどうするかとシミュレーションしているのだから。

一撃一撃、様々な角度からシグナムは剣を払うがヒロはその全てを一步も動かずに受け、流す。

シグナムは疑問に感じる。なぜヒロが攻撃してこないのかと…。

不意にそう考えた瞬間、僅かな隙が生じる。

「……ッ！」

「チイツ！」

ドドンとオート式で銃から弾が撃たれるが、しかしそこは百戦練磨のシグナム。間一髪のところではレヴァンティン弾き、背後に跳ぶ。

「そこ……ッ」

しかしヒロは手を緩めない。着地し、体制を立て直す暇など与えずに連撃。

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

《了解！》

避けながらもシグナムはレヴァンティンに炎を纏わせ、ヒロの攻撃を薙ぎ払い防ぐ。

（攻撃しないなんてとんでもない…ラインハートは待っていたんだ…私に必ずできるであろう隙を…攻撃に意味ができる確実なタイミングを！

よほどの冷静さが無ければこんなことはできない……）

シグナムの中である感情がフツフツ込み上げる。

(おもしろい……！)

本当なら実力を見極め、そのレベルに応じて自身の力を上げていこうと。

しかしヒロの実力は予想を遥かに超えている。なにより魔法の類いは一切使うそぶりも見せず、攻撃もたったの二度だけ。

(どこが普通レベルだと……まったくどの口が……)

シグナムは内心苦笑する。視線の先には銃を左右非対称に構えるヒロの姿。

まず構えからしてシグナムは見たことはない。

確実に完全な自己流。

しかし、自己流にありがちな隙は微塵にも感じられない。

真の達人たるシグナムだからこそ感じる事ができるのだ。

だからこそ己の全力を出してみたい。

いや 出したい…全力を出すべきだ、と。

時間はいつの間にか七分を過ぎ、もうすぐ八分。

残り時間は殆どない。

(決めるのならば……ここしかない！)

ガシャンガシャンと煙りと共に薬莖が排出され、レヴァンティンの炎の強さがさらに増す。

まさに一撃必殺に相応しいであろう……

シグナムが足に力をこめ、走りだそうとした瞬間

「『ッ！』」

訓練場全体にビーっと音が響き渡る。

「シグナム、ヒロくん、おつかれさま、試験時間の10分、終了や」

「なあっ!?!主はやて!?!」

「終わった〜っ……」

反応はまさに対称的なものだ。

シグナムからしてみれば、まさにごここからがいいところだったわけ…

しかし、主であるはやてに盾突くわけにもいかず、なんとも不満げな表情を浮かべるのだった。

「いやあ〜ひさびさにええ闘いを見せてもらったわあ〜」

シャワールームを借りたヒロはサッパリした状態で再びミーティングルームに連れてこられていた。

一番に口を開いたのは、はやてだ。絶賛である。

フェイトなどは未だにハラハラしながらどこか痛くならなかったかなどと心配する。

なんとも心配性だなと視線をむけると、視線に気付いたヴィータ、そしてヒロとは初対面のギンガが近づいてきた。

「ま、まあなんだ…中々やんじゃねーか…」

「あ、ありがとうございます…」

「ッ！？か、勘違いすんなよ！アタシからしてみたらまだまだなんだからな！」

やはり先ほどの一件をまだ少し引きずっているのか、顔を合わせると真っ赤になりプイッと明後日な方を向いてしまう。

なんだかなあ…と思いつつも視線を隣に向けると、何やら瞳をこ
れでもかツと言わんばかりにキラッキラに輝かせた人物が目の前に
いた。

「はじめまして。陸士108部隊所属、ギンガⅡナカジマ陸曹です
！」

「ナカジマ…って、ゲンヤⅡナカジマさんの？」

「あ、はい。もしかして父から私の話しを聞きましたか？」

「会話の中でチヨコチヨコと……」

「そ、そうですね！」

ギンガの堅い対応になんだかなあ…などと思うのだが

「あ、あの…！」

「えっ？あつ、ハイ」

「さっきのシグナムさんとの闘い、私も観てました！」

「そ…そうなんですか…」

「そうなんです！」

何故だろう…ヒロはその先が非常に聞きたくないような衝動に駆られるのだ。

「私、今まであんなにスゴイクロスレンジは見たことありません！ファンになりました！私とも模擬戦してくださいッ！」

「え…あ…いやあ…」

いきなりのファン宣言。しかも今しがた闘ったばかりだというのに模擬戦をしてくれと。また瞳をキラッキラに輝かせながらなので断りたくても断れない。

これはヤバイとフェイトに目線で助けを求める。

「ギ…ギンガ…ヒロは今シグナムと闘ったばかりだからその、疲れてるから…」

「あつ！そ…その、スイマセン！私興奮してたみたいで……」

さすがは憧れの人物なだけはある。あれだけ我を見失いかけていたギンガを一言で現実に戻すのだから。

「でもそうだな…ヒロの体力が万全なときにも模擬戦してもらおう。私も一緒に参加するから」

「よ、よろしくお願いします！」

(あ…あのぉ……模擬戦することそのものをやめてほしいんですけど…)

クロスレンジについて会話に花を咲かせはじめたフェイトとギンガにそう言いたかったのだが、そんな雰囲気にあらず。

「ヒロ君……ホンマ、頑張つてや！」

「ア アタシも参加するんだからなッ！覚悟しとけよ！」

どこから取り出したのかハンカチで涙ぐむはやての言葉と一緒に肩に置かれた手にヒロも泣きそうになるが、ヴィータにトドメをさされたことで、更に追い討ちをかけられたヒロはそこで崩れ落ちた

……

そういえば知っている顔が一人足りないと、疑問におもうヒロは聞いてみようとしたが、その必要はすぐになくなった。

「お待たせしました。主はやて」

「お、シグナム待つとったんよ。それでどないやった？」

「はい。騎士カリム、クロノ〃ハラオウン提督、リンディ〃ハラオウン統括官、主はやての署名及び全責任の確約をもとに管理局本局人事部がヒロ〃ラインハートをスカウトするための条件を承認しました」

「おお、そやったかあ。通るかどうかハラハラやったんやけど心安心や」

「経理部などはかなり困惑していましたが…」

書類を提出したときの経理部の同員の冷や汗顔を思い出したのか、シグナムは苦笑いしてしまう。

「クロノとリンディ母さんが……」

「ゴメンなあフェイトちゃん…出来ることなら固めたかったんよ…」

「う、ううん！それは全然いいんだけど、クロノとか忙しいって言うてたからよくできたなって」

「ああ……」

はやてもその光景は容易に想像できたのか、苦笑いしてしまう。

「テストロッサ、クロノからの伝言だ。とりあえず顔をみせに来いよ…」

「えっと… ツー!？」

シグナムの視線の先にその答えはある。

「フッ…そういうことだ……」

「シグナム……クロノ…もしかして……」

「お前の想像どおりだな…相当気になっている感じだったぞ……」

ああ……と、クロノという人物がどんな性格なのか思い出す。

とにかく過保護。普段は提督という地位にいるためほとんど出さないが見た目とはかなり違い重度のシスコンだったりする。

二人の視線の先にはヴィータに模擬戦しろしろと悪態をつかれて
いるヒロの姿。

「はやて…クロノに会ったら上手くごまかすの手伝ってくれないかな……」

「……そやね…このままやとクロノ君…クラウドディアのアルカンシエルとか撃ちかねんしね……」

「同感です…主はやて…」

知らぬが仏、そんな言葉がピッタリな光景である。

「さてヒロ君、試験の結果やけどな」

「あ、はい…」

「合格や」

「……はやいですね…」

こんなにあっさり言われるとかえって不安になるのだが、はやては笑う。

「あんなあゝ。それなりに本気のシグナム相手に十分間倒れずにい

ること自体スゴイことなんやで？」

「偶然ですよ…ホント、たまたまです」

「ほんなら魔法を使わず、シグナムの剣技を一度も喰らうことなく完全に防ぎきったこともか？そんなん普通は絶対ありえへんよ」

はやての言い分にシグナム本人はもちろん他の三人も同様に頷く。

「まあええ、今は勘弁したる。ほな続きや。これがヒロ君を囑託魔導師としてスカウトする条件面や。」

さっきの提示に変更したものに署名がついとるから確認してな」

再度、今度は二冊のファイルをはやてはヒロに渡し、ヒロは両方に目を通す。

「たしかに、確認しました。両方、条件どおりですね」

「ほんならその両方にサインしてな。片方は管理局、もう片方はヒロ君の控えやから」

「わかりました」

サラサラと自分の名前を書き、はやてにファイルの片方を渡す。

「次は……」

「ほら、登録のことだよ」

フェイトが助け舟を出す。

「そやったね。でもな〜どうしようか迷っとんねん……」

「なんですか？」

「あのね、囑託魔導師に限らず魔導師登録するときは魔導師ランクと魔力保有値、あとは陸戦か空戦とか色々登録しないといけないんだ」

「そんなもんなんですか……」

「はやてが悩んでんのはな、お前がリンカーコアを持ってねえのに

魔力を持つてゐることなんだよ」

すかさずヴィータがよく分かっていないヒロのために補則を入れてやる。

「そやねん。正確な魔力保有値が解らんに高ランク魔導師としての実力は充分なのが…なあ…。」

「なにぶん魔力保有値が【Unknown】というのは初めてらしくてな…」

それゆえ魔導師ランクが高すぎるのは多くの者に疑念をもたれる可能性がある。

主はやてはそれを心配しているというわけだ」

「なるほど…ちなみにここにいる皆はどんな感じですか？」

「ここにいる皆さんは私を除き全員がオーバーSランク魔導師ですよ」

「ちなみにギンガさんは」

「私は陸戦Aですね」

「ギンガはね、若手のなかじゃ結構なエリートなんだよ」

「そ、そんなことないですよッ！」

アタフタ否定するギンガを見ながらヒロは考える。

「あの、ヴィータさん……」

「な、なんだよ……」

不覚にも真剣な顔で見つめてくるヒロにドキドキしたのはヴィータだけの内緒だが。

「魔導師ランクってどれくらいが当たり障りないと思いますか？」

「あ？あ、ああ。そうだな…そもそも魔導師ランクってのは管理局とか民間とか関係なしに高ランクほど信用度が高えからな。一概にはなんとも言えねえよ」

「じゃあ、民間重視では？」

「ん…まあA AとかA A Aありゃあ充分すぎると思うけどな」

「うっむ…」

結論、さらにわからなくなってしまった……。

「どないしよか…」

はやても悩む。囑託魔導師試験において、ここまで決めにくいことなど今まで無かった。

全力では無いとはいえシグナムと同等に渡り合うその実力は片鱗だけしか見ていないが、それでもA A Aクラス。はっきりいってしまえば実力は未知数なのだ…

さらに問題なのはいきなりオーバース以上の魔導師が現れたらだ、管理局はヒロを警戒視し、下手をすれば監視下に置かれてしまう可能性がある。

（それだけはアカン……ヒロ君を管理局の使い捨ての駒になんか絶

対させへん！)

どうするか、あまり低くすぎるとはすぐにバレてしまう。高すぎれば的になる。

(なら……)

それならばその中間を取ればいいのだ。

「よっしゃ！決めたわ。ほんならヒロ君の魔導師ランクはとりあえず、空戦A A、陸戦A A Aで登録するな。こつすれば魔力保有値が【Unknown】でもなんとかできるからな」

「ト　A A A！？すごすぎます……」

「ギンガ甘えな。はやては取りあえずって言ってただろ？アタシらからしてみれば低くすぎるくらいだぞ」

ヴィータの言葉にギンガとヒロ以外はウンウン頷く。

「そんなにすごいことなのか？」

「まあね。正式な局員でもAAA以上はかなり優秀な魔導師だからね、どこの部隊でもエースクラスになれるよ」

「うん……」

当の本人にはその凄さはイマイチわかっていないらしい。

「あっ あのさ、はやてさん」

「ん？なんや？」

「名乗る時って必ず囑託魔導師じゃなければダメなんですか？」

「なんや問題あるか？」

「えーっと……」

ヒロは持論をはやてに伝えることにした。

「つまりは、魔導師ってのはヒロ君の世界だと格式高いクラスだから自分には合わないと……」

「まあ、簡単にいえば。なんていうかやっぱり俺には誓約者を名乗るほうが気楽なんですよね」

「なるほどなあ……」

らしいといえればいいのか、そこはやはり異世界から来たということ再認識させる。

「ん、そういうことなら問題ないよ。ちゃんと話し通しておくから心配せんでな。」

「ッし……」

「よかったね、ヒロ」

「ああ、ホントに」

こうして本日この瞬間、囑託魔導師兼誓約者、ヒロ＝ラインハートがここに誕生した。

囑託魔導師試験を終え、あらかた決めることを決めたヒロたちは再びゲンヤの元を訪れる。

「ほお…囑託魔導師兼誓約者ねえ…おもしろえじゃねえか」

「あ、ありがとうございます……」

まるで面白いモノを見るかのような笑みを浮かべるゲンヤにヒロは少し苦笑いする。

「それで八神、とりあえずはどこに就かせるんだ？」

「そおですねえ…本来ならフェイトちゃんのパートナーが妥当なんですけど…」

「お嬢は執務官だからなあ…シャーリー嬢ちゃんがついてるし…ん？八神よお…」

「なんですか？」

「ふと気づいたんだがよ、この兄ちゃんのデバイスはどうなってるだ？」

「『あつ……………』」

「？」

ゲンヤとヒロ以外の空気がかたまつた……。

「そやったあ…ヒロ君をスカウトするだけで頭がいっぱいっぴいで、デバイスの手配忘れてもーた……………」

「あの…そのデバイスってフェイトのバルディッシュとか、シグナムさんのレヴァンティンの事ですよね…」

それって絶対必要なんですか？」

アツチャーと天を仰ぐはやてにヒロはもつともな疑問をぶつける
と、代わりにフェイトとシグナムが説明に入る。

「昨日も説明した通りだけど管理局で定めた法律では質量兵器
つまりは魔力を使わない武器や殺傷性のある武器の使用は禁止され
てるんだ」

「ラインハートの銃は確かに殺傷性は低く該当はしないが、一般的
に囑託や正規局員関係なしにデバイスを所持することは決められて
いる」

「こまつたなあ〜…ヒロ君のデバイス、どないしよか…」

顎に手をあてながら、はやては考える。

「マリーさんの予定は……」

「アテンザ技術官は詰めています」

「忙しいですもんね…マリーさん…」

「シャーリーはどうなんだ？」

「シャーリーは…最近はずっと書類地獄に追い込まれてる……」

「『……………』」

やはりというか、ヒロ以外の全員は自分達が属している組織がいに壊滅的な人手不足かを改めて痛感してしまつ。

「まあ、ヒロ君は超法規的な条件でスカウトした身やからな。よつほどの事件が起きないかぎりは縛られることはないからな…幸いにしてヒロ君はバリアジャケットとかデバイスが無い状態でも魔法が使えるみたいやしね。」

デバイスの件は私からシャーリーに頼んどくからな」

「わかりました」

「とりあえずはや…お昼まではあと二時間ちよいか…この分なら全部片付けられそうやね」

「うん。じゃあ私はこれからヒロを連れていくよ。お昼はここで一緒にしよう」

「ほんならフェイトちゃん頼むわ。あたしらはこのまま通常業務に戻るか」

「わかった。そんじゃあまた昼な」

「私もお昼には一緒に一緒にさせていただきますね」

「ラインハート、テストロツサから離れて迷子にはなるんじゃないぞ」

などなど好き勝手なことを言いながら出ていった。

「な…なんかスゴイ疲れました……」

「アハハ…」

「まあ、お嬢がついてるんだ、心配はいらねえわな」

その後のスケジュールはかなり密度が濃いものだった。

ミッドチルダで生活するうえでヒロには足りないものが多すぎる。だからこそ、それらを一遍にすませてしまおうということらしい。

身分証やらIDやらに始まり各種免許などの申請などなど。それが終わるとフェイトと一緒に首都クラナガンに赴き銀行口座を複数開設。それが終わるとすぐさま108部隊に戻り今度は囑託魔導師の給料や報酬を振り込むための書類書きなどに午前中は追われるのだった。

昼食をみんなで済ませた後、ヒロとフェイト、ギンガ以外は本局のほうへ用事があるということとで別れた。

現在三人がいる場所というのは、つい数時間前に試験をした訓練場である。

主な理由は一つ。

ヒロが使わせてほしいと頼んだからだ。

「ちっ、と……」

ミッドチルダに来てからヒロはずっと気になっていることがあった。

「えっと、ヒロ君。それは何なの？」

不思議そうにギンガは質問する。

「これは使い魔との契約の証を収める使い魔専用のアイテムですかね」

「ヒロの世界にも使い魔はいるんだ……でも、それならなんで今まで出さなかったの？」

「まあ……そこは色々事情があるってことで、深くは聞かないでくれるとありがたいかな」

むうっと訝がるフェイトだが、流石にヒロとて教えることはでき

ない。

ハッキリいって格好悪すぎるのだ。

しかし、このまま使い魔のことを放っておくわけにもいかない。

もしも契約が未完了だったりしたら一大事。

本来なら独りでやるべきなのだが、万が一にも使い魔がモノスゴク巨大だったりしたらどんな被害が出るかわからない…

それならば折角頑丈で耐久性抜群な広いスペースがある場所であれば被害は未然に防げる。

さらに不測の事態が起きても被害を最小限に抑えることもできる。

まさに一石二鳥とはこのことだ。

「それじゃあ二人は上にあがってて」

「それは危険な儀式魔法なんですか？」

「いや、そんなことはないはずだけど……まあ、一応念のためだよ」

「わかりました」

「気をつけてね……」

ギンガとフェイトが観戦ルームに上がるのを見届けたヒロは『絆の書』を室内の中央に置き、自らも肩膝をつく。

「さて……このみるからにヤバそうな雰囲気……いったい何が出てくるっていうんですか……」

『絆の書』を開こうと手をかけたそのとき、

「ッ!？」

いきなり黄金色の魔力光が輝きはじめ、バカッと開いた瞬間、ポオンと煙が巻きおこり、そして……。

観戦ルームにあがったフェイトとギンガは数時間前と同じ光景を見ている。

「フェイトさん…使い魔ってというのは…」

「ん……私の場合はアルフになるのかな…」

フェイトは自らの使い魔であるアルフを想像するが、ヒロを見ている限り違和感が出てくる。

使い魔という定義からして違う気がしてならないのだ。

しかし、それを推理してもわかるわけがない。

なぜならヒロ自身がリンカーコアを持たないという彼女たちの常識からは考えられない存在なのだから。

「フェイトさん、ヒロ君動きまし　ッ!？」

「ギンガ、どうし　ッ!？」

条件反射的に観戦ルームを飛び出していた。

煙が巻き起こった次の瞬間、何か沢山な物が雪崩式に落ちてきたかのような音がし、それと一緒に聞こえてきたのが……

「やあああつと……繋がったあゝあゝ　キャアアツ!？」

女の娘特有の声、歓喜と悲鳴。そして何かに激しく落ちたような音……。

「な……なんだあ……?」

当然ながらヒロは茫然とする。

『絆の書』から発生した煙は未だに収まらないからだ。

「ヒロ君！」

「ヒロッ！」

いったい何かと叫びながらギンガとフェイトは駆け寄る。

「いやその……俺にも何がなんだか……」

少しずつ煙が晴れていき、その全貌が姿を現すと、そこにいたのは……

「イッタタタタア…オシリ打っちゃった……」

「『なああっ!?!?』」

幾つものトランクやらキャリーバックが無造作に積みあがったその中心に埋まる落下した形で自分のお尻をさすっている女の娘の姿がそこにはあった。

第六話 〽 『試験と騎士と出会いと ……』 (後書き)

【スペシャル・コメンタリー】

白金「はい、始めましたね。スペシャル・コメンタリー。前は私と夜天のチビダヌキの次元バトルでコメンタリーを佐さんと春さんに急遽任せてしまいました……猛省に猛省ですよ……」

だが、それでもわからないのが……なぜこの空間において絶対的存在であるこの私が……なぜに正座で待機をしなければいけないだろうか……」

????「本当にわからないのかな……」

白金「ッ!?!この声……もしやまさか!?!いやそんなはずはない!だってあのお方の登場はまだまだまださ」

????「ダイバイン……」

白金「き」

????「バスタ ……！」

ドオオオ ……ン!

ザザツ ……ザー ……

【原因不明の桜色の閃光がカメラを吹き飛ばしてしまったことにより只今音声と映像が乱れています。もうしばらくお待ちください】

ドドドッ ……

なのは「どうも、こんにちは〜」。高町なのはです。実は私、魔法少女やっています!」

白金「……………リアルに…白い悪魔だよね」
ボソッ「」

なのは「喋っていいよって私……………言ったかな…」
(目が虚ろ)

ブンブンブン! (白金が首を横に振る音)

なのは「そうだよね！白金さんは私の質問にだけ応えるってさっき
“OHANASHI”したもんね！

それともまだ“OHANASHI”が足りないのかな…」（も
はや目に光は無い）

ブンブンブンブン！（白金が恐怖のあまり残像が見えるくらいに首
を横に振る音）

なのは「わかればいいんだあゝ それじゃあ白金さんに私から質問
があるんだけど」

白金「誠心誠意…お答えさせていただきます…」

なのは「うん！いい心掛けだよ なら早速なんだけど、どうしてフ
イトちゃんやはやてちゃんたちは出てるのに、私は出てないのか
な？」

白金「ウグツ…それは…」

なのは「よっぽどしつかりした理由があるんだよね」（スバラ
シイ笑顔）

白金「……………」

なのは「どうしたのかな白金さん…なんでそんなに滝のような冷や汗が出てるのかな？」

白金「……………で……………」

なのは「えっと、よく聞こえないよ？」

白金「実はなのはさんにはもっと凄い見せ　ヒイツ！?!?!？」

いつの間にか目の前に置かれていく証拠の数々。

なのは「……………これによると、あと三話くらいはストックがあるみたいだけど　…私、まだ出て来てないよね？」

白金「……………なのはさん……………」　「ここ数年見ることのない作者の真剣な眼差し

なのは「な……………なにな……………」

白金「実は　これはまだ最重要機密情報なんだが　…なのはさ
んを出さないのには…理由があるんですよ……」

なのは「えっ……な…なになかな…その理由って……」

白金「それはここでは言えませんがネタバレになりますからね。でも安心していいですよ。今は諸事情により、なのはさんの出番が無
いですが、やっぱりシリーズの核にいるのは　」

なのは「白金さんもういいよ！このままだとそのネタバレになっちゃうしその　私が勘違いしてたみたいだし……ディバインバスタ
ー撃ってゴメンナサイ!!」

白金「わかって…くれたのかね？」

なのは「私、白金さんのこと誤解してたのな…白金さんは全体を
ちゃんと考えてわざと私を登場させてないのにな私……」

白金「うむ…ならば私を信じて　待っててくれるかな?!」

なのは「いいとも〜なのっ!」

白金「それじゃあ今回は大団団ということでここまで！お相手は白金と」

なのは「良い子の皆はそんなんじゃないってわかってるって信じてるけど、私のことを『管理局の白い悪魔』とか『冥王』って言う人がいるけど、そんな嘘には耳を貸さないで欲しいのなの！　な、高町なのはでした〜」

白金&なのは「『ばいば〜〜〜い！』なの（『」

白金「言えない　……実はウツカリ出すの忘れてました〜…なんて…絶対……」

第七話 〽『存在自体が規格外ですからッ!』〽 (前書き)

さあ〽〽やっつてまいりました!遂に今回、アイツが登場します!

アイツの暴走を止められる者は果たして存在するのでしょうか!

そして、(色んな意味で)ヒロラインハートは生き残ることが出来るのでしょうか!?

感想、お待ちしております!

ここでお知らせを。感想と一緒に後書きの【スペシャル・コメント】のネタなども一緒に募集してますので、どうぞ気軽にメッセージなど送ってください。返信は確実に返させていただきますのでよろしくお願いします。

第七話　『存在自体が規格外ですからッ!』

これは一体どういうことなんだろうか…

ヒロ＝ラインハートは現実を受け止められないでいた。

「え〜っと、貴方が私を喚んだ契約者マスターさんなのかな？」

目の前にいるとびっきりの美少女は両手を後ろで握り、下から覗き込むような格好で自分のことを契約者マスターかと聞いてくるではないか……。

「……………」

ハッキリいって只今、ヒロ＝ラインハートには正常な思考能力がない…脳内で情報が処理しきれていないのだ。

目の前の女の娘は深海を連想させるかのような鮮やかな蒼色の髪を腰まで伸ばし、最高級赤ワインのような真紅の瞳は興味津々といったように、ヒロを観察している。

服装は所々に切れ込みがあるダメージジーンズに、少々露出が多いロックスタイルで纏めている。

ごまかしが絶対きかない服装に出るボディラインは凄まじく、まさしく魔性のボディーが当て嵌まる。着痩せするタイプみたいだが、その状態でもフェイトやギンガと競べても劣ることのないバスト、力を入れてだけで折れそうなくらい細いウエスト、ちょうどよくキユツと上がっているヒップライン。

これを魔性と言わずに何と言えはよいか……

「『……………』」

すでにフェイトとギンガは言葉も出てこず、目の前の女の娘に目がクギツケになっているのが何よりの証といえよう。

「いやあ〜もし貴方が契約者さんなら最高に感激だなあ〜ツ！私

フェイトギンガにとっては完全に知識のみ。見るのも初めての行為であった……。

「ツブはあつ……どうだったかな……初めてだから上手くできたかどうか不安なんだけど……って……」

「……………」

「あっちゃあ……気絶しちゃってるねえ……でも私はとっても幸せだよ……ッ！」

今度はその豊満すぎる魔性のボディで気絶しているヒロをギュッと抱きしめ、とろけるようなフニャフニャ顔で悦に入るのだが……

彼女“たち”が、それをよしとしない。

「【トライデント・スマツシャー】ッ！！」

刹那、黄金色の三叉の槍を形どる砲撃が女の娘を直撃し

「【リボルバァ……シユート】ッ！」

衝撃でフツ飛ばされたところにギンガがさらにリボルバーナックルからの強烈な魔力弾の一撃をお見舞いしていた。

「ハアツ…ハアツ…ハアツ…」

「フウツ…フウツ…フウツ…」

フェイトは肩で息を穿きながら自らが撃った砲撃の方向を見ながら激しく後悔していた。

気がついたら身体は自然とバリアジャケットを展開していて、気がついたらバルディッシュに砲撃を命令していた。

何故こんな行動に出たかは自分でもわからないが…気付けば身体が勝手に動いていた。

それはギンガも全く同じだったらしく、リボルバーナックルの回転が収まりはじめたところで、ようやく幾分かの冷静さを取り戻すことに成功する。

「いやあまったく、不意打ちは卑怯だと思っただよねえ私的にはさ

あゝ
」

「『なつ……………』」

しかし、彼女たちは知ることになる。彼女たちの目の前にいる彼女たちと同年代に見える少女がどれほど規格外の存在かということ
を
…

奇しくも冷静さを取り戻したことによって。

「いやあまったく、不意打ちは卑怯だと思っただよねえ私的にはさ
あゝ
」

「『なつ……………』」

モクモクとたちこめる煙の中から悠々と現れる少女は一言で表す
ならば『無傷』。

仮にも砲撃魔法が直撃したのにだ……。

いくら管理局が非殺傷設定魔法仕様だからといえど物理的ダメージは存在する。

それがどうだ…女の娘には服に汚れすらついていないではないか…

自慢の魔法の一つゆえにフェイトは少なからずショックを受ける。

しかしそこは管理局のエリート執務官、すぐに冷静さを取り戻す。

「ヒロを離してくれないかな…そのままじゃ窒息しちゃっよ……」

カタチをグニグニと変えながらヒロの顔をのめり込ませているその光景にフェイトのコメカミがピクピクしてしまうのは若さ故の未熟だろうか。

「そもそもイキナリその」

「ああ、キス？」

「普通に堂々と言わないでください！なにより非常識じゃないですかッ！まるで襲い掛かるようにするなんてッ　貴女には恥じらいが無いんですか!？」

「こちらは感情全開のギンガ。よほど混乱しているのか、顔は紅く視点も合っていないようにもみえる。

「恥ずかしいってよりは嬉しいかなあ。だってさあ、これから一生一緒に過ごす愛する人に初めてを捧げるなんて、これ以上の喜びはないとおもっけど?」

「ああ愛する!??っていうか、メチャメチャ初対面っぽいじゃないですかッ!？」

「そ、そうだよッ!」

ハッキリと断言する女の娘はヤレヤレと首を振り、優しくコワレモノを扱うかのような丁寧さで気絶しているヒコを床に寝かせる。

「じゃあ聞くけど、人を好きになるのに理由とかいるの?」

「そ……それは…」

もちろんフェイトもギンガも答えることが出来ない。

何故なら二人とも、特定の異性と付き合ったことも、好きという感情すら持ったことが無いのだから。

「あの時あの瞬間、私は私を喚んだこの人に私のココロは根こそぎ奪われた　本当の一目惚れってやつね。」

理由なんて知らない。けど私たちにとって召喚ってのは重大な意味があるの。

それはね『運命』といっても過言じゃないの」

あまりの力説ぶりにフェイトとギンガはただ聞くしかない……

そんな二人にお構いなしに彼女は続ける。

「すべては一生に一度っきりの召喚。使い魔を喚び出すことは一生に一度しかできない…」

しかも召喚にはお互いの魔力の相性とか召喚者の資質とか色々あって私クラスを喚べる召喚者なんて本当の奇跡が起こらない限りあ

りえないの。

それなのに私は喚ばれた。しかも同じ年くらいの私のど真ん中ストライクな優しそうな男の子にッ！

これが運命の出会いじゃなくて他に何かあるのッ?!あるんなら今すぐ出してみなさいよねッ!」

ビツシイッと効果音が出そうなくらい拳を天に掲げる女の娘は見事に持論を言い切った。

まさか当事者が気絶しているなかで、その当事者に全くの第三者からしてみれば愛の告白同然のことを言われているなどは露知らず、タイミングが良いのか悪いのか、当事者であるヒロ＝ラインハートは目を醒ます。

何故自分は意識を失っていたのだろうか思い出そうと試みる……

「ハワッ!?!」

問題なく全部鮮明に覚えていた。というより、忘れるなど一生不可能だろう……

一生に一度の使い魔の召喚・契約の儀式で喚びだした超がつく美少女に半ばイキナリ襲われクチツケされたのだから……

「あつ、起きた？ヤツホー久しぶりい」

「ん………なわあああつ！？」

不意に顔をあげてみれば、目の前に立っているのは今の今まで思っ
いで出していた人物ではないか、おもわずヒロはなりふり構わずに後
ずさりしていた。

「ありやりやあ〜……やっぱ流石に一言宣言してからのほうがよかつたのかなあ……

でも大丈夫ツ！私もハジメテだったからっ！」

目の前の女の娘はこの上ない笑顔。

そもそも宣言って何の？ハジメテって何が！？

いや勿論、ハジメテの意味くらい今の混乱しているヒロにだって流石にそれくらいは理解できる。

ようは現実逃避がしたいだけなのだ。

しかし現実はその時間を与えたりはしない。

「えっと、とりあえずは落ち着いて話しができる場所に移動しませんか？」

ヒロが目を醒ましたのが冷静さを一気に取り戻させたのかギンガが提案し、全員がそれに賛同するのだった。

「『……………』」

「エへへエへ」

「……………」

この張り詰めた緊張感は何なのだろうか…

本日三度目のミーティングルームにてヒロ＝ラインハートは冷や汗をかいていた……

「あの……」

「ヒロ君…鼻の下、ノビてるよ…私としては破廉恥な行為は慎むべきだとおもつんだ……」

「……………口元、緩んでるね……」

視線が…厳しすぎる……

フェイトとギンガの視線は暗く、虚ろそのもの。

その元凶たる人物はといえば、満面の笑顔で腕に抱き着いてきているのだ。

弁明は不可能。

一度だけギンガの父ゲンヤが新たなヒロの関係者がいると聞き付け来てみたものの、ギンガの表情をみるなり回れ右。

見なかったフリを決め込み退出し、まさに孤軍奮闘を余儀なくされてしまったというわけだ。

「気を取り直してまずはこちらから自己紹介をします。」

私は管理局陸士108部隊所属、ギンガ「ナカジマ陸曹です」

「管理局本局魔導師、フェイト「テストロッサ」ハラオウン執務官です」

二人の自己紹介が自分に向けてのことだと気付いた女の娘はヒロに抱き着いている腕を解き、佇まいをただす。

これにはフェイトとギンガも少し驚く。

なぜなら姿勢を正した次の瞬間、なんともいえない雰囲気が始めたのだ。

ソレは『洗練された雰囲気』といえいいのだろう。ものごとろつく前からの教養を身につけた者でしか出せないソレは、それまで抱かせていたイメージを根底からブチ壊すには充分すぎた。

「私はリン＝ストラトス＝ドレッドノート。私たち魔族に年齢なんてあんまり意味無いんだけど、一応は人間でいうところの15歳。

私のことは普通にリンって呼んでほしいな。もちろん敬語も無しでね」

フェイトとギンガも頷く。

「さてと、それじゃあ今がどんな状況なのか教えてほしいんだけど…
まずは私の契約者^{マスター}のことから聞きたいな」

「わかった…俺の名前はヒロ＝ラインハート、歳はリンと同じ15

歳。もう気付いてると思うけどリンを喚びだしたのは俺なんだ」

「うん、これから一生の付き合いだからね。よろしくねッ！」

笑顔のリンとヒロは握手を交わす。

そしてそこからヒロが状況を説明する。

使い魔召喚の儀式で何らかのイレギュラーが発生したこと。

結果、次元を超えて異世界に飛ばされてしまったということ。

この世界でフェイトに保護されたということ。

今はいろんな人に助けてもらっているということ。

そして現状、元の世界に戻る方法が見つからず、例え見つかったとしても帰らないということ。

包み隠すことなく話す。

「ふ〜ん…なるほどねえ…… うん、わかった。別に元の世界に帰れなくても全然いいよ」

「いやリン…俺はよくてもリンは良くないんじゃないか……」

「フウ……あのねえ、あそこにある荷物、何のために持ってきたかわかる？」

「私はね、最初っから自分の世界には帰らないつもりだったの。だから全然問題なし」

「それ、問題なしじゃないよ……」

例え使い魔がどんなものであろうがフェイトの言う通り、はいそうですかと納得できるわけもない。

すると一転、リンは自分のことを語りだした。

「私の親はちょっと変わっててその… 私、魔王の娘なんです」

「……………」

「……………」

「……………」

「『エエエエエツ!?!?』」

衝撃すぎるカミングアウトに一瞬空気が固まった次の瞬間、ミーティングルームには絶叫が響いた。

もしもこの部屋に防音効果が無かったら人が飛びこんできてもおかしくないほどに。

「魔王…って、魔王?」

「たぶん、その魔王」

奇しくもフェイトとギンガは同じことを考えていた。

「『魔王って実在したんだ……』」

彼女たちの身近には管理局の『エースオブエース』、『不屈のエース』と呼ばれる少女がいる。

その少女が尊敬と畏怖を込められ陰でなんと呼ばれているのかも

……

ある者は『管理局の白い悪魔』

またある者は『冥王』

またある者『魔王』と……。

ただ、どれもこれもイメージでつけられたただけであり、勿論魔王を直に見た者などいるわけもない。

しかしだ、今自分たちの目の前には魔王などという架空な存在を
実在していると肯定する魔王の娘とやらがいる。

何がなんだかもう分からないでいた……

「まあ勿論、ここが異世界だっというんなら証明なんてできけど、ちょうどいいかな〜なんてねッ」

リンは話す。自分が魔王の娘だということには誇りを持っているし、家族も魔界も好き。だが、なにかが物足りない……。

ワクワクしない毎日に嫌気がさし、もう二度と魔界に戻らないつもりでここ一年ほどはいつでも喚ばれていいように荷物を準備して、毎日毎日待ち続けていたことを。

しかし、彼女クラスがそう簡単に使い魔として喚ばれるはずもない。

全ては一生に一度つきり。普通の使い魔でさえ運命の出会いレベルなのに　だ。彼女クラスともなれば喚ばれる確率はほぼゼロ……というより、本当に一人の力で喚べるのかということすら怪しいもので、待っている間の彼女も、それはヒシヒシと感じていた。

「もうだめかな……」そんな弱音が出るくらいに諦めかけていたある

日の昏下がり、ついに彼女に奇跡が起きた。

部屋に設置していた反応の無かった魔法陣が突如として輝きを放ち、夢にまで待ち焦がれた門【ゲート】が現れたのだ。

まさに突然のことだったのだが、その時の彼女は不思議と冷静だった。すぐに多忙を窮める家族を呼ぶと、満面の笑顔で「いつてきます！」と言い、荷物を【門^{ゲート}】に押し込み自分も飛び込んだということ。

なるほど、ヒロもようやく理解できた。

視線の先はミーティングルームの隅、訓練場から台車に載せ運んで来たキャリアバッグやスーツケースの数々が彼女の言うことが紛れも無い真実であることを悠然と証明している。

つまりは全てが用意周到だったことを意味する。

ここまで彼女が覚悟しているならば何を言っても効果は無いだろう。

それに元はといえば変な意地を張らなければ彼女を巻き込むことも無かったのだ。

ならばヒロが取るべき行動は自ずと決まる。

「あの、さ…フェイト……」

「ん。ヒロの気持ち、わかってるよ」

「私も微力だけど協力するから」

「ギンガまで……」

立ち上がったフェイトはリンに笑顔で告げる。

「リン…もしリンが良いなら、私と 私たちと一緒に暮らさない？ 部屋は余ってるから。」

「い、いいのー!？」

「うん。」

「私も、微力だけどヒロ君とリンのことはサポートさせて貰うからね？」

「あ、アリガトー！フェイトツ！ギンガツ！」

「『エツ　　ワツ?!』」

ガバツ！といきなり抱き着いてくるリンにフェイトとギンガはビツクリするが、すぐに体制を整える。リンはといえばよほど嬉しいらしく、二人を離そうとしない。

異世界から飛ばされた少年と、そんな少年に喚ばれた魔王の娘。

この二人の出会いが世界にとって善となるか悪となるかは、まだ…誰もわからない……

第七話 〽『存在自体が規格外ですからッ!』〽 (後書き)

【スペシャル・コメンタリー】

ヒロ「ガクガク……ブルブル……」

白金「これはまた……良い具合に廃人コースというか…ガッツリな感じでトラウマになってるなあ……」

ヒロ「お前は鬼か!? 外道なうえに鬼畜なのかそうなのか?!?」

白金「まったく何を言うかと思えばこのドヘタレ主人公は……こんなに激甘なシチュを盛り込んでいるのに、どこが不満だということかね?」

ヒロ「ももも問題大アリだから!?!?!?どこの世界に会って二分も経たないのにそのキキキ」

白金「ああ、ディープなキスね」

ヒロ「サラっと言わないでええええッ!?!?!?」

白金「いやあく自分の使い魔に会って早々、半ば強引に唇を奪われる主人公っていうのは製作サイドとしてはとてもオモロゲフンゲフン……。というか、なにをディープなキスくらいでガタガタと……。こんなもの序の口というか……。まだ始まってすらいないのだが?」

ヒロ「まだ上があるの!?!?!?」

白金「フツ……。前回私はホンモノの冥王……から直に噂の“OHANASHI”を喰らったときに決めたんだよ……。生きて帰ったら私は君に更なる理不尽という名の愛の試練を与えよう」と

ヒロ「あるうことかただの八つ当たり!?　　っていうか理不尽って普通に言っちゃってる!?!?」

白金「……。では、登場して貰いましょうかね……。今回のゲストに」

ヒロ「ま　まさ……か……」

白金「はい、そのま　」

ヒロ「ノオオオオオオ……」　（戦略的撤退）

白金「　アイツ……近いうち逃げ足だけは音速の域に到達するかもしれない……。まあ、いなければいなくても今回は問題無いか。」

では改めまして今回のゲスト、存在そのものが規格外！圧倒的な頭脳と知識、無限に等しい体力と不可能を可能にする行動力！そのすべてはヒロ＝ラインハートを墮とすため　：魔界の統治者にして絶対の存在である魔王の愛娘にして魔界のプリンセス　リン＝ストラトス・ヴァンガードさんです！どうぞ……ッ！」

リン「へえ……。こっちでも白金さんはテンション変わんないねえ……」

白金「いやいやリンさん貴女には敵いませんよ。いきなりのディーブなキスでの先制攻撃、流石期待を裏切りませんねえ」

リン「う……ん……私としては全然物足りないんだけどさあ、やっぱ

り魔王の娘としてはイメージも大事だからね。」

白金「なるほどね…」

リン「まあ、実はそれだけじゃないんだけどねえ」

白金「ほお……是非聞きたいね。」

リン「まあいいけど。思うんだけどさ、私としてはチカラズクとかじゃなくて、ちゃんとした正攻法でヒロのこと墮としたいんだよね！」

白金「正攻法？」

リン「たしかに私クラスになればチカラズクなんて、そこらへんのテキトーな国一つ消滅させるのと同じくらい簡単なんだけさあ、なんていうかやっぱり一人の女としては魅力で勝負したいんだよね！」

白金「なるほど…『恋する乙女理論』ですな。…　ということは、これからリンは一切の色仕掛け無しで勝負していくと？」（先に国一つ滅ぼすあたりにツッコミ入れようよ!? b y ヒロ=ラインハート）

第八話 、『推測の域でしかないけれど』(前書き)

さあて更新だ〜ツ！ ……と言いたんですけど、今話は過去最大に少ないんです(泣)

まあ、この短いやり取りの中には、かなりの伏線 というか、イロイロな意味合いを持つてくるので了承を。

とはいえ次回は かなり長いので、同時に次話を編集している身としてはこれまた苦勞しっぱなしなのですが ……

とりあえず本編いきましよう。

どろろ〜！

第八話 　『推測の域でしかないけれど』

「フウ……」

私、八神はやては今、本局にきてます。

用事をチャツチャと済ませてリンと一緒に調べ物しとるんやけど……

検索結果、該当無し

「やっぱりあらへんなあ……」

「ないですう……」

アカン……やっぱりあらへん……

探しはじめてかれこれ二時間…私もリインも徹底的に調べてるんやけどなあ……

「はやて、リイン、なに調べてるんだ？」

「あ、ヴィータ。どや、お仕事終わったんか？」

「うん。キッチリ片付けてきた。それで、はやてとリインは何調べてたんだ？」

「ああ、これなんやけど……」

「これは……」

画面に出された内容をヴィータは喰い入るように見る。

私がアクセスして画面上に表示されているのは簡単にいえば管理局の用語データベース。

管理局が管理している世界の言葉や用語などを無限書庫とは異なるデータバンクに集めて保存しとるデータベースで、必要なときに検索閲覧するのにはうってつけで、これで見つかるはず やった

んやけど……

「ヒロ君が言った言葉、『誓約者』なんやけどな ……どうやら管理局が管理しとる世界は無いみたいなんや…。」

ということとは、や……現状考えられる可能性は大きく二つ。

一つはどこかの世界の平行世界。

もう一つは…管理局が見つけてへん世界、もしくは管理局やミッドチルダ以上の文明世界やってことやな……。」

「はやてそれって ……」

「次元の海は広大や…いくら管理局といえど全ての次元世界を把握しとるわけやないし、まだまだ未発見の世界もある。」

それにや、いくら管理局といえども自分ら以上の文明世界を発見はできへんし、そもそも発見したところで何もできへんやろ…。」

「正直なところはわからないんですけどね」

「アイツが嘘言ってるって…。」

「それは無いな。嘘をつくメリットがあらへんし、何よりリンカーコアが存在せえへんのだ…こっちの常識の領域外を示しとる何よりの証拠や」

「はやてちゃん…もしもこのことを管理局の一部の上層一派に知られたら……」

「やせへん…」

私はラインの頭を撫で言い切る。

「ヒロ君を自分の利権しか頭に無いやつらの使い捨てのオモチャにさせてたまるかッ！」

「はやて…」

「ヴィータ、ライン、大丈夫や。もうすでに手は打つとる」

コンソールを叩き、画面に表示させるのは人物の画像と相関図。

「これって　ッ！」

「そや、この人たち全員に話しはつけとる。現状、管理局内でヒロ君を悪くできる奴らなんて存在せえへん！」

「さっすがはやて！」

「さっすがですう」

「ありがとなあ。さあつて、また明日から忙しくなるよあ〜。なにせ、もうすぐなんやからな！」

リン「色々ツツコミどころはあるよねえ〜……どこからどうみてもスク水なのに実はスク水じゃなかったりとか」

白金「わかるなあ〜……妙に現代っぽい制服かと思えば下は
×
ってか、服そのものの規準がオカシイっていうか」

リン「でもさあ、観ててこう 何かを感じるんだよねえ〜」

白金「なにか？なにをだい？」

リン「うまくはいえないけどさ、なんていうか、ロマンを全部そのままぶち込んだらアウトだけど、ちょ〜とだけ手を加えたらセーフになった〜って感じが」

白金「う〜ん……これからはそういうのも描写としては工夫していくべきなのか……」

リン「あ、多分さあ、地 波でボカしとしての
だからいいんじゃない？」

白金「代表的なの挙げたいけど、挙げたら挙げたで問題になりそう

だから具体名については言及しないが、作品としてはかなりメジャーですね」

スタッフ【そろそろ本番行ってください〜い】

白金「いやあ〜随分な脱線具合だったけど、今回のコメントリーの主題はア メ談議ではないんですよね」

リン「でもまあ〜今回の話の内容、特に本編にふれることは無いんじゃない？短いし」

白金「……なんだろうな… 事実は事実なのだがこつもズバッと言われると生傷にハバネ口擦りこまれるみたいな苦痛を感じるのだが

…

まあいいでしょう。今回のコメントリーの目的はですね、このコーナーの名称を決めたいと思ひまして」

リン「なるほどお〜」

白金「いつまでもただのスペシャル・コメンタリーでは面白みに欠けますからね」

リン「モのほつでやってる『白金のアトリエ』じゃあダメなの？」

白金「うーむ…そこがまた微妙なところでね…あちらとこちらをゴツチャにするのは如何なものかと…それになにより二番煎じのよくな気が…」

リン「シンプルにルルッってBGMが聞こえてくるやつとかは？」

白金「却・下」

リン「じゃあ、今日のあた」

白金「ラ オン製品は扱ってませんよ？」

リン「だぁ〜〜ッ！お〜も〜い〜っ〜か〜な〜い〜」

白金「諦め早すぎませんか？」

リン「こういう万人受けしそうなネーミングと違って決めるの難しいんだよねえ〜」

白金「やはりスナリとは決まりませんね〜……ということでは、作者からのお知らせです!」

リン「ま　まあさか……」

白金「はいそのままさかです。日頃から御鼻屑にしてくださいさる読者の皆様から、この【スペシャル・コメンタリー】のコーナー名のアイディア募集をしたいと想います。

コメンタリーの名前にふさわしいカッコイイ名前やセンスを感じさせる名前が浮かびましたら、お気軽に感想とかメッセージとして送ってください。参考にさせていただきますのでよろしく願います。」

リン「活動報告とかにも載せたら?」

白金「それもそうか……活動報告にも専用に使いますので、そちらでもOKです。是非是非お気軽にカキコよろしく願います。

では今回はここまで。お相手は白金と」

リン「リン＝ストラトス・ヴァンガードでしたあ〜」

白金&リン「『ほ〜〜〜〜〜』」

第九話 く『はじめてのお仕事は (前編)』く(前書き)

いやはや、これまた予想以上に長いッ！というわけで一話では纏まりません。

さて今回の話では、あのコンビが初登場！

…白い悪魔ファンの皆様ごめんなさい…彼女は諸事情によりまだまだ登場できません…

まあ、原稿データの方のほうではようやくチラホラ出て来てはいるので。

しかし…いつになったらStrikersに入れるのやら……

【スペシャルコメンタリー】のコーナー名は引き続き募集してるので、お気軽にアイデアを寄せてください！

ではでは本編、どうぞぞ！

第九話 、『はじめてのお仕事は (前編)』

「えっと……」

現在の時間は夜中の三時 ……

たいていの人間なら夢の住人になっているこの時間、本当なら私もそのはずなんだけど……

突然のことだが私こと、フェイト⇨テストロッサ⇨ハラオウンは今の自分の状況がわからないでいる……

なぜなら……

「んにゃ〜……フェイト〜……」

自分の隣で…とても言葉に出せないような格好でなにやら幸せ夢心地な寝言を呟いている二日前からの同居人、リン「ストラトス」ドレッドノートがいつの間にか一緒のベッドで寝ているからだ。

どうやら夜中にお手洗いに起きて、そのまま無意識のうちに私の部屋を自分の部屋と間違えたようだ。

今ならヒロの気持ちかわかるかもしれない……

私より年下なのにこのスタイルは反則だよ……

もしリンがはやてに見つかったら……ハッ?! 想像するだけで顔が熱くなっちゃうよ……

実はリン、日常的には四六時中ヒロに迫っている。彼女は「私はヒロを私無しで生きれなくするのが私の最終目的なのッ」と、堂々と宣言したうえでこう付け足した。

「実は魔界は王族だけが一夫多妻制が許されてるんだよねえ〜。だから私的にはオツケーだし、するからには魔界式の結婚式もできるけど、やっぱり一番の座は譲れないんだよ〜」。

まあ、そついつわけだからヨロシクねッ!」

らしい……。

なにがヨロシクなのは……よく分からないんだけど……。

「それにしても……」

絶対言葉に出来ない格好のリンのNGゾーンをケットで隠し、改めて見る。

「なんていうか、反則だよ……」

シミなんて微塵もないキメ細かい肌。

妖艶な顔だちなのに性格は真逆。

所々でシツカリと見える教養と洗練された振る舞い。

極めつけは只今絶賛成長中だという反則クラスのプロポーション。

全てが反則、規格外だ。

「……………エイッ……………」

なんだか悔しくなってコッソリ攻撃してみる。

ほっぺをツンツンしてみるけど や、柔らかいッ……………!?!?

…跳ね返す!?!?

「んにゃ〜ん……………」

「エ……………ワワワッ……………」

刹那、突然の事に私はパニックに陥る。

だって、リンがいきなり私に抱き着いてきたから!

「ッ!?!?」

な、なにこの良い匂い…

これっ… んの……

「ハッ!？」

だ、ダメダメッ!？今意識無くなりかけたッ!

早く …… って、なんか力強く……… て解けないッ!？

ちょっリン!はやく起きてええ〜ッ!？

「おはよ〜」

朝起きたヒロがいつも通りに洗顔を済ませてから、リビングに向

かうと、既にリンとフェイトは起きていた。

「あっ！ヒロオハヨーッ！」

モーニングコーヒーならぬモーニングココアを飲んでいるリンが一番にヒロに気付き朝の挨拶をし、ヒロも「おはよう」と返す。

そしてこれまたいつも通り、フェイトに朝の挨拶をしようとしてフェイトの方を向くのだが

「フェイトおはよう　　って、……フェイト？」

「あ……ヒロ……おはよ……」

何かが変だとヒロは感じる。

フェイトの様子がどこか変なのだ。

表情は普通な感じなのだが、ヒロにはフェイトが疲れているように見えた。

「リン…フェイト、どうしたんだ？」

「んっ………？」

人差し指を唇に当て、わからないと言う。

そしておもむろに立ち上がり、朝食の準備をしているフェイトの後ろに近づいていく。

黒の制服に黒いエプロン、まさに黒一色に腰まで伸ばした黄金色の髪。そこに近づくは蒼。

「フェイトッ！」

「はワァァッ！」

後ろから近づきポンと肩に手を置いただけで、なぜかフェイトは顔を真っ赤にしてワタワタする。

「起きたときからずっっとこんな感じなんだよねえ」

「いや…わかった…わかったから　俺にしがみつかないでくれ…」

「ダクメツ！朝の充電なんだからッ！」

抱き着かれながらも無理矢理剥がせないのは男の性サガなのか。

朝から繰り広げられる激しいスキンシップ。

睡眠で回復したはずの体力をゴツソリ消費させられながらも、ヒロはフェイトがいてくれたココアを口に運ぶのだった。

三人での食事にも違和感が無くなって来たこの頃、今日も仕事のフェイトはいつもの執務官の制服を身に纏っている。

朝のニュース定番の占いコーナーが流れ、女の子なリンとフェイトが結果に一喜一憂している中、何かを思い出したらしいフェイトが口を開く。

「そうだ。実はね、今日からヒロには陸士108部隊に出てほしいってナカジマ三佐から連絡が来たんだ」

「ふ〜ん…じゃあ朝ごはん食べたらずぐ？」

「あのね、そのことなんだけど…私、今日は本局のほうで別の捜査があつて一緒に行けないんだ…」

「だから、今日は一人で行けるかな？」

「申し訳なさそうなフェイト。」

「いや、この二日で大分地理も分かってきたし、フェイトが用意してくれた免許と身分IDがあれば何とかなるから、俺のことは気にしないで」

「うん…わかった…ヒロ、リンも気をつけてね…二人が強いのはわかるけど、どんな簡単な捜査でも何があるかわからないから…
ね？」

「ふあひいほふあふおふえふいほ！ふあふあひはふいふえふああ
あ」

「せめて飲み込もうぜ……」

こうしてヒロの囑託魔導師兼誓約者としての初めての仕事が幕を開けることになった、そんな朝のヒトコマ。

先に出勤するフェイトをヒロとリンは玄関でお見送りし、自分たちも準備を始める。

「よ〜っし、それじゃあリンは準備できたか？」

「もちろん、大丈夫だよ」

いつも通りのジーンズに黒で纏めたラフなヒロの服装。基本的にヒロは色や柄は違えどこんな感じのコーディネートを好む傾向にある。

対するリンも下はジーンズなのは同じだが、上はゆるふわな白の

ワンピース系で纏めている。

「そういえばさヒロ、移動手段はどうするの？」

「ああ、そこら辺は大丈夫。ちょっと苦労したけど陸士108部隊の隊舎近くに転移魔法陣を予め設置しておいたんだ。

さっき通信でギンガに移動手段のこと話したら数日内に手配してくれるって言うってたから、それまでは転移魔法陣が移動手段だな」

昨日フェイトが渡してくれた部屋のカードキーの合い鍵で鍵を閉め二人はマンションを出る。

本日の目的地 陸士 108部隊へ向かうために。

「あゝ〜リンさん……さっきから周りの視線が痛いんで、腕の方…もしよければ離してもらえませんか？」

「うん、却・下」

「何故に!？」

「だって周りに見せつけてるんだもんねッ!」

「……………」

ここまで断言されてしまったては反論などできはしない。

転移魔法陣での転移に成功したヒロとリンは隊舎を目指し敷地内を歩いているのだが、いつの間にかヒロとリンは大変な注目を浴びていた。

もちろん、その原因はリンにある。

こんな公衆の前でもお構いなしでヒロの腕に抱き着きながら満面の笑みで歩いているからに外ならないのだが、実はヒロも気付いていない理由が存在していた。

初めてリンを目の当たりにした108部隊の隊員たちが抱いた率直な感想は

脚なつがあゝッ！？

ウエストほっそおゝッ！

大量破壊兵器ですかあの胸はゝッ！？

ってか隣にいるやつ幸せすぎんだろブッコロすッ！

ほぼ全てがリンの規格外な容姿への驚愕から来ていたのだ。

同性の女性隊員に到っては泣きながら走り去る者もいたとか……

とにかく視線が痛すぎで、マイナスな感情はあれどプラスになるものなどは微塵も感じられず、受け付けをすませ建物内に入っても同じこと。

この針の筈がゲンヤの居る部隊長室まで続くのかと思うと流石にヒロもゲンナリしてしまう。

ただ、そんな地獄にも救いはあるもの。

「あつ！ヒロ君、オハヨー」

「オオツ！ギンガオハヨーッ！」

まさに地獄の中の救いの女神、ギンガⅡナカジマがヒロとリンを見つめ駆け寄ってきたではないか。

108部隊でも人気があるギンガが一緒ならば少しは視線がバラける！そう考えるのはごく普通で、期待するのだが

「ムッ……ムムッ……」

ギンガの姿を視認した瞬間　あからさまに全身から警戒オーラを全面に押し出す人物、リンⅡストラトスⅡドレッドノートがヒロの希望的観測に待ったをかける。

「あの…リンさん…さっきよりも何だか柔らかい物体がさらにカタチ　　ウワッ！　　かえて　　なわッ！？」

「気のせいだよ？」

（な、なんだろう……この黒い笑みは……ここでツッコミを入れて

しまえば最後　　自分の首をしめかねん…)

草食動物的な勘の良さが働き察知したヒロは腕に伝わる柔らかい
感触を極力意識しないようにするのだった。

「おはよーヒロ君、リン」

「オハヨーギンガッ！」

「おはよ〜」

相も変わらずギンガのお姉さんオーラは本日も全開の御様子だが
内心、ギンガのお姉さん気質にヒロは一種の安定感を感じていたり
する。

この人ならば隣の天然核兵器のような行動など絶対にとるはずが
ない　　……そんな根拠は無いが感じられる。

言うなれば全幅の信頼というやつを。

「フェイトさんから話し聞いたんだよね？」

「ああ。さすがにフェイトも内容までは知らなかったけど」

「じゃあ詳しいことはお父さんが話すそうだから」

「……………は？」

のだが…………刹那、ほんの一分前にあつたはずのギンガに対する安定感やら信頼やらが文字通り“パツ！”と消えてしまう。

素晴らしい笑顔のギンガはリングが腕を組んでいない反対方向に移動し…………

「とりあえずゴー！」

「あの…………ギンガ…………さん…………イッタイナニオ…………」

いきなり離さんと言わんばかりに、ガツチリとギンガが腕を組んできたのだ。

当のギンガはといえば「気にしちゃダメだよ？」などと柔らかく

微笑むが、ヒロとて健全な年頃の男の子。

意識しないわけがない。

その『すごく柔らかい感触』は脳に向けダイレクトにアラートを煩いくらいに鳴らす。

「ムムツ…ギンガ！そんなことしたら通路の幅とって他の人の邪魔になるよ?」

当然、今まで独占してきたリンからしてみればギンガの取った行為は面白く無い。

一応の体裁も込めて、正論を唱えてみるもの……。

「大丈夫。今の時間は人は少ないから。それとも私が腕を組んだらリンは都合でも悪いのかな?」

「べべべつに都合なんかぜんぜん悪くなんかないもんね！ヒロの一番は私だもん！」

「そっか。ならこのままでも問題ないよね?」

「もももモチロンだよ」

予期せぬ反撃を喰らい、してやったりのギンガにリンは悔しそうな顔をする。

「あの…俺の自由意志での決定とかは……」

「『却下』だよ」

「……………」

ここに来てヒロが下した結論

わけがわからん。

もう、何も言つまり…

結局ヒロはゲンヤの居る部隊長室へ着くまで、リンとギンガの両手に華状態が続き、すれ違う男性隊員たちからの嫉妬や憎悪といった負の感情にさらされ続けたのは言つまりまでもなかった。

朝から嫉妬に狂う男性隊員たちの視線で胃が悲鳴をあげそうなものの、ようやくゲンヤがいる部隊長室の前にたどり着き、ボタンを押すと中から入るように促すお馴染みの渋い声が聞こえ、三人は声に従い部屋に入室する。

「朝から両手に華たあゝこりやまた良い御身分だなあラインハート」

「お、お父さん！」

部隊長室に入るなりゲンヤのニヤニヤ顔がお出迎え。ギンガの睨みにも飄々とした感じである。

「ゲンヤさんまでそんなこと言わないでください……ただでさえ此処までくるのに大分精神力もっていかれたんですから……」

「そんじゃあゝまあ、お仕事の話しでもしようじゃねーか。ギンガ」

「はい」

顔を引き締めた瞬間、ゲンヤからは管理局二等陸佐の雰囲気が出て口には垣間見えた気がした。

ゲンヤがギンガに促し彼女がテーブルに置いたのは管理局のロゴ入りの薄っぺらい一冊のファイル。

「……これは？」

「今回のお前さんの仕事はな、ギンガのサポート役として合同捜査に参加してもらいてえんだ」

「合同捜査？」

「そうだ。部隊名は陸士386部隊。捜査内容は違法魔導師で構成された組織の摘発。今回の合同捜査ではうちが主体で進めるんだがな、386部隊の新人達の場合を増やすためってのも主な理由の一つになってる。」

捜査本部の規模は約40人ほど。

囑託のお前さんはギンガと新人のフォーマンセル いや、そっ
ちの嬢ちゃんを含めた五人でのチームを組んで行動してもらおう」

「まあ色々聞きたいことはありますけど …… とりあえず報酬はどんな感じなんですか？」

「そおだなく …… とりあえずあえずは …… こんなところだな」

「 …… …… 了解しました。指定の口座に振込んでおいてください。で、その合同捜査とやらはいつからになるんですか？」

「二時間後に本部が設置されるから、それからすぐだ。それまでは自由時間 つつか、386の新人との顔合わせだな。」

ちなみにその二人は俺のもう一人の娘、スバルっていうんだがな、スバルとその相棒だ。詳しいことはギンガからでも聞いてくれや」

「ねえ、ギンガ、さっきのオジサンが言ってた二人組ってギンガは知ってるの？」

「オジサンって……」

飯にも佐官クラスの人間をオジサン呼ばわりに自分の父親のことだが、ギンガもリンの大物っぷりに言葉が詰まる。

もちろんヒロが申し訳ないという表情をしているのだけは弁明するが。

「そうね、スバルは私の妹だからね。よーく知ってるわよ。テイアナともスバル繋がりでよく顔を合わせてるしね」

「どんなやつなんだ？」

「うん……ってほら、噂をすればってやつかな」

「『ふ』」

ヒロとリンの視線の先では何やら手を大きく振りながらこちらに走ってくる人物が……

私、スバル「ナカジマは久しぶりにギン姉に会えるのが楽しみで
テンションはさっきから上がりっぱなしだ。

正直、昨日連絡が来てからほとんど寝れなかったんだよね〜。

「そっぴやスバル。アンタ、ギンガさんと会うのはどれくらいぶり
だったけ？」

「ん〜……だいたい二ヶ月ぶりじゃないかな。研修とか訓練とか
色々忙しかったし」

「たしかにね。まあ今回の合同捜査は私たち新人には濃い経験が積
めるって言うってたし、なによりギンガさんがいるから安心ね」

一緒に隣を歩いているオレンジ髪のツインテールな娘が私の親友
で相棒のティアナ「ランスター」。

ティアは訓練校では私とは全然比べものになんないくらい成績良
くて、なんと訓練校を首席で卒業したんだよね。

卒業してからもアタシとティアは一緒の部隊に入って、パートナーを組んで、いつも私はティアに助けてもらってる。

ティアが言ってる通り、今回の合同捜査は訓練とは違って実戦の可能性が高い。

だから私たち新人にとっては経験の場数を踏むには絶好のチャンスなんだよねッ！

なんて思ってたら前方によく知ってる顔が見えて、無意識に私の身体は動いていた。

「ギン姉え久しぶり！」

「スバル〜！ちょっと背伸びた？」

「えへへえ〜」

濃い青色のショートカットの髪にギンガと同じ茶色を基調とした陸士部隊の制服の少女はギンガに飛び付き、ギンガもそれを受け止める。

どこからどうみても仲良しな姉妹といえるだろう。

「あれ？ギン姉、そっちの二ツ！？」

「ああ」

なにやら信じられないようなものでも見たかのように目を見開くスバルの様子にギンガは気付かずヒロとリンを紹介しようとするが、外から聞こえてきた声により遮られる。

「スバルッ！いきなり走り出さないでよッ！ あっ、ギンガさんお久しぶりです！」

「ティアナ久しぶりい、元気だった？」

「おかげさまで。386部隊の訓練は厳しいですけどスバルと一緒に

に何とか喰らいついてます　　って、あの…そちらッ!？」

こちらティアナもスバルと同様の反応である。

「ああ、二人とも紹介するわね。こちら今回の合同捜査でチームを
組むことになった」

「はあ〜い。リンイラストラトスドレッドノートで〜す。歳は
15歳、将来の夢はヒロの妻でっす!」

「『15さいッ!?!』」

笑顔で自己紹介をするリンだが、スバルとティアナの驚きようと
いえばハンパではなく、さながらギャグ漫画のようなリアクション
をとってしまっていた。

「いやそこ、もっと違うところッッコんでッ?!特に俺としてはそ
の先を全否定したいからッ!」

「まあまあヒロ君、リンの冗談に真剣にツッコミ入れてたら時間が
いくらあっても足りないから」

「ハグアアア〜ッ!? ギンガさんッ!? ちぎれるッ! 皮膚とかお肉とか引きちぎれるッから〜ッ! あとその関節はそっちの方向には曲がりましええん?!」

笑顔と共にドス黒いオーラを放つギンガがヒロに何をしたのかは……… 詳細がみたい勇者さまはウェブにアクセスッ!

ともあれ、初顔合わせは最悪な状態からの始まりとなったのは言つまでもなかった。

立ち話もなんだし、まずは落ち着いて話しをということとで一同は休憩スペースを訪れている。

「それじゃあ改めて、まずはスバルとティアナから、そうね…まず は軽く名前と階級、魔導師ランクあたりからね。 ……リンはややこしくなるから後でね?」

「チエ〜」

ギンガのジト目に渋々ながらもリンは頷き、立ち上がる二人組。

「ティアナはランスター二等陸士です。年齢は15歳、所属は陸士386部隊、魔導師ランクはC、所有デバイスはアンカーガンタイプのストレージデバイスです。よろしくお願いします」

「えっと、スバルはナカジマつていいいます。15歳です！ギン姉の妹で階級は二等陸士、所属部隊はティアと同じ陸士386部隊で魔導師ランクはC、戦闘スタイルはシューティングアーツを使ったクロスレンジ主体です。」

よろしくお願いします！」

「じゃあ次はヒロ君ね」

「えっ……」

軽い調子でギンガは言うが、正直なところヒロは何を話しているのかわからないでいた。

加え、勝手な感じ方なのだが、どうにもヒロはティアナの視線に威嚇のような警戒のようなものを感じてならない……

(気のせい……だよな。もちろん……)

かといって、自己紹介をしないわけにもいかず、とりあえずは当たり前障りのない辺りから喋ることにした。

「えっと…囑託魔導師兼誓約者、ヒロ＝ラインハートです。よろしく」

まあ、無難なところだろうなと頭を下げようとするのだが

「それだけか……い！」

リンの素晴らしいツッコミを戴いてしまつ。

「そうだね。たしかにそれじゃあ足りないよね。せめて戦闘スタイルとか入れてみようよ」

「そ　　そっか……」

リンに加えギンガからも説明が足りないと言われれば仕方ないので、急いで無難そうな言葉を選び構築していく。

「えっと、戦闘スタイルは銃を使つての戦闘 ……というより銃以外の武器は実戦じゃあ殆ど使えないだけなんで……」

「……………」

銃という単語を聞いた瞬間、ティアナの形の良い眉がピクリと動きをみせるが、残念ながらヒロはティアナの仕草に気付けなかった。

「じゃあ二人からの質問にヒロ君が応えるって感じにしよっか」

少しだけ行き詰まった場の雰囲気を開しようとしてギンガは提案し、その形で話しを進める。

「ラインハートは」

「あ、ファーストネームでいいよ。あと敬語とかはいらさないから」

「……わかったわ。こっちにも敬語とかいらさないから」

「呼び方は？」

「ティアナでいいわよ」

「あたしもスバルでいいよ」

「わかった、ティアナにスバル」

「それじゃあ質問させてもらっわ」

やはり最初に質問してきたのはティアナ。

「ヒロの魔導師ランクに保有魔力量、使う魔法に経験、スキルとか教えてほしいんだけど」

「えっと…魔導師ランクはAAAって聞いているけど…」

「『と、AAA!?!』」

聞いた瞬間、内容に驚いたティアナとスバルは思わず大きな声を

出してしまっ。

「ギンガ…やっぱりAAAってそんなに凄いの？」

「う〜ん……管理局での有名どころだと『エースオブエース』高町なのは一等空尉なだけだね。確か現在の魔導師ランクがS+で、15歳当時だとAAAだったって話し聞いたことあるよ」

「はあ……」

元々が次元漂流者のヒロだが、ミッドチルダの情報などは日々勉強している。

いるのだが……それでもレベルとしては、まだまだテレビで流れている程度の事しか知らない。

(そういえばフェイトとの会話の中でも何回か『タカマチナノハ』って単語が出て来たような…確かフェイトの親友で ……)

記憶を呼び起こしてはみるものの、実際に会ったことがないので考えても仕方ないかと、ヒロは一旦、『タカマチナノハ』という単

語を思考の隅に置いておくことにした。

「ギン姉……もしかしてヒロって、物凄い人だったりするのかな……」

想像を遥かに超えた話らしく、スバルは啞然とするしかない。

「……………い……」

「どうしたの？ティアナ？」

俯きながら何かを呟くティアナにギンガは違和感を覚え声をかけるが……

「ギンガさんッ！アタシとヒロを闘わせてくださいッ！」

「ええっ!？」

いきなり立ち上がり、誰もが予想していなかったことを口にしたティアナは刹那、眼からレーザー光線でも出しそうな勢いさながらヒロを睨みつける。

「アタシはこんなヒヨロつとした優男が魔導師ランクAAAだなんて、とてもじゃないけど信じられません！」

「えっ？エツ？」

一番状況についていけないのはヒロである。

彼はただ、質問されたことに素直に応えただけだというのに、何がティアナを怒らせているのかは全くわからない。

「へえ……私のヒロが弱い……ねえ……」

しかし、そんなモノは彼女　リン＝ストラトス＝ドレッドノートには全くもって関係がなかった。

フッフッフツ…などとこれまた俯きながら立ち上がる彼女からは決して有り得ないことではあるが例えるならば『背後の背景が歪んでいる』と錯覚させるほど濃密な魔力がユラユラと放出しているではないか。

「り、リン、落ち着いて、ね？」

「大丈夫だよギンガ、私はいつも通り冷静だよ。ただちょっと……ほんのちょっとだけ、このオレンジツインテールに生まれたことを心底後悔させながら、この世からあの世に向けてノーロープバンジーして貰おうってだけだからさあ〜」

「ぜ、全然冷静じゃないよ!？」

笑顔でティアナを見据え死刑宣告を下すリンにティアナも対象をリンへと変更するかのようキツ!と睨みつける。

「フン、ちょっと胸が大きいからってなに?そんなもん戦闘に邪魔なだけよ!」

「ティアナもおちついて」

慌ててスバルも止めようとするが時既に遅し、一触即発とはこのことかいつ爆発してもおかしくない。

当事者を蔑ろに話しを進めるのは如何なものかと思うが…

ただこのままでは本当にマズイ 何とか場を鎮めなければ…と、ヒロが立ち上がるうとした時だ。

「それなら、ちょうどいいから模擬戦しよっか。お互いの实力を知るのも大切だからね。リン対スバル、ティアナ組でどうかな？」

これまた唐突なギンガの提案なのだが、彼女の発言で場の雰囲気は一変する。

「ギンガく、この私にくくんなザコっちいのと闘えっていうの？加減ミスってウツカリ死んじゃうかもだよ？」

ニヤニヤ不敵に笑いながらリンは挑発をかます。

「……上等じゃない……スバル、いけるわね！」

「さすがにティアをザコ呼ばわりされたら黙ってられないよ……それにあたしもリンと闘いたいッ！」

見事なまでにそれに乗っかるティアナとスバルも不気味な笑みを浮かべ、三者視線を外すことなくズンズンと休憩スペースから出て行くのだった。

先日同様にヒロは再び屋内訓練場に来たのだが、ただ今回は位置関係が若干違う。

このところ連戦していたヒロが今日はギンガと一緒に観戦ルームにいるのだ。

「なんかスゴイ不安だ……」

ヒロ＝ラインハートの目に映るのは険悪なオーラ全開の三人。

もちろんティアナ、スバル、リンである。

「それじゃあルールを説明するね」

マイクを通しギンガの声が訓練場全体に響く。

モニターには三人の姿。

「まず、リンは攻撃魔法は一切禁止だからそのつもりで。あとは普

通の模擬戦通りどちらかが戦闘不能になれば負けになるからね」

スバルとティアナは頷くが、ここで不満げな表情をしたのはリンだ。

「ギンガ〜、なんで私は魔法使っちゃダメなの？」

「……………もしかして……………あれだけ自慢してたのに魔法が使えないと実は何も出来ないとか？」

今度はギンガが仕掛ける番だ。

意地の悪い笑みは勿論仕様。

仕様なのだがしかし、効果は絶大。

「ふん……………いいわよやってやろうじゃないの……………そのかわり、大事な妹がポッコボコになるかもだけど？」

「スバルのシューティングアーツはね、私が教えたの。私の自慢の妹だもん、大丈夫だよねスバル？」

「もちろんだよギン姉！」

親指を立て、スバルは弾ける笑顔でローラーのセーフティーロックを外す。

「それじゃあ制限時間は十分。レディー……………ゴー！」

「さあ〜って、どっからでもかかってきなさい！私は早く終わらせてこのサイズが合わない訓練服とオサラバしたいんだからね〜ッ
「！」

「ッ!？」

「ッ!？」

これでもかと訓練服（主に胸のサイズ）が小さすぎて合わないことをアピールするリンに当然、ティアナとスバルが黙っていられるわけがない。

彼女たちは ……更衣室で着替える際に対抗心からリンと同じサイズの訓練服を着たのはいいが、残念なことにバスト部分のサイズにはまだ ……『かなり』の余裕があり、ダボついている状態を必死に隠していたりする。

彼女たちは同じ歳にもかかわらず、自分たちより遥か高みのプロポーションを持つリンに対抗心メラメラ。

同性ゆえの性を逆手に取った高度な心理戦。

すでに闘いは始まっているのだ。

女子としてのプライドという名の聖戦が。

勿論リンは全部察していて尚、挑発を加えているから尚さら夕子が悪い。

「ティア、援護お願いね！」

「任せなさい！」

「ふ〜ん……」

前衛にスバル、後衛がティアナ。

典型的に定石な陣形ではあるものの、限られた空間においてはハズレが無いのも確かで、しかしリンはつまらなそうに顔をしかめる。

「もうちょっとこう……意外性を期待してたんだけどなあ〜……」

「いくよお〜ッ！」

ローラーで地を蹴り ……

「ウオオオオッ！」

ジャンプしてからの回し蹴り。

「う〜ん……軸がブレてる。こんなじゃパワーは上手く伝わり
きらないよね？」

しかし、リンは難無く片手で止めてみせる。

暢気に解説をつけながら。

「そお〜れッ！」

刹那。隙だらけでガラ空きなスバルのボディに、リンは掌底を叩
きこむ。

「エッ ワアッ!？」

掌底を叩きこまれたスバルは一瞬だけ浮遊感を感じた次の瞬間に
はブツ飛ばされていた。

「スバルッ!？ シュートッ！」

ティアナのアンカーガンタイプのデバイスから撃ち出される魔力弾は一直線にリンに飛んでいくが、彼女は左足を軸に半回転しながらヒョイッと避けてみせる。

本来ならば展開させ、追尾弾として攻撃するのがティアナにとつての定石なのだが、それはスバルという前衛のフルパフォーマンスがあるからこそその戦術であり、訓練場という限られた空間の中での銃士ガンナータイプのティアナが取れる行動は自ずと限られてしまう。

「ふ〜ん……で、どこ見てんの？」

「ッ!？」

「ふつとべええッ!」

ティアナが気付いたときには、振りかぶりながら左の一撃を繰り出そうとするリンの姿が目の前に迫っていた。

「ッ……」

回避は不可能

まさにティアナに直撃しようとした瞬間

「ウオオオオツ！」

「へえ）……」

吹っ飛ばされたはずのスバルがティアナを庇うように魔力シールドを展開し

「お返しダアアツシャアアツ！」

「オオツ?!」

右手のナックルが凄まじい回転を始め、スバルのカウンターの一撃がリンを捉え吹っ飛ばす。

ただし、リンもシツカリとガードをしていたので、勿論ダメージはゼロ。

ズサーっと脚に力を込め、吹っ飛ばされた衝撃を楽しむかのよう

なリンは微笑む。

「あのタイミングでよく間に合ったねえ〜」と言いたげに。

しかし、スバルとティアナが善戦できたのはここまで。

というより、リンは準備運動の5%程度しか出していないにもかかわらず、もはやそこから先は一方的な展開が待ち受けていた。

「……………正直な感想、言ってもいい？」

「う……………うん……………」

「俺、リンのこと侮ってました……………」

「大丈夫。それ、私もだから……………」

一方的な攻撃の連続。

正直なところスバルとティアナがダウンしないのは、リンが本気で攻撃していないことの何よりの証明になってしまっただが、それを差し引いてもやはり奇跡に近い。

まさに圧倒的な実力差。

そうとしか表現のしようがない。

魔法も武器も一切使わず、ただの体術のみ。

本人は準備運動のつもりなのだろう、攻撃の最中にも関わらず自分の身体の調子を確認するそぶりまで見せる余裕っぷりだ。

ティアナとスバルがダウンしないのは彼女たちのささやかな抵抗心からといったところか、何度吹っ飛ばされても攻撃することを止めはしない。

「それにしても、スバルとティアナの根性もたいしたもんだな…俺には此処までの根性は無いや……」

「スバルは私の妹だから。ティアナは…譲れない信念と絶対に叶えたい夢があるから、ね…」

「……………」

自分達の闘いなど全く出来ていない

否。させて貰えないほどの実力差を見せられても尚、ティアナとスバルはギブアップをしない。

しかし、無情にも制限時間という壁が全てを終わらせる。

訓練場のブザーが鳴り、明暗はハッキリと別れた。

『楽勝』の二文字を掲げ悠々と訓練場を後にするリンと

「……………」

ブザーが鳴った瞬間に肩膝をついてしまったスバルとティアナ。

完全なる勝者と敗者の姿がそこにはあった。

その後の初日の合同捜査会議に出席し、顔合わせと今後の割り当てが決まり解散となったのだが、あれ以降ティアナとスバルはめつきり大人しくなり、ヒロは二人とろくに会話も出来ないまま別れてしまった。

「……………全然、歯がたたなかつたね……………」

「……………そうね……………」

夕日が差し込む訓練場にはスバルとティアナの姿があった。

陸士部隊の制服で壁に寄り掛かりながら二人はつい先ほどのことを思いだしていた。

「……………アタシ、どこかできつと天狗になってたんだと思う……………周りがエリートのお卵だらけの訓練校を首席で卒業して、386部隊での仕事も訓練も順調で……………あんなわけの分かんない奴らなんか絶対口だけだつて……………決めつけてた……………」

「……………」

「でも現実は何？ ほぼ同い年なのに… ろくに魔法すら使っていないのに… アタシは… ただの一発も攻撃を当てらんなかった…」

「あたしだってッ！ ……全然… 自分の闘い… させて貰えなかった…」

空気は重くなり、沈黙してしまっ…

「……………ヒロも… 強いのかな…」

「……………さあね……………」

「強いわよ」

「『ッ…』」

いつの間にか二人のそばにはギンガが立っていた。

「……ギン姉は…見たことあるの？」

「ええ……正直、私もまだまだ鍛錬が足りないって思い知らされたわ……」

「……ギンさんでも敵わないんですか？」

ティアナの問い掛けにギンガは苦笑いするだけ。

「本当は本人に無断で言うのはいけないんだけど……」

考えるそぶりを見せるが、何かを決めたらしくギンガは話し始める。

「クロのこと、リンのこと、自分が知っていることを……」

第九話 〳はじめてのお仕事は (前編) 〳 (後書き)

【スペシャル・コメンタリー】

白金「いや〜今回は凄まじく長いなの。バトルにシリアスに
コメディーに、バランスとるの難しいね！」

ヒロ「それにしてもリンのやつ、強すぎないか？アレ、ぶっちゃけ
何割くらいのチカラなんだよ」

白金「フム…本編にも記したとおもぅが、あの段階では準備運動
での5%だから、全力で換算すると ……0.00026%ってと
ころだ」

ヒロ「……スマン…数字にされると余計にわからない……」

白金「そうか？ならばブツチャケるとだな、魂的にも身体的にも人
間というカテゴリーに入る者がリンに勝つことは不可能ということ
だ。」

ヒロ「……つかぬことを聞くが、一体誰なら勝てるんだ？」

白金「一対一でリンに勝てる可能性があるのは …… 全ての存在のなかでもごく限られる …… というよりか、おそらくは魔王家の面々だけだろうな。」

もちろん、いくら主人公がお前だろうと、純粋な魔法戦闘で、正面からリンに勝つことは不可能だアキラメロ」

ヒロ「主人公なのに…orz」

白金「もしやヒロ君 …… 君は最強になりたい …… などと考えているのかな？」

ヒロ「……………」

白金「プッ …… むりぽ」

ヒロ「作者自らが可能性を絶つんじゃないねーコンチクショ……………！」

白金「プククツクツ …… ンンツ！スマナイネ私としたことが …… あまりにも世間知らずな発言に思わず本音が …… 」

ヒロ「うわああああ……………ん …… ！」
(自暴自棄による撤退)

白金「お〜〜〜い …… って、行ってしまったな……

それにしてもだ、チート能力なんぞ持つてるキャラとか、ホントに副作用とか無いんだろうか……

『神のチカラ!』とか『魔力値無限大!』なんてモロ身体に悪いと思っただけど……

そこら辺は魔王の娘としてはどう思う?」

リン「これまた唐突だねえ〜…うーん、確かに人間が神やら何やらのチカラを持ったところで毒でしかないと思っただけだ〜。

私らの見地からしてみれば器の身体、核の魂、両方 あるいはどっちかでも人間の域に在れば本来はチカラを行使するどころか、多分持った瞬間、負荷に耐え切れずにあの世行きつてのが常識なんだけだねえ〜」

白金「なるほどやはりですか…なら、神のチカラとやらを人間が擬似的に再現、構築したものならどうかな?」

リン「ん〜…どんなチカラにもよるけど、今の話の中で出た神から人間に与えられたチカラを人間が行使するのは人間の側に問題があるから無理だけど、人間が作ったものを人間が使うぶんには

…まあ、リスクはそれなりにあるだろうけど、基本的には問題無

いんじゃない？」

白金「そこらへんは本当に微妙な線引きだよねえ……実際問題、原作である、Urobrosシリーズもそこら辺の問題は多かれ少なかれ抱えてるわけだし」

リン「創り出すってのはシリーズ通して命題の一つでもあるからなあ。
」

白金「製作の裏側をあまり語るのは無粋ではあるが、まあとにかく繊細なんだよ。詳しくは言えないが、ヒロの隠れた苦悩なんかそこにあつたりなかったり」

リン「ってか、白金さんって真面目な話とかもできたりするんだね！
」

白金「フツ……私としてもギャグ路線一本で行きたいところではあるが……本当の私というものを誤解されては困るからね、要はメリハリというやつ啦」

リン「ふ~~~~ん……………」

白金「な、なんだねその嘘クセ~~~~と言いたげな顔は……………」

リン「私知ってるんだあ〜！実は白金さん、某日某所で無防備に原稿広げながら執筆活動してた時〜」

白金「　　ッ！？！？作者権限発動につき今回は此处まででゴザルの巻〜！」

（強制終了）

第九話 、『はじめてのお仕事は (中編1) 、『 (前書き)

さて、今日は何故か身体に倦怠感が……

そんなものおおおっ！幻覚にすぎんのにいいいっ！?!?!

最近、どうにもネタ不足というか……

ええええい！モチベーションを保つのも作者としては基本だろうが
ああっ！

感想、質問、意見、要望、待ってます！

というわけで本編をどうぞ！

第九話 、『はじめてのお仕事は (中編1) 』

もはや既に日常と化しているフェイト、リン、ヒロの三人の食事。どこにでもある普通の家族の“団欒”。

フェイト自身が長年望んできた夢でもある。

約二名ほどこの場にはいないのが、フェイトとしては少しばかり寂しいが。

それにフェイトは別にハラオウン家に不満があるとかでは無い。

義母であるリンディを始めクロノやエイミイたちは、いついかなる時でも暖かく歓迎してくれ、これでもかと包みこんでくれる。

だけど、そんな暖かい場所から急に独りになった時、彼女に襲い掛かるのは言いようもない不安と孤独。

日々の仕事に追われ感じる暇もないはずのことではあるが、ふとしたときに、そんな感情に襲われる。

ずっと欲しかった小さくても暖かい団欒、キツカケは偶然だけど、手に入れた家族の温もり。

彼女は今、ものすごく満たされていた。

「ねえ〜フエイトお〜今度の休みにさあ、ヒロと三人でここ行こうよお！今話題のスポットだって〜！」

「それは女性モノしかない服屋だろ！？なんで俺まで行かなきゃいけないんだ！」

「それはあれだよお…オンナノコは隠れた部分のファッションにも気を遣うからに決まってるよお〜」

「んなッ？！ますます却下だよッ！」

「ブーツ！民主主義の大原則は多数決！賛成2反対1で名付けて『ヒロの好みの下着を撰んで買って墜としちゃおうツアー』の開催が決定されたんで〜ッす！」

「アホか〜ッ！この場合は全会一致が適用されるってのが民主主義ってやつだろ！俺は拒否権を発動するッ！」

「あ〜れえ〜いいのかなあ〜ヒロそんなこと言って…ホントはヒロだっけ見たいはずだよあ〜…」。

フエイトが“ピー（自主規制入ります）”なのとか“ピー（自主規制入ります）”とか“ピー（自主規制入ります）” …」

「リリリリン！？私はそんなの着けないよッ！？」

「え？じゃあ〜あの袋のな …」

「ワ〜ッワ〜ッワ〜ッ〜ッ！」

「ほがもがふもがッ！？」

「ヒロ〜！」

「…ナンデシヨウカ…」

「…………リンが言ったのは…デタラメだからね…絶対信じちゃだめなんだよ…………」

「へ？あ、ああ…………」

「ダメなんだからね!？」

少しエスカレート気味な賑やかすぎるのも実は性に合っていると彼女が気付いたのは内緒の話だ。

「まったくもお…………」

ゆっくりと一日の疲れを癒すような長風呂から上がったフェイトは自室で髪をとかしていた。

思い出すのは先程の会話の中で拳がった自分の下着の話題だ。

「…………全然…普通だよ…………」

すっかり部屋着なわけで、フェイトはチラリとめくって自分のモノを確認する。

彼女としては自分の着けている下着は自分の基準ではあくまでも控え目で、前にはやてと一緒に更衣室で着替えていた時にはやてが話しのネタになるからと、モノスゴイセクシー系な下着を見せてきた時など、同性であるフェイトの顔を真っ赤にさせるほどの破壊力があり、アレに比べれば自分など…と思っている。

現実にはフェイトは服と一緒に黒系を好んで選ぶため、自然に大人でセクシー系になってしまっているのだが、彼女はそれがよくわかっていない。

「……………やっぱり男の子ははやてが着けているみたいなのが好き…なのかな……………」

無意識で呟く。

こればかりは男性と付き合った経験がゼロのフェイトには想像…いや、妄想するしかない……………」

「リンも…スゴイの着けてたし……………」

あれはリンが住み始めた翌日、おもむろに洗濯機を廻そう（洗濯は諸々の大人の事情によりヒロは絶対に不可侵）としたときだ。

偶然手に取った明らかに自分のモノではない紐と透けた極少の布面積（しかも確実に透けている）の真つ赤な下着を目にした時のフエイトの衝撃ときたら……

「……………」

思い出すだけでボンツ！と煙りが上がりそうなほど顔が紅潮し、水を垂らせば一瞬で蒸発しそうなくらいに熱くなる。

自分に一番足りないものはなんだろう…そう考えたとき、フェイトの中で一番に挙がるのは、断トツに『色気』であった。

仕事仕事の毎日で、一日の殆どが管理局の制服で過ごす彼女はごく普通の年頃の乙女たちと比較しても圧倒的に私服が少ない。

部屋着も黒いレギンスやワンピースなどといったシンプルな物が殆どをしめ、たまの休日に出るための服など一桁くらいしか合わせるパターンが無い。

加え管理局の、執務官という仕事上、彼女はどうしても戦闘の数が多い。

故にメイクとてナチュラル系が殆ど。

それでも男性局員たちの目を奪うのはやはりフェイトの容姿が整っているからこそ、ナチュラルでもいいのだが、彼女は自分を地味だと思いきむ傾向があったりもする。

「見えないところは…ちょっと派手なくらいがちょうどいいのかな…」

いよいよ真剣に思索しているとき、
コンコン…と、扉を叩く音が聞こえた。

「ッ！？だ、だれ？」

「あ、フェイト。俺、ヒロだけど」

「ええッ！？どどどどどつかした？」

先ほどの事があるため、いきなりのヒロの到来によりフェイトの思考は軽いパニックに陥ってしまう。

「あ、その……実はちょっと悩み事があったさ……」

「？」

ただ、フェイトの思っていたこととは違つらしく、ヒロの声のトーンは明らかに小さい。

「あの　とにかく入って？」

「……おじやまします……」

フェイトの部屋に入ると、彼女は自分の机で何やら作業をしていた。

「えっと、どうしたのかな？」

しかし、何やら声色が焦っているようにも聞こえるヒロはハテナマークを浮かべるものの、敢えて気にしない方向でいくことにする。

「あかさ、ちょっと聞いてほしいことがあるんだ……」

ヒロは今日起きたことをフェイトに話す。もちろん、ティアナの名前は出さずに。

「……そんなことが……あつたんだ……」

話しが終わり、一度も口を挟まなかったフェイトは顎に手を当て神妙な顔つきになる。

「俺の居た世界でも、もちろん誓約者ライセンスやら何やらあつたけどさ、それぞれに領域があつたからそれほど気にしたことなかつたんだよ……だから 今日色々聞いてみて正直驚いたんだ」

実はヒロ、合同捜査会議の後でゲンヤ、ギンガのナカジマ親子に魔導師ランクの意味を聞いていた。

管理局という組織において魔導師ランクと魔力保有量は出世するために多大なアドバンテージを持っていること。とりわけ魔導師ランクが重要だということ。

「それでさ、俺の魔導師ランク…AAAで登録されたよね…そのAAAってランクは管理局のエースオブエースって異名を持つてる

」

「なのは…高町なのは、私の親友だね」

「そう、その高町なのはさん。管理局でも天才魔導師、エースオブエースの異名を持つそんな人と同格とか聞かされて…」

正直……わかんなくなっただ…俺みたいな流れ者が…」

「そんなことないよ。私もそうだけど、あそこにはいた全員がヒロの魔導師ランクがAAAなのは妥当だって思ったんだよ。だからそんなに自分を卑下するのは駄目だと思う」

「……………」

優しく諭すフェイトにヒロはどんな顔をしていいのかわからない…

正直に言えば迷いがある。

フェイトもそれが分かっていた。

だからこそ、フェイトはそこで終わらせない。

「ねえ…ヒロはどうして誓約者になろうって決めたのかな…」

「えっ……………」

「ヒロがいた世界では生れつき魔力を持っているのが当たり前だっ
て言ってたけど、全員が全員、魔法に携わっているわけじゃないよ
ね？」

「まあ、それはそうだけど…」

自らの意志で誓約者を目指すことを決めた ……というわけでは

残念ながらないヒロにとって、あまりにも厳しい質問である。

「……ちなみにフェイトはなんで管理局に？」

「私？ ……そうだね、ちょっと長くなるけど聞いてくれるかな」

フウツと軽く息をつき彼女は語りだす。

ある意味で血塗られたといってもいい自らの過去を。

「……こんなところかな……」

「……想像以上にヘビーな過去なんだな……」

唯一無二の親友である高町なのは。

当初彼女とフェイトは『ジュエルシード』と呼ばれるロストロギアを廻り闘う間柄にあったいわば敵だったこと。

母親であるプレシアⅡテストロッサと彼女が深く関わった通称『PT事件』。

ヒロが面識がある八神はやて、シグナム、ヴィータが深く関わる通称『闇の書』事件。

重要なキーワードである『プロジェクトF』、『ロストロギア』などなど、ヒロにはとてもではないが理解が追い付かない。

『プロジェクトF』や『闇の書事件』については機密事項の部分があるのでフェイトも独断で話すことは出来ないので勿論その部分は伏せ、簡略化してしまったのだが。

自身がプロジェクトFの …… アリシアⅡテストロッサのクローンであることも……。

スタートからが最悪な顔合わせ初日から時間は経ち、三日目。

あの日の一悶着以降、ギンガのフォローなどもありスバルとは距離が縮まったのだが、ティアナとの溝は意外に深く、なんとも表現できない微妙な感じになってしまっている。

もちろん仕事の打ち合わせや連絡などでは会話は成り立つもの、それ以外では全く会話にならない … というよりかティアナから発せられる気まずい空気にヒロもリンもどうしたらいいか分からないでいた。

ギンガいわく、ティアナには色々な意味で時間が必要だということらしい。

なぜ突然そんなことを言い出すのか疑問に思ったヒロが問いたですと、答えは簡単に返ってきた。

あの日ギンガはティアナにヒロが次元漂流者であることなどを喋ってしまったと初めて本人に打ち明けた。

ヒロとしても別段知られて困ることも無いので気にしていないのだが、ティアナは別だとギンガは伝える。

彼女いわく、ティアナはヒロの魔導師ランクの発言を勘違いしていたらしく、それが気まずさの原因らしいとのことだ。

律義といふかなんというか…とにかくこればかりは時間が解決してくれるのを待つしかないらしく、ヒロもその案に乗っかることにしたのだ。

しかしだ、待つと決めたもののこれが中々厳しいものがある。

コミュニケーションをとることは仕事の成功率を高めるための重要な要素の一つ。

ただ、非常に困るのは取り付く島もないケースであり、運が悪いことに現在がそれに当て嵌まることなのだ。

「スバルッ！ガードが甘いよッ！」

「クウッ！？　　グアアアッ！」

距離がある程度縮まり親密度合いがアップしつつあるのがスバルとリンの二人である。

元々スバルは社交性が高く、類は友を呼ぶがごとくに同類なリンとは直ぐに打ち解け、今ではクロスレンジでの模擬戦なんかもしている。

とはいえ実力の差がありすぎるため模擬戦というよりは指導というほうがシックリくるが。

ガードが甘い部分にリンが右の一撃を入れ、スバルが吹っ飛ばされるもローラーで踏ん張りを入れているのだが、ズシャアアアツ！と吹っ飛ばされる勢いはそれでも止まらず、結局四十メートルくらいのところでようやくスバルのローラーが止まる。

驚くべきは、リンが繰り出す攻撃が魔力で強化してなどはない、純粹なただの右の一撃を打ち込んだだけということ。

ヒロがリンを見る限り、彼女は本気には遙かほど遠い。所々の動作を確認するように腕をグルグル廻したり、屈伸などを相も変わらずの余裕ぶり。

しかし、そんなものを目の前でまざまざと見せ付けられるヒロにとっては堪ったものではない。

もしもスバルの位置が自分だったらとおもつと、それだけで背筋

に冷たいものを感じてしまうのだ。

「うつひゃああっ…こんなにフツ飛ばされたんだ」

「それはスバルの防御の仕方が悪いからだよ。いい？あそこは…」

すぐに身振り手ぶりで解説をしはじめリンは指導に入る。スバルも真剣らしく、クロスレンジ談義は続く。

「いやあ〜二人ともよくやるわあ。俺なら最初の一分もモタナイね」

417

「よく言っよツ！さっきからツ！ フツ！ 攻撃…一度も
当てられて …ない ハアアツ！ …私の立場、どうなる…
フツ のおっ！」

少し離れたところではヒロとギンガもクロスレンジでの手合わせをしている真っ最中。

とはいえ互いに武器は持たずの手合わせなのだが。

シューティングアーツを修めたギンガのクロスレンジはスバルよ

りも一段階も二段階も高度なもので、一見するとスバル同様、豪快かつ一撃で勝負を決めるような手数が多いように見えるが、実際はかなりの数のフェイントも混ぜていたり、綿密に計算されたものになっている。

普段から鍛えている賜物だろう引き締まったウエストを捻り繰り出される拳はまさに一級品と表現しても差し支えないレベルなのが、その拳は残念ながらヒロには未だ一撃も届いてはいない。

彼、ヒロラインハートは“避ける”という一点においては天才的な勘とセンスの持ち主なのだ。

…男としてどうなのだという疑念は遣るが……

「なん　でッ！　あたらなフッ！　いのおおっ！？」

どれだけフェイントを混ぜてもヒラリ交わされ、ギンガにも余裕がないのか手数が単調になってきているのは否めないのだが、それでもギンガが不利な状況にあるかといえはそんなこともない。

「いやあ、実際は　避けるだけでッ！　精一杯だなッ」

ヒロの言葉に嘘は無い。実際ギンガの攻撃を完璧に避けることは

出来ていても、避けることに専念しすぎるあまりに全く攻撃に移れていない。

つまりはずっとギンガのターン状態なのだから。

「……………」

和気あいあいな雰囲気になつかわしくない不機嫌モード全開で自身の個人スキルである精密射撃の精度を上げる為の訓練をしているのは、頑なに輪の中に入ろうとしない彼女、ティアナⅡランスターである。

スフィアを設置し空中で瞬間的に点滅を続けるところにタイミン
グよく自作のオリジナルデバイスであるアンカーガンを向けていく。

「……………」

しかし今日 いや、ここの、三日の彼女の精密射撃はいつもの
キレを欠いてしまっていた。

精密射撃を向上させるには集中力が重要な要素の一つといわれている。

いついかなるときも“平常心”でなければならぬというのに、彼女は明らかに平常心を欠いている。

「ッ！」

自分の心理は自分がよく知っているらしく、そのまま訓練用スフィアを消してしまう。

(いったい……何だっというのよッ！)

霧のようにモヤモヤとしたモノがティアナの心を支配する。

原因はわかっている。それがあまりにも単純で独りよがりで子供っぽいことも。

視線を向ければギンガと組み手らしきものをしているヒロの姿が目に入る。

「……………」

アンカーガンを握る力が強くなっていくのを肌で感じる。

いったい、アタシは何してるの ……その瞳は語る。

「ねえティアア…」

「ッ!？」

「ワッ!？ ……びっくりした……………」

いきなりかけられた声に反射的に睨みをきかせると、目の前に立っていた声の主はティアアナがよく知る者だった。

「スバル…アンタ、リンとの組み手じゃなかったの?」

「あ、うん。ちょうど終わったから今度はティアアと訓練しようかな
って」

「……そ……」

素っ気ない　　というよりはどこかトゲがあるティアナの態度に
笑顔のスバルの表情は一瞬で曇ってしまう。

ろくに会話も成立しないのに訓練が上手くいくはずもなく、ギコ
チナイ空気のままに時間だけが過ぎていき、そのまま訓練は終了。

ティアナはまるで逃げるように訓練場を足早に立ち去り、わざわざ
建物の一室にあるシャワールームに駆け込むのだった……。

「……んむっ……」

「ねえ〜ヒロ〜どうしたの〜？さっきからそればかりだよ〜？」

「ん？ああ……」

昼食を済ませ、身分が囑託であるヒロは正式な捜査ではなく108部隊での待機が命じられた。

もちろん、囑託であるヒロも正式な捜査は参加できるのだが、今回待機を命じたのは他でも無い責任者のゲンヤ「ナカジマだ。

現在ヒロはそのゲンヤに呼ばれ部隊長室に行く途中である。

ただヒロの表情はなんとというか、“心ここにあらず”というか、完全に自分の思考の海に潜っていた。

昼食のときからリンもそうだがギンガやスバルが話しかけてもこの状態なのだ。

ちょうど今は二人つきり。

いつも誰かしらは傍にいますお邪魔虫たちは仕事に追われていて久しぶりの二人つきりだというのに上の空な状態はリンからしてみればオモシロクナイことこの上ない。

強引に流れを作ることなどリンにとっては日常茶飯事 ……なのだが、今日の彼女の気分はソレとは違ったものらしく、どちらかと

いえば“振り向かせたい気分”なのだ。

ならばどうする …… 考える…。

(この閉塞した空気をブチ壊す大胆かつ繊細にしてインパクト満載でグッドなアイデアを捻り出せ！私の頭脳ッ！)

存在自体が規格外なのだ、もちろんその頭脳も無駄に高性能。

基本天然な要素があるが頭脳レベルは“超絶”が五個ほど並ぶであろう。もはや天才という言葉すら陳腐になってしまつくらいに、だ。

残念なことにヒロを墮とすことに全てを費やしているため伝わりにくいことこの上ないのだが…。

(まったく、こんなにイオンナを目の前にして思考の海に溺れるなんて ハッ！？もしかしてこれはヒロからの無言の挑戦状！？
…ウツヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ…これはアレだよねえ。据え膳喰わねば何とやら だよね絶対ッ！)

無意識に垂れるヨダレを慌てて拭き、わざとらしい咳ばらいをしながら小走りにヒロの前に出ると、そのまま今度はヒロを前に後ろ

向きに進み出す。

「むっ……」

依然、顎に手を当てながらヒロは唸ったまま歩き続ける。

もちろんリンの怪しすぎる行動になど気付いているわけがない。

(よっし、それじゃあ……“アレ”いっちゃおっかなあっと)

確実にロクデモナイことを実行しようとしているのは、リンの締まりのない緩みきった表情からみても一目瞭然。

軽やかにルンルンステップを踏みながらエモノよろしく、思考の海に潜りながら歩を進めるヒロの前に、後ろ向きになりながら出る。

両腕をバツ！と開き、少し身長に差があることもあり、カカトを伸ばし背伸びするとうちよっとした演出も入る。

リン＝ストラトス・ヴァンガードが何をしたいのか ……それはごくごくシンプルなものだが“王道”。

情熱的な“ハグ”からの濃厚な“キス”を御所望に外ならないのだ。

普通に考えれば行き交う他人の目がある。

普通に羞恥心を持っているのならば実行になど移せるわけがない

…

魔界の統治者であり絶対的存在である魔王の娘たるリンがどれほどに規格外な存在であろうと、彼女とてレディの卵。

しかも、ただのレディの卵ではない。魔王の娘ということは魔界の姫ということになるからして、上流階級　いわゆる洗練された超一流の教育と教養を修得している身である。

その流れからいけば本来ならばだ、とてもじゃない　…はずなのだが、彼女：リン「ストラトス・ヴァンガードには当て嵌まらない。

なにしろ彼女は超がつくほどの規格外な存在なのだ。

おしとやかなお姫様なわけがない。

もっとも、彼女の性格からしてもソレを良しとするわけが無いのだが……。

とにかく、彼女からしてみればだ。

ただ単に自分の欲求に『火がついた』という清々しいくらい恐ろしく単純明快なのだが、理由など彼女にしてみればそれだけでも実行するに値する充分な動機になる。

そこから先は彼女からしてみればノープラン。

いつも通り完全にその場の勢いを利用しての見切り発車作戦で、手段を選ばず全勢力を総動員させて一線を超えるために死力の限りを尽くす。

無論ヒロとしても、いつも通り必死の抵抗を 『存亡を賭けた抵抗』をする……。

しかし彼女はそれすらも実力を持って完膚無きまでに叩き潰すことを言葉無き決意にて宣誓する。

今ここに、聖戦と呼ばれる己がプライドを賭けた戦いが無言のままに開戦する……。

（よっし、つかまえ）

両腕を広げているリンの腕の捕縛範囲まであと数センチ。このままいけばヒロは捕まりいつも通り貞操を賭けた死闘の幕開けが始まるのだが

…

「たッ！　つて、あれ？」

文字通り、ガバツと腕を閉じヒロを捕獲したとリンは確信したのだが、肝心のヒロを捕獲した完食が無い　というよりは……。

「うむう〜……」

「……………」

その一歩手前には通路の分かれ道があり、ヒロは右に曲がってしまった。

「……………これ…オチ？」

残されたのは一人空気を抱きしめているリンの姿だけという奇妙な光景。

彼女の名誉のためにフォローするならば、『ウケ狙い』ではなく大マジメの真剣勝負とだけ言っておこう。

「こんなオチって……………」などと愚痴りながらヒロを小走りで追いかけていくリンの姿を偶然見た108部隊の隊員たちの証言によれば彼女の背中には何とも表現しがたい哀愁が漂っていたとかいなかったとか……………

「失礼します。ゲンヤさん、呼びましたか？」

「おお。ラインハートの兄ちゃんか、リン嬢ちゃんは……………って、嬢ちゃん…どうかしたのか？」

「へ？　リン、どうかした？」

「ちゅあ………?」

「ま まあいいか……。そんじゃラインハートの兄ちゃんも座ってくれや」

ゲンヤに促されるままにヒロはリンの隣に背を預け、ゲンヤが対面に座り両者向かい合う形になる。

「実はなあ、ウチの隊員の連中から報告書が上がってきててな。率直なハナシどうよ?」

「えつと………」

「ティアナ＝ランスター二等陸士とギクシヤクしてるらしいじゃねーか。」

「あ………」

何が言いたいのかヒロは直ぐに察したのだが ……。

「あのね〜オジサン！文句言いたいののはこっちのほうなんだよねッ！

今日だってみんなでの組み手だったのにティアナだけ入って来なかったしさあ、昨日だって私がジューズ奢ってあげよっかなーって思っただけ振ったのに聞こえないフリして素通りしたんだよッ！？

ああっ…なんか思い出したらムカムカしてきた…ッ…

こっちがコミュニケーションとろうとしてんのに捜査以外のことはマトモに口きいてくれないしさあ！

どおなってんの！？協調性が足りないよキョーチョーセイがッ！」

遂に怒りの導火線がゼロになったのか、ヒロが口を開くよりも先にリンがここ二日くらいの不満を爆発した。

「じ…嬢ちゃん、オチツケ、な？」

ゲンヤもこれには流石にどうしてよいものが困ってしまう。

それもそのはず。まだちょっとした確認をとろうとしただけなのにだ…彼女の口からは出るわ出るわ不平不満の暴風雨。

しかもちよっとした日常の出来事が大半を占めているという

…。

「から……って、オジサン聞いてんの!?!?」

「オ、おうとも聞いている聞いてる!?!?」

「まあまありん。そろそろゲンヤさんに話し進めて貰わないと。ど
うやらお堅いお話らしいぞ?」

「……まだ言い足りないのにい……」

「……………」

本当に渋々ではあるが、たった一言で、あの不平不満の暴風雨を
鎮静化させるヒロにゲンヤは別の意味で感心させられてしまう。

いつの間にかカラカラに渴いていた喉を手元にあるお茶で潤し、
いざ切り出そうとした時だった……。 ……。

突然、宙にモニター画面が幾つも展開されたのは。

「な、なにになになに!？」

しかもモニター画面には『エマーゲンシー』
緊急事態を意味していた。

「こいつは」

『失礼します。』

ゲンヤの正面にモニター画面が新しく展開され、映し出されたのは108部隊の男性局員。

「おう、状況を報告してくれや」

男性局員からの報告を受けたゲンヤは直ぐに部隊に向けて次々と指示を飛ばしていき、あらかた指示を終えると新しいモニター画面を展開させる。

「つたく、厄介なことになりやがったな……」

「これは……」

展開されたモニターに映し出されたのはクラナガンのショッピングモール前。

しかし買い物客で賑わうこの場所は現在、武装した管理局員たちで溢れているという、ショッピングモールにはとても場違いな光景が映し出されていた。

「コレ、随分物騒な感じに見えるんですけど……なにことですか？」

「ああ
」

ゲンヤは改めてヒロとリンに状況を説明する。

簡単に説明するならばショッピングモールを舞台に『人質立て籠もり事件』が発生したのだ。

しかも人質はショッピングモールに買い物に来ていた多数の一般人たちと、あるうことが管理局員。

それも … 最悪なことに顔見知り以上といえる …。

人質になっている管理局員は計四名。

スバルⅡナカジマ

ギンガⅡナカジマ

ティアナⅡランスター

たった今、話題に挙がっていた人物たちに加え … 意外な人物が加わっていた。

「えつと…」

「ねえヒロ…これってモノスゴークメンドクサイことになってない？」

「……ワカッテル…ミナマデイウナ…」

モニターを食い入るように観ているリンを尻目にヒロは頭を抱えてしまう。

そう…ヒロとリンにとっては、もはや盛大な身内。

今朝も三人一緒に朝食をとり、玄関でお見送りをした相手。

「なんでいるんですか…フェイト…」

管理局が誇る執務官…フェイト「テストロッサ」ハラオウンが何故か人質になっていた……。

「どおやらへましましたみたいだな…しかしそれにしただって、な

「んでお嬢が人質の一人になってやがんだ？」

「そ、それが……」

モニターの先では男性局員がバツの悪そうな顔で説明をする。

今回108部隊が追っていた違法魔導師の組織はいわゆるピラミッド式の構造で、たまたまスバル、ギンガ、ティアナたちが捜査の聞き込みをしている中、別件で108部隊と同じ組織の捜査の一環で末端グループの鎮圧作戦を展開していた執務官で組むフェイトたちの作戦チームと偶然遭遇し、急遽参戦したわけだが ……

運が悪いことに末端グループの魔導師たちはミッドチルダでは違法の質量兵器を所有していた。

さらに悪いことは重なり、市街地内での逃亡を追っていたため、ショッピングモールに逃げ込まれ人質を捕られてしまった。

部が悪いと一旦退こうとしたのだが、興奮状態の違法魔導師たちが近くにいた民間人の子供に銃を突き付けたため、既に突入していたフェイトたち四人は武装 すなわちデバイスを放棄させられ現在にいたる ……

というのが現場チームが得ている情報になる。

「人質の数が多いな……ゲンヤさん……どうするんですか？」

「……………スバルやランスター陸士は実戦経験が殆ど無いからしかたねえが　ギンガ、お嬢が人質つてのは痛え……………しかもこの人手不足だ……応援要請出しても直ぐには動けねえだろうな……………」

悔しいそうにゲンヤは舌打ちしながらモニターを睨みつける。

正式な管理局員ではあるがそれ以前に大事な娘たちを人質に取られているのだ。

不安になるのが自然な反応なのだ。

「……………ゲンヤさん……俺が行きます……………」

「……………いいのか？」

「まあ、末端といえども違法魔導師の組織の一員みたいですからね。依頼にも当て嵌まる。」

それに
「

「それに？」

「ギンガもスバルもティアナも　もう『仲間』ですからね。仲間が仲間を助けるのは当然じゃないですか」

僅かな沈黙を挟み、ゲンヤは口を開く。

「……わかった。現場チームには話しつけとく。頼んだぞ？」

「全力を尽くします。　リン……」

「まったく、しょーがないなあ」

視線を向けられたリンは不敵にニヤリと笑い、オモイツキリ伸びをする。

バキキキツと背中から背骨の関節が鳴ったとは思えないほど物騒な音が響く。

「まっかせてえ。あんな奴ら、かるーく成層圏までブツ飛ばしてあげるからオッ！」

なんとも危険な香りが満載な言葉を口にしながら、意気揚々と軽やかな足どりでそのまま執務室から出ていこうとするのだが

「いや、ちがうんだ」

何故かヒロから待ったの声がかかる。

「へっ？？どいじつじつと？」

当たり前のように着いていく気満々のリンにとっては想定外の言葉。
葉。

バツが悪そうにヒロは明後日の方を向きポツリ

「その …… 今回リンは留守番だから…」

告げる。

「チヨツ！チヨツ！待ってよ留守番ってどーいう事！？私も出るよ出られるよッ！」

はいわかりました　とスンナリ事が運ぶわけがなく当然の如くリンは猛抗議。

どれだけ自分が優秀かを猛アピールにかかる。

そのどれもが年頃の乙女が言葉に出すなど恐ろしいほど　それこそ犯人グループの為に神父様の手配をしなければと憐れになるくらいに物騒なものだ。

「いやリンさん　……俺は何もリンさんが優秀じゃないとは一言も口に出してませんよ」

「ケドツ！一緒に連れてかないっていうことは暗に私のこと無能の役立たずだって言ってるのと同んなじなんだよッ！」

どうにもリンの感覚はどこかズレているとしかヒロには思えないでいた。

なんとというか、『軽い』のだ。

モノスゴク……

例えるならば、“ちょっとスーパーに買い物に行こうかな”的なレベルというか……。

しかし、あくまでヒロは冷静だった。

「あのさリン…画面にも映ってたけどさ、人質の中にはまだ小さい子供もいるんだぞ？」

「わかってるよそんなの。見たもん！だから私がフルパ ……」

「小さい子供に血生臭い光景みせるのか？」

「ウツ!？」

圧倒的に頭の回転が早いリンがヒロの言葉の意味を理解するのに僅かな時間すらかからない。

「そ。リンならわかるよな。そんなことしたら確実にトラウマになるってことさ。」

「ム　むづづううづッ……」

リンの頭の中では彼女が考えられるあらゆる状況を想定したシミ
ュレーションが行われている。

「ム　むづづううづッ……！」

「どっだ？」

本当は既に答えなど出ている。

口では魔王の娘などと言っているけど、リンは自分の実戦でのチカ
ラを見せたことがない。

もちろん使い魔契約を結んでから日が浅いということもあるのだ
が、それでもリンは少しでも早く自分の力を観てもらいたかった。

何よりヒロの役に立てるのだ。もしも万事が上手くいけば ……

「よくやったな流石はリンだよ」 ……などシンプルな一言に加え

頭なんて撫でてくれるだろう…いや、寧ろ撫でてもらおう…。

小さく、彼女にしては驚く程にささやかな己の欲望　それゆえの葛藤なのだ。

しかし、もしも加減に失敗すれば無垢なる子供たちにトラウマを与える……。

そんなものが勿論リンの本意であるはずがない。

「……無理…どんなに手加減しても発達途中の子供の発育にはヨロシクナイよ……」

ゆえにガツクリとリンはうなだれてしまう。

画面越しに見るかぎりには負ける要素など皆無なのだ。

妙な敗北感をリンは感じてしまう。

「わかった。留守番してるよお……」

本当に渋々ながらも留守番を承諾したリンはイジケてしまったのか、ソファアの上で体育座りしながらソッポを向いてしまつたのだ。

「それじゃあゲンヤさん、行ってきます」

「お　おっ……」

執務室から出ていこうとするのだったが

「あっ、それと……」

「ん？……わあったよ。頼まれた」

「よろしく願いますね……」

寸出で思い出したことをゲンヤに耳打ちし、苦笑いしながらゲンはそれに応じ、今度こそヒロは執務室から出ていくのだった。

第九話 〽はじめてのお仕事は

(中編1) 〽(後書き)

【スペシャル・コメンタリー】

白金「突然だが、私の頭の上で何かが弾けた！なんか知らんが露出凶の天使が私の頭に水をかけたら急にチカ」

ヒロ「ネタ古ッ！ってかテ テン君懐かしすぎ！」

白金「私はね、当時アニメ化していたあの時代、テンン君を初めて見たときは衝撃が走ったことを今でも覚えてるよ ……あの時間帯でアレが放送コードに引っ掛からないで地上波で流れていた奇跡を！」

ヒロ「……………たしかに……………」

白金「だが、あの素晴らしきアニメが謎の終了を迎え……………いまだにDVDが出回ってないことに私は疑問を覚えて仕方ないんだよ！」

ヒロ「な、なんか熱いな今日の作者……………」

白金「それだけではないぞ…当時、おそらくは物凄い幼かったが私の記憶の片隅には、あるアニメが思い出として残っている…

一人の若者が何でも願いを叶えてくれるという蒼い球を持ち逃げして南の島にひよ

ヒロ「まさか…パ ワくん!？」

白金「あれほどぶっ飛んだキャラクターは中々見つからないぞ…網タイツはいた半魚人に何かとピンク色なカタツムリ…何故か二足歩行の犬…」

ヒロ「また随分と懐かしモノ引つ張りだしてきたな…で、なにがあっただよ？」

白金「…最近、イロイロとネタ不足でな…考えてみれば今より昔の私のほうがイロイロ思考も柔軟だったなあと懐かしんでいたのさ。時に、こんなのはどうか？」

グリフィス「ああ〜…寒い…………凍えそうだ…」

エリオ「もう少しで会社です、しっかりしてください部長！」

グリフィス「ああ…見えるよ…あそこに温かい男のゴールデンタイムを持ったはやて社長が！」

はやて「……………（ニコッ）」

エリオ「しっかり部長！あれはレジアス副社長です！」

白金「……………的な？」

ヒロ「見事に某CMに感化されてるなあ……………」

白金「いや、何故か知らないが急に思い出し笑いが止まらなくてね。

つい書いてみたくなっただよ！」

ヒロ「気分転換もいいが、早いところ後編の編集しないと、監督と編集長が進まない〜って血涙流してたぞ？」

白金「フン！いいんですよ。アイツら、私がスランプで逃走するたびに【クノス社】のハンター使うんだから、少しくらい困らせてやらないと割に合わないですよ」

ヒロ「【クロス社】のハンター…いくら持ち前の隠密性に優れた白金といえども所詮は文化系のインドア派、見つければハンターの機動性には勝てないか」

白金「アイツラホントに人間？普通にオリンピックレベルなんじゃないのか！?!?!」

ヒロ「【クロノ社】の公式発表だとハンターはサイボーグらしいよ？」

白金「……とにかく、次こそは逃げ切って臨時ボーナスゲットしてやりますぜ！」

ヒロ「（なんだかんだで楽しんでるよね…）まあとにかく今回はこ

第九話 〽はじめてのお仕事は (中編2) 〽 (前書き)

き 奇跡だ…こんなに早く投稿できたよ…

けど、よく考えたらこの小説…誰かに読まれているんだろうか…

このサイトは作者さんたちのレベルハンパないから私のような文才
皆無で無名な作者と作品では連載は無謀だったのか…

とりあえず、いってみましょう。

第九話 、『はじめてのお仕事は (中編2) 』

108部隊敷地内へリポートから軍用ヘリに乗り、現場であるシヨッピングモールに着くまでには流石は高性能なだけあり、十五分とかからなかった。

が、到着した段階で広がっていた光景は、ヒロにとってはあまり宜しくないものである。

予想以上に人が多いのだ。

モニター越しに見るかぎりはマスコミ関係の数が結構いるのはわかっていた。

でもそれは作戦を始めるにあたり下からせねばすむことで、さほど問題はないと踏んでいた ……のだが……。

「人が多いな…」

真昼間という時間的な要因もあるのだろうが、人で賑わうシヨツピングモールでの事件発生という場所特有の事情も重なり、既に多くの野次馬が出来ていた。

幸いなことに108部隊や386部隊、近隣の管理局の部隊の応援などもあり、一応の封鎖などはできていたのだが、それは一応であり完全ではない。

「着きました」

「ありがとうございます」

操縦士との短いやり取りを終えへりを降りると、何やらお出迎えがヒロを待ち構えていた。

「ご苦労様です。ゲンヤナカジマ部隊長から指示は受けております。我々108、および386および、その他の全ての隊員の指揮権を一時的にヒロラインハート殿に預けるとのことです。」

「こちらへ。作戦本部を設置しました」

「あ…はい…よろしくお願いします……」

みるからに屈強な二名の男性隊員は敬礼する。

（そついえば…合同捜査会議で見たことあるな……）などと考えながらヒロは隊員たちの後ろを着いていく。

とはいっても、連れて来られたのは歩いて二十歩弱進んだところで止められている管理局仕様のトレーラーなのだが。

トレーラーの中は物々しい緊迫感で支配されていた。

幾つものモニターが展開され、中央には人質が捕われているショッピングモール内部の全容が立体に映しだされている。

男女合わせて五、六人といったところか、目まぐるしく通信をし

ながらコンソールを叩いている。

ヒロを案内した隊員たちといえば、自分達は封鎖に戻らなければなりませんので　などと人だかりの中に消えていく始末。

おまけにだ、「無事に解決に導いてください！」だの、「手腕に期待してます」だのと、力の籠った握手をさせられてしまった。

「おじやましま　ッ!？」

なるべく皆さんのお仕事の邪魔にならないように、目立たないようにと、そろり乗り込むもののヒロだったが、バッチリ女性隊員と目が合い、気合いの入った敬礼をされてしまう。

勿論、一人がそんなことをすれば他の人間も例え集中していたとしても気付かないわけがない。

全員が作業の手を止め立ち上がりビシッと敬礼をするのだ。

その光景といえばヒロにとっては何とも反応に困ってしまう光景である。

何故か。ギャップが激しすぎるのだ。

ヒロは今までの三日で、108部隊の隊員たちと会話もしたし訓練にも参加したのだが、部隊長のゲンヤの性格がフランクな感じなので、当然部隊内もそういう雰囲気があったのだが、今はどうだろうか
…

ちらほら見知った顔があるのだが、まるで人が違うかのようではないか。

これが有事の際の管理局員たちの姿なのか……。

緊迫感が包む雰囲気の中で、どこかズレたことを考えてしまったヒロは気を取り直すと、隊員たちに現在の報告書をするようにお願いをする。

108部隊の隊員たちはわかっていた。

合同捜査や訓練などでコミュニケーションをとっていくなかで彼、ヒロ＝ラインハートは人を使ったりすることがどちらかといえば苦手なことを。

しかし、隊員たちは信じていた。

管理局員が 苦楽を共にする仲間が人質になっているという大事件の中、部隊のトップである部隊長がわざわざ名指しで指名したのだ。

この件に関わる全ての局員の指揮権を預けると、だ。

ならば自分達はそれを信じて従うだけ。

他の所の局員たちがどう思っているかはわからないが、少なくともヒロ＝ラインハートは既に“同じ釜の飯を食った仲間”なのだから。

「それじゃあその…あの…よろしくお願いします…」

挙動不審すぎる仕草に苦笑しながらも隊員たちは頷くのだった。

「それじゃあその…まずは現状、集まっている情報を報告してください。そこから救出法を考えましょう」

「では私から」

108部隊の女性隊員がモニターを展開し、報告を始める。

「まず違法魔導師グループの人数ですが、今現在判明している人数は十二人です。」

「……………多いですね……………たしか執務官の特別捜査チームが追っていた魔導師たちとこちらが追っていた魔導師たちが不運なことに元は同じ組織の構成員で、たまたま出会い頭に合流してしまったと……………」

そういえば、居合わせたっていう執務官チームの魔導師さんたちの姿が見えないんですけど、そこらへんとの連携はどうなっていますか

すか？」

「それについてですが……」

言いにくいのか、苦い表情で男性隊員が立ち上がる。

「彼らはその……今回の捜査はいわゆる強攻捜査らしく、満足な準備ができていなかったようで……」

フェイト「テストロッサ」ハラOWN執務官という戦力に頼り切りだったみたいです……」

「それはまた……」

思い出すのは疲れ人を癒すヒーリング効果なんかは身体から滲み出ているんじゃないかと疑ってしまうほどの優しい笑顔の持ち主。

人が良いフェイトのことだ、執務官の任務に手を抜くことなどしてないだろうが、その他の魔導師たちはフェイトという管理局有数のエリート魔導師が一緒だということもあり、心のどこかに緩みが生じてしまったのだろう。

そこは人間。誰にでもそうというのは在って当然なのだが、どうや

ら今回は良くない形で表面化してしまったとヒロは結論づけた。

しかし、ここでその魔導師たちの責任を追及したところで現状何が変わるわけでも無し

すぐに思考を切り換える。

「犯人側からの要求は何かありましたか？」

「約八分前にコンタクトを謀ってきましたが、残念ながら機械で声を換えているため身元の照合は不能でした。

要求ですがその …」

「えっと、なんですか？」

こちらも苦い表情の男性隊員。

「二時間で次元転移機能付きの高機動ヘリを四機 …… しかも民間製造で未登録のモノを要求してきました…」

「もしも…二時間を超えたら十五分経つことに人質を一人ずつ…… 殺していくと……」

「それはつまり……なるほど……用意するのが難しいということですか……」

場の隊員たちの沈黙と重苦しい雰囲気如実に物語る。

次元漂流者であるヒロはこの世界 すなわちミッドチルダの技術力を余りよく把握できてはいないが、言葉を聞く限りではソレを用意できるか出来ないかはそれくらいはわかる。

残念ながらこの場合は後者になる。

「まあ、逃走用の資金を要求されなかっただけましですけど……」

女性隊員は悔しそうに拳を握る。

（おそらくは万が一にでもアシがつくことを警戒したんだらうな……間違いない。こいつら玄人だ…… それならとるべき行動の選択肢は限られてくる、か……）

……下っ端のくせに、一流の犯罪者のマネゴトか……それとも……などと、ヒロは思考を停めない。

「……決まりました。じゃあ今から人質たちの救出作戦の説明を始めます ……」

本来ならば人が行き交い活気溢れるはずのショッピングモールは本来の姿のカケラも無くなっていた。

流れる音楽は全て止まり、代わりに聞こえてくるのは悲鳴や泣き声といったものばかり。

周囲には違法魔導師たちがデバイスに加え、ミッドチルダでは違法とされている質量兵器で完全に武装している。

「……………」

フェイト「テストロッサ」ハラオウンは懸命に策を模索しているのだが、どれだけ思案したところで何も出てはこない。

なにせ、自らの相棒であるインテリジェントデバイス、バルディッシュは犯人たちの命令により放棄させられ手元には無いのだから。

偶然、捜査に合流することになったギンガ、ティアナ、スバルも同様にデバイスを取り上げられている為、現状、彼女たちには対抗する術がない。

いかに管理局有数のオーバーSランク魔導師といえど、デバイスが無ければそのチカラは魔力を有していたとしてもデバイスを持つ普通の魔導師以下。

隙をつけば一人や二人ならばなんとかなるだろうが、十人以上はどうにもならない。

シューティングアーツを修得しているギンガやスバルであっても、生身でデバイス有りの魔導師を十人以上相手にするなど無謀ではないのだ。

「フェイトさん……」

「この状況……私たちには悪すぎる……ここは大人しく救援を待ったほうがいいと思う……」

「ですけど、もしも要求をのんだとしてもさっきの様子だと……」

「そうだね。まず全員独り残らず助からない……ううん……最初から助けるつもりなんてサラサラ無い……」

ギンガの言葉をフェイトは肯定する。

少し前から見せている犯人グループの妙な動きをフェイトはイチ早く察知し、盗み見ていた。

「ティアナとスバルは？」

「今は情緒不安定な人達のフォローに……386部隊での訓練が活きています……」

災害救助活動を主に（ティアナとスバルは新人のため訓練や研修のみだが）している386部隊では要救助者の精神状態が不安定なことが珍しいことではない。

そのための訓練や演習なども日々、専門のカリキュラムが組み込まれているため、今回は状況は違うものの活かせる部分はある。

「もう駄目…私たちがそのまま殺されちゃうんだ…」

「大丈夫です。もう少しで我々管理局の仲間が助けに着ますから。一緒に頑張りましょう」

「お姉ちゃん……僕、怖いよお…」

「大丈夫だよ。お姉ちゃんが絶対に護るから！」

遠目にティアナとスバルの頑張りを目の当たりにして、フェイトも負けてはられないと再び良い案を模索するのだが……

「へえ……なら護ってみるよッ！」

悪意が満ちたこの空間

で、一番想定したくない最悪な展開へと歯車は動きだす……。

「ここか……」

ショッピングモールの内部　：関係者以外は入れない区画にヒ
ロ「ラインハートは足を踏み入れていた。」

目の前には一人が入れるであろう荷物運搬用のエレベーターの
扉がある。

「本当に……一人で大丈夫なんですか？やはりここは別の作戦を立て
たほうが……」

「そ、そうですよ！……こんなの無謀過ぎます！」

後ろに控えるのは108、386部隊の魔導師たち六人。

口々に異論を唱える。

「わかっていますよ。この作戦がどれだけ無茶苦茶なのかは……」

でも現実、犯人側の要求は時間には間に合わないし、強行策なんか採れば必ず犠牲者が出ます。

対してこの作戦はパツと見は無茶苦茶ですけど、リスクを負うのは実は俺だけだったりするんですよ。

裏を返せばこの作戦、俺さえ気をつければ、余程のイレギュラーが起こらない限りは、ほぼ100%成功することを意味します。」

「し、しかしですね…」

妙に自信満々なヒロだが、魔導師たちの反応は不安そのもの。

作戦は大胆かつ繊細に ……どこかの誰かが言ったであろうお決まりのセリフを具現化したような作戦をヒロは立てた。

ざっくりと言うならば、ヒロが時間を稼いでいる間に別方向から侵入し、局の魔導師チームが人質全員を保護できるくらいの大きさを結界を張り、人質の安全を確保。

さらに、機を見計らって待機させている味方魔導師たちを一斉突入させて逮捕。といった流れなのだ。

……が、ヒロ以外の者に言わせてみれば、デバイスすら持たないヒロの作戦など無謀としかいいようがない。

この作戦の報告を受けたゲンヤですら一瞬事態がのみこめなかったほどのだから。

「まあまあ。どのみちリミットまであと一時間も無いんですから。

それじゃあまず……」

強引に話しを中断させるとヒロは荷物運搬用エレベーターに入りこむ。

「まず俺が潜入して内側から崩していきますから、こっちの指示通りに動いてくださいな。」

……それじゃあただ今より、作戦を開始します！」

「あッ！ちよ……」

魔導師たちの言葉も一瞬だけ遅かった。

そのままヒロは扉を閉めエレベーターは上昇していく……。

本当にこんな無茶苦茶な作戦が成功するんだろうか……

そんなことを思っていたのはヒロと同じ場所にいる魔導師だけでは決してない。

通信でしっかりと観ていたこの事件に関与している108、386部隊の隊員たち共通の不安なのを知らないのがヒロだけなのは秘密である。

「やっ……と……」

荷物用エレベーターが目的の階につくと、ヒロは極力物音をたてずに下りる。

ここから先はスパイ映画さながらの隠密性が要求されているのだから。

「しっかし……」

改めて自分の服装をみてるが、これは逆に目立ち過ぎないか？

そんな疑念にヒロはかかる。

「まあ、たしかに言ったよ？特殊戦術用っぽい防護服ありますかって…… けど……流石に隠密用には見えないよなあ……」

上から下まで黒一色。万が一の時、質量兵器が命中したとしても命を護るために関節以外は全てといてもいいだろうという防弾プロテクターに、鼻まで隠してあるマスク。

きわめつけは暗視用赤外線機能が搭載されたバイザーと、念のいれよつは評価できるが、今回のような屋内では目立ちすぎる。

が、このような防護服はヒロの世界にもしつかり有るので、そういう点では異世界カルチャーショックに悩まなくて済むところは彼にとってはありがたいところだ。

それになにより、同じようなものだから構造も大体は同じなわけで、少しではあるが手を加えることもできる。

といっても、主に身につけているプロテクター類をほんの数カ所外すだけなのだが。

「……よし、こんなもんかな……」

外したプロテクターは荷物運搬用エレベーターの中に置き、さらに軽く腕を降ったり屈伸を試みる。

装備の全体の重量は未だに重いせいで動きはまだまだぎこちないものの、それでもプロテクターを外した今は付けていたときよりも気持的には楽になれた。

「さて、ここからは自力でいかないとな。

………現在地はつと……

……」

デバイスを持っていないヒロは勿論他の隊員たちと通信を取ることができない。

念話の類は敵魔導師の中に索敵専門の魔導師がいることも考えられるため却下したので、残ったの手段はオーソドックスな携帯端末しかない。

容量などはデバイスとは比べものにならないくらい小さいものだが、そもそも一般市民はコレなのだから別に問題は無い。

早速端末を開き、事前に読み込んでおいたショッピングモールの全体図を立体化させると、ヒロは自分がいる現在地と、犯人グループのいる場所の位置関係を確認する。

次に侵入経路を確認する。

「……………これ、だな……………」

位置情報と照らし合わせながら探していると、ソレはすぐに見つかった。

このショッピングモールに脚を運んだ時、大型施設だけあるが、通気孔ダクトの他に施設管理用の作業用通路が天井に張り巡らせてあるのにヒロは目を付けていた。

大きく分けても三階のショッピングモール。

当然、敵は一階にいる。

このショッピングモールは全体が中々に広い。

情報によれば違法魔導師グループの人数は12。

普通に多い感じはするのだが、この場合は些か状況な違ってくる。

広い場所ということは外部からの侵入を防ぐために見張りや巡回にあたる役割をする者が必要になる。

犯人側の人数には当然だが限りがあるわけで、この場合は違法魔導師たちは人質たちに圧力をかけるための人数を残さなくてはならない。

ただし、残念なことだがヒロにとっては見張りや巡回などで違法

魔導師たちの数が減ったことはあまりプラスなものではない。

こちら側 …つまりは侵入する側が有利に見えるが、人質立て籠もり事件はそう簡単なものではないのだ。

人質の無事が最優先。しかし、それはあくまで鉄則であり最低条件。

あらゆる不確定事象をも想定した綿密な計算を弾き出し、それを実行し、成功させなければ失敗と同義なのだ。

「とりあえず、ここだな……」

施設管理用のダクトの中をはいつくばりながら着いた場所は、どうやら洋服のテナントだった。

ダクトの中から様子を伺い、敵らしき影や足音聞こえないのを確認し、出来るだけ音をたてないように飛び降りる。

ヒロの勘は当たっていた。

テナントから出るが客は一人もいない。

が、標的はすぐに見つかった。

見えるのだ。

ヒロがいるフロアは大きく正方形状に吹き抜けていて、対角線状に四本のエレベーターがある。

一階部分、ヒロがいるフロアからはもう一つ先にいったフロアに何やら人だかりが見える。

「……………ビンゴ……」

装着しているバイザーの視覚部分はモニターにもなっており、ありがたいことに自動望遠システムも搭載されている。

ズームアップしていくと、逃げ遅れて巻き込まれた人質たちが老若男女約二十名ほどと、その周囲を完全武装している明らかに犯人と思わしき人間たちの姿があった。

「数は…… ツ！？オイオイ……そこまでしますか普通……」

少しでも情報を集めるためにバイザー越しに目線を動かしていると、ヒロの目には彼の怒りを引き起こすのに充分すぎる光景がそこにはあった。

「……………腐れ外道が……」

今にも飛び出しそうになる衝動に駆られるのだが、寸前のところで踏み止まる。

「オチツケヒロ…ラインハート…冷静に…目的を見失うなよ…ヒロ…ラインハート……」

今お前がするべきことは何だ…無謀に突撃かましてみんなの命を危険に晒すことか？ちがうだろ……

いつも通りに行動しよう…いつも通りに……」

ギリリと拳を握り、人質がいる方向とは反対の方向にヒロは足早に歩き出す。

(ゴメン…絶対助け出すから…だからもう少しだけ耐えてくれ……)

ポタリポタリと床に滴り落ちるのは鮮血

短い悲鳴がそこらじゅうで響き渡り、目を背け震える。

「オラオラオラアアア！しっかり護れよお管理局の局長さんよおお
お！」

短い　それでいて独特な音が二、三回響く。

「ぐっ……ッ！」

苦しげなスバルの声と同時にスバルの柔肌には傷ができ、鮮血が
滴り落ちる。

「スバルッ！？」

ギンガの悲痛に似た叫び。

「だ……だいじょ……ぶだよ……ギン姉……」

大好きな姉を呼ぶスバルは笑顔。

「バカスバル！大丈夫なわけないでしょ！」

「ティア……へへっ……ティアが心配してくれるから……まだまだ……大丈夫……だよ……」

「は！我慢強さだけは一人前ってかあっ！」

「ッ！」

また一つ、傷が増える。

両の腕をいっぱいに広げるスバルの身体には、いたるところに細長い傷が刻まれている。

スバルの後ろには先程までスバルが励ましていた年端もいかない男の子がうずくまっている。

立ちはだかるは黒の覆面にマスク、全身黒づくしの違法魔導師グループのうちの一人在狂ったように奇声をあげながら手に持つ質量兵器　いわゆるハンドガンの引きがねを弾いていく。

撃ち出される弾丸は全てスバルの皮膚ギリギリのみを掠めていくのだ。

これで何発目だろうか　スバルがただ一方的にされ続ける。

何がこの魔導師の逆鱗に触れたのかは本人しか知らないのだが、凶器は一方的にスバルと男の子に向けられたのだ。

「オラオラオラアア！倒れてもいいんだぞお！てめえが倒れたときがガキの命が無くなる時だけだなあ！」

「いやあああっ！」

「お母さん！落ち着いて下さい！」

男の子の母親と思われる女性はフェイトにより止められている。

我が子の命の危険に冷静になれる親がいるわけがない。

「うるっせえなあ……お前から頭に風穴あけてやってもいいんだぜえ？」

「『ッ！』」

すかさずギンガとティアナがフェイトと男の子の母親の目の前に立ち塞がる。

「まあいいや……こっちのガキはあと何発もつかねえ……」

ハンドガンの銃口を再びスバルに向ける。

仲間の魔導師たちは笑いながら弾の無駄撃ちはやめるよなどと笑う。

「……………っ……………」

ポタリポタリと、それでも流れる血は止まらない。

滴り落ちる血は水溜まり少し手前までになってしまっている。

事実、スバルの視界は定まらず、徐々に意識がボオツとしてくるのがスバル自身でもわかっていた。

「ッ！」

が、脚に力を込め懸命に踏ん張る。

（あたししか…いないんだ…この子…護れるの…あたししかいない…）

スバルは信じていた。

時間を稼げば絶対に助けが来ると。

意識が朦朧とする中、スバルの頭の中には自然と浮かんでいた。

出会ってまだ日は浅いが、気付けば仲良くなっていた少年の姿が

使い魔に振り回されながら苦笑いを浮かべる少年の姿が

一緒にいて何か不思議とホンワカする少年の姿が

きつと 絶対助けに来てくれる……

(ヒロ……)

だから

「……か……」

ありったけの力を振り絞り

「倒れて たまるかああああああっ！」

叫ぶ。

が……

「うるせーガキだな……もう殺してもいいか……」

渴いた音が弾けた…。

目の前にいるパートナーに向けられる凶器……アタシの視界を映す景色は全てがスローモーションに見える……

嘲笑う魔導師の凶気じみた笑い声……

引かれる引きがね……

動け

動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け……

ありつたけの力を振り絞り脚に力を入れ、床を蹴る。

距離にして数メートル

魔導師の質量兵器がスバルの命を奪うのに必要な時間は一秒とかからない。

パートナーの命の危機にアタシの脳内はこんなクダラナイことしか考えられないの？

なんで？

なんでよ？

間に合え

間に合いなさいよアタシの脚！

「ッ！？」

アタシは今、猛烈にパートナーを殴りたくなった……

このバカッ！なんでこんな時に笑ってんのよ！

馬鹿じゃないの!?

逃げなさいよ!

早く逃げなさいよ!

この

「馬鹿スバルッ!」

わかる

アタシは間に合わない

たった数メートルなのに……

もうアタシから……大切な人 奪わないでよ!

神でも魔王でもなんでもいいから……

誰でもいいから 助けてよ！

「ッ！？」

短く、濁いた音が

弾けた……

短く濁いた音が弾ける。

誰もが目を背け、最悪の結末を迎えた。

「ア…… ガアアアアアアアアアアッ！?!?!？」

はずだった……

「『 ツ!?!?』」

絶叫をあげたのはスバルに銃口を向けた犯人側の魔導師。

その手からは銃は消えていた……

否、正確には…弾き飛ばされたのだが。

刹那

金色の閃光がスバルに銃を向けていた魔導師をのみこみ 建物
の一部ごと外まで吹き飛ばす。

自らに起きた異変を認識する間も無く魔導師の意識はそこで闇へ
と墜ちた。

実に約一秒以下の出来事。

全員の意識が金色の閃光が通りすぎたのとは真逆の方向へと視線
が移る。

「……………」

約十五メートルほど先に佇む人影は徐々に距離を縮めてくる。

ユラリ　ユラリ…

一歩、また一歩と。

右腕に閃光の残留魔力であろう余波を発生させながら。

全身が黒一色。

対防弾用プロテクターでの完全武装、すっぽりとマスクで鼻上まで隠し、目元を完全に隠したバイザー。

特殊戦術用装備ともいえるソレは、違法魔導師の装備などチープに感じさせるほど強烈な異彩を放っていた。

「な　何者だ！管理局かッ！？」

歩を止めない突然の乱入者の出現に完全にパニックに陥った違法
魔導師たちは一斉に質量兵器を構えるが ……

「……………」

それでも止まることがない。

「止まれ……………これ以上来たら 撃つぞ!?!」

引きがねを一斉に外す。マシンガンの類いは自動に切り替わる。

「……………」

それでも尚、歩みを止めない……………むしろ速めている。

その距離は十メートル以下にまで縮まった。

「!?!……………!?!のやるし……………なら……………」

「あぐアツ!?!?」

犯人側の一人がスバルの髪を引っ張り無理矢理に盾にする。

「スバル!？」

「ギンガ!駄目だ!」

「ギンガさん!」

「フェイトさん離してくださいスバルがッ!ティアナも!離して!」

制止を振り切ろうとするギンガをフェイトとティアナの二人がかりで必死に留める。

「テメエ!それ以上コツチ来てみる!お仲間の管理局員がどうなってもいいのああ!？」

違法魔導師の中の一人が血まみれのスバルの髪を引っ張りながらマシンガンの銃口を頬にくいこませる。

「お願い止まって!」

「……………」

加え、ギンガの悲痛な叫びに乱入者は歩みを止めてしまう。

「ハッ！最初っからそうすりゃいいんだよ！」

「アゲアッ！」

「スバルッ！」

乱入者が歩を止めたことを屈服したととらえたのか、スバルの髪を掴んでいた魔導師は用無しとしたらしく、乱暴に突き飛ばし、ティアナが素早く受け止める。

（早く　止血を…………）

回復魔法は訓練校の参加者制の特別講習で習った心得程度しかないものの、とにかく止血が急務だとティアナは覚束ない手つきで回復魔法をかけはじめた。

しかし、脅威はまだ続いているのだ。

歩を止めた乱入者に違法魔導師たちはジリジリと詰め寄る。

徐々に間隔を広げていき、扇型へと……最終的には取り囲む算段なのだろう。

(助けなきゃ……殺される！)

自身が今デバイスを取り上げられていることも頭から抜けたギンガは乱入者のもとに走りだそうとするが

「ギンガ駄目だ！私たち今デバイスが！」

「あ……」

腕を掴むフェイトにハッと我にかえる。

「その人！逃げてくださいッ！早く！逃げてください！」

大切な妹の危機を救ってくれた名前も知らない誰かが危機に晒さ

れているというのに、護る力がある自分は護る力そのものを奪われ、逃げると言っことしかできない……

なんと無力なことが……

「……大丈夫だよギンガ……」

「……フェイト……さん？」

絶望すら感じるギンガの手をフェイトは優しく微笑みながら握る。

「だってあれは……」

乱入者は視界からありったけの情報を集めながら脳内で戦略を纏める。

……これで条件は揃った……

いま、この時点で犯人たちは誰一人として人質たちのことは意識上に無い。

乱暴にスバルを突き飛ばした魔導師ですら人質たちに目もくれずに自分の方へとジリジリ迫ってくる。

「……………」

「どうした？コイツを突き付けられてビビってんのか？さっきの威勢はどうしたよ？」

勝ち誇ったようにゲラゲラと笑いが起こる。

その全員に質量兵器を向けられている乱入者といえば

…

「……………ふっ……………」

隠した口元は笑みが我慢できないところまできていた。

「なんだあ？おい、なんとか言っつて」

スツと物言わぬ乱入者が右手を挙げた瞬間。

「『……………』」

「『なああつ!?!?』」

バババツ！と二階部分から犯人達を取り囲むように立ち上がる人影が多数。

同時に、ギンガ、フェイト、スバル、ティアナを含めたその場に
いる全ての人質たちが結界で保護される。

立ち上がった人影の全員がバリアジャケットを纏い、杖型デバイ
スを構えていた。

「管理局だ！暴行、殺人未遂、その他諸々で全員逮捕する！大人し
く全ての武装を解除し、床へ俯せになれ！抵抗する場合は」

「『ッ!?!?!?』」

バチチチツと何かが弾けるような音と共に違法魔導師たちの背後

に現れたのはバリアジャケットを纏い、同じ杖型デバイスを構えた更なる増援。

「馬鹿な！見回りの ……まさか！？」

「お前たちの仲間には既に拘束済みだッ！無駄な抵抗はやめろ！それでもというならば ……実行使もやむを得ない！」

その数は約15。二階部分の人数を合わせれば30人弱といったところだろう。

「……………幻術……か……………」

違法魔導師グループのリーダー格の男の眩きと共に次々と武装を解除していく。

（終わったな…）

次々とバインドで拘束され、連行されていく様を観ながら乱入者は足早にその場から立ち去るのだった。

いつの間にか太陽がオレンジ色になりはじめていた。

事件現場のショッピングモールが見えるすぐ隣のビルの屋上に佇む人影。

乱入者である。

視線の先では違法魔導師たちが護送の割り当てをされていたり、人質になっていた人達が管理局員たちに事情聴取などを求められていたり、体調の異常を訴える人たちの応急処置や傷を生った者たちを病院に搬送したりと、ごった返している。

「こんなとこにいたんだ……捜したよ？」

乱入者の背後から聞こえてきたのは優しい声。

「よく……わかったね……」

「こう見えても私、管理局の執務官さんなんだよ。だから、人を捜

すのは得意なんだ。知らなかった？」

どこかからかうように。

「それに……一緒に住んでるんだから、わかるよ ……ヒロ……」

「はあ……正解です……お見それ致しました」

ペコリーっと頭を下げ、顔を隠したマスクを下げバイザーを外すと乱入者 ……もとい、ヒロ＝ラインハートの姿がそこにはあった。

「一言も喋ってないのに、どこから俺だっかわかったんだ？」

「それを教えたらヒロは直すから教えてあげないよ」

自信があっただけに見破られたのは相当なショックだったヒロはその場にドサリと腰を下ろし苦笑いを浮かべる。

その横に立ち、フェイト静かに微笑む。

ビルの屋上とはいえ、今は風もなく穏やかそのもの。

静かな　それでいて嫌じゃないほうの沈黙が流れる。

「その……スバルは……」

先に沈黙を破ったのはヒロ。

「うん、大丈夫。ギンガとティアナと一緒に付き添いで病院に行つたよ。救急隊の話しだと命にかかわるようなことは無いって。」

二三日くらい入院で済むってことらしいから　…明日あたりお見舞いに行ったらいいよ。」

「そっかあ……」

安堵からヒロの口からは大きなため息がもれた。

「『……………』」

再び沈黙が包む。

聞きたいこと。

聞かなければいけないこと。

言いたいこと。

言わなければいけないこと …。

そんなことが山ほどあるというのに、フェイトはそれを聞けないでいた。

その変わり …。

「ヒロ、今日の夜は何が食べたい？」

「……………へっ？」

満面の笑顔と明るい声でフェイトは口を開く。

「季節はちょっと早いんだけど、お鍋なんてどうかな？」

「そうだ！焼き焼きて知ってる？私の故郷の地球ってところの料理なんだけど、すごく美味しいんだ！」

「えっ？は？焼き焼き？まあ、俺の世界にもあったから知ってるけど…」

「じゃあ今夜は焼き焼きに決定。さ、今から一緒に買い物行こう！」

「エエッ！？いやだってフェイトは事後処理 …」

「大丈夫だよ。フェイトさんは優秀だから！」

「いやあの…理由になっ ワッ！引張ら ア…！」

「今日はこれから忙しくなるよ！まずはリンを迎えに行って、それからスーパールのタイムセールに間に合わせないとね！」

「た…タイムセール！？」

「夕方の 女のプライドを賭けた戦場だよ！」

「フェイトさん！なんだかキャラ … ああああ…」

シリアスな空気はどこへやら、わけもわからずに引っ張られると
口は夕焼けに染まるフェイトの笑顔を見ながら
…

(ありがとう……)

なにも聞かなくてくれるフェイトの優しさに少しだけ、スツと重
みが消えたのを感じるのだった。

第九話 〽はじめてのお仕事は

(中編2) 『 〽(後書き)

【スペシャル・コメンタリー】

白金「はい、というわけで今回は久々に本編重視のコメンタリーを
していこうと思います」

ヒロ「ホントに久々……というか、このコーナーでまともに本編に
触れたの片手で数えるくらいじゃないか？」

リン「まあ〜白金さんだしね〜」。

ヒロ「そうだな。存在自体が“不純”みたいな奴だからな」

白金「……フツ……私は大人だからね……この作品の全権を握る者の寛
容な心で君達の未熟な発言を受け止めてあげるよ」

ヒロ&リン「『寛容な心………プッ………』」

白金「(平・常・心!)というわけで今回の話だけど」

リン「今回はヒロが珍しく主人公っぽい真面目なバトルシーンだったねえ〜」

魔法撃ったときのヒロ…カッコイイ〜〜！」

白金「……癒だがたしかにその通りだ。認めたくはないが……な…」

ヒロ「癒なのか！そんな砂糖と重曹間違えて舐めたときにするような苦い顔するほど認めたくないのか！？」

白金「……………」

ヒロ「無言の肯定！？」

リン「あの魔法ってたしか、Urobrosシリーズの【再の章】で使ってた魔法だよな？」

白金「そのとおり。雷系の中級魔法【雷光】はヒロが最も好んで使う魔法ではあるが、実は【雷光】は正式名称ではないんだ」

リン「そ、そうなの！？」

白金「【雷光】というのはヒロが元々の魔法の術式と工程を少しばかりアレンジしたシロモノで、いわば簡易版みたいなものだね」

ヒロ「厳密に言えば今話の【雷光】もまたちょっと違うものなんだけどな」

リン「え〜〜と……？」

白金「【雷光】の元の魔法の正式名称は【雷煌】というんだ。【雷光】は【雷煌】の術式をいじったって説明しましたね？」

リン「うん」

白金「【雷光】は本来の【雷煌】よりも威力は低いがその分、速さに重点を置いたものでね。」

そもそも【雷煌】はバリエーションに富んだ魔法なんだけど、ヒロが使う【雷光】に限っては用途は一つに限られる。

それは直線という軌道のみでの使用。【雷煌】本来の術式の威力領域を大幅に速度に書き換えたんだ。速度としてはこれ以上無理！
つてくらいなまでに。

まあ理論上、威力を犠牲にさせた【雷光】は音速の域には届いて
いるはずだよ」

リン「で、でもさあ……【再の章】のもそうだったけど、こっちの
も相当な威力たたき出してたよ？それにヒロ、無詠唱だったし。通
常、無詠唱とか詠唱破棄の魔法ってどんなに頑張っても詠唱有りよ
り劣るのが普通じゃないの？」

白金「まあ、魔法に限ったことじゃないけど、普通の理論としては
リンの言ってることが正しいんだけど、この主人公、ずる賢いとい
うか 抜け道みつけるのは天下り官僚並に上手いんだよ……」

ヒロ「ちょおッ！作者自重！！」

白金「まあ、ここでそれを明かすのは企業機密というか作品機密だ
ったりするから言えないが、とにかくヒロは抜け道を見つけたんだ
よ。まあもつとも、魔力保有が無尽蔵で、純粋なチカラが規格外の
リンからしてみればこんな姑息な理論使わなくて最強レベルな
のは間違いないから安心しなさいな」

リン「ブーブー！ヒロとおんなじ術式つくか〜い〜た〜い〜！」

ヒロ「いや、あの……」

白金「は…ははは…（言えない…これ以上リンに強くなられると作者の生命にも危機が及ぶかもだから…なんて言えない…）」さて、これを見てるみんな、今日の説明でわかったかな？

次回はよいよ後編。つまりはようやく、はじめてのお仕事が終わりますよ。」

ヒロ「まあ、アレだよ…：…まだまだStrikerS編には入る兆しさ見えなほほど長〜〜い作品だけど作者なりに精一杯進めてるから熱い応援をよろしくお願いします！」

リン「感想とか質問疑問、なんでも受け付けてるから気軽にメッセージ送ってください。」

あと、私たちでよければ出演、コラボしたいって作者さんがいたら、そちらもメッセージとして送ってくださいね！」

白金「それではまた次回お会いしましょう。お相手は作者、白金と」

ヒロ「よく頼りない〜とか流されやすい〜とか、優柔不断〜とか注意されるけどオレだって日々精一杯生きてるんだよ〜な、ヒロ」
ラインハートと」

リン「実は最近、ヒロをとっさ　んっん！行動をウォッチングし

ながら、記録したモノを広く公開して世間の皆様にヒロの魅力を伝えよう！ってサークルを創設し」

ヒロ「チヨオツ！！？なにその不穏なサークルは！！？！？」

リン「あれえ〜？言っただけ？」

白金「創設メンバーは

会長 リン⇨ストラトス・ヴァンガード

副会長 八神はやて

情報収集参謀 佐 涙子

ネットワーク技術長官 初 飾利&リインフォース・ツヴァイ

作戦参謀及び議長 フェイト⇨テストロッサ⇨ハラオウン

以下随時更新予定、だ」

ヒロ「組織作り完璧！？てかメンバーに死角無し！？！？」

リン「ネット開設たった1時間で120万アクセスとか奇跡だよね〜」

白金「やはりシークレットファイルの効果が凄いらしいぞ？」

リン「エプロン姿が断トツNo.1だよね〜」

ヒロ「解散！そんな人のプライベート無断で公開させる犯罪一歩手前組織、強制解散だからね！！」

白金&リン「『ばいば〜〜〜い！！』」

ヒロ「ちよっ人のな だから帰るなああああッ！！！！」

第九話 、『はじめてのお仕事』 (後編)、『(前書き)

今回は比較的、楽に更新できました。

今話は、はじめてのお仕事編のエピローグというか、まあそんなところなんですけど……

書いてて思いました。ああ……もっと描写が上手く表現できれば！スバルとティアナの持ち味が出てくるか心配なんですよ。

それでは本編を。

第九話 、『はじめてのお仕事は (後編) 』

一夜明けた次の日。

首都クラナガンでもそこそこの規模を誇る病院の前にヒロ＝ライ
ンハートの姿があった。

フェイトのススメ通り、負傷したスバルのお見舞いに来たのだ。

本当ならばリンとフェイトもついてくるはずだったが、フェ
イトは朝も早くから執務官としての仕事があるらしく、時間的には
厳しいらしい。

比べ、囑託身分のヒロは時間という縛りをあまり受けない。

そうなる何故にヒロは一人でここにいるのか…というより、何
故一番ついていくと言いつうなりリンの姿がないのか…

「病院は退屈だから嫌！」

なんともリンらしいというか。

そういうわけでリンは大人しくお留守番。

とにかく、今ここにはヒロしかない。

「……ここまで来たら……覚悟決めますかね……」

病院の受け付けでスバルの入院している部屋を教えてもらい、早速部屋まで来てはみたものの、扉一枚隔てヒロは進めないでいた。

思い返せば、今まで同年代のケガをした女の子のお見舞いなど経験がない。

さらに追い討ちは、プレートにある名前はスバル＝ナカジマのーっだけ。

「どう見ても個室…だよな〜……」

意外なことにスバルは個室に入院していた。

しかし、これがヒロにとっては大問題。

スバルには今日来ることは連絡していない。

ヒロは事前にゲンヤかギンガに連絡を入れようとしたのだが、フェイトがそれに待ったをかけた。

フェイトいわく、女の子はサプライズが大好きな人種で、サプライズのほうがスバルは喜ぶかもということ。

お見舞いにサプライズが必要なのは疑問が残るが、せっかくの提案を無下にすることはないな…などという結論に至りヒロはフェイト案を採用した。

…が、サプライズで来たのはいいものの、年代の女の子のお見舞い経験が無いことを思い出し、さらには入院している部屋が個室だったという、ある意味で逆サプライズを仕掛けられ…要

は、どんな感じで入ればいいのかわからないのだ。

ただ、いつまでもこの状況が好ましく無いことはヒロ自身、自覚している。

病室の前でウンウン唸ったり、ウロウロと歩き回るのは第三者の目からはただの変な人にしか見えないからだ。

実際、他の見舞いに来ている人の視線はチラチラ集まり、中には年端もいかない無垢な子供が指をさし、親に注意されていたりもする。

ハッキリいって、この上なく好ましく無い……

(ええい……ままよッ！)

あわよくば援軍（スバルの見舞いに来るであろう人達）を期待するも、可能性は低い。もはや立ち往生は許されず覚悟を決めブルブル震える拳で扉をノックすると

「はあ〜い。どござー！」

「……………」

聞こえてきたノホホンとした、およそケガ人としてはそうでは無いが、スバルらしいといえればスバルらしい声が聞こえてきて、ヒロは少しだけホツとした。

「スバル、俺…ヒロだけど……………」

「えッ…えええエッ!?ちよっ…ヒロ!?な…なんで!?!」

が、一変。スバルの声があからさまに動揺に変わる。

「あ、いや お見舞いに来ただけど。入っていいか?」

「うえええッ!?ちよっ…五分 じゃなくて…一分待って!」

同時に、病室の中がドタバタと少しだけ騒がしくなる。

「スバル…その、今都合悪いなら出直すけど?」

「だ、大丈夫だから!だからちよっど ……………うん。入っていい

よー！
「！」

「あ……ああ……それじゃあ、お邪魔します」

なにやら気にはなるが、一応許しも出たので扉を横にスライドさせる。

「あ　あのその……いらっしやい……」

「……なに……してんだ？」

「あは……アハハ……」

一番に目に入ってきたのは、ケットを被りながら顔を朱くするスバルの姿があった。

「ハア………」

あたしことスバル^{II}ナカジマは昨日、人質立て籠もり事件で負傷してこの病院に運び込まれた。

幸い命には別状は無く、検査入院で済むみたい。

でも驚いたなあ……昨日お父さんからあたしを助けてくれたのがヒロだって聞いたときはさあ……。

ギン姉が言うには…何かアツという間に解決したって言ってたし……。

やっぱりヒロって凄いんだあ……

あの時、よくわからないけどヒロが助けに来てくれる気がしたんだよね……

そういえば今日はギン姉とティアがお見舞いに来てくれるんだっけ！

ヒロは来てくれるかなあ……

あ、でも確かヒロは囑託魔導師だから事件が解決したら ……連絡先は ……駄目だ、聞いてなかった…

もしかしてこのままお別れとか……そうなるのかな…

あたしと違ってヒロは魔導師ランクもありえないくらい高いし…

せっかく仲良くなったのに、下手したらもう会えないかも……
って！ダメダメ！ネガティブな考えは駄目だよ！

コンコン……

あれ？誰か来た。ティアとギン姉かな？

「はあ〜い。どつぞ〜！」

「スバル、俺…ヒロだけど……」

「えッ…えええエッ！？ちよっ…ヒロ！？な…なんで！？」

ななななななんでヒロがここに!?

病院のことも入院してる部屋番号だって … お父さんとギン姉
はヒロにはまだ教えてないって言ってたし …

おおおちつけあたし!

鏡 …… って!すごい寝癖がピョンピョン跳ねてるッ!?

こここんなのじゃ …… 早くなんとか

「あ、いや …… お見舞いに来ただけだ。入っていいか?」

「うえええッ!? ちょっと…五分 …… じゃなくて…一分待つて!」

せせせつかく来てくれたんだから …… って、当たり前だけど…
あたし部屋着のまんま〜ッ!?

「ス …… スバル…その、今都合悪いなら出直すけど?」

やばい!ヒロ待ちくたびれてる!?

えっとえっと　もっと普通の　女の子っぽいパジャマとか
は　…って、そんなの持ってたなかった…

むっむっむっむっ…「うっなったら…

「だ、大丈夫だから！だからちょっと　…うん。入っていいよ！」

「あ…ああ…それじゃあ、お邪魔します」

「あ　あのその…いらっしやい…」

「…なに…してんだ？」

「あは…アハハ…」

ヒロはケツをこれでもかって被ったあたしを何か不思議そうに見てるけど、その反応は正しいんだよね…

退院したらすぐギン姉とカワイイパジャマ買いに行かなきゃ…

昨日の今日で仕方がないといえばそうなのだが、スバルの頬には痛々しい傷痕を隠すような治療の跡が施されている。

「その……身体の具合はどうだ？」

「あ……うん。大丈夫だよ。お医者さんの話したと二三日で退院できるって言ってたし！」

「そっか……じゃあ、花とかは要らなかつたか……」

「えっ!？」

驚くスバルがヒロの手に視線を移せば、ヒロの手には色鮮やかなお見舞い用に包んだ造花があつた。

最近、大きな規模の病院ではお見舞いの花の持ち込みを衛生上の理由から遠慮してもらつ傾向にあることを知っていたヒロは予め

造花ならばと聞いていたりする。

「うわあああ……………」

同年代の異性からお見舞いのお花など貰った経験が無いスバルにとってはかなりのサプライズらしく、目を輝かせる。

「……………本物じゃなくてゴメンな。」

「ウンウン！全然！スツゴク嬉しいよヒロ！ありがとうツ！」

「喜んで貰えるなら選んだ甲斐があったよ。」

あとこれ。まあ月並みだけどフルーツの詰め合わせだな」

「リンゴにバナナにマンゴー…メロンも！」

こんなに高そうなの……………ほ ホントに貰っていいの!？」

「ん？ああ、全然だいじょうぶだいじょうぶ。」

これ食べて、しっかり治してくれ」

「で…でもお…」

「それに…スバルのケガ、俺にも責任があるからさ…」

「……………えっ？」

突然の独白にスバルが困惑するのも無理は無い。

いくら考えても彼女には思いあたる節が全く無いのだから。

そんなオロオロとするスバルにヒロは「やっぱり気付いて無かったか」と小声で呟きながら口を開く。

全てを包み隠さずに。

スバルが凶弾に晒されていた時、実は陰から一部始終を見ていたこと。

見ていたにもかかわらず、見張りの違法魔導師たちの捕縛を優先させてしまい、その結果スバルが傷を負ってしまったことを。

全てを話し、ヒロは再度頭を下げる。

やってしまった ……

せつかく仲良くなれたのに、確実に嫌われたなあ ……と、後悔と共に。

「なあ〜んだ。そんなこと?」

「……………へっ?」

しかし、掛けられた言葉は覚悟していた罵声では無く、全く予想外の穏やかなものだった。

「だってヒロはさ、みんなを無事に助けるために一番良い方法を探ったってことでしょ?」

みんなが無事に、笑顔で帰れるようにするために ……さ。」

「いや　でも……」

「それに……ね……」

「？」

「犯人に……撃たれてるときさ、何となくだけど　……時間稼いだら
ヒロが助けに来てくれるなあ……って……ぼんやり頭過ぎったんだ。

そしたらさ、本当に助けに来てくれた！」

不思議だよねッ！と、スバルは無邪気に笑う。

何とも無邪気な笑顔を向けるスバルにヒロは何も言えなくなる
というよりかは、これ以上の謝罪の言葉は逆にスバルに対して失
礼になると感じ、出かけた言葉を心に引っ込める。

ヒロはそれ以上は謝罪の言葉は出さない。

そんなもの無くとも、二人の心は短いやり取りで解りあえたのだ
から。

「そ　　そうだー！リンゴ剥いてやるよ」

代わりに彼の口から出たのは照れ隠しの言葉。

「え　　…いいの！？ならさあ、ウサギさんの形とかできる！？」

「いやまあ…できるけどさ…スバル　　ベタすぎないか？」

「まあ、ヒロはわかってないなあ。それがいーんだよ」

「はいはい。ウサギさんねーっと」

「ここが病室だということを忘れていたのかのような楽しげな笑い声が室内を包み、賑やかな時間が過ぎていくのだった。

午後からスバルは検査があるとのこと、ヒロは病院を出ることになった。

帰る間際スバルから連絡先の交換を持ち出され、即OKを出したのだが、そこで新たな問題が発覚した。

ヒロ＝ラインハートは次元漂流者。本人すら完全に忘れかけていたのだが、彼はこちらの世界での通信手段を未だに確保していなかった。

そう、密度が濃すぎる日々の中ですっかりこぼれ落ちてしまっていた通信手段の確保。

そのことをスバルに説明すると、とりあえずはとスバルは自分の連絡先を紙に書き、渡す。

勿論、仕事用とプライベート用との事。

とりあえずは最優先で確保して、連絡を入れる約束をし、ヒロはスバルの病室を後にした。

「ん …あれ…」

病院のエントランスを歩いていると、ヒロの視界に見知った顔が
というよりか、その見知った顔はあからさまに不機嫌さを隠し
もせずに仁王立ちしているではないか。

明らかに待ち伏せという表現が適切だろう。

見知った顔はヒロを見つけるや否や無言でクイツと“外で話しが
ある”と合図し、そのままスタスタと歩いていく。

「……………なんだ？」

何をしたいのかわからないが、下手に刺激して機嫌を損ねられ
ると面倒なことになると判断したヒロは素直に見知った顔の後に続
くことにした。

一言でいうならば律義とでもいうのか、病院から出ると見知った
顔、ティアナ＝ランスターはわざわざヒロがそばに来るのを待って
いた。

ただし、その光景を第三者が見る限りは二人の間柄が決して親しいものではないことが見てわかるほどに、流れる雰囲気は張り詰めている。

「アンタもスバルのお見舞い？」

先に口を開いたのはティアナ＝ランスター。

「……も　　つてことは……」

「何よ……なんか文句ある!？」

「いや別に……」

不機嫌から一変、顔を真っ赤にしながらティアナのオレンジ色のツインテールが逆立ったのは、ヒロとしては錯覚であってほしいところだ。

彼女の殺意すら感じられる視線にチキンなヒロが耐えられるわけも無し。視線をあからさまにずらす。

ただティアナの様子はどこかおかしく、妙にソワソワしているようにもヒロには見えた。

ティアナは一つ大きく咳ばらいをすると、ズズイッとヒロとの距離を一気に縮める。

その距離　　約20センチ。

突然のティアナの行動に当然ヒロは戸惑う。

ヒロの方が背が高いため自然とティアナから見上げられる形になるが、どこかソワソワと落ち着かない彼女の目づかいに居心地の悪さを感じてしまうのは年頃の男の悲しい性さがなのだろう。

ここは当然距離を取ったほうが　と後ろに歩を出そうとするが、僅かにティアナの行動の方が早かった。

「……………ん」

「……………へ？」

おもむろに差し出されたのは二つ折りにされた紙切れ。

「あの…ティアナさん…これって…」

開いた紙に記されていたのはティアナの連絡先だった。それも、ご丁寧に仕事とプライベート用の両方だ。

「……スバルの…受け取ったんでしょ？」

「いやまあ…そうだけでも…」

「なに！？…スバルのは受け取れたのにアタシのは受け取れないっていうの！？？」

「いえまさか！喜んで！受けとらせていただきます！」

「な　なら…いいけど…こ　光栄に思いなさい！美少女の連絡先なんてアンタにはそうそう縁が無いんだからね！」

「“美”　少女？」

「……なんか文句でも……」

「いえ！ありません！サー！」

本当ならツツコミの一つでも入れてやりたかったヒロだが、射殺さんばかりに放たれるティアナの強烈なプレッシャーに負け、即敬礼してしまう始末。

しかし、どこか安堵した様子のティアナは一つ深呼吸。

「とりあえず端末手に入れたら連絡、よこしなさいよね」

「お……お……」

言い終えると踵を返し、今度はスバルのお見舞いに行くのか、そのまま病院に向かい歩いていく。

病院の方へ歩いていくティアナの後ろ姿を見ながらヒロの頭の中は激しく混乱していた。

なにせ、未だに理由はよくわからないものの、いくら鈍感唐変木のヒロとてティアナは自分に対して（主に魔導師ランクについて）

あまり良い感情を持っていないことだけは感じていた。

それもつい二日前までは確実に　　だ。

それが日を跨ぎ、一体どんな心境の変化　　…いや…もはや革命
が起きたとしか思えない。

もしかしたらフェイトかギンガ辺りが上手いことフォローを入れてくれたのではないかと仮説を立てているところに　　…

「……………ヒロ！」

ふと、ティアナが足を止めクルリと振り返った。

「どーした？」

「アンタのこと、ほんの少しだけど認めてあげるわよ…！」

「……………は？」

「かかかカンチガイしないでよね！？ほんの少し……………完全に認めた

わけじゃないんだからねッ！！」

言い終えるや、そのままモノ凄いスピードで病院内に走り去ってしまっ。

「……………」

対する予想外の言葉をブツケラレた当事者といえ、脳がティアナの言葉の意味を理解できず完全に“真っ白”になり、人が行き来する道のド真ん中で立ち尽くす。

彼がティアナの言葉の意味を理解し、それを腹の底から驚愕の絶叫を挙げるまでには約5分かかったのに本人が気付いたのは大分時間経った後だった。

第九話 〽はじめてのお仕事は (後編) 〽 (後書き)

【喫茶白金〽ネコ耳ツンデレメイドさん始めました。〽 (飯)】

白金「どうも〽。今回もはじま え？タイトルが何かおかしい？

…まあ、まだまだ飯の段階ですから(苦)

そんなことより今話でようやく、はじめてのお仕事は 編が終了
しましたね。

というわけで今回のゲストをご紹介しましょうか。どうぞ〽〽!

スバル「はじめまして〽。スバル〽ナカジマで〽す!」

白金「よく来てくれましたね。ささつ、こちら …あれ？スバル
さん、今日はもう一人呼んでたはずだけど?」

スバル「アレ?いない?一緒に来たんだけど……お〽〽〽い!テ
イ〽〽ア〽〽〽!」

???「ウツサイこのバカスバル!」

白金「ムムツ…声は聞こえるが姿は無し……」

スバル「もお〜しよーがないなあ〜。ほーら、こんなとこに隠れてないで〜」

???「なっ!?ちよ ヒヤアッ!?アンタどこ触っ」

スバル「ホレホレ〜早く〜」

ティアナ「〜〜〜〜?!?!?覚えてなさいよ〜…!」

白金「まったく、ただか登場シーンで何をモタモ」

ティアナ「アンタが1番の元凶よ!」

【オレンジハイキック】

白金「ハグラバツ?!?!?」

スバル「今日のティアのは　白っと」

ティアナ「なにサラっとメモってんのよ!?!」

【オレンジハイキック（逆回転Ver）】

スバル「ないすばんちらばらっ!?!?!」

ティアナ「そもそもなんでアタシだけ衣装がちがうのよ!しかもこんな…こんな…」

白金「ウム!ネコ耳メイドさんだな。しかもコスプレ仕様じゃない
正統派のメイド服だが、どうかしたのかね?」

ティアナ「だから!なんでアタシがこんな着なくちゃいけないのよ!」

ネコ耳スバル「細かいこと気にしちゃダメだよ〜」

ティアナ「……コイツら……間違いなく似た者同士だわ……」

白金「それでは改めまして今回のゲスト。スバルⅡナカジマさん、
ティアナⅡランスターさんです」

スバル「よろしく願いします！」

ティアナ「よろしく願いします……」

白金「それでは早速だけど、はじめてのお仕事編を通してみて、ど
うだったかな？」

スバル「う〜ん……あたしは……アツ！ティアとヒロとリンとギン
姉でアイス食べに行ったのが楽しかったなあ〜」

ティアナ「アンタ……それ、本編未公開シーンじゃない……」

スバル「やっぱりあのアイスは最高だあ〜」

白金「たしかに……あのシーンは……壮絶だった……おそるべし！クラ

ナガンDX！

まさか、リアルでアイスのピラミッドが存在するとは……」

ティアナ「しかもギンガさんもスバルと同じのを余裕で完食するあたり、やっぱり姉妹よね」

白金「いや、もう一人いました…完食した人物が……」

ティアナ「まさかリンが完食するとは思わなかったわね。」

白金「アレを完食できる者はアイスに身も心も奪われ、血で血を洗うことも躊躇しない呪われし業者　アイス狂信者だけがなせる奥義だよ……」

それに……」

ティアナ「それに？」

白金「本編未公開な一番の理由はだな……お会計での予想以上の額に本気崩れ落ちてしまったヒロの表情が哀愁に満ちてて……」

それがまたいいという製作スタッフさんの声が多数あったのだが、ソレ以前に主人公の表情としてどうなのよ？という声もたくさんあ

つてな……

最終的には未公開シーンとなってしまうたわけだね」

ティアナ「た…たしかにあの金額はアタシとしても予想を超えたモノがあつたわ……」

白金「店員さんにお金を払うとき、中々手が離れなくて……断腸の想いで手を離れたあの瞬間 ……離れ行くお札たちを見送るそのシーンはもはやジ リレベルだったよ……」

ティアナ「まあ、スバルはしかたないわよ。ホンモノのアレだし」

スバル「うゝゝ…そ そんなこと言っんならティアアだって！」

ティアナ「な なによ……」

スバル「あたしみたもん！ティア、この間のオフにヒ口呼び出してデートしてたもん！」

ティアナ「な なああつ！?!?!?」

白金「マジですかスバルさん！？！？」

スバル「うん！だって、あたしたち全部見てたもん！」

ティアナ「“たち”！？複数！？ちょ あんた！？」

白金「ふむ…それは興味深いねスバル君…是非に詳細を…」

スバル「いいよー じゃあ今からギン姉とリンを …」

ティアナ「呼ぶなああああッ！！！！！！」

ピンポンパンポーン…

【ただいま映像と音声途切れています。大変申し訳ありませんが、しばらくお待ちください】

白金「ええ、一部映像に乱れがありました」

スバル「ごめんね」

ティアナ「あんなたちのせいでしょ?!?!」

白金「というわけでスバル君からの情報と後日徹底した取材を敢行して、いつか本編か番外編で製作することが決定しました」

スバル「いえ、いえ、いえ！」

ティアナ「ちよおツ！だからその話しは」

スバル「ティア、そんなネコ耳でフリフリのメイドさんが何言っても信憑性がないよ？」

白金「まったく、語尾には『にゃん』を付けなきゃだめじゃないか！」

スバル「そうだよティアにゃん！素直になって！ほら、にゃんって

言って！」

ティアナ「ばばバツカじゃない！？言うわけないでしょ！？！？」

白金「でもリンは普通に言ってるぞ？」

スバル「ホントに！？」

白金「あ…ああ…（喰いつき良すぎなんだけど…）朝ヒロを起すときに言うのは事実だ」

ティアナ「ッ！？！？」

スバル「どどどんなふうに！？！？」

白金「え 映像あるけどみ」

スバル&ティアナ「『はやくみせて（なさい）！！！！』」

白金「う…うむ…（逆らえば…死ぬ！？）では映像、再生だ…」

スバ&ティア「」
.....
」

次回へ続く！

第十話 、『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』(前編1)

皆様…約一ヶ月におよぶ更新の停止…本当に申し訳ありませんでしたあ〜〜ッ！

正直なところ、ハマって抜け出せなくなっていました…

否、現在進行系でハマってしまってます…

とある新作ゲームに！

紅茶姫最強〜！

ツンドラ魔女最強〜！

狼ツ娘最高〜〜！

やっぱり猫もいいよ〜〜！

つてかブロンドシスターさんにミニスカ狩人、みつあみツインな魔法使いつて！

エデンは 存在した！

欲をいえばキリはないが、せめて海賊令嬢とか導き手とか氷姫とかのフラグが欲しかった！！

もしや、私が知らないだけで存在するのか？

新年に入り特番が続く中、必死に遅れを取り戻そうと頑張ってるので、皆様応援してください！

それではお待たせしました。今話はいよいよ読者の皆様の希望により、あの方が登場します！

予定では二部、三部構成で、色々どんでん返しのモノも考えていたり？

質問、要望、感想などは大歓迎です！

それでは新年初の本編、どうぞ~~~~!!

今年もよろしくお願いします！

第十話 、『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』(前編1)

カーテンの隙間から入る明るい一筋の陽光は、一日の始まりを上げる。

静かな とても静かな時が流れるその中で、眠りの底からゆっくりと覚醒する者がいた。

その者にとっては睡眠こそが唯一、本当の意味での休息ができる時間であるのは本人が一番知っていた。

深く説明はいらない。

常々、その者は危機に晒されていた。

詮索などいらない。

もはやそれが常となりつつあるのだ。

諦めの境地　　というやつだ。

だからこそ、その者は、せめて睡眠だけはしっかりと。次の日のイロイロな事象へ対応するための十分な体力を回復させたいだけなのに。

たったそれだけの　　ささやかにもほどがある願望のはずなのに

……

表現としてはありきたりで使い古されたベタなものではあるのだが、それでも使わずにはいられない。

“ 神も仏もあつたもんじゃない…… ”

その者の意識はゆっくりと浮上してゆく……

ゆっくりと……

まどろみの中にいたその者が一番始めに感じ取ったのは、香り。

鼻を擦る芳醇な香りは例えるならば最高級品の桃のような甘い甘い香り。

しかしその者はまどろみの中にもかかわらず、「はて？」と疑問に駆られる。

こんなにもハッキリと鼻が感じとるほど良い香りが出るモノ桃の香りなぞ、自分の持ち合わせのモノには無いぞ…と。

次に感じたのは 違和感。

何故か身体が動かないのだ。

否。身体が動かないのではない。

ガツシリと掴まれているような感覚……

やはり何かがおかしい!?

急激に浮上する意識。

寝ぼけ眼を開いてみると

「……し……る……?」

視界を覆うのは白一色。

「……ッ……!??」

否。チガウ!意識が急激に覚醒していく。

正確には純白。目に映るのは綿とレース生地。

跳ね上がりそうになる心拍数を冷静さを努めることで抑えながら自らの状況を確認する。

(ま……またですか…)

簡単にいえば、その者は“抱き枕”にされていた。

相手は ボタンもろくに閉まってないワイシャツを纏った下着姿の女性。

ワイシャツの隙間から堂々と姿を現す女性特有のレースのフリフリが付いた下着をなるべく視界に入れないように、深い深いため息を一つ吐く。

頭を動かすことは出来ないが、こんなことをする輩の心当たりはある。

確信といってもよい。

幾度となく繰り広げられてきた聖戦が今日もまた始まるのかと思えば、溜め息しか出ないが、いつまでもこの状態が続くのは非常に好ましくないと判断し、声をかけようと口を開こうとするのだが

…

(……………ん?)

一瞬ふと、更に何か違和感を感じた。

それは、幾度と無く自らの貞操を賭けた聖戦を勝ち抜いてきた実績があるからこそ気付けた違和感。

(……………サイズが…ちがう?)

真っ先に頭に浮かんだのは自らの使い魔。

幾度とない色仕掛けと実力行使のせいで、年齢に似合わない圧倒的なポリユームの感触は不謹慎かもしれないが、もはや身体に刷り込まれてしまったと言ってもよいだろう。

だからこそハッキリと違いに気付くことができたのだ。

本人からしてみれば、コメントに困ることこの上ないのだが

ただ、気付いた瞬間、背筋に冷たいものが伝わる。

自らがよく知る存在で無いのならば、今隣にいる 正確には自らを抱き枕がわりにしながら夢の住人と化しているのは何者なのか

!?

レースのフリフリ下着が目飛び込んでくるのを極力意識しない方向で視野を広げてみると、新たな情報が入ってきた。

奇しくもそれは自らの懸念が現実のモノには変わった瞬間でもある。

「にゅわ… ツ!?!?!?」

奇妙な声を上げながら距離を取ろうと試みたのだが

(は はずれない!?!?!?)

絶対に離さないという無意識なのに意図的なモノを感じてしまうくらいにびくともしない。

厄介なのは、焦れば焦るほどにホールドしている力が強くなっていく気がするのだ。

「ん~~~~だ~~~~め~~~~はなれ~~~~ちゃ~~~~めっ~~~~なの~~~~っ
……」

囁かれる猫撫で声と鼻腔をくすぐる甘い香り。脳が麻痺する感覚に精神が陥落しそうになるのだが

「は にゅあああつ~~~~!?!?!?」

押し付けられた胸が最後の駄目押しとなった。

わけのわからない奇妙な声を出し、普段は出来ないであろう柔軟かつ俊敏な動きで抱き枕役から逃れることに成功するが、代償にその者は反動でベッドから落ちてしまう。

「ん~~~~にゅ~~~~」

対する謎の存在はユツタリとした動きをみせる。

正直に言つならば彼、ヒロ＝ラインハートは相当に混乱している。

気がつけば見知らぬ部屋　などというオチは無く、もはや見慣れた自室。

ただちがうのは、ベッドの上。

猫のように丸まっているのは腰まである亜麻色の髪に、ろくに閉じていない　所タイロイロ目のやり場に困るワイシャツを纏った否、ワイシャツしか纏っていない自分と同年代に見える女性。

いまだに夢の中なのだろうが、その寝顔を見る限りは自らの同居人である人物や使い魔と比べても遜色ない容姿。

(……………思い…出した…)

平静さを取り戻したら色々と思ひ出した。

この人物が、どういう人物なのか。

何故自分の隣に寝ているのか経緯は定かではないが昨晚の記憶と照らし合わせるならば、たしかに眠りにつくその瞬間まで自分一人

だったわけだから、問題の人物がこの部屋に来たのは自分が眠りに
ついた後だということになる。

「うっ……にゅ……にゃ……おとうとくん……おはようにゃの……」

自らの昨日の記憶を確認していると、問題の人物がようやく目を
覚ます。

が、どこからどうみても眠そうである。

「……………おはようございます……なのはたん……」

「ん……イタタタ……あたま……イタイの……」

「のみすぎです……」

「にゃ……だめだよ……おとうとくん……けいごはきんし……。あとお
ねえちゃんってよばなきちゃ……なの……」

「（な……なんとという幼児化……）わ　わかりましたから。とにかく
フェイトの部屋戻って着替えて顔洗って！」

「なのはおねえちゃんってよんでくれなきゃや〜なの〜」

「……………」

「おとうとくん〜…」

「……………なんですか？」

「えへへえ〜〜……………だっこ」

「フエイトヘル〜〜プ！」

もはや色々なモノが臨海点をむかえたヒロはこの家での最後の砦である同居人に助けを求め自室を飛び出るのだった。

本来清々しいはずの朝が何故、こんなにも混沌とした状況になっているのか ……

時間は約二十四時間前

昨日の朝までさかのぼる。

波乱に満ちたヒロの囑託魔導師兼誓約者として、クラナガンシヨツピングモール人質立て籠もり事件から早十日。

報告やら事後処理やら手続きやらからようやく開放され、再び依頼待ちの身となったヒロ。ラインハートがオフを満喫しようと決めた日の朝。

今にも泣きそうな同居人、フェイト。テストタロツサ。ハラオウンの相談を受けていた。

「　　というわけなんだ……」

「えっと……つまりは、一緒についてきてほしい……と？」

「だ……ダメ……かな……」

フェイトが何を相談しているのかというと、実はフェイト、二日

ほどもえに自身が小学三年生からの親友の一人で、管理局とその他次元世界にその名を轟かせる『エースオブエース』高町なのはとプライベートな通信をしていた。

互いに日々が多忙なため、中々休みが重ならず最後に会ったのは二ヶ月も前なのは余談ではあるが、親友との他愛のない会話の中で彼女 フェイトは、なのはの異変に気がついたのだ。

元来、なのはが何かと自分のキモチよりも他人を優先させる性格を知っているフェイトは、長い付き合いから、こういうときにどんな言葉をかけるべきなのかも心得ているのだが、どうやら今回は思いの外、深刻だと感じた。

同時に、自分一人には荷が重いということも。

交遊関係が無いわけでは決してないが、こと、なのは関連では相談できる人脈は限られてくる。

有り体なことかもしれないが、管理局内でも一部を除くが、決して少なくない畏怖の眼で見られていることを彼女は知っている。

余程気心が知れていない人物以外に相談できないのが現実で、残念ながら今のところ心辺りがある人物たちは、管理局の慢性的な人手不足の為に多忙を窮めているので、相談できなかつた。

フェイトは悩んだ。悩みに悩んだ末に　ふと、フェイトの優秀な頭脳は閃きを発動した。

そつだ、自分には頼れる身内がいるじゃないか！　と。

灯台下暗しとはよく言ったものだ

そんなわけで白羽の矢がたったヒロは現在フェイトから相談を受けているのだ。

「事後処理なんかは片付いたし、今はフリーの依頼待ちだから予定はガラガラだけどさ、その　……俺なんかが行ってフェイトの力になれるのかな……」

一方、相談を持ち掛けられたヒロからしてみれば、ほかならぬフェイトが自分を頼りにしてくれるのは嬉しいのだが、荷が重すぎるというのが正直な気持ちでもある。

それもそのはず。あまりにも馴染んでしまっているが故、保護したフェイトも忘れかけているが、元々ヒロは次元漂流者。

それになによりヒロは、なのはについては当然面識など一切無く、知識としてはフェイトとの会話や週刊誌、テレビの情報番組で取り上げられている程度。

そんなヒロがフェイトの大切な親友の悩み事にフェイトの身内と
いうだけで関与してよいものか ……

優柔不断を具現化したような自分が他人の悩みに関与するなど恐
れ多い …… などと想っていたりする。

ただ、そんなヒロの思いとは裏腹に、フェイトの期待値は予想を
遥かに超えて高い。

「ヒロだから！ …… その…ヒロだから…一緒に来てほしいんだ
…」

「いやあの…」

縋るような…ウルウルと雨の日に捨てられた子犬のような瞳で
正面から見つめられれば 優柔不断かつ、チキンハートなヒロが
断れるはずがない。

なによりトドメの一撃が下されるのは自らの使い魔のひとつ。

「私の愛する契約者^{マスター}がオンナノコを泣かせるわけないよね？」

ヒロ個人としては“愛する”というワードを否定したいのだが、首を右に向ければフェイトの泣きそうな顔、左を向けばニコニコ笑顔ながらもどこか有無を言わさぬ迫力を滲み出すリンの顔。

ヒロが何を考えようと既に結果は出ているのだ。

「できる限りチカラになれるようがんばります……」

ヒロ＝ラインハート、当然のごとく陥落である。

「……………これはまた……」

「でっかいねえ〜！」

ミッドチルダ管理局地上本部。

首都クラナガンでの規模では管理局の施設としては最大規模で、文字通り地上部隊 主に『陸』の総本山である。

ヒロとリンがフェイトに連れられここにいる理由としては勿論、なのはを訪ねてきたからである。

遙か高くそびえ立つ地上本部を見上げながら、ヒロはフェイトに教えてもらった情報を簡単ではあるが思い出していた。

高町なのはは航空魔導師 空戦という、いわゆる空を飛びながら戦うことを得意とする魔導師であるが、陸戦であってもエースオブエースの名前に負けない強さを持つ、オールラウンダーであること。

得意とする魔法は主に射撃や砲撃といったものを好んで使うこと。

最近はこちら地上本部の敷地内で他の魔導師に教導を施しているとのこと。

さすがは親友というべきなのか、フェイトは、なのはのスケジュールを事前に把握していた。

肝心の作戦のつかみとしては地上本部に用事で来たフェイト、ヒロ、リンの三人が“偶然”なのはに遭遇し、彼女の悩みをそれとなく探るというもの。

少々 あからさまな感じがしないでもないが、重要なのは、確実に高町なのという人物とのコンタクトだ。

「それにしても」

「うん。なんていうかさあ〜」

これもまた当然だが、ここは管理局の地上部隊の中枢。そこらじゅうに管理局の制服を着ている者が忙しいそうに動いている。

フェイトも執務官の黒の制服を着ている。

しかし、ヒロとリンは違う。

108部隊では大して気にはしなかったが規模が規模だけに、ヒロとリンのような私服は自然と浮いてしまう。

「たぶん他の人たちから見れば私とヒロ、悪いことしてフェイトに捕まった犯人に見えてるんだよ」

「リリリン！私はそんなことしないよ！？」

「ホントお〜？？」

「うっうっ……」

涙目のフェイトをニヤニヤと意地の悪い笑顔のリン。はたからみれば確実に悪者なのは後者だ。

もう少し見物していてもよいが、まだ建物にすら入れていないことを考えれば、この辺でフェイトに助け舟を出さなければとヒロは口を開く。

「まあまあリンそのくらいでえ。」

「は〜い」

「うん。それじゃあフェイト、俺たちここは始めてだから案内よろしくお願いしますね？」

「うん！任せて！」

むんず！と気合いを入れるフェイトを見ながらこれで一安心と安堵する。

が、彼女はいち早く次の行動を開始する。

「よ～～っし！じゃあしゅっぱ～～っ！」

「なわあっ！？」

「ッ！？！？！」

ほんの一瞬でヒロの左背後に回り込んだリンはそのままヒロの左腕に抱き着き、ヒロの左腕は彼女の豊満な双丘に埋もれていく。

最近は耐性がついてきたとはいえ、不意打ちとなれば話しは別。

形を変幻自在に変えながら自分の腕を包み込む何とも言い難い感触に、一瞬でヒロの顔はボンッ！と紅くなってしまう。

全てはリンの手の平の上で進められているのは言うまでもなく、もちろん目の前でこれを見せられた彼女　フェイトの次の反応すらもリン思惑通りの展開へと進む。

「リ　リン！あのね！こういう人が沢山いるところでその
“　　そういうスキンシップ”は良くないと思うんだ！

その……ヒロも　　」

「ええ〜〜ッ！？ヒロ、嫌がってるふうには見えないよお〜？」

「ばアッ！？」

「……………」

想定外のフリに対応できるほど今のヒロの思考は平静なはずがなく、当然焦りで言葉が出てこない。

結果、それはリンの言うことが“あながち嘘ではない”と、フェイトに誤解を与えるには十分なモノになる。

瞬く間にフェイトの瞳からハイライトが消えていくのをヒロは身体全体の神経が感じとる。

背筋から尋常ではない冷や汗が噴き出す。

「（これは　マズイ!?）」

フェイトにどんな心境の変化があったかはわからないが、最近のフェイトはリンのヒロに対する過激なスキンシップに過剰に反応するようになってきた。

はじめのうちはヒロもフェイトが“お姉さん気質”でそう言ってるのだらうと思っていたが、どうもそれはチガウ気がしてならないと感じている。

最近では、もちろん幻覚な筈だが、フェイトの全身からドス黒いオーラのような幻覚にしては笑えない部類のモノが見えて仕方ないからだ。

普段が冷静沈着かつ理論的だけに、こうなったフェイトは反動からか極度に子供っぽくなってしまい、どんな行動に出るのかわからないのが厄介なところである。

最初からこうなることを計算しているリンだが、彼女らしさはここからが本領発揮である。

「そういえばもうひとつ腕に空きがあるなあ。いったいそこには誰が収まるのかにゃ〜?」

「ッ!？」

「なあっ!？」

ここまでできてヒロとフェイトはリンが何を企んでいるのかわかっってしまった。

顔を真っ赤にしながらもフェイトの視線はヒロの右腕を捉えて離さない。

その様子をニヤニヤと意地の悪い笑顔で見るリンは視線をヒロに映すが、こちらもフェイトに負けず顔を真っ赤にしてるのだ。

彼女にとっては目論み通り。

あとは最後のヒトオシをしてやる。

「ヒロ」

「な、なんだよ……」

「オトコノコにわあ〜、待ってる女の子をエスコートする義務があるってことくらい知ってるよね〜?」

「……………」

やられた! まんまと彼女の手の平の上で躍おとらされていたとヒロはここでようやく気付く。

視線をニヤニヤ顔の使い魔からずらせば、こちらは依然として顔を真っ赤にしながらも期待を含んだ上目遣いの視線を送るフェイト。

明らかに待っているし、何を期待しているかなど考えるのも愚問なのだがそれでも考えずにはいられない……

というよりは現実逃避がしたいだけ。

ヒロ＝ラインハートにはつい最近、似たような体験をしたばかりだった。

思い出すのは108部隊の隊舎をギンガ＝ナカジマと、リン＝ストラトス＝ドレッドノートを両手に華状態で歩いたときの男性隊員たちから送られた負の視線の嵐。

あの時ですら自らの明日に絶大なる不安を覚えたというのに、だ。

ここは管理局が誇る地上本部。いわば地上部隊の総本山ともいべき場所であって、規模は108部隊の隊舎とは比較にならないほど大きい。

ということはだ、そこにいる人の数も比較にならないくらい多いのは容易に想像できるわけで、もしもここで108部隊のときの再現などしてみる …

…想像することすら脳が拒絶する。

しかし、熱い期待の眼差しを送り続けるフェイトが視界に入るたび、ヘタレの権化ともいえるヒロ＝ラインハートの脆弱な精神力は悲鳴をあげる。

そうだ。

最初から選択肢などあって無いようなもの
いや、存在しない
のだ。

「……………あの……………」

「　　ッ！？　なななにかな！？」

ヒロ＝ラインハートは決して男気溢れる少年ではない。寧ろ、正
反対……………

何度でも言おう。

ヒロ＝ラインハートは元の世界でも自他共に認める“ヘタレ”で
ある。

そんなヘタレなヒロが僅かな勇気を振り絞りできることといえば
……………

「……………あっ……………」

「……………」

顔を真つ赤にしながらなるべくフェイトの顔を見ないように、空いている右手を差し出すくらいなものである。

フェイトは差し出された右手をゆっくりと握る。

「ッ!?!」

「……………ッ!」

どちらも負けず劣らず顔を真つ赤にさせながら俯く。

「ん〜…私としてはちょーっと物足りないんだけどお…まあ、今回はこれくらいで許してやろう!」

八割方満足そうにウンウンと頷く自らの使い魔を見てヒ口は堅く堅く決意する。

ささやかな反撃を ……

今朝リンが鼻歌混じりで冷蔵庫にしまっていたジャンボシュークリームの中身のカスタードクリームだけ食べてやるうと。

恥ずかしいという気持ちはほんの一瞬だけ、慣れればそれほども無い ……

というのはまあ有り得ないわけで、地上本部の建物内に入って数秒足らずでモノの見事に大勢の視線が集まり悪い意味で注目的になってしまつというヒロの懸念は本人の予想通りとなつてしまった。

「いやあ〜。いい感じな目立ち具合だにや〜」

「……………」

「あう……………あう……………」

同じ状況にありながら、これほどまでに感情の差があるのも珍しいだろう。

口笛を吹きながら突き刺さる視線を楽しむかのような発言をするリン＝ストラトス＝ドレッドノートのお気楽加減というか圧倒的な存在感に、契約者たるヒロは、この全てが規格外の使い魔と契約してから何百回目になるだろうか　疑問に思う。

何故に自分が契約者^{マスター}なのだろうか、と。

地上本部に入るやいなや視線の暴風雨に曝されるヒロ＝ラインハートの胃は本日の締め上げが最高値を記録してしまった。

何が原因など説明すら不要だろう。　もちろん、『両手に華』が原因である。

ガツチリとワガママボディーをこれでもかと押し付けながら、ご満悦の表情で左腕を占拠している自らの使い魔、リン＝ストラトス＝ドレッドノート。

依然、恥ずかしさで顔が真っ赤になり、周囲の視線にオドオドしながらも、その右腕はシツカリ組んで離すという選択肢など有り得ないのだろう　∴ 右腕を占拠しているフェイト＝テスタロッサ＝ハラオウン。

特にフェイトという人間は管理局では『雷神』『心優しき金色の死神』の通り名でも広く知られているし、その美貌と、執務官というエリートながらそれを感じさせない親しみやすさから男性局員のみならず女性局員の人気も根強い。

そんな、そこらのモデルやアイドルなど軽く凌駕するほどの美女二人を『両手に華状態』などという男の浪漫を実現させているのは、どこにでもいそうな『普通の少年』なのだから、その衝撃度は計り知れない。

当然、男性局員からの視線は嫉妬、殺意のどちらかしかない。

というよりは、ヒロの耳には平和を司る管理局員としてはあるまじき暴言の数々が副音で聞こえていたのだが、当のヒロ＝ラインハートはといえば …

「……………」

自らの両腕が埋もれる至高と表現するに値する代物のせいで凄まじい速さで精神力がガリガリ削られている真っ只中。

残り僅かな精神力を総動員させ、鼻から鮮血をジェット噴射させないために尽力しているため、ハッキリ言ってしまうと“些細”な視線にまで気を向けている余力など無いのが本音だったりする。

…もつとも、一部の中立的な存在や、ミーハーに興味が無い一部の女性局員から見れば、美人捜査官と美人民間協力者によって“補導された少年”に見えていたのだが。

インフォメーションでフェイトが当初の目的通り、今日の高町なのはの予定を確認し、今いるであろう場所　すなわち地上本部のある訓練場へヒロとリンを連れて歩を進めようとしたときだった。

「あれ？フェイトさん！今日は地上本部に用事とか無いはずなのにどうしたんですか？」

「シャ　シャーーー！？」

「あ、はい。って　なああッ！?!?!？」

「『…』」

フェイトの知り合いだろうか、フェイトがシャーリーと呼ぶ茶色のストリートロングの髪に知的さをアピールするようなメガネをかけ、管理局本局執務官補佐の濃い青色の制服を身に纏った女性が駆け寄ってきたのだが、突然表情が驚愕のモノへと変わる。

もちろんヒロとリンは彼女が何にそんなに驚いているのかはイマイチよくわからなかったが、いち早く気付いたフェイトが瞬間的にヒロの腕から離れたことで、ようやく事態が理解できた。

おそらくはシャーリーと呼ばれた女性からしてみれば普段のフェイトが男性と親しげに腕を組むなど考えられないんだ、と。

「あ、アハハハハ……… ……邪魔しちゃってゴメンナサイ！」

「ちちちちがうんだよシャーリー。これは！」

「いゝゝえ！フェイトさん！ごまかさなくても大丈夫です！というよりフェイトさんに春が来たと思うと私、嬉しくて嬉しくて！」

「あの ……まあ、そうなればその私も…じゃなくって！！ととりあえずは ……話を聞いてええええゝゝッ!?」

「なるほどお〜。そちらのお二人がフェイトさんが言った」

「そ、そうだよ」

あまりに目立ちすぎるといふ理由から地上本部のカフェテリアの
一つに場所を変えることに。事情を説明しているうちにフェイトも
冷静さを取り戻した。

内心、リングが「おっしいなあ〜」などと残念がっているのは
また別の話したが……。

お互いが一通りの自己紹介を終え、ヒロは目の前に座るシャリー
ーと呼ばれる女性の情報を纏める。

シャリオ＝フィニーノ。階級は一等陸士でフェイトの執務官補佐
にして優秀なデバイス技師とのこと。

「そついえばシャーリーはどうしてここに？」

「あ、はい。実は例の件で、なのはさんとレイジングハートさんの定期シンクロデータチェックとかその他諸々で。」

「…あの…少し気になったんですけど…」

「……………なのはのこと？」

「は、はい…」

フェイトと会う約三十分前、シャーリーはなのはと会っていた。

その時、シャーリーは何かが変だと感じた。

「その……………なのはさん…パツと見る感じはいつも通りのなのはさんなんですけど……………何て言うか、その…上手く言えないんですけど…」

「……………うん。シャーリーの勘、当たってると思う…」

「フェイトさんもそう思いますか？」

「…このあいだ…ね…」

フェイトもプライベートな通信で今日のシャーリーと同じような何とも言えない違和感を感じたことを打ち明ける。

「フェイトさんもですか…これはいよいよ決定的、ですね…」

「うん。なのは、絶対何かに悩んでる………」

神妙な表情で「うゝゝむ…」と唸るフェイトとシャーリー。

「ムツフツフウゝゝ…私、わかつちやつたなあゝゝ！」

「エエゝゝツ!?!?…」

「ほほほんとですか!?!?…」

「………なんだろ…このいつも通りのな胸騒ぎは………」

「その人が抱える悩み…それはズバリ! 『恋の病』! 間違いないね

「！」

「『……………』」

人差し指を天に掲げ、ズビシィッ！と効果音がつきそうなりんの
決めポーズを前に二者が言葉を失う。

「……………アレ……………どうか……………したの？」

何の反応も無いことで流石に何かを感じ取ったリンが視線を戻す
と
…

「“あの”なのはが『恋の病』……………」

「“あの”なのはさんが…『恋』で悩む……………」

「『うん、ありえないよ（）です（）』」

「（な、なんだろ…ツツ）ミビゴころが俺とは違っ…　っていつか、
そこまで断言される高町なのはさんって……………何者？（）」

フェイトから話しを聞く限りは、なのはとフェイト、シャーリーは少なくとも同世代。

年頃の乙女の悩みとくれば恋愛というのも一般的には悩みの候補に入っけていても不思議ではないわけ（まあ、リンのように恋愛と断言してしまうのは早いとヒロは感じた）で、ヒロとしても候補としては入っていたのが本音である。

ただ、リンが『恋の病』と口にした時のフェイトとシャーリーの“ソレだけは絶対無い”と言いたげな表情にヒロはまだ会ってはいないが、高町なのという人物像がさらにわからなくなってしまったと同時に、恋愛方面を即・否定された高町なのはさんが少しだけ可哀相だと思ってしまった。

そんな中でヒロはこの世界に来た当初に管理局について色々聞いたことを思い出した。

慢性的な人手不足に飾りだけの労基法、過労死が絶えない世間では華やかと持て囃される管理局の職場事情を。

そこで確信する。

おそらく いや、会ってはいないがほぼ確実に、高町なのははワーカホリックだと。

ゆえに黙禱を捧げる。

年頃の乙女なのだから恋愛も良い経験になりそうなんだけどもなあ……などと、なのはやフェイト、シャーリーよりも年下のヒロはある意味、老成しきったような心持ちになってしまう。

ヒロ＝ラインハートとて、自身の恋愛などには消極的というか疎いというか鈍いというか……とにかく“ヘタレで意気地無し”なわけで、こと恋愛に関しては決して他人様に言葉を出せるほどの経験は無いのだが。

結局、このまま頭であれこれ考えるよりも、実際に会ってみたほうが何かしら掴めるとのヒロの提案で一同は再び、なのはに会うべく地上本部の敷地内のある訓練場へと行くことにするのだった。

「おおおおっ！……」

「う〜ん…これは何て言うか…スサマジイ…」

管理局地上本部第八屋外訓練場。その名の通り地上本部の敷地内にある訓練場の一つである。

屋外ということで晴れ渡る空の下に一同は来ている。

広大な訓練場の中には約五十人ほどだろうか、皆一様に同じ服装（この場合は管理局戦闘用バリアジアケットになる）の管理局の魔導師と推測できる者たちが、ある一点に熱心な視線を送っている。

その一点とは今、ヒロたちの目の先で行われている模擬戦である。

その数、五対一。

ある者は空を飛びながら魔法を撃ち、ある者は陽動をかけ、それぞれがそれぞれの動きを見せ、たった一人を追い込まんとしているのだが

「　　アクセル！」

対する一の方は、たったワンモーションで危機的ともいえる状況から抜けて見せる。

五人を相手に互角以上の闘いをしているその者の實力は、“格”が違った。

他の五十人とはただ唯一違う全身が純白の、何かの学校の制服のようなバリアジャケットに、デザインからして明らかに他とは違う紅い宝石のようなものが目立つ身の丈ほどありそうな長い杖。

「……………あれって……………」

フェイトに負けない端正な顔だち　いわゆる美少女。腰まで伸ばした亜麻色のツインテール。

「……………調子は……………うん。大丈夫そうだね」

「レイジングハートさんもいつも通りですね」

約三十程度の桜色の魔力弾が数秒で構成され、一斉に放たれ、相手の五人に襲い掛かる。

ただ、実力の差がありすぎるせいか、ものの一分足らずで最後の一人を残し全員が魔力ダメージでノックアウトされ、最後の一人も…

「デイバイーン……バスターーツ！」

空中から容赦無く放たれた桜色の魔力の閃光にのみこまれ、光りがおさまった時に現れたのは、無惨に地面に倒れている姿だった。

「流石、なのはだね。」

「はい。なのはさんとレイジングハートさんの模擬戦弾は優秀ですから、相手に怪我は無いと思います」

「……あのさ、ヒロ…」

「……まあ、そっだよな…」

奇しくもヒロとリンは同じ感情を抱いていた。

「『やりすげでしょ』……」

ゆっくりと空から降りてくる圧倒的な存在感と瞳に不屈と信念を
持つ管理局が誇るエースオブエース高町なのは
…

これがヒロラインハートが高町なのはこの存在を目の当たりに
した瞬間である。

第十話 、『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』(前編1)

パパパパパ〜 パ〜 パ〜 パア〜 パア〜 パア〜 パア〜

(某映像BGM風)

スバル「は…はじまつたあ〜…」

ティアナ「な、なんか緊張するわね………」

?

?

?

ピンポンパンポーン

【今映像を検証した結果、あまりに過激な描写、展開を含むため、作者及び製作サイドの判断により公の公開を控えさせていただきます。あらかじめご了承ください。

映像終了後のトークで映像がどのような内容か一部想像できますが、作者及び製作サイドは一切の責任を負いません。

なお、要望があれば番外編として編集バージョンの製作を検討させていただきます】

~~~~~  
Fin?



【竜殺しの左ハイキック（ツンデレVer）】

白金「ないすばんちらばっ!?!?!?」

スバル「ティアティア!この映像メモリーは没収ってことでいいよね!」

ティアナ「ととと当然よ!管理局員としては民間協力者のその…しゅ趣味もシツカリ把握してその……」

スバル「そそそうだよね!検証の一環だよね!どんなにマニアックなプレイが映つても管理局の人間としてはシツカリと勉強しなくつちゃだよね!」

ティアナ「あああたりまえよ!!決してその……悔しいからとか対策とかそういう目的じゃ…アアアッ!とりあえずサツサと帰るわよ!」

スバル「そうだね!帰ってもう一度最初から」

ティアナ「余計なこと言わない!!」

白金「……………行ったか…フツ……………さて、これで種はまいた。あとはこれをいつ収穫するか…」

とりあえずは番外編の候補として挙げておくとするか……………

まずは今回はここらへんで締めるとしよう。お相手は作者の白金でした。バイバ~~~~~イ！」

第十話 く『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』（前編2）く

さすがは白い悪魔専用パート。あらゆる面で凶悪ですね……

どうも、作者です。前回の話しを読んだ察しが良い読者様ならもう  
おわかりだと思いますが、なのはさん……かなり強烈な仕上がりに  
なってますね……

それに伴い文字数もドンドン増え ……過去最長な予感がします！

今回は前編2になりますね。

さて、ここで後書きについてのお知らせですが、製作サイドの協議  
の末、バトルパートやシリアスパートが続くので、一段落した後  
にゲストの“あの方”をお呼びする形を取らせていただきます。

感想、質問、リクエスト大歓迎！随時、お待ちしてます。

それでは本編、どうぞ……！

ゆっくりと空から地上に降り、脚をつけたところで高町なのははバリアジャケットを解除すると、髪型はサイドポニーに変わり、服装も青と白が基調の教導隊の制服姿に戻る。そして一息吐くと、今度は休むことなく指示を飛ばす。

なのはによって気絶させられた五人の魔導師を救護班に診てもらうためである。

いくらなのはの訓練用魔法弾が優秀だからといっても物理的ダメージは存在するわけで、身体的に全く無傷ではない。

救護班によって五人が運ばれて行くのを見送ると教導を再開する。

一通り解説、質問を交えたと再び指示を出し、模擬戦を組んでいく。

「……………そこは」

時には模擬戦を止め、丁寧に指導を挟みながら ……

「……………！」

視界に一瞬、よく知る人物が入ってきたが、訓練を止めることはせずに指導に戻るのだった。

「随分とスパルタな感じなんだなあ………：俺だったら絶対ついてけない……………」

遠巻きに激しい動きを繰り返す魔導師たちを目で追いながらヒロ  
「ラインハートは思わず弱音を吐いていた。

「でもさあ……、なーんか動きが保守的っていうか、きょーかしよ

的っていうか ……」

「なのはの教導は基礎と基本に忠実だから」

「体力的にも精神的にも厳しい訓練内容ですけど、教導が進むにつれ確実に安定した実力が付く構成になってるんですよね」

旧知の仲のフェイトとシャーリーのなのはを見る目からは、何があっても揺るがない信頼の感情がヒロには見てとれた。

「ふっふん………」

「……リン？」

ヒロがリンの僅かな異変に気がつけたのは、未だ左腕に絡み付く彼女の腕に少しだけ力が入ったからである。

「……どうかしたか？」

「ん？……なっふんでもなっふいよッ！」



ただ、ヒロが声をかけると妙な力がフツと抜けた。

「そっか」

「うん」

だからこそヒロは下手に聞くことはしない。

自分に向けられる笑顔が“心配は無用だよ”と語っているから。

ふと視線を戻すと訓練が終わったのだろう、先ほどのバリアジャケットを解除し、栗色髪をのサイドポニーに纏め、青と白を基調にした制服姿の人物

高町なのはが駆け寄ってきた。

「お待たせフェイトちゃん！ひさしぶり！どうしたの？お仕事？」

「なのは、ひさしぶり。うん、捜査関係で少しだけ。それと、なのはに紹介したい人達がいるんだ」

「？ あっ！？もしかして一昨日話してた？」

「うん。二人とも、いいかな？」

事前の打ち合わせで、まずフェイトがヒロとリンをなのはに紹介することになっていたので、二人はその通りに動く。

「たぶん、八神家のみんなからも話しは聞いてると思うけど、私が保護した」

「はじめまして、ヒロ＝ラインハートです。えっと、高町さんの活躍はフェイトから色々と伺ってます。こっちが使い魔の…」

「どうも。リン＝ストラトス＝ドレッドノートです。よろしく」

「高町なのはです。えっと、ヒロ君に　リンさん……でいいのかな？」

「あ……なのは……実はヒロとリン、二人はその……私たちより年下なんだ……」

「『ええええ~~~~~~~~ッ!?!?!?』」

思わず驚きの声を挙げてしまう。しかも、なのはだけではなくシヤリーもだ。

「聞いてませんよフェイトさん!?!?」

「あ、あれ?」

「その……二人は……いくつなのかな……」

「俺は15、です」

「『ぜ…全然年下…』」

「う〜ん…私たち魔族に歳とかはあんまり関係無いんだけど、人間換算でいうと…私も15かなあ〜」

「『なあああああつ?!?!?』」

この驚き、見るのは何度目になるか。ヒロとフェイトは散々見えてきたので慣れっこだが、やはり、リンのプロポーションで15というのは相当に衝撃的なのか、なのはとシャーリーの口からは「ありえない」とか「反則だ」などといった言葉が飛び交ったとか。

それにしてもヒロは改めてなのはを観察する。

フェイトの話しもそうだが、なるほど、管理局が広報で取り上げるだけあり容姿はかなりのもの。加え、先ほどの模擬戦での圧倒的な実力…

「（ほんと、普通の女の口っぱいんだけどなあ〜……）」

リンの年齢でわたわたするその姿は、何処からどうみても年頃の女の子にしか見えない。

「い、ごめんね…取り乱しちゃって……」

「あ、いえ。大丈夫ですよ高町さ」

「なのは」

「……へ？」

「その高町さんってすんごく他人行儀な感じがするから禁止。堅苦しいのは嫌いだしね」

「いや、でも……」

「それに、フェイトちゃんのことでもフェイトって呼び捨てにしてるし」

「あ、それはその……」

正直なところ、どうしてもいいのが困ってしまっ。

フェイトの場合は不可抗力というか、泣き落としされたというか

…

そもそもヒロは異性を呼び捨てにすることに慣れていない …  
というよりは、苦手だったりするわけで …

「やっぱり私って…怖いのかな……」

「ッ!？」

保有スキル『優柔不断』のせいでウンウン唸るなか、不意になのは表情が寂しげなものへと変わる。

「そっいえば、さっきの模擬戦も見られちゃってたっけ……」

「いや、その……」

勿論、バッチリと見ていた。

大の男五人を相手に一步も退かず、むしろ圧倒的なチカラで完膚無きまでにねじふせ医務室送りにしたところまでバッチリと。

「ヒロ……」

「ヒロ？」

「ヒロ君？」

横を向けばフェイト、リン、シャーリーが心なしか非難の眼差しを送っているようにも見える。…というよりか、見ていた。

「うっ……」

「……………」

視線を前に戻せば、今にも泣きそうな管理局が誇るエースオブエース。

「……………なのはさんで勘弁してください……………」

「むう」……まあ、最初はそれでもいいけど…慣れたら“さん付け”も禁止だからね！」

「……………精進させていただきます……………」

頬を膨らませながら少し不機嫌そうに上目遣いを繰り返すなのは表情には出さないがドキッとさせられたのは本人だけの秘密である。

なのはの呼び方、そして、何故かシャーリーのことも「フィニーノさん」から「シャーリー」へと強引に変えられるという一場面もあったがそれも鎮静化したのだが ……

「そういえば、はやてちゃんから聞いたんだけど、ヒロ君 ……囁託魔導師なんだよね？」

この何気ないなのの一言が、ヒロにとってはこの上なく好ましくない展開へと突き進んでしまう。



「えっ？いや、あの…」

無論、自分に災いが降り懸かることを察知する能力（いわゆる草食動物に備わる危険察知能力的なモノ）に人一倍長けているヒコは瞬時に、なのはの質問に答えることが自らの身を危険にさらす死亡フラグ的なモノだということだと理解する。

理解するのだが …

「……………？」

「……………」

小首を傾げながら明らかに期待を籠めたなのはの笑顔に背中に寒いモノを感じる。

…どこかで目にした記憶があった。

確かアレは……

「（……………シグナムさんと同じ眼…だ…）」

そう。 バトルマニア 戦闘狂な烈火の将、シグナムの期待を籠めた眼差しと同じモノだ。

これはマズイことになりそうだと、ヒロは何とか回避するための上手い策を頭の中で構築していく。

……………が…

「そうなんだよなのは！ヒロは凄いだよ！魔導師ランク総合A Aで、しかも！この間のクラナガンシヨッピングモール人質立て籠もり事件を解決に導いたんだ！」

敵は身内に潜んでいた。

おそらくはその時のことを思い出しているのか、興奮気味なフェイトによって、ヒロとしては最も言ってほしくない情報が開示されてしまう。

「えええッ！？あのニュースでやってた！？！？」

「そそそれってまさか、今、地上本部と本局の一部の魔導師たちの間で話題に挙がってる……って！あの囑託魔導師ってヒロ君のことなんですかあゝゝツ！?!?!?」

「しかも、ヒロの実力は囑託魔導師試験で実力検査で模擬戦の相手をしたシグナムのお墨付きなんだよ！」

「『シグナムさんの?!?!?』」

烈火の将として管理局で広く名が知れているシグナムの実力は当然、なのはとシャーリーはよく知っている。

そのシグナムが試験官として手合わせをし、実力を評価したのだから、ヒロの実力には嘘が無いと、なのはは確信する。

「……………ヒロ君……………」

「……………なんですか」

来た…。

正直、最も来てほしくないヒロにとっては最悪の展開が来てしま

ったと、ヒロはなのはの表情から察知してしまう。

ウズウズしているというか、血が騒ぐというか、素晴らしい笑顔でひこと

「模擬戦、しよっか！」

「……………」

振り向けば「目的の為だよ！」という表情をしながら期待の眼差しを送る本来味方であるべき筈の御三方。

古びたブリキのオモチャのようにギギギと顔を前に向ければ、「絶対に断るわけないよね？」と信じきっている管理局のエースオブエース。

「……………御意……………」

断ることが絶対不可能な空気の中、ヒロにとって予想通りの言葉が投下され、ヒロはソレを受けるしかなかった。

急遽模擬戦を申し込まれたヒロだが、ヒロはデバイスを持っていないためバリアジャケットなども当然無い。

今ヒロが着ているのは明らかに模擬戦にはそぐわないジーンズにジャケットとラフな私服。

このまま模擬戦をすれば少なからず私服が汚れたり破れもするだろうと気がついたのはは、わざわざ上下が黒の訓練着を用意し、ヒロは更衣室で着替えをすませた。

再び訓練場に足を運ぶと、なのはの教導を受けていた魔導師たちが、なのは、フェイト、シャーリー、リンを前に整列しているのがヒロの目に入ってきた。

「あの、……これ、なんですか？」

男女合わせて五十人近くの魔導師たちの様々な感情を含む視線を一手に受けながらヒロはなのはに聞く。

「あ、うん。せっかくだからみんなにヒロ君のこと紹介しようってことになって」

「はあ……」

気を取り直し前を向くのだが

「（か …… 歓迎されてね〜〜〜ッ！ってか、メツチャアウエーですよ！？）」

主に男の魔導師からの負の視線にヒロの心は折れかけそうになる。

ちなみに女性魔導師たちの視線には気付く余裕が無かったヒロではあるが、女性魔導師たちの第一印象は、中々に好評価だったりする。

善くも悪くも管理局という組織は色々堅く、とりわけ陸の…地上部隊は男性局員の体育会系割合が格段に高い。

角刈りだったり、軍人氣質だったり、軍隊氣質だったり。

だからなのか。中性的な容姿かつ、どこかフワフワ抜けているような。…それでいて女性サイドの保護欲を絶妙にくすぐる印象を持たせるヒロは、それだけで好印象を獲得できるというわけだ。

…ひそかに男らしさに憧れている本人が聞けば数日は立ち直れないであろうショックの大きい事実なのだが……。

「えっと、みんな紹介するね。こちら囑託魔導師のヒロ＝ラインハート君です」

「……………ども……………」

「こちらのヒロ君はみんなより少し年は下ですが、魔導師ランク総合AAAの実力があるとのこと。急遽、私と模擬戦をしてもらったにしました。」

みんなには高ランク魔導師の動きをしっかりと見て貰って、今後の教導の参考にしてほしいです。」

なのはが魔導師ランク総合AAAと言った瞬間、ざわめきが起こるが、予想の範疇だったのはは素早く手を叩き場を静める。

「それじゃあ、そのまま安全圏まで下がってね。準備が出来次第、

模擬戦を始めるよー！」

「ヒロ君！」

「あつ、シャーリーさん。あれ？フェイトとリンまで」

全員がなのは指示通り安全圏まで一斉に下がる中、フェイト、リン、シャーリーの三人がヒロの傍に歩いてきた。

「ヒロ、これ」

「え？……これ……」

おもむろにフェイトが差し出してきたのはフェイトの愛機、待機状態のバルディッシュ。



「実はね、はやてさんからヒロ君のデバイスの製作を頼まれたの思  
い出したんだ。それで、良い機会だから少しでもヒロ君の戦闘デ  
ータが採れればと思ってるね。フェイトさんとバルディッシュさんに  
ご協力をお願いしたんだよ」

「データくらい別にいいですけど、フェイトはその……俺なんか  
バルディッシュさんを貸して大丈夫なの？」

「うん。ヒロなら信頼できるし、大丈夫だよ。」

「あの…俺、デバイスとか使ったことも無いのに、そんな当たり前  
みたいに言われても…」

《私もヒロ殿ならば信頼に至る人物であると確信していますので》

「バルディッシュさんまで……」

「大丈夫だよ、ヒロ君」

トランクから計測機器のようなものを出しながら空中の画面にコ  
ンソールを叩きながらシャーリーが笑う。

「ヒロ君にリンカーコアが存在しないのに魔力が存在することを含め細かい事情はフェイトさんとはやてさんから聞いてるし、今回バルディッシュさんは主にヒロ君のサポートに廻ってもらったから」

「…………サポート？」

「そつだよ。戦闘データの中でも今回一番必要なのは、ヒロ君の空戦に関するデータなんだ」

「空戦…………」

「難しく考えなくても大丈夫。バルディッシュはヒロの飛行魔法をサポートするっただけ分かっただけいいんだよ」

「なるほど…………」

持つてるだけで良いのならいくらか気が楽だとヒロはフェイトからバルディッシュを受け取る。

《よろしくお願ひします、ヒロ殿》

「いちごこそ、バルディツシュさん」

「……うん、こんな感じかな。それじゃあヒロ君、今から少しやらなきゃいけないことがあるんだけど、良い？」

「あ、はい」

純白のバリアジャケットを展開させ、なのはは自身の相棒であるレイジングハートのシステムチェックをしながら、頭の中でこれから行う模擬戦の戦術を練っていた。

なのはがヒロにこの模擬戦を頼んだのは、一重に今の教導で起きている問題が背後にある為だ。

『本局嫌い』。

一部の部隊を除き、地上本部の影響力が強い部隊ほど魔導師たち

に共通して顕れる現象。

有り体な事を言ってしまうえば現状、なのはは露骨なまでに避けられている。

場所はクラナガンでも教導を施す魔導師たちの所属は本局が殆どなのはにとつて今回、教導を施す魔導師の所属が全員地上部隊、しかも地上本部直属は初めてのことだけに、噂に聞いていた『本局嫌い』を体験したなのはの心は大きなショックを受けてしまった。

彼等彼女等も大きく管理局の組織の一員であるから、教導に関していえば真面目のだが、

カタチだけ真面目に取り繕う者たちに実力が付くわけもなく、その結果が先ほどの五対一の模擬戦である。

勿論、全員が全員というわけではない。

寧ろ、同性からの支持は高い。

…が、やはり数の大半を占めるのは男性で、そんな男性魔導師たちからしてみれば、女で、しかも自分たちよりも年が下の小娘に教導を受けるのは彼等のプライドが許さないといいわけだ。

ただ、年が十代のなのはとて管理局入局九年目。

元々、幼少期の家庭環境のせいで、年齢の割に達観した感覚を持つのはも、男性至上主義を持つ局員たちの考えが理解できないわけではないが、それでも、そういう考えは胸のうちに秘めて欲しいと思ってしまう。

《マスター、大丈夫ですか？》

「あ、…うん。大丈夫だよ、レイジングハート」

エースオブエースとして、他の局員の前で弱い部分を見せるわけにはいかないし、元々人前で弱い部分を見せることが苦手なのは。

彼女にとって、自らの心情を理解してくれる相棒の声は救いでもある。

「（しっかりと…せつかくヒロ君がくれたチャンスなんだから……）」

なのはがヒロに模擬戦を頼んだのは、本局嫌いの局員たちに高ランク魔導師同士の实力を見せることで刺激を与えること。

所属や年齢、性別などという取るに足らないくだらないプライドを捨てさせ、ただ一人の魔導師として自分を見てほしいという願いをこめて……。

「……………うん……」

全力を尽くそう。

不屈の心を瞳に宿す。

「魔力…ですか？」

「なのはが自身を奮い立たせているとは露知らず、ヒロはシャーンから説明を受けていた。」

「そうだよ。今のバルディッシュさんはマスターのフェイトさんの魔力を基に機能してるから、ヒロ君の魔力をバルディッシュさんに認識させる必要があるんだ」

「わかりました。えっと、普通に魔力を流すだけでいいんですよね？」

「ちよつと待って。ん…………… ……バルディッシュさん、準備いいですか？」

《 ……準備完了》

「……………はい、了解です。それじゃあヒロ君、バルディッシュさんに魔力流して」

「あ、はい……」

コンソールを叩き続けるシャーリーの横でヒロは目を閉じ集中する。

「『……………』」

「……………」

見守るリンとフェイトの視線にも自然と力が入るのが、視線を送る彼女たちにもわかった。

「……………いきます……………」

《魔力認証開始》

ヒロの声とほぼ同時、バルディッシュが金色に輝く。

「進行度25%。システムチェック……………オールグリーン」

「……………」

コンソールを叩き続けるシャーリーに合わせ、ヒロはバルディッシュに流す魔力を維持し続ける。

魔力を流し続け約三十秒ほど経過したとき ……

《……………魔力認証完了。ヒロ＝ラインハートの魔力適合を確認。》



システムチェック … オールグリーン。お疲れ様でしたヒロ殿

バルディッシュが完了を告げる。

「うん、こっちも大丈夫。ヒロ君、もう魔力流すの止めても大丈夫だよ」

「……………ふう……」

深呼吸し、ゆっくりとヒロは目を開く。

目を開き、手を閉じたり開いたりを数回繰り返し、前方のなのは顔を向ける。

「なのはさーん！」

「なになん？」

「五分くらいいいので、準備運動とかしても大丈夫ですか？」

「大丈夫だよー！」

バリアジャケットを展開しながら笑顔でなのはが応える。

「五分で大丈夫なの？」

「うん…まあ、何とかなるぞ」

「ヒロ……バルディッシュがサポートしてくれるから大丈夫だと思  
うけど、怪我には気をつけてね？」

「リンもフェイトも心配しすぎ。まあ確かに俺一人だったら俺も不  
安だけど、バルディッシュさんがサポートしてくれるんだからダイ  
ジョブダイジョブ！」

「ですよー！バルディッシュさん？」

《はい。何があってもヒロ殿に怪我などは負わせません》

心強いバルディッシュの言葉に後押しされながらヒロは歩を進め  
る。

チラリと後ろを見れば、やはり心配そうなフェイトの横で、笑顔でリンがサムズアップしているのが目に入る。

「さて……」

グルリと視線を遠くに映せば、安全圏で自分の方を見ている局の魔導師たち。

前方約十五メートル先には興味津々といった感じで視線を送る管理局のエースオブエース高町なのは。

「（まあ、あれですよ…勝とか負けるとか以前の問題のような気がするけど、そこは気にしない方向で行きますか…）それじゃあバルディッシュさん。まずは…飛行からお願いしますね」

《了解》

電子音声が発せられ、ヒロの身体はゆっくりと空中へ浮かびあがっていく。

様々な感情を含む視線を受けながら。

第十話 、『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』(前編3)

やってまいりました前編3。今回はすこーしだけ短い気もしますが、構成の都合上、ここで切るのが良いと製作サイドで決めました。

最近、他の先生方の作品を沢山読ませていただいてますが、いかに私の作品が脆弱か再認識させられました……orz

しかし、参考になったことがあります。

もしかしたら、ウチの主人公が主人公として弱すぎるのがいけないのかもしれない。

無双……チートにすべきなのか……

感想、質問、リクエスト、アドバイス、受け付けてます！

それでは本編、どうぞ！

正直な心境をありのままに表現するならば、彼ヒロ＝ラインハートの心は感動で溢れていた。

ヒロがいた世界では魔法戦闘中、わざわざ浮遊などの術式を行使しながら戦闘を行うような光景が見られることは極めて珍しい。

【浮遊術】 【飛行魔法】 など、呼び名は様々だが、“空中に浮く”  
又は、“空を飛ぶ” などという行為は、ただでさえ膨大な魔力の消費する。

その上、複雑な術式を制御しながらの戦闘行為が非効率的でしかないのは現代魔法戦闘理論においては常識であり、これを戦闘に用いる輩は潜在的 もしくは生れつきの魔力タンク型か、ただの目立ちたがりの馬鹿かに分けられると言ってしまっても過言ではない。

当然、ヒロ＝ラインハートも、魔法戦闘においては【浮遊術】や【飛行魔法】は使わない。

…というよりは、使えない。

彼の場合は他とは少々違い、術式そのものを正式に学んだのではなく、独学な我流というのが一番の理由で、一応は使えるレベルではあるものの、独学な我流のため、完全版よりもさらに燃費が悪い。

当然、魔法戦闘で使えるレベルであるはずもなく、せいぜい移動目的で使うのが関の山。

それがヒロ＝ラインハートにとっての【浮遊術】。

ただ、ヒロとて立派なオトコノコ。

自由に空を飛ぶことへの憧れもあるし、前から近々、不完全な術式を改善し、完全なモノにしようと計画していた。

つまり何が言いたいのかといえば、ヒロ＝ラインハートの心は踊っていた。

「うっひやあああああ~~~~~っ!!」

今、ヒロはバルディッシュによる飛行魔法の完全制御により、青い大空を飛んでいるのだから。

「いやあ〜ホント、さいつこ〜ッ!」

《どうやら、成功のようですね》

「バルディッシュさん? いやあ〜貴方最高ですよ! こんな楽に魔法で空を飛ぶなんて俺のいた世界ではありえないですもん!」

《恐縮です、ヒロ殿》

急上昇、急下降、旋回をしながら自然に笑みがこぼれるのをヒロは自覚する。

複雑な術式 ……この場合は、“こちらの世界”の術式になるが、制御を全てバルディッシュが担当しているおかげで、ヒロはそのほかのことに思考が専念できていた。

全身に淀み無く魔力が流れている。それを制御しているのがバルディッシュだということもヒロには直ぐにわかった。

バルディツシュの制御が無ければここまで効率が良い飛行などできるはずがない。

今の飛行に費やしている魔力量は、ヒロが独学我流で行使用する飛行魔法の約10%、正式な術式の約4.5%程度しか費やしていない。

専門の計測器を使用していないヒロには正確な数値など解るはずもないが、魔力消費量の感覚に天と地の差があるのだ。もはや数値以前の問題といってもいい。

比べようがない低燃費、バルディツシュが…デバイスの存在の大きさを実感する。

「う~~~~~む~~~~」

飛行動作を繰り返すうちに、ヒロはミッドチルダの魔法に興味が湧いてきた。

もしもミッドの魔法と自分の世界の魔法を組み合わせることが出来たら、今まで使うことの出来なかった魔法や、半ば破綻気味な研究テーマの壁になっている問題が一気に解決するかもしれない。



「バルディツシュさん」

《どうしました？ヒロ殿》

「次元漂流者な俺でも、ミッドの魔法って使えるんですかね？」

気付けば、勝手に言葉が出ていた。

ヒロは仮説を立てた。もしも自分がミッドの魔法を使うことになった時、最大の障害になることといえば、それは何かと。

答えは、『リンカーコア』。ミッドチルダや管理局が管理する次元世界では常識の魔力を精製する第六臓器。

魔力を保有する者が持つリンカーコアを基準に魔法やデバイスが確立しているミッドチルダにおいて、体内にリンカーコアが存在しないにもかかわらず魔力を保有しているヒロがミッドチルダの魔法が使えるかは正直なところ事例が無いため疑問としか言えないからだ。

《……おそらくですが、ヒロ殿が魔法を使うことは可能だと私は推

測します。》

「ほ、ホントですか!？」

《ヒロ殿の世界では魔力を持つ者の大半が属性魔力 ……こちらの世界の用語で言うならば、魔力変換資質という類いにあてはまると推測します。

魔力変換資質を持つ魔導師をヒロ殿が知るところで挙げるならば、マスターであるフェイトと、シグナム殿がわかりやすいでしょう》

「あ、そっか!確かフェイトとシグナムさんは」

《マスターは電気 ……ヒロ殿の世界でいう雷属性の魔力変換資質を。シグナム殿は炎熱の魔力変換資質を持っています。

ここから推測するに、重要なのは魔力の有無であり、おそらくリッカーコアの有無は魔法の行使にはそれほど影響が無いかと考えられます。》

「なるほど……そう言われてみれば確かに……」

ヒロの頭の中でバラバラのパーツが一つに組み上がっていく。

仮に、リンカーコアが魔法を使用するのに不可欠だとするならば、現時点でリンカーコアを基本としたデバイスのバルディッシュにヒロの魔力認証をさせたり、飛行することも本来なら出来ないはずだからだ。

《もしよろしければ、試してみますか？》

「よろしくお願いします！」

思いがけない好転に笑顔でヒロは即答していた。

《それでは》

バルディッシュの説明は実に明確そのもので、異世界の魔法理論にも関わらずヒロにもしっかりと理解できる内容だった。

「なるほど……基本的にこっちの魔法って汎用性に優れているんですね」

《では、まずはマスターも頻繁に使用する魔法から説明しましょう》

「よろしくお願いしますー！」

バルディッシュの重力制御で空中に浮きながら動きを止めていたヒロは、再びゆっくりと上昇していくのだった。

ヒロ＝ラインハートが空の上で飛行魔法を試しているその下では、実に様々な声が飛び交っているのを、空の上のヒロ＝ラインハートは知らない。

声を出す者もいれば、じっくりと視線のみを向ける者も中にはいる。

「……………」

彼女　高町なのはは、そんな後者の類いに入る一人である。

ヒロの旋回する姿、急上昇からの急下降などを視る目は航空魔導

師としての …… 教導官としての目線そのもの。

目を閉じ、息を一つ吐く。

「……うん。はやてちゃんや八神家のみんな、それにフェイトちゃんのスゴイって言うのもわかるなあ。」

レイジングハートから見てヒロ君はどうかな？」

なのはは自らの左手に握る杖に問いかける。

《そうですね……》

点滅しながらレイジングハートは思考を始める。

《素晴らしい機動のように見えますが、おそらく飛行魔法についてはあまり経験がないのかと推察します》

「……うん。私も同じ見立てだよ」

レイジングハートの答えになのはも同じ考えらしく、肯定するよ  
うに頭を縦に振る。

「でも……だからといって……」

《油断は禁物です。マスターはいつも通りに》

「うん！手加減一切無しの全力全開！だね！」

エースオブエースの信念は揺るがない。

空中で一通りバルディッシュからの説明を受けたヒロは、ゆっくりと地面に足をつけた。

地面に足をつけた時、少し足がもつれそうになるが、何とか力を入れて転ぶことだけは防ぐ。

が、転びそうになるところはバッチリと見られていた。

「にやはは。大丈夫？」

「ああ、すいません大丈夫です。」

「ヒロ君は空飛ぶの、あまり慣れてないのかな？」

「お恥ずかしながら……俺のいた世界じゃ使っても移動手段程度な  
んですよね」

「あれ？いいの？そんなこと言って？」

「いや、まあ事実ですし……。それに、日頃から空を飛んでるなのは  
さんなら、さっきの動きで俺が空飛ぶのに慣れてないのに気付いて  
るはずなので、別に構いませんよ」

「そっか……」

内心、ここまであっさり言われ、なのははかなり驚いていた。

ヒロが言ったことは、少し見方を変えれば、自分が絶対的に不利

だと自らの手の内をさらしたも同然。

なのはは、前にプライベート通信ではやてと喋った時に、ヒロのことはある程度のことは聞いていたし、教導で会う機会が多いヴィータからも色々聞いていた。

その時の彼女たちの話振りからは、ヒロ＝ラインハートは自分の持ち札を明かすことを中々しない印象をなのはは感じていたのだが

…

「……………」

そうか！そうだったのか！ と、なのはの思考の点と点が繋がった。

色々な意味を籠めて頼んだこの模擬戦。

試されているのは外ほかならぬ自分なのかもしれない と。



なのはがヒロに対して盛大な勘違いをしていることにヒロが気付くわけも無いが、ヒロには、なのはを試そうなどという思惑は一切無い。

寧ろ小心者を地で行くヒロは、なのはの纏う雰囲気は鋭くなるのを感じると、草食系小動物にある生存防衛スキルを即発動させる。

先ほどの五対一の模擬戦を見る限り、なのはの攻撃は一発一発が一撃必殺の域にあり、まともに喰らえばどうなるか……想像するだけでヒロの背筋は寒くなる。

どうすれば攻撃を受けずにすむか。攻撃を受けたとしても、ダメージを喰らわないようにするにはどうすればいいか。

「なのはさん。模擬戦のルールはどんなのですか？」

まずは外枠から組み立てにかかると。

「そうだね……せっかくだから時間無制限の一本勝負。どちらかが魔力ダメージで戦闘不能になるまでにしようか」

「な、なるほど……」

せつかくだからの意味が分かりかねるが、ハッキリしたことがある。

真っ先に狙うべき“時間切れ”という選択肢が消えたということだ。

「それじゃあ、始めよっか！」

「……………はい……」

やる気のみなざるなのは声とは対称的にヒロの声は悲哀に満ちる。

これから喰らう魔力弾の硬さや痛みは想像するだけでヒロを億劫にさせる。

それでも …

「ヒュー〜ロ〜〜！ファイト〜〜〜 オ〜〜〜〜！」

無邪気にエールを送る自らの使い魔や、ハラハラした表情をしながらも目が合うと拳を胸の前でグツと握る同居人を見てしまうと、オトコノコとしては後に引けない。

フワリと中に浮くなのは、レイジングハートを構え、戦闘準備は終わっている。

「ハア〜〜〜……………」

大きな溜め息を一つ吐きながら、ヒロは愛用の黒い改造銃を一挺だけ抜き、弾倉を確認し、セットする。

「……………」

「……………」

空気が張り詰めていくのが、なのは、ヒロ、両者が感じ、最高潮に到達した瞬間

「『…』」

特別な合図無く、両者が動き、高町なのはと、ヒロ＝ラインハート模倣戦が幕を開けた。

第十話 く『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』（中編1）く

こんにちは、白金です。さてさて最新話は前回に引き続きバトルパートですが ……

やはり作者、バトルパートは苦手です！

文才が文才が文才が ……呪詛のように唸りながら執筆してました。

最近、とあるの第二期を再度見直してたんですが、やはりシスターさんにはロマンが詰まっています。色んな意味で！

だから私の小説の新キャラはシスターさんにしようかと……

まあ、この件は改めてということですね。

感想、意見、質問、アドバイス絶賛大歓迎！

それでは本編をどうぞ！



第十話 、『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』(中編1)

「レイジングハート！」

《アクセルシューター》

なのはの声に呼応するかのようにレイジングハートが点滅し、一瞬で、なのはの周囲に桜色の魔力弾が形成される。

その数、8。

初手がアクセルシューターでの様子見は、なのはの常套戦術。

すなわち、例えば様子見だろうと、彼女が手を抜かずに本気で倒し

にかかるという証にほかならない。

「これはまた…」

空を飛ぶなの是对し、ヒロは飛ばない。

いくらバルディッシュの制御が優秀だからといっても、戦闘となれば話しは別。

毎日空を飛んでいるなの是对し、普段から使っても移動手段にしか使わないヒロとでは空中戦の技術と経験値に絶対的な差がある。

さらに、今のヒロがなの是对して互角かといえば答えは否。

魔力保有量、魔法戦闘技術、魔導師ランク、全て、なのはが勝っているのは明らか。地形の面においても、空を自在に飛ぶことができるなのはに分があるからだ。



不規則な動きをするアクセルシューターを気にかけてながらもヒロは思考する。

いかにして、なのはを自分の得意な領域での勝負に持ち込むかを。

しかし、なのはが悠長にヒロを待つわけがない。

「いつくよ〜ッ！」

掛け声と共になのはがレイジングハートを振り下ろすと、それまで不規則な動きを繰り返していた桜色の魔力弾がヒロめがけ襲い掛かる。

「どっちらマジな感じですね……」

ヒロは何も持っていない左手を腰の後ろに持って行く。

桜色の魔力弾を十分自分に引き寄せ、タイミングをはかる。

否、計ったところまではよかった。

…が、彼にとって予測不可能な事態が発生した。

「あ　　キヤアア~~~~アツ!?!?」

神の　　いや、悪魔の微笑みか……

急に吹いた上向きの突風が、あるうことか、なのはのロングスカートを巻き上げたのだ。

…奇跡的にヒロから見た正面半分を……。

当然見えるモノはバリアジャケットを展開しているとはいえ、見えれば恥ずかしいシロモノ（ちなみに本日の色的にも）に変わりはない。

管理局が誇るエースオブエースとて華も恥じらう年頃の乙女。

なのはが戦闘中には似つかわしくない可愛らしい悲鳴をあげるのは女子としては当然の現象なのだ。

650

…そして

「へあっ!?!」

年頃の …ごく普通で平凡健全なオトコノコであるヒロ＝ライオンハートが、合法的ラッキースケベ現象に目を奪われないわけがない。

全く意図しない予測不可能で偶然な現象なのだからしかたがない。

しかたがない ……のだが……。

「 ……まずッた~~~~ッ!？」

目どころか意識ごと奪われたヒロの回避行動が遅れたのは説明すら要らないわけで ……。

桜色の魔力弾が地面に着弾して爆煙があがると、ヒロの放った絶叫は哀しいことにほぼ同時だった。

「ち　直撃！？シャーリー！？」

「いまサーチャーを飛ばしました。映像　来ました！

けどこれは　……　すみません。煙で詳細まではわかりません。

フェイトさん……大丈夫、ですか……？」

「……ごめん……シャーリー……ヒロがまともに攻撃受けたところ見たの初めてだからその　……動揺しちゃった……」

苦笑いを浮かべるフェイトはシャーリーが急遽飛ばしたサーチャーから送られてくる詳細映像が映し出されているモニターに視線を向ける。

視線を向けながら改めてフェイトは思考する。

なぜ、あんなにもアツサリと、ヒロがなのはのアクセルシューターによるダメージを喰らってしまったのかを。

攻撃を避けるという一点において、ヒロ＝ラインハートの技能は間違いなく天才の域にある。

ミッドチルダに飛ばされて来た初日、フェイトとシグナムの二人を相手に逃走した際や、囑託魔導師試験の実技試験の際のシグナムとの勝負が良い例だろう。

そんなヒロだからこそ、なのはのアクセルシューターを正面からまともに喰らったのにフェイトは疑問を覚えるのだ。

…もつとも、ヒロからしてみれば、悪魔の微笑みのせいで意識が丸ごと奪われたせいで回避行動が遅れたなどは格好悪いことこの上ないので言えるはずもない。

フェイトたちや地上部隊の魔導師からは、絶妙なアングル具合のおかげで、なのはに何が起こったか全く見えなかったのは、ヒロにとっても、なのはにとっても命拾いというところだ。

「出ました！ヒロ君です！」

「ッ!？」

そんな、どうしようもない当事者側の事情など知るよしもなく、疑問を消化できないフェイトの思考を現実に戻したのはシャーリーの声だった。

視線を再びモニターに向けると、そこには煙りが立ち込める中からゴロゴロと横回転しながら姿を見せるヒロがいた。

「フウ〜っ……なんだかんだでヒロ君、なのはさんのアクセルシューター避けてたみたいですね」

徐々に煙りが晴れ、地面にはアクセルシューターが着弾した痕があるが、ヒロには被弾した痕が無い。

「うん。ヒロ、避けきつたんだね。流石だ」

フェイトも安堵の表情を浮かべるのだが

「でもさあ〜…な〜んかスツキリしないんだよねえ〜…」

怪訝な表情で、リンが異を唱える。

「……なにがスツキリしないの？」

「だってさあ〜、避けるの上手いヒロがだよ？」

あの程度の数とスピードにテンパるなんてさあ〜……な〜んか  
ヒロらしくないじゃん!!」

「………たしかに……」

「いやいや、ヒロ君だって生身の人間なんですから判断遅れること  
だってあります。」

リンちゃんもフェイトさんも考え過ぎですよ〜。」



「そ　　そうだよね！ヒロだって人間だもん！判断遅れることだってあるよね！」

「いやあ〜…そりゃあ〜シャーリーの言うこともあると思っけど  
……

な〜んかチガウベクトルっていつかさあ〜…

もしかしたら私、スングクオモシロイシーン…見れなかった気がするんだよなあ〜……」

「『面白い…シーン？』」

目を細めながらモニター上で対峙するヒロとなのはを見つめるリ  
ンに、フェイトとシャーリーは首を傾げながらも視線をモニターに  
戻し、勝負の行方を見守ることにした。

「……………見た……………かな……………」

「……………」

ほのぼのな外野サイドとは打って変わって、重苦しい沈黙と、  
ペリペリした緊張感に支配された当事者サイド。

「……………見え…た？」

「いや……………あの……………」

勿論、原因は今、目の前で起きた嬉し恥ずかしハプニングだ。

もっとも、これといった特殊な趣味の持ち主で無いのはにとっ  
ては嬉しいはずが無いし、寧ろ恥ずかしいという要素しか無い。

ゆえに困るのだ。

これから発するたったひとことが、ヒロにとっては己のこれからの状況（物理的なダメージな意味で）を左右する運命の回答になってしまうのだから。

対峙するヒロとなのはの間に流れる微妙な空気。

なのはは平静を保とうと努めているが、顔の紅潮はどうにもならないらしく、彼女の頬は朱に染まっている。

対するヒロはといえば、マズイなあ……と薄々は感じているもの、認めてしまえば待ち構えているのは、記憶に新しい医務室送りになった魔導師たちの姿と同じ末路だけに、出せる言葉は決まっていた。

保身に走ろうとする中間管理職の心境よろしく。

「……見てません」

きわめて冷静に言い放つ。

が……。

「嘘だよ絶対！ヒロ君の目、泳ぎまくってるの！-！」

物の見事にバレバレだった。

「ううううううう~~~~ッ！」

顔を真っ赤にして涙目になりながら、なのははレイジングハートを力強く構える。

「あの……………なのは……………さん？」

「うっうっ~~~~~うっうッ!」

ガゴンガゴンと二度、重厚な音が響き、レイジングハートからは  
薬莖と煙が吐き出され、なのはの魔力が急激に高まりを見せる。

「いやあのその……なんというかそう！偶然です！不運です不可抗  
力です！」

「むっう~~~~~うっうッ!」

ヒロの必死の弁論も届かず、なのはの周囲に形成されるのは、先  
ほどとは比べものにならない数の桜色の魔力弾。

その数 約30。

「ちょ その数は反そ どわあああッ!」

無情にもレイジングハートが振り下ろされた次の瞬間、数も速度



アクセルシューターの動きに幾つもの緩急を挟み、ヒロの思考を遅らせ

「しま……」

バランスを崩したところを狙い撃つようにアクセルシューターをヒロ目掛け撃つ。

タイミング的に回避はほぼ不可能。

「ノリヤアアッ!!」

だったが、悪運が強いのか諦めが悪いのか、強引に身体を捻り、さらに動きを止めずに横っ飛びし、そのまま勢いに任せ横回転でゴロゴロ転がりながら間一髪、アクセルシューターの被弾を逃れる。

「ッ！」

アクセルシューターが地面に着弾したせいで、辺りが煙に包まれるが、素早く体を起こしたヒロは腰を低くし、なのはの追撃に備える。

フェイトやシグナムといった猛者と手合わせの経験があるヒロは、なのはが二人と同等の実力の持ち主ならば、この場面で追撃をかけてくることは充分有り得ると判断したからだ。

「……………ん？」

ただヒロの予測に反して、なのはからの追撃は来ない。

おかしい……………。



身を低くしながら警戒を絶やさずに煙が晴れるのを待つヒロだが、この待ちは“悪手”だった。

「（これ……）まさか!？」

ヒロが気付いたのと、煙が晴れてソレが見えたのは、ほぼ同時。

「ヒロ君の……」

ヒロ＝ラインハートの頭は、先ほどの魔導師たちの“正確”な末路を忘れてしまっていた。

「うわあ……遅かった……」

視線の先 正確には空の上でレイジングハートをヒロに向け、桜色の魔力をチャージしているその姿を見て 初見のインパクトの強さゆえ忘れていたことを思い出した。

高町なのはの本分は …… 砲撃魔法にあるということ。

「えっち~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ツ!!」

《【デイバインバスター】》

絶叫しながらレイジングハートの引き金を引いた瞬間、桜色の魔力の集束砲 直射型砲撃魔法【デイバインバスター】がヒロめがけ撃たれた。

轟音と膨大な魔力は、ヒロをのみ込む。

まるで、三度目は“避けさせない”と言わんばかりの勢いで…。

「いやあ〜、人間って大人しい種族だってウチの世界じゃ言われてるけど ……ズイブンブツ飛んだ人間もいるんだねえ〜 ……」

「あ……………あはは……………」

「まあ……………なのはさんは特別……………ですよね……………」

膨大な魔力を集束させた桜色の砲撃　　ディバインバスターを近距離から容赦無くヒロに撃ち込んだのは、正直な心境を言葉にするならば、リン＝ストラトス＝ドレッドノートはドン引きを通り越し、ある意味感心していた。

なのはをよく知るフェイトとシャーリーは苦笑いしか出来ない。

モニター内は、なのはの魔力の余波により映像と音声に若干の乱れは出るものの、なのはに異常は見られない。

「シャーリー……ヒロにバスター、当たったと思う？」

「うっくん……タイミング的に回避は不可能なはず……なんですよね」

コンソールを叩き、シャーリーはサーチャーを操作しながら映像を解析する。

そう、心配なのは寧ろヒロの方なのだ。

「なのはのバスター……痛いんだよね……」

「なのはさん……いつでも全力全開ですから……」

フェイトとシャーリーの二人がモニターの映像で見た限りでは、なのはのデイベインバスターに対してヒロは防御も回避も出来ず、デイベインバスターに飲み込まれた。

いかに管理局の魔法が非殺傷設定とはいえ、当たれば痛い。

ましてや、魔導師ランクオーバーSのなのはの砲撃魔法を非殺傷設定とはいえ、防御魔法も使わずに正面から喰らってタダで済むわけがない。

過去、実際に喰らっているフェイトは、なのはの魔法の威力を誰よりも分かっているという自負もある。

「シャーリー……医療班の要請、お願いできる？」

「それなら模擬戦が始まる前に手配しておきました。その……なのはさんですし……」

「そうだね。なのは……だから……ね……」

やはり顔を合わせ、苦笑いになってしまう。

模擬戦はここで終了だねとフェイトは展開しているモニターを閉じるためにコンソールを叩き操作する。

(ヒロには痛い思いさせちゃったなあ……。あとでちゃんと謝らな  
いと……………)

自然とフェイトの形が良い眉が下がるが……………。

「……………でも、ヒロは負けないよ……………」

「……………リン?」

煙が上がる方向を真剣な眼差しで見据えるリン。ストラトス。ドレッドノートは異を唱える。

「リンちゃん。気持ちはわかるけど、なのはさんのデイバインバスター正面からまともに喰らって立ってられる魔導師なんて管理局に

は  
…」

「それでも、負けないよ」

クルリとフェイトとシャーリーの方に身体を向け、妖艶で不敵な笑みを浮かべ言い放つ。

「だって私のヒロは私のマスターで、誓約者だからねッ！」

## 作者からの重要なお知らせ【2/6更新】

読者の皆さまこんにちは。作者の白金です。

いつも当作品を応援、閲覧していただきありがとうございます。

今回、作者は魔法少女リリカルなのはStrikerS EX【US】の原作。作者オリジナル小説を連載開始しました。

タイトルは

、Urobros【再の章】といいます。作者のマイページから閲覧ができます。

作品の概要は【再の章】本編に掲載しています。

是非、当作品と同様に応援してください！

知っているというレアな読者様へ。

こちらで連載する方を完全版として位置付けしたいので、向こうの



モノをかなりテコ入れして投稿しています。

更新などは活動報告で随時報告しています。ちなみに本日、ブログを投稿しました。

この作品同様、感想、質問、意見、評価、アドバイス、お気に入り登録は作者の更新速度にモロに出ます。

特に心の弱い作者は【感想】【評価】【お気に入り登録】の増加が作者を有頂天にさせ、更新速度が倍加させます。

是非、メンタルが弱く、心が折れやすい作者の為、熱い応援をお願いします。

第十話 、『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』(中編2)、『

「あう~~~~うう~~~~っ……」

全力全開のデイバインバスターを撃つたのはは、撃つた数秒後には後悔と自己嫌悪に陥ってしまう。

673

よくよく思い返せば今のハプニングは完全な不可抗力で、ヒロに落ち度は皆無だった。

《マスター……今のは間違いなく不可抗力でしたよ?》

「だ……だってえ……」

咎めるようなレイジングハートに、なのはは抗議の声を挙げる。

なのはとて頭では理解しているのだ。理解しているのだが　　気  
付いたときにはディバインバスターを撃っていた。

どんな状況においても冷静さを失わないのは、魔法を扱う者としては基本中の基本な心構え。例え、羞恥心が臨界点を超えてしまっ  
たとしても、だ。

ただ、やはり頭で理解しているつもりでも我を忘れてしまうのは、  
高町なのはがまだまだ精神的に未熟な十代の少女であることの証だ。

真っ赤に染まるなのはの頬からは、ほんのり蒸気が立つ。

《……ですが、マスターの攻撃は避けられたようですね……》

「……まあ、当然だよね……」

空気が一変し、なのはの目は鋭さを放つ。

「だってヒロ君には……」

レイジングハートを構え直しながら、なのははディバインバスターを撃ち込んだ影響で煙りが支配する地面を見据える。

「フェイトちゃんの……」

《ソニックムーブ!》

「フッ!」

「 ……バルディッシュがいるんだもん！」

《プロテクション！》

三度目は避けさせないと言わんばかりにヒロ目掛け、超至近距離から放たれたディバインバスター！

タイミング的に、ヒロが避けることは不可能だった。

ただし、それは『ヒロ個人のチカラ』では不可能ではあるが、『強力な味方』からしてみれば、決して難しいことでは無い。

寧ろ、高町なのはの性格や癖、行動を熟知している彼女の親友、フェイトⅡテストアロツサⅡハラオウンの優秀な相棒　バルディッ

シュに出来ない道理は無かった。

瞬時にバルディツシュがフェイト愛用の移動系魔法【ソニックムーブ】を自動で発動した御蔭で、ヒロはディバインバスターを直撃ギリギリで避けることに成功し、事無きを得ると、動きを止めること無く再度ソニックムーブを発動する。

そして、ソニックムーブを発動した事で更に広範囲に煙りが拡がるの中で気配を殺し、煙りに身を隠す。

その際、視線の先で何やらワタワタするなのはの姿に「ん〜？」と疑問に思うが、余計な思考は切り離し、戦略へとシフトさせる。

「バルディツシュさん……行きます……」

《了解しました。 マスター！》

「マー!? ……はい!」

否定しかけたが、それは違う気がした。少しの間とはいえ、フェイトはヒロに相棒を託した。

そこに籠められた彼女の想い。

彼女の相棒の想い。

大切にしたい　そうヒロは感じた。

金色の魔力がヒロを包み込み

《ソニックムーブ!》

「　ッ!?!?」

一瞬にして、ヒロは風になる。

立ち込める煙りを切り裂き、金色の閃光と化したヒロは空中に浮く。なのはの背後を取った。

空中で、なのはとヒロの視線が交錯する。

互いの表情には笑みが浮かんでいた。

ソニックムーブで背後を取ったヒロの片手にはお馴染みお手製の改造銃が握られており、銃口はなのはに向けられていた。

「ッ！」



《プロテクション!》

改造銃の引き金が弾かれた瞬間、銃口からはオートマチック設定で魔力衝撃弾が機関銃のごとく撃ち出されるが、レイジングハートのプロテクションが発動し、弾丸をシャットアウトする。

しかし、重力制御をバルディッシュに任せているヒロは、なのはのシールドが破れないにも関わらず撃つのを止めない。

衝撃弾と防御障壁がぶつかり合い、遂にヒロが持つ改造銃の弾丸が無くなる。

「レイジングハート!」

なのははシールドを消し、瞬時にアクセルシューターを発動。魔力弾を展開させ放とうとするが

「それを待つてたんだ！」

ヒロは空いている方の手を、なのはめがけて振る。

振られた手からは、約五センチ四方の黒いキューブ状の物体が放たれた。

「　　ッ!?!?」

黒いキューブ状の物体にはデジタル画面が嵌め込まれタイマー表記は、なのはの視界に入った時には残り3秒を切っていた。

《マスター!?　　プロテクション!!》

爆発物を危惧したレイジングハートが瞬時にアクセルシューターを消し、プロテクションを展開する。

「……………え？」

《 ？ 》

が、黒いキューブ状の物体はカウントがゼロになっても爆発することはなかった。

しかし、その一瞬の安堵と油断は不正解だった。

「……………?!?!?」

黒いキューブの側面部が開き、つんざくような大音量の超音波が鳴り響く。

大音量の超音波は、なのはの三半規官を直撃。聴力と平衡感覚を

麻痺させるだけに止まらず、脳をも揺らす。

ものの一瞬で視界はグニャグニャに歪み、平衡感覚も狂い、聴力も麻痺。

そんな状態で、まともな魔力コントロールができるはずも無く、なのはの空中でのバランスがグラつく。

「ッ!」

それでも不屈の心を持つエースの瞳の光りは輝きを失わない。

航空魔導師にとって“墜ちる”ことは『死』を意味する。

そのことを誰よりも理解しているのが、なのはだ。

「　　ッ！レイジングハート！」

持ち前の負けず嫌いとし精神力の強さでリカバリーを試みる。

「　　！」

桜色の自身の魔力が淀み無く流れるのを感じる。

（まだ　大丈夫！）

超音波の攻撃を喰らいリカバリーを試みるまでの時間は約五秒足らず。不屈の心と精神力、高い魔法技能を持つ高町なのはだからこそ出来ることだが、それでも戦闘中の五秒は致命傷だった。

「　　ッ！？……………」

なのはの聴力は超音波によって麻痺させられている。

が、なのはは感じた。

背後で銃が自分に向けられているのを。

聴力が麻痺し、聞こえないはずなのに、一瞬確かに聞こえた気がした。

「チェックメイトです。      なのはさん……」

僅か五秒の間、不覚にも目を離し、今まさに探そうとしていた人物

ヒロ＝ラインハートの声が。

「チェックメイトです。      なのはさん……」

ヒロ＝ラインハートは手に持つお手製の改造銃の銃口を、なのはの後頭部に向けながら、冷静に      ……それでいて控え目な口調で告げる。

地上では歓声、どよめき、その他様々な反応が聞こえるが、ヒロは極力気にしない様になっていた。

例え、一番ハッキリと聞こえるくらいに熱烈な黄色い歓声をあげているのが自身の使い魔で、その内容が放送コードギリギリアウトな内容でも、だ。

それにしても何故、なのはという絶対的強者を相手に、デバイスを使った魔法戦闘の経験が無いヒロが互角以上の闘いが出来ているのか。

ヒロはなのはとの模擬戦の前から、『ある仮説』を立てていた。

『デバイスを使うなのはを含めた魔導師たちは、攻撃と防御を同時に行えないのでは？』  
という仮説を。

発端は、なのはと地上部隊の魔導師たちの模擬戦の中にあった。

実力に大きな差があるのは見れば誰にでも分かるが、見ているうちに気付いたことがあった。

なのはと魔導師たちは、それぞれ攻撃手段に違いはあるものの、行動のパターンに一定の共通点があった。

最もわかりやすかったのは、『シールドの展開中に、魔力弾の展開が無い』こと。



あらかじめ魔力弾を放った状態で相手の攻撃をシールドで止める光景は何回かは見られた。

しかし、魔力弾を放つ前でのシールドの同時展開や、シールド発動中での魔力弾生成や、それらに類似した行為は一度も無かった。

勿論、何の確証も無い、ただの仮説に過ぎない。

偶然、やらなかったという可能性だってあるし、問題無く出来るという可能性だって当然考えられる。

何せ、こちらの世界にはデバイスがあるのだ。

自分の世界では確実に困難な事も、デバイスの助けがあるこの世界では普通に出来てもおかしくは無い。

そつだ。結局、分からない事をあれこれと頭で考えるのには限界がある。

ならば、出来るパターンと出来ないパターン、両方の戦術を組んで試してみればいい。

確かめる方法はいたってシンプルだった。

お手製の改造銃を、なのはが使うであろうシールドに直接撃ち込むのだが、弾切れになるまで撃ち込むことが見極める鍵になる。

ここで重要なのは、確かめることでは無い。

なのはの取る行動に臨機応変に対応し、攻め崩すというゴールだ。

ヒロは更なる一手を頭の中で構築する。

そして思い付く。

自分が今、持っている有効な手札を使った戦術を。

鍵となるのは“音”。

正確には『超音波』。

ヒロは、元いた世界では個人的な趣味が講じて『よろづ屋ハート』という店を営んでいた。

主に扱うのはマジックアイテムの類のだが、女性からのリクエストが多かった為、女性客層向けに防犯アイテムなども製作していた。

試作段階な為、正式な商品名や名称などは特に決めてはいないが、ヒロが掛けた開発費、制作費はそこそこ高い。

そこそこ高い開発費にはそれなりの理由がある。

ヒロが放った黒いキューブ状の物体から響いた超音波だが、ただの超音波ではない。

便宜上、ヒロは【マナ・ジャミング】と使っている。

【マナ・ジャミング】とは魔力と特殊な音を術式で混合し、更に異なる制御の術式を重ねがけした複雑高度なモノ。

この【マナ・ジャミング】の優れている点は、第一に人体への安

全が徹底されていることにある。

超音波　音の大きさ、音量は実はそれほど大きくは無く、なのは聞いた音は厳密には『大きな音に聞こえる』というほうが正しい。

【マナ・ジャミング】の根幹の理論にはヒロの世界でいうところの『魔奏器』の関わりが大きい。

魔力　つまりはマナが豊富な地域に存在する　特別な材料を専門の職人による門外不出ともいえる技術で加工製作した楽器『魔奏器』の奏でる音には空気中のマナと深く強く結び付き、普通の楽器では出せない感動を聞く者に与える。

もちろん、普通の楽器以上に演奏するのは難しく、一流の演奏者と呼ばれる者の中でもほんの一握りしか扱える者がいないのは説明も不要だろう。

なのはが体感した『大きな音に聞こえたが実際には音は大きくない』という不可思議な現象は、この魔奏器の技術の一部を応用し、特定の周波数に調整を施したモノ。

しかし、この程度では一流の魔導師の動きを封じることができない。

なのはの動きを封じた【マナ・ジャミング】の核の部分は、黒いキューブ状の物体に仕込んである『術式』と『媒体』にある。

【マナ・ジャミング】に使われている魔奏器の技術とは、【マナ・ジャミング】の理論の一端でしかない。

なのはの動きを封じたのは、無意識になのはが纏う魔力の流れを激しく乱したから。

正確には、黒いキューブ状の物体が出た【マナ・ジャミング】が、空気中の魔力素に共鳴し、一時的に魔力素の濃度を上昇させた。

濃度が上昇した魔力素は音に乗り、なのはに …… なのはの纏う魔力に直撃し、更に魔力素の濃度を上げてしまい、正常な魔力の流れそのものに“大きな負荷”をかける。

本来、人間の身体は急激な環境の変化に耐えられない。

登山家が酸素が薄い高い山に登る際、一気に登らず、酸素が薄いという環境に自分の身体を徐々に慣らし適応させ、時間を掛けて登るのが良い例だろう。

濃すぎる魔力にリンカーコアが対応できず、“大きな負荷”が生じ、なのはの保有する膨大な魔力が乱され動きが封じられた。

【マナ・ジャミング】とはすなわち、極端に濃度の高い魔力を音に乗せ飛ばし、対象者に急激な魔力濃度の変化による身体異常を引き起こす名称通りの『妨害』　ジャミング効果というわけだ。

ちなみに、なのは以外の者に効果が無い主な理由は二つあり、黒いキューブ状の物体の側面部から放出される際、有効効果範囲が四メートル以内の扇型になるように計算されているのが一つ。

もう一つが、実はヒロ、ソニックムーブを使って突撃する前に、【マナ・ジャミング】の効果を防ぐ為の専用の耳栓を付けていたという背景があるからだ。

「チェックメイトです。」

なのはさん……」

「……………」

謎の黒い物体から放たれた音で狂わされた聴覚が元に戻りつつあることを感じる。

向けられているであろう銃口には狂いは無いだろう。

なのはは自らに問い掛ける。

手加減なんて一切していない。いつも通りの全力全開だ。

それなら何故、圧倒的に自分が有利な空戦で遅れをとっているんだろう……。

親友のデバイスが優秀すぎるからというのも要因の一つかもしれない。

が、それだけでないのは明らかなのを彼女はわかっていた。

(……………うん。八神家のみんなが言ってたこと、今ならわかる。)

ヒロのことは通信越しではあるが、フェイトからはもちろん、八神家の面々からも話しは聞いていた。

その中でも、直に手合わせしたシグナムの熱が入った弁は凄まじかったのは記憶に新しい。

なのははシグナムが相手の実力に対して嘘を言わないことを良く知っている。

だからこそ、益々興味が湧いた。

ヒロ＝ラインハートという人間に。

そして現在、直に手合わせをした感想は、もはや言つまでもなかった。

正直なところ、なのははヒロの実力が自らの予想を遙かに超えている事に驚いている。

これまで、なのはは実に様々な魔導師を見てきたし、数え切れない位の模擬戦もしてきた。



しかし、ヒロ＝ラインハートのような魔法以外の戦術 …… “道具” を多用する魔導師など見たことも聞いたことも無かった。

(……………うん。ヒロ君は……………強い)

何より、空戦魔導師の自分が得意な空戦で遅れをとっているのが揺るぎ無い証明。

(……………でも……………)

なのはの表情はヒロからは見えない。

が……………。

「まだ、負けてないよ」

なのはの顔には笑みが浮かんでいた。

「まだ、負けてないよ」

「?.....それ ツ!?!」

どこか嬉しそうなのはに問い掛けようと口を開きかけた瞬間、  
ヒロは気付く。

「.....なるほど.....」

「うん。そういことだよ」

なのはの持つレイジングハートの球体部分にしっかりとソレは反  
射して映っているのだ。

自分の背後で、いつでも撃てると言わんばかりに空中で待機させ  
てある二発の魔力弾が。

第十話 、『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』（後編1）

みなさんこんにちは。作者の白金です。

まずはこのたびの、東北地方太平洋沖地震に伴い被災された全ての皆様、この場をお借りして哀悼の意とともに、一日も早い復興を心から願います。

活動報告にも記載しましたが、私は地震発生当時、実家の山形県に用事で赴いたその日に地震に遭遇しました。

私の実家とエリアは震度5を記録し、停電と物が散乱する程度でことなきをえましたが、地震や津波の被害にあわれた人達のことを考えると、喜ぶことができません。

作者は二年前の一時期から今現在も仙台市とは深い縁があります。福島、岩手にも旅行に行ったことがあり、とても悲しく思います。

地震発生からの四日目以降、住んでいる今の場所から食料や物資が不足する実家への仕送りを終えて考えたのは、必要最小限に買い物を抑えることや、おつりの募金することくらいしかできず……自分の無力さが悔しいです。

こんな私ですが同じ東北に生まれた者として、一日も早い復興を願っています。

最後に、こんな時ではありますが、こんな時だからこそ小説を投稿させていただきます。

感想、意見、お気に入り登録、アドバイスなどはいつでも大歓迎です。

また、作者のオリジナル小説「Urobros【再の章】」の応援も同時によくお願いします。

それでは、本編をどうぞ

第十話 〱『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。(後編1)〱』

「もぉ〜！ホント、ヒロは詰めが甘いなぁ〜！」

地上で、場違いなくらいにのほほんとした声を出しながら、リン  
「ストラトス」ドレッドノートは戦況を見つめる。

彼女の視線の先には、優勢だった戦局が二発の桜色の魔力弾によ  
って五分に持ち込まれ焦りの表情を浮かべているヒロ「ラインハ  
トがいる。

「まあ、そういうところも私のハートをググツと掴んで離さないん  
だけどねえ〜」

ポワポワとハートが飛ぶリンの視界は恋する乙女そのもので、特  
有のピンク色一色に染まっていた。

彼女にとってはヒロがなのはに勝とうが負けようがどちらでも構わないというのが本音だったりする。

どちらに転ぼうが、彼女は両方に対応する完璧なプランを既に完成させていた。

「（私的にはヒロには負けてほしいなあ。そしたら落ち込むヒロを慰めるって大義名分できてそのまま……）なんちてなんちて」

無駄に高すぎるスペックを駆使して構築した抜かりなど微塵も無い自らの計画で、数時間後に実現予定なピンク一色な光景を妄想させながら身悶えるが、残念ながら彼女の思考はその姿から周囲にダダ洩れの状態。

そして、それは今なお上空で闘っている彼女の想い人たる少年にも例外では無いということだ。

「そ、それにしても流石ですよ、なのはさん」

せわしなくコンソールを叩き続けるシャーリーは、この妙な空気

を脱するための一言を放つ。

「そそ、そつだよね！うん。なのは、なのはだよ！」

リンのアダルティーな妄想に充てられていたフェイトもシャリー  
ーの言葉に、ようやく正常な思考を取り戻した。

真つ赤に染まった頬だけは隠せてはいないのだが……。

「そついえば……シャリー！。ヒロ、なのはに何か投げてなかった  
かな」

「あ、はい。映像………出します。」

コンソールを素早く叩き、新たなモニターを出すと、ヒロが、な  
のはに向けて黒いキューブ状の物体を投げた瞬間のスローモーショ  
ン映像が展開される。

「……！、シャリー！。今の所、巻き戻して」

「あ、はい。」

「そこ！停めて！」

指示を出したフェイトはモニターを食い入るように見る。

「……別の角度での映像、出せる？」

「えっと、……これですね」

「……………これ…」

「スピーカー……………でしょうか……………」

サーチャーから送られて来た映像にはしっかりと黒いキューブ状の側面が捉えられている。

「フェイトさん……………これ、見てください……………」

「この数値は？」

「一応念のため、サーチャーが感知したなのはさんの周囲約十メー



トル四方のデータを調べてみたんですけど……

その……ほんの数秒ですが、大気中の魔力素の濃度が……異常な数値を叩き出してたんです！」

「　　ッ！それって！」

「はい。ほぼ間違いなくヒロ君が使ったこの黒いキューブ状の物体が原因です」

「　　……魔力素の濃度レベルは……」

「Sランク魔導師……いいえ、ちがいますね……。人間のリンカーコアでの魔力運用は不可能だとおもいます。」

「ここ……ヒロ君が黒いキューブ状の物体を投げた瞬間なんですけど、ほんの一瞬ですけど、なのはさんがバランスを崩してるんです。」

「……………」

「大気中の魔力素を……こんな技術、見たことも……  
あの……フェイトさん」

「……………うん」

「こんなこと言うのは変ってわかってるんですけど…」

「……………うん……………」

「……………ヒロ君、本当に……………“何者”なんですか？」

「……………」

シャーリーの問い掛けにフェイトは何も言葉に出せずに、空の上で動きを停めているヒロを瞳に映す。

改めて問われて痛感した。

フェイトがヒロを保護して、その次の日にリンが現れて、三人で一緒に生活をして、かれこれ約一ヶ月が過ぎようとしている。

毎日がドタバタで、楽しくて、三人で一緒に食卓を囲む時はホッとして、次元漂流者とか保護などすっかり忘れていて、一緒にいるのが当たり前になっていて

「……わからない」

ただ、肝心なことは何もわからない。

ヒロの生い立ちやヒロの家族。元いた世界で、ヒロが何をしてどんな生活をしていたのか。

「……わからない……」

フェイトはヒロの過去の話しを聞いたことがない。

否。あえて、聞かなかったところもあるかも知れない。

「……」

初めてヒロと会った時、ヒロは『組織』という単語に過敏な反応を見せ、拒んだ。

一緒に暮らすと決めた日の夜、クラナガンの夜景を見ていたヒロはフェイトには『儂く』見えた。

元の世界で“何か”があったんだと漠然と感じていたものが確信に変わった瞬間でもあり、その“何か”が聞けなくなった瞬間でもあった。

「……………」

しかし、シャーリーに問われて改めて思う。

知らなくてもいいの？ と。

「……………」

恐くなった。

聞けば、取り返しがつかなくなるかもしれない……………。

自分の前からいなくなるかもしれない……………。

かつて、自らの“母”がそうだったように。

「ッ!？」

考えが過ぎった瞬間、その考えを掻き消すように頭を左右に振り、無理矢理追い出す。

「どうすれば…いいのかな……」

考えれば考えるほど不安になる。不安が自らの心を覆って…。

「だ〜いじょ〜ぶだよ、フェイト」

「ふえッ!？」

彼女の心は黒い深い闇色に包まれることは無かった。

温かく 背後から優しくフワリとリンがフェイトを包み込むように抱きしめたのだ。

突然の不意打ちに驚きを通り越し、リンから微かにフワリと香る甘い香りに一瞬クラリとなるが、当のリン本人はフェイトを抱きし

める力をキュツと少しだけ強める。

「……私はヒロを…信じる。私が想う、目の前にいるヒロだけを信じる。…何があっても……」

「……………」

「まあ、どーしてもガマン出来なくなったら ……“チカラズク”  
なんだけどねッ！」

「冗談まじりでウィンクするリンの純粹すぎる“想い”に、フェイトのココロは揺れに揺れ、揺さぶられる。

「…リンは……強いね……。どうして…どうしてそこまで信じられるの？」

記憶をよぎるのは十年前 ……どうしようもなく周りが見えなくなっていたあの頃……がむしゃらに暴走し続け、本当の温もりを知ることすら許されなかったあの頃。

そんなどうしようもなく、ただ刃を振るうことしかしなかった自分を無条件に信じ、声を挙げ続け、“信じること”の本当の意味を教えてくれた親友 高町なのは。

奇しくもフェイトの目には、ヒロを想うリンの姿は重なって見えた。

フェイトの問いにリンは答えず、ただ微笑みながら視線を自らの想い人、ヒロ＝ラインハートに向ける。

「ホント、不思議だよねえ……」

そんな彼女の眩きは誰に聞こえることは無かった。

「これはこれは……」

お手製の改造銃をなのには向けながらチラリと後ろを向けば桜色の魔力弾が二発、しっかりと自分を狙っているのをヒロは視認する。

同時にヒロの脳はフルに回転を始め、推測する。

おそらく、なのははアクセルシューターの全弾を放ったわけではなく、あえて二つだけ別に上空に留めておいたのではないか？。

“もしもの保険”として。

そう考えればヒロが最初に建てた仮説（シールドの展開と、魔力弾の同時生成の可否）には該当しない。

大量のアクセルシューターは、シールドを展開する前に放たれたのだから。

（ヤッバイなあ〜……）

思わず弱音が出そうになるのをグツと堪えるのだが、ヒロの中ではこの模擬戦の勝敗の行方が完全に見えてしまった。

もちろん、自分の敗北という結末が、だ。

何より、なのはと会話を交わしているそれこそが、ヒロの敗北を決定付けているのだ。



【マナ・ジャミング】のカラクリが分からずに混乱すると同時に、【マナ・ジャミング】が及ぼす影響で一気に負けを認めて貰うのがヒロの理想であり、唯一勝てるかもしれない要因だった。

しかし、しっかりと会話が出来ている所を見ると、予想よりも【マナ・ジャミング】が効いて無いのは明らかで、効果が薄いのもあるのか、僅かな時間で回復してしまったではないか。

加え、ヒロは、草食動物が持つ特有の危機管理能力にも匹敵しそうな『第六感』的なモノは察知していた。【マナ・ジャミング】が唯一の切り札である自分とは比べものにならないくらいの“切り札”を持っている、と。

「……どうしますか？一応、聞いておきますけど……」

「もちろん、ギブアップはしないよ！」

「……………」

微かな希望は呆気なく微塵もカケラも無く木っ端みじんに打ち砕

かれた。

そんな彼、ヒロ＝ラインハートが取るべき最良ともいえる選択肢は思い付く限りは一つしか無い。

「……………仕方が無いですね……………」

「　　ッ!？」

背後のヒロの表情は見れないが、ヒロの声色が低く、重くなったのを感じたのか、なのはに緊張がはしる。

「非常に……………非常に不本意ではありますが……………なのはさんに負けを認めてもらえないのであれば……………致し方ありません……………」

「　　くっ!」

これはいよいよ更なる鬨の激化を意味するのかと、なのははレイジングハートをしっかりと握りしめる。

「ギブアップ〜アップ!」

「……………え?」

が、背後の人間が口にした言葉は、なのはの 否、なのはと地上で見ている全ての人間の予想の遙か斜め上をブチ抜くほどアリエナイ言葉だった。

起こるのは大きなどよめきとざわめき。アリエナイ言葉に地上で観戦していた魔導師たち、フェイトやシャーリーですら騒いでいるのが空の二人には聞こえる。

約一名、腹を抱えながら爆笑している使い魔の声が聞こえるのは気のせいだと、契約主はスルーを決め込む。

「とまあ、模擬戦は俺の負けということだ。」

そそくさと地上に降下しようとして回れ右しようとした瞬間

「い、異義ありッ!」

「……………へ？」

当然、納得できるはずが無いであろう。なのはから声が拳がる。

振り返って見てヒロは表情がほんの一瞬だけ強張るのを感じた。

頬を真っ赤にしながら「納得できない！」という表情でレイジングハートを構えるのがいたからだ。

表情や仕種は十八とは思えないほど非常に可愛らしい（本人が知れば更に顔を真っ赤にしそうだが）が、彼女が醸し出す雰囲気は決して可愛いらしいとは言い難い。

どちらかといえば白黒ハッキリつきたい性格のなのにとって、曖昧なグレイゾーンは納得うんぬんの前に、それこそ“アリエナイ”のだ。

「こ、こんなに有利な状況でギブアップはありえないよ！私に気を使ってるなら気にしないでいいんだよ！？」

「あ………。いやいや別に気を使ってるとかそういうことは一切無いんで……」

「嘘だもん!!」

「……………あの…」

「嘘だもん!!」

「なのはぢ…」

「嘘だもん!!」

「……………」

どうしたものか…と、ヒロは思案する。ヒロとしては、別段なのはを気遣かって敗北宣言をしたわけでは無く、ただ純粹に敵わないと思つてのことなのだ、一種の幼児化現象を起こしたなにはには取り付く島もない。

ヒロが改造銃の引き金を弾いたとしても、衝撃弾がなのはに届く前にアクセルシューターを喰らっていることは間違い無く、なのはのアクセルシューターがヒロの背後を取った時点で勝負は決していたのだから、ヒロの敗北宣言は妥当なモノといえる。

仮に、ヒロにフェイト並の速さとデバイスを使つての戦闘技術があるならば、衝撃弾を撃つて、かつ、なのはのアクセルシューターを避すことがもしかすると出来るのかもしれないが、残念ながら仮定は仮定　机上の空論でしかない。

さらに付け加えるならば、例えばフェイトのような高度な戦闘スベックが備わっていたと仮定して、基本の根幹がヘタレ成分で構築されているヒロにフェイトと同じことが出来るかといえは　……甚だ疑問としかいえない。

「まあまあ。理由をお話しますから、まずは聞いてくださいな」

それに、ヒロが敗北宣言をしたのにはしっかりとした理由がある。

「まず、俺は別に気を使って敗北宣言したわけじゃありません。」

「でも……」

「ん〜……。説明より見せたほうが早いかな……」

おもむろにヒロは明後日の方向に持っているお手製の改造銃を向け、引き金を弾く。

「……………あ……………」

「わかっていただけましたか？」

ガチンと音がするだけで、改造銃からは弾が発射されない  
…  
つまりは弾切れだ。

「じゃあ…あの時ヒロ君がギブアップを促したのは……………ブラフ…ハ  
ツタリだったってこと……………」

「御明察」

当たり前のことだが、弾切れをおこした銃など、弾倉を交換しな  
いから使い道は鈍器程度しかない。

ヒロが弾切れに気付いたのは、まさになのはに銃を向けた瞬間だ  
った。

弾切れに気付いたヒロは表情に出さないように必死に隠していた  
が、内心は焦りに焦っていた。

さらに運が悪いことに、この模擬戦そのものが急遽決まった想定外な出来事だったのもあって、今日のヒロは交換用の弾倉を持っていなかった。

模擬戦を続けようにも武器が無ければどうしようもない。

魔法を使うという手も確かにあるのだろうが、ろくにデバイスを使った魔法戦闘の経験の無いヒロが、次元世界の犯罪者たちにその名を轟かせ、震えあがらせる管理局最強の一角の呼び声高いエースオブエースに敵うという発想が無茶というもの。

それなら潔くギブアップしたほうが肉体的に余計なダメージを受けずに済むという、冷静かつ合理的な思考がヒロに敗北宣言をさせたというわけだ。

「うう……ムウウ……」

無論、なのはが納得するかといえば、答えは否。

かといって、このまま模擬戦を続行できるかといえば、それもまた答えは否。



魔導師うんぬん以前に、ソレは“人間”としてやってはいけないことだから。高町なのはが正義感の塊だという事前情報を巧く利用したヒロの心理作戦はモノの見事に的中した形になった。

地上では、なのはと同様に不満気なオーディエンスの不協和音を奏でている姿が視界に入る。

下手に反応すれば、これはまた別の意味で厄介なことになりそうだな…と感じたヒロは『あからさまな聞こえないフリ』でのスルーを決め込みながら、ゆっくりと地上へ降りる。

あきらかに納得していない、背後で可愛いらしく唸るなのはの恨めしげな視線を受けながら。

「ひ……酷いめにあつた……」

「あ、あはは……その、お疲れ様。」

「フェイト……笑い事じゃないよ……」

何故、こうなった……。そう自問してみるが、残念ながらヒロは答えがわからなかった。

憔悴しきっているといって間違いないだろう。コンクリートの地面に両手をつきながら両足を僅かに浮かせるという、よくよく見れば器用な姿勢をヒロは保っていた。

その隣にしゃがみ込み、フェイトは苦笑いを浮かべることしかできない。

先ほどまで悩んでいた姿が嘘のようだが、目の前の飾ることの無いヒロを見ているうちに、悩みはいつの間にか消えていた。

ただ、ヒロの状況はちがう。ボロボロといっても差し支え無い。それも、ほどよい感じに。

なのはとの模擬戦を機転を利かせて（セコイともいうが）何とか収めることができ、ようやくこれで精神的にも肉体的にも重いプレッシャーから解放されたと意気揚々、地上に降りた所までは良かった。

ただが …。

どこでどう見誤ったのだろうか、その先がよろしくなかった。

最大の勘違いは、ヒロが地上に降りてくる時に聞こえたモノは、実は少数派だったということだ。

実際ヒロが降りて来たのを待ち構えていたかのようにギャラリーの魔導師たちは一斉にヒロに群がり、質問攻めが始まった。

お陰で縦に横にと揉みくちやにされたその結果、解放された時には程よい感じにボロボロになっていたというわけだ。

ギャラリー陣にはヒロとなのはの会話は聞こえていなかった。あの場面でヒロがギブアップと叫んだのは、背後に生成した二つのアケルシューターが決め手になったと、状況のありのままを鵜呑みにしている。

しかし、彼ら彼女らにしてみれば模擬戦の勝敗などどうでもよかった。

彼ら彼女らにとっては、いきなり現れた無名のパツと見る限り普通の少年が、一瞬ではあるものの管理局最強の『白い悪魔』、『魔

王』相手に善戦したことが重要なのだ。

毎日行われるハードな教導の中で高町なのはの悪魔じみた実力を  
見せ付けられるうちに、今までのエリート意識は粉々に砕かれプラ  
イドもへし折られ、精神的にも肉体的にも追い詰められつつあった  
彼ら彼女らに、ある種の希望をヒロは与えたといえる。

ただ、そこまでならばヒロとて某・色欲使い魔によって鍛えられ  
た持ち前の精神力で何とか踏ん張ることができた。

トドメを下したのは…シャリオ＝フィニーニ。通称シャリーリだ  
った。

シャリオ＝フィニーニに魔導師としての適性は無い。

彼女が専門にするのは通信や、デバイスなどといった、つまりは  
典型的なインドアでデスクワーク系なのだ。本来は。

しかし、この時の彼女は違った。

魔導師としての適性は無いはずなのに、仮にも日々、魔導師とし  
ての訓練を積んでいるはずのギャラリー陣を畏縮させてしまうほど  
の … 某・管理局の白い悪魔をある意味で超えるほどの覇気（ダ

「クパープル色のオーラ？」を纏わせ、揉みくちやにするギャラリ  
ー陣（目を爛々と輝かせた女性が目立つ）たちを一瞬にして散らば  
せヒロの傍に来て、見る者の冷や汗が止まらないような笑顔を浮か  
べながら一言だけ。

「くわしく話しが聞きたいな」

たった一言だけでヒロを即正座に追い込んだ。

そこから約三十分は彼女の独壇場といっても良いシャーリーの尋  
問という名の質問が行われヒロは【マナ・ジャミング】の基礎理論  
部分のあらかたをはかされた。

724

もつともシャーリーとて技術者の端くれとしての節度を守り、そ  
れ以上の核部分には踏み込まなかったが、ヒロからしてみればシャ  
ーリーの笑顔とオーラは色々と恐かったのは言うまでもないだろう。

「シャーリー……恐ろしい娘ッ！」

後のインタビューで、某・色欲使い魔は回答したとかしなかった  
とか、真相は闇の中である。

「それにしても……元気だなあ……」

足の痺れに耐えながら視線を別の方向に向ければタフなことに、  
なのはは教導を再開していた。

「たぶんなのは、嬉しいんだと思う」

「……………嬉しい？」

「うん。だって……………」

「……………あ……………」

なのはと模擬戦をしている名も知らぬ地上部隊の魔導師たちの瞳  
が強く輝いているのがヒロには見えた。

最初に五対一の模擬戦を見た時を思い出す。

あの時、模擬戦を見ていた他の魔導師たちの目は ……死んだ魚  
のように鈍よりと濁っていた。

諦めていた ……。

圧倒的な魔力量と豊かな才能、決して埋めることの出来ない“差”。

諦めていた。

現実。

しかし、今はどうだ。

なのはと模擬戦をする名も知らぬ魔導師たちとそれを見る魔導師たちの目は獯猛に 弱者が強者に“立ち向かう”者の目に変貌している。

自分たちよりも遥かに年下の名も知らぬ、魔導師かもわからないやつが管理局のエースオブエースと一瞬ではあるが拮抗した。

エリート自分たちに出来ないはずが無い！

打ち砕かれたエリート意識が打ち砕かれる前よりも強く再燃したのだ。

「なんていうか……いいの？」

「う〜ん……。でも、しっかり教導が出来るんだから、たぶん良  
いんじゃないかな」

「本局嫌いつてやつ？」

頷くフェイトを見ながらヒロは作戦会議をした時のことを思い出  
した。

地上部隊　とりわけ地上本部に密接な部隊であるほど、本局と  
の対立が激しく、本局という肩書きが付く人間を毛嫌いする傾向が  
あり、それは教導においても顕著になると。

教導隊とはいえ、本局所属のオーバーSランク魔導師のなのはも  
例外ではなく、教導においても苦労したのだろう。

（なら、少しは役に立てたの……か？）

肉体的にも精神的にも割に合わないことこの上ないがと内心、苦  
笑してしまうのは苦労人の性。



「シャーリーさんもバルディッシュさん持ってどこか行っちゃったし……」

「バルディッシュからヒロの戦闘データ探るって張り切ってたよ？」

「あ……ハハハ……」

眼鏡を妖しく輝かせながら走り去るシャーリーに新たな不安を覚えながら

「それでリンさん……貴女はいったい何してやがるんですか？」

自分と契約を結んだ、あらゆる意味で規格外な年中発情色欲使い魔に向け、本日ガリガリに削られた残り少ない精神力でのツツコミを試みる。

「……スー……ハア……ッ……スー……ハア……ッ……  
え？なにっつて、わかんない？ヒロの背中に抱き着いてえ  
く、汗の匂い嗅いでるんだよ……？」

「……………」

返って来たのは、権限がある職種の人間に聞かれれば確実に事情を聞かれること間違いなしな痴女的な発言だ。

「チョツ                   リン!? だだだダメだよ! 女の子がそんなことしちゃ  
「!」

「いや、性別はかんけいな                   」

「ヒロは黙ってて!」

案の定、フェイトが黙っているはずもない。

「ええ~~~~? ……ん~~~~ ……じゃあ、フェイトも一緒にする?」

「ふえッ!? そそそそんなははは恥ずかしいことしししたいなんて思っ  
てななないよ!?!?」

(目が泳ぎまくってる!?!? 説得力のカケラもないよ!!)

あからさまに狼狽するフェイトと、アワアワするヒロを見たリンの目が一層妖しい輝きを増し、何かを思い付いたようにニヤニヤと黒い笑みを浮かべる。

「ネエ〜〜……ヒ〜〜口〜〜お〜〜……」

「ヒッ!？」

人間としての生存本能が警鐘を鳴らしたヒロはリンから距離を取ろうとするが、グワツと視認出来ないスピードで、ガツチリホールドして離さないと言わんばかりにマウントポジションを取られてしまふ。

「ア……あ……の……」

「ん〜〜?どおしたのかなあ〜〜?」

ゴロニヤンな猫撫で声と妖艶な笑みを相手に声も掠れる中、最後の砦たるフェイトに、お助けの視線を向けるのだが。

「アワワ……アワワワ……」

顔を沸騰しそうなくらい紅潮させ、こころなしか頭からは湯気が立ち上り、目の焦点はグルグルと定まらず … ポンコツと化していた。

「ネエ〜…ヒ〜口〜お〜…」

「クツ!？」

もはや信じられるのは自分のみ。

自分の身は自分で護るという弱肉強食の世界ヨロシク、食物連鎖で表すならば確実に狩られる側 草食動物側ではあるのは現状から間違い無いが、オトコノコとして気丈に振る舞ってみせる。

「ネエ〜…ヒ〜口〜お〜…。普通〜、運動してえ〜、汗とかかいちゃったりしたらあ〜、どっするのかなあ〜?」

「ッ!?!?」

刹那的なスピードで、自らの未来が見えた気がした。

それも、ほぼ確定的な。

(いや …… まだだッ！)

身内最後の良心であるフェイトがポンコツな今、頼れるのはたった一人しか残されていない。

ありつたけの力を腹に籠め、ヒロは救世主の名前を叫ぶ。

「なのはさ~~~~~ん！ たすけて~~~~~ん！  
~~~~~ッ！ なのはさ~~~~~ん！  
~~~~~ん！」

「ムッフッフウ~~~~~」

模擬戦をしている距離ではあるが、これだけ大声を挙げていれば確実に聞こえるはずなのに、何故かなのははヒロたちの方を見向きもしない。

それどころか、誰ひとりとして気付いていない。

あるのはリンの妖艶で好戦的な笑みだけ。

「ッ!?ま…まさか!?!」

「そ。結・界。私たちの周囲、5メートルだけだけどね!」

「……………」

魔界の 正真正銘、魔王の愛娘たるリン「ストラトス」ドレツドノートにかかれば、この程度の結界を発動させるなど呼吸するのと同じくらいに容易だった。

「ブブーツ……タイムアップだね〜。正解わあ〜」

「なっ!? チョツ わああッ!?!?!」

抵抗など微塵もできずに、ヒロは抱き上げられる。

世間一般でいう『お姫様抱っこ』というやつだ。

この場合、そう呼べるかどうかは疑問であるが……。

「なっ ……！チヨッ ……リン！リンさん！？」

「正解わあ〜…『シャワーを浴びる！』でえ〜っす！」

「そそそんなこと聞いてるんじゃない」

「というわけでえ〜、私とフェイトの二人でピツカピカに洗ってあげるね！」

「ハアアアアア〜…ツ！?!?ちよつとま ……っておい！止まれ止まっつと歩き出さないで！」

すでに聞く耳もたずに歩き出すリンをヒロは何とか止めようと抵抗するように身体に力を入れようとするのだが、絶妙な加減で掴まれているせいか、身動きひとつ ……というより、身体は微動もしない。

「チヨッ ……フェイト！助けて！このままじゃ！」

色んな意味で多くのモノを失ってしまいかねないと必死の思いでフェイトに助けをもとめる。

「アワワ……アワワワ……」

がしかし、ポンコツ化しているフェイトに届くはずも無い。

「フェイトも洗いつつ、したいよねえ……?」

「アワワ……アワワワ……  
ん……」

「チヨツと！いま、うんって言った！？ねえフェイト！ちゃんと意識あるの！？あるなら止めて！リンを止めて……！！」

「やだなあ……ヒロお。意識なんて必要無いよお。だってえ、いまのフェイトの言葉わあ、『本心』から出たんだもんねえ……！」

「ちつくしよおお……  
ツ……！」

時刻は昼に差し掛かるうとした地上本部。

少年 ……ヒロ＝ラインハートにとっては別の意味で、『絶対に負けられない闘い』が、幕を開けた。



この後書きは、後付けな感じになります。

有り難いことに、読者の皆様からの感想をいただく中で興味深いのがいくつかありました。

そうです。『絶対に負けられない闘い』についてです。

本当なら、あまりに過激で規制対象に引つ掛かりそうなので、次話ではカットが製作サイドでは決まっているのですが……頂戴した感想を読んでいるうちに迷いが生まれました。

そこで、アンケートを取りたいと思います。

その1 アダルト全開！ノーカット版の執筆。

その2 表現は作者の事情で変えた控え目バージョンの執筆。

その3 読者のみなさんに自由な妄想権を守護するため、あえて全カットで！

今のところ、この三択です。

感想と一緒に希望するものと理由を添えて意見をお願いします。

それでは、よろしく願いします！



第十話 く『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』（後編2）く

みなさんこんにちは、作者の白金です。

最近は原作、Urobros【再の章】が中々伸びないことが作者の悩みとなっております（泣）

皆様！是非、【再の章】の方も応援よろしくお願いします！

そして、いよいよこの話しが来てしまいましたね……

アンケート結果を考慮して書かせていただきました。

感想、お気に入り登録など、いつでも大歓迎です！

それでは、どつど！

第十話 、『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』(後編2)

立ち込める温かい湯気。

ポタリポタリと雫が落ちる。

狭い空間の中は、さながら自然界の弱肉強食が如き縮図が展開されていった。

「ちょ…リン…リンさん…リン様…」

ジリリ…ジリリ…と追い詰められるのは草食動物サイド、ヒロ＝ラインハート。

涙目になりながら、懸命に生存への道標(貞操的な意味で)を模索するその姿は、ほんの十数分前に管理局のエースオブエースとの模擬戦で勇姿を見せていたのと同じ人物とは誰が重ねられるだろう。

そして 追われる者がいるならば、そこには必ず、追う者も存在する。

「ムフ……ニユッフッフッフッフッ」

妖しく輝きを放つ真紅の瞳。同様に妖しくワキヤワキヤ残像が残りそうなくらいに早く動く両手。

肉食系サイド リン＝ストラトス＝ヴァンガードが今まさに、ヒロを追い詰めんとジリッジリッと距離を縮めにかかる。

さながら、『狩り』のように。

リンと使い魔契約を結んでから今日まで幾度となく繰り広げてきたが、その中でもトップ5に入るであろう絶体絶命（貞操的な意味で）のピンチに冷や汗が滲み出る。

そこまでヒロを精神的に追い詰めているのは、何と云っても場の状況に外ならない。

入口と兼用の出口は1つ。

ヒロから見て右斜め約四メートル先なのだが、最大の障壁  
ン「ストラトス」ヴァンガードが行くてを立ち塞いでいる。リ

自力でリンを振り切ったの脱出できる確率は限りなくゼロ。不可  
能とっていい。

（どうすれば この危機的状況を打破できる！考える……俺の灰  
色脳細胞！）

焦るヒロを尻目に、余裕タップリの笑みを浮かべるリンはジリリ  
…ジリリと包囲網を狭めにかかる。

笑顔と共にリンのしなやかな手がヒロに掛かるつとつまさにそ  
の時。

「あ、あのね！」

（きたあああッ！）

遂に、ヒロが待ちに待った救いの女神の一言が発せられた。

「もぉ〜…なあに？フェイト？」

「いや、あの…ね…」

手を止めて振り返るリンにフェイトは怯む。

今のリンはオアズケを喰らったドラネコよろしく、獲物（欲求的な意味）を前に思考能力が麻痺している。

しかし、フェイトは勇気を出して一步を踏み出す。

持ち前の正義感が訴えかけるのだ。

「あのね！家<sup>うち</sup>じゃいいけどその…流石に地上本部の女性用シャワー室は駄目だと思っんだ！」

「よく言ったフェイト！シッコミどころが違う気がするけど、よく言った！」

ヒロとしては「場所ウンヌン関係無しで一緒にシャワーを浴びるということが間違っているから！」と言って貰いたいのだが、状況

が状況だ。この際賢沢は言ってもらえない。

「むう……」

一旦、冷静になったのか、少し考えるような仕種をするリンだが、すぐに何か思い浮かんだらしく、ニンマリとイヤラシイ笑みを浮かべる。

「つまりは、ヒロが男の姿だからマズイわけね。それなら問題無いよー」

「『へっ?』」

ヒロとフェイトがリンの言葉を理解する前に、ソレは放たれた。

ポーンとリンの手から放たれたのは、何てこと無い見た目が水風船のようなモノ。

ソレがヒロの頭上に放られ。

「うわっ!?!?ペッ 苦ッ!なんだこれ!?!」



空中で勝手に割れた。

万有引力に則り、割れた水風船の中身の液体はもれなくヒロの頭にかかるのだが、液体というよりは、『ドロドロとした何か』と表現したほうが正しいのか。

さらに不安を掻き立てるのは、謎の『ドロドロした何か』の色。

謎の『ドロドロした何か』の色は紫色。野菜で紫といえば少しカタハズレだが健康なモノが多いが、液体での紫は お世辞にも人体に良いモノと連想できない。

ニガイニガイと苦悶するヒロを他所に、元凶のリンは何やらカウントを始める。

「リン！これな　！？」

異変はすぐに起きた。紫色のドロドロした何かをかけられたヒロの身体から、ピンク色の煙が上がり始めた。

自分の身体から発せられるピンク色の煙りを視界に入れてから五秒足らず

「まさかこれッ！リン！まさか！！」

「うん！いまヒロの頭に浮かんだのが正え〜解！」

「んなああッ！？」

ピンク色の煙、さらには紫色のドロドロした何かの正体に気付いたヒロは慌てて洗面台に向かおうとするが、一歩遅かった。

「ッ！？！？」

ピンク色の煙がヒロを取り巻き、ボフン！と音が響く。

「ばくは ええええッ！？リ、リン！？」

「大丈夫。落ち着きなさいなフェイト。それよりほ〜ら、オモシロイもの見れるよ〜」

軽くパニックに陥るフェイトをなだめながら、リンはフェイトにピンク色の煙の方を見るように促す。

「うん……うん…… え………?」

ピンク色の煙が消え、そこには

「リン！ヒロいなくなってるよ!?!?」

誰もいなかった。

「だ……いじょ……ぶ。ほら！ちゃんと成功してるみたいだね」

「えっと……」

恐る恐る目を凝らしてみれば、床に何かが落ちているのが見えた。

本来の主を失った訓練着だ。

「えっ?えっ?えっ?」

謎が謎を呼ぶ展開の連続にフェイトの優秀な頭脳が遅れをとり始

める。

が、一変。

モゾリッ！つと、着ていたはずの主を無くした訓練着が僅かに動きを見せ、現れたのは。

「こい……ぬ？」

つぶらな瞳が印象的な黒い毛並みの子犬。

「いよっし！効果抜群。バッチリ大成功だね！」

「もしかしてリン……この仔犬……ヒロ？」

「うん、そだよ〜」

あっけらかんと言ったのけるリンにフェイトは盛大にズッコケてしまう。

仔犬の正体に気付けたのは簡単で、床にはヒロがいつも付けてい

る白銀の腕輪と、リンとの魔界式の使い魔契約を結んだ証である漆黒の指輪が落ちていたからだ。

「つまりはねえ〜」

「な、なるほど…」

端的にわかりやすい説明を受けたフェイトはすっかり怯えてしまつて小さく丸まる仔犬<sup>ヒロ</sup>を抱き抱える。

抱き抱えられた際、リンにも決して劣らない豊満なバストに仔犬<sup>ヒロ</sup>が埋もれかけるのは御愛嬌。

つまるどころ、リンがヒロにかけた紫色のドロドロしたモノは、変身系の術式を混ぜたモノで、今回は仔犬バージョンとのこと。

「キャウン！キャウン！（リンさん！お願いだから解毒薬を！）」

「キヤッ！ヒロっ……暴れヒヤウン！」

「フツフーンだ！何言ってるかなんてゼーんぜんわっかりませーん！それよりいっ」

ニヤリとリンは仔犬ヒロに黒い笑みを向ける。

「あれえ〜？こ〜んなところに仔犬が迷い込んでるなあ〜ど  
うしよ〜！」

あっ、そうだ〜！これからシャワー浴びるからついでにキレイキ  
レイしてあげよーそうしよー！」

「キヤウン！？（なん……だと！？）」

「それじゃあ行こうそうしよ。フェイトも早く来てね〜」

「キヤウン！？クウン キヤウン！？キヤウン！？（なっ！？ち  
よっと待ってくださいリンさん！後生ですから！？）」

「流石の私も犬語まではわかんないなあ〜残念残念」

「キャウ~~~~~ン!?!?!」

鼻歌混じりでフェイトに抱かれたヒロ（仔犬）を逃げられないようにしっかりと首根っこ掴みながらリンは脱衣所の奥へと向かうのだった。

「……………」

完全にフリーズしたフェイトを残して。

室内の真ん中、幅約三メートルを通路とし、広さは約二メートル四方とプライベートがしっかりと守られているスタンダードな個別シャワー。

その個別シャワーが左右に四つずつあるのが、地上本部の女性職

員用シャワールーム共通の造りである。

現在使用しているのは専ら、一人と一匹だけなのだが。

「かゆいところはないですか〜?」

左手前から二番目のシャワールームから、リンの弾んだ声が室内に響く。

彼女のテンション指数を表す鼻歌も絶好調らしく、泡立てたボディーソープを仔犬ヒコに塗りたくり、絶妙な力加減で洗いあげる。

「キュウ……キュウ……（目が……しみッ!）」

「はい、気持ち良いでちゅね〜」

地味に効果的なダメージを喰らいながら、何故仔犬ヒコは逃げないのか。

目を閉じているからだ。



では何故、目を閉じているのか？

理由は簡単。目の前で上機嫌に鼻歌なんか歌っちゃっているリン  
「ストラトス」ヴァンガードは現在産まれたままの姿……要するに  
だからだ。

幾度となく強制連行され、その都度網膜に深々々く刻まれたり  
の肢体。

要は慣れだよ。などと言うお気楽な輩がいれば今すぐその発言を  
力づくで捺伏せたいとヒロは思う。

もはやそんな次元ではないのだ。

リン「ストラトス」ヴァンガードは存在自体が規格外。無論、彼  
女の容姿も同様に規格外である。

そのスペック、人間年齢に換算して、齢15にもかかわらず『魔  
性』と表現するに相応しく、直視させられたヒロは時間が経った今  
も尚、少しでも思い出そうとすれば、その瞬間の光景が一枚の静止  
画の如く脳に鮮烈に訴えかけるほどだ。

「キュウ〜……（ここで目を開けるわけには……ッ！）」

煩惱退散の四文字を絶えずヒロは頭の中で復唱する。

しかし、まるで見透かされているかのようなリンが先手を打ちにかかると。

「フフツ……それじゃあ私もカラダ、洗おっかな。ちょうどいいのあるし！」

「……キュウ（聞こえない聞こえない聞こえない……）……」

「上質なスポンジ、あるもんね〜」

「キャワン！？（なあっ！？）」

突然持ち上げられた仔犬ヒロはリンの意図に気付けなかったが、伝わってきた鮮烈な感触で閉じていたまぶたを開いてしまった。

「ひゃッ！ フフツ……こゝら！急に動いちゃダメだよ〜？」

「キャウン！？キャウン！？（なあっ！？リン！？ななななにをッ

「!?」

「まふまふで気持ちいい〜」

背中越しに伝わる鮮烈で圧倒的な感触　リンは仔犬ヒロをスポンジ代わりにして、その豊満なバストを洗っているのだ！

圧倒的な双丘は圧倒的な弾力で跳ね返したかと思えば、低反発顔負けの性能で包み込みにきた生命の神秘に、ちっばけな哺乳類は声にならない声を挙げることしか許されない。

一方では、無力な哺乳類（仔犬ヒロ）などお構いなしに、いよいよエンジンが温まってきたのか、リンはテンションのギアを一気にトップへと上げにかかる。

「さ〜っつてと〜、ここからが本番だよ〜？魔王家に代々伝わる秘伝奥義！魂まで刻みこませて私無しじゃ生きられないようにしてあげるね〜！　…っつて、アレ？」

と、寸前でリンの手が動きを止め、一つ、不敵な笑みを零す。

「いるのはわかってるわ！出てきなさい！」

「ッ!？」

不意にかけられたリンの声に、かけられた者はわかりやすいくらいに反応を見せる。

「待ってたよぉ〜? フェイト?」

「あつう……」

個別で区切られているシャワールームの曇り板一枚挟んだ背後。

リン⇨ストラトス⇨ヴァンガードに負けず劣らず持て余しているワガママボディーを純白のタオルで包み込み、顔を真っ赤にさせたフェイト⇨テストロッサ⇨ハラオウンがおずおずと姿を現した。

「わ 私、その……犬洗うの……得意……なんだ……」

「キャウン! キャウン! (ちがうよフェイト!! 論点ズレてるから!)」

「それよりフェイト、シャワー浴びるのにタオルは無粋じゃない

「？」

「ふえええ〜っ！？でもでも…その…ヒロが…」

「ヒロ？変なこと言うな〜フェイトは。ここ、女性用だよ？ここに  
いるのは〜、わんちゃん。ただのカワイイ仔犬ちゃん！」

「ッ！？」

「キャウン！キャウン！（ちよっ！なに言っちゃってるの！？それ  
にフェイトも！？いつもの優しいフェイトにもど（）」

「そ そうだ よね！ここにいるのは仔犬…仔犬… うん  
！これは要らない…よね！」

「冗談だよね！？ などと使い古されたツツコミをヒロが入れる  
よりも早く、フェイトはタオルに手をかけ

「は 恥ずかしい…から…あんまり見ちゃ…だめ…だよ…？」

フェイトは肢体を隠すタオルを取った。

生地が擦れる音はそれだけで生々しく、至近距離にいるヒロの耳にもバツチリと届く。

「ほ、ほら……その……キレイキレイ……しよ?」

「よ〜っし!それじゃあ第二ラウンド!今度は頭、洗おうね〜」  
「!」

後日……ヒロ＝ラインハートは、こご語っている。

リン＝ストラトス＝ヴァンガードとフェイト＝テストロッサ＝ハラウン……今まで見てきたどんな戦略兵器よりも恐ろしい!と。

渾身のチカラを籠めて語っている。

女性の身嗜みに時間がかかるのは世の常識。無論、シャワーも例

外ではない。

たっぷり三十分強、時間をかけたシャワータイムで心も身体もリフレッシュしたフェイトとリンの女性二人は、身嗜みもしっかり整え、ちょうど時間も昼時ということでランチをしようと、地上本部のカフェテリアに赴いていた。

ちなみに、ついさっきまで世界最高クラスであろう桃源地獄を味わっていたヒロはといえば、姿が元に戻るなり精神的ショックからだろう、休憩所備え付けの椅子に座り放心状態となっている。

「ちよ〜とただけやりすぎちゃったかな〜」

などと珍しくリンが苦い顔をするほどに。

「あ、フェイトさん！お疲れ様です！」

カフェテリアに入ったフェイトとリンに掛けられる声。

カフェテリアの奥。四人掛けの席の二画にシャリオ＝フィニーノは陣取っていた。

「お疲れ、シャーリー。データの解析はもう済んだの？」

「はい。もう良いデータがバッチリ。これなら良い子ができますよ！

…って、あれ？フェイトさん、ヒロ君はどうしたんですか？」

「えッ！？ええっと……その……」

「ヒロはさっきの模擬戦が疲れたからって、あっちの休憩所で休んでるよ」

「ッ！そうなんだシャーリー。だから心配いらないよ。ね？」

「は、はあ……」

「それより」

何とかごまかせたことにフェイトは内心ホツとする。

自分がどんなに大胆な行動に出してしまったのか、冷静になった今ならよくわかるし、ついさっきの出来事を思い出すだけで、顔から火が出そうな位に恥ずかしさが込み上げてくるが、不思議と嫌な気



持ちはしないな　とフェイトは感じていた。

「あれ……なのはさんじゃないですか？」

「えっ？どいっ？」

フェイトはシャーリーの一言で思考の海から我に返る。

カフェテリアの入口付近から、フェイトたちを見つけたなのはは、そのままフェイトたちの席まで歩いて来た。

「フェイトちゃん、シャーリー、リンちゃん、相席いい？」

「もちろん」

「大歓迎ですよ」

「私もいいよ」

笑顔で迎えられたなのははそのままシャーリーの隣の空席に腰を下ろした。

「あれ？そっついえばヒロ君は？」

「ヒロはさっきの模擬戦が疲れたからって、あっちの休憩所で休んでるよ〜」

「じゃはは……やっぱりさっきの模擬戦、やりすぎちゃったか〜」

シャーリーの問いと同様に返したリンの応えに、なのはは苦笑いしてしまう。

仮にも管理局のエースオブエースが、デバイス戦闘の経験が皆無な限りなく一般人を相手に全力ではないものの、それなりのチカラを振るったことは、やはりなのにとっては気掛かりだった。

「でも、ちょうどいい……タイミング……かな……」

急に弱々しいモノに変わるなのはの声に、三人の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

「三人に……相談があるんだ……」

「……誰かの視線を感じる？」

「……………うん……………」

なのはの悩みを聞いた三人の顔は曇る。

なのはの悩みとは、ここ最近 厳密に言えば今の部隊の教導を始めてからすぐの頃から、今日まで、妙な視線を感じているのとだった。

「それって……………」

「ストーカーってことじゃないの？」

言いにくいことをリンがズバツと言うのに思わずなのはは苦笑いを浮かべてしまう。

「なのは、視線だけ？他には何か無いのかな？」

日々、捜査をするフェイトは執務官目線で尋ねると

「にははは……さすがフェイトちゃん、鋭いね……」

力のない笑みを浮かべるのはは厚みのある茶色の封筒を取り出し、中身を少しだけ見せる。

「ッ！？こ…これ………」

「ッ！」

「うっわ〜……」

取り出されたのは 写真。教導隊の制服を着ているなのは写真である。

しかし、ただの写真とはワケが違う。

遠くから意図的に狙い撮った いわゆる盗撮写真だった。

「……なのは……もしかしてそれ、全部？」

「最初は数枚だけだったんだけどね……これは昨日の朝ここに来たらロッカーに入ってたんだ……」

「『……………』」

三人は言葉を失う。

震えるなのは声は、見えない恐怖に怯えていた。

「あ……………う……………」

場所は変わって地上本部の休憩スペース。

その一画では桃源地獄からの生還を果たすものの、精魂尽き果てかけたヒロがぐでーっと備え付けのテーブルに突っ伏している。

当分、ここから動きたくないな…というのがヒロの現在の心境。  
さきほどのことをおもえば仕方ないことなのだが…。

「なあなあコレ、もう見たか？」

「……………んあ？」

少し離れた一画に集まる集団から発せられた声が妙に気になり、  
ヒロは顔を向ける。

茶色の制服　つまりは地上本部の男性局員なのだろう。

四人の男性が何かを見ながらニヤニヤ笑っているのが目に入る。

(……………なんだ？)

胸騒ぎがした。ここで無視したら絶対に後悔すると。

倦怠感満載。けだるい身体を起こし、妙な集団の背後に回ると

「ッ!？」

信じられないものがヒロの目に飛びこんできた。

「ん?なんだ?見かけない顔だな?」

「あ……はい……その……嘱託魔導師の手続きで……」

「嘱託かあゝ、珍しいよな」

酷く嘘臭いなどヒロは自分で思ったが、相手はどうやら納得したようだ。というより、そんな些細なことを気にする余裕は今のヒロには無い。

「あの……それ……」

震える声を懸命に押し込め、局員の一人に尋ねる。

「ん?ああコレか?スゲーだろ。今ひそかに話題になってんだよ」

「わ……だい？」

「不定期なんだけどよ、なんでか俺らの端末に届くんだよな」

「ってか、地上本部のヤロー全員に送られてるみたいなんだよな」

「まあ、俺らとしても、な？」

「事欠かないよな」

下品な笑い声にヒロは吐き気をこらえる。

「……俺にも……くれませんか？」

「いいぜ、減るもんじゃねーし！」

「むしろ増えてくし！」

自分の端末に送られてくるデータ。端末にコンプリートの文字が表示され、データをくれた局員たちに一礼してヒロは足早に場を去る。



酷く冷たく、無機質な表情を浮かべながら。

「…………チツ…」

人の目が届かない非常階段で端末に目を移し、ヒロは舌打ちする。

端末に映っているのは、女性局員用更衣室で着替えをしている真っ最中の、なのはの下着姿の静止画だ。

しかも、なのはしか映らないよう意図的に角度を調節されているのが、ヒロにはわかった。

そして、この盗撮静止画に『魔法』が使われていることも。

「……………」

ヒロは自分が正義の味方だとは思っていないし思わない。

自分がとことん弱くて無力だということを知っている。

しかし、弱いから 無力だからといって、何もしないという選択をするほど枯れてはいない。

「……………」

無言で端末を操作し、メモリーからお目当ての番号をプッシュ。

「もしもし…ヒロ＝ラインハートです。お忙しいところすみません。  
はー。。。」

静かな会話は、晴れやかな昼下がりの空へと溶けていった。

第十話 、『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』（後編3）、『 』

はい、みなさんこんにちは。作者の白金です。

モゲーで活動していた頃から執筆速度が遅い遅いと言われ続けて来て、何とかしたいと努力はしているのですが（汗）

今話ですが、いよいよ！なのはパートも大詰め！？なのですが、ちよーっと な展開です。

原作【再の章】の応援もよろしくお願いします！

それでは、どうぞ！

P・S

後編3を修正。第九話に加筆修正を加えました。

第十話 、『乙女心が複雑なのは、どの世界でも共通である。』(後編3)

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

嫌な沈黙だけが場を支配する。

誰が、何を、どんな言葉を、なのはにかけていいのか迷っていた。

ほんの少ししか見れていないが、封筒の厚さ、なのはの話し具合からして、量的にはかなりの量があるとみて間違いない。

同じ女性として、姿が見えない犯人の卑怯で卑劣な手口に怒りを感ずる。

しかし現実問題として、写真だけでは犯人を特定するのは難しい。

けど、目の前で苦しむのはの力になってあげたい。

だから、まずは何か声を掛けて安心させてあげたいのだが、何をどうやって言えば良いのか……。

(おもお！空気、おもおッ！)

特に堪えていたのは、基本的には賑やか担当。

シリアスな展開を不得手とするリン＝ストラトス＝ドレッドノートだった。

そんな、誰もが俯いている状況の中で均衡を打破する勇者が現れる。

「なのは、シャーリー、二人とも今夜は何か予定入ってるかな？」

重苦しい雰囲気が漂う中、最初に破ったのはフェイトだった。

「ふえ！？私は……うん。何も無い、けど……」

「私も特には……」

「じゃあ、八神家の皆も誘って私の家で晩御飯、食べない？久しぶりにパーっと！良いよね、リン？」

「もちろん！反対する理由は無いよ〜！」

「うん。それじゃあまずは」

僅かなアイコンタクトだけで完璧な意思疎通を果たしつつ、わざと高めめのテンションで口を挟ませない。

これこそ、同居歴一ヶ月強が成せる御技。

なのはとシャーリーが口を挟む暇も無しに、トントン拍子で話し

は進み、あっという間にプランは完成するのだった。

「そ、そういえば、なのはさん……ヒロ君の姿が無いんですけど、どうしたんでしょうか？」

「えー!? え〜っつと……」

「あ、ヒロならなんか手続き?の不備で108部隊に行くから先に帰っていいって」

「じゃあヒロには私からメールいれておくね。えつと……うん。送信」

「よ〜っし! それじゃあヒロが帰ってくるまで美味しい料理い〜っぱい作らないとね!」

「うん。ヒロ、きつとお腹すかせて帰ってくるから頑張らないと!」

オーツ! 拳を突き上げるリンとフェイトは早速何を作るかの相談し始める。

「な〜んかヒロ君……愛されていますねえ〜」

「じゃはは…… あ……」

「どうかしましたか？」

「え？あ、うん。なんでもないよ、シャーリー」

いつの間にか自然に笑っていたのに気付いたのはは、ハッとす  
る。

今の部隊の教導が始まってからは、正直なところ笑うことさえも  
億劫になっていた。

笑うことが好きなのに、いつの間にか笑うことが形式的なモノに  
さえ変わっていたことに気付いて落ち込んで、また仕事で悩んで、  
終われば見えない影に脅えながらどんどん追い詰められて……。

エースと呼ばれる自分が、弱いところを見せられないからと無理  
に笑って……。

そんな自分を鏡で見て嫌になって……。



でも

(笑えた……。不思議、だなあ……)

久しぶりに、本心から笑えた。

もう一度、なのはは目を閉じてみた。

「……………」

浮かびあがるのは今日初めて会ったばかりの、年下の弟のような少年の顔。

小学三年生の頃からの親友と、とても15には見えない個人的なものすごく羨ましい美貌を持つ女の子に板挟みになりながら困ったように苦笑いする姿。

まだ話した回数は少ないけれど、聞いているだけで安心できる声。

私と模擬戦しようって言ったなら泣きそうな顔してた……。

それなのに、いざ模擬戦になったら …。

「フフツ……」

「なのは……さん？」

「シャーリー、行こ！フェイトちゃんたちにおいてかれるよー！」

「えええツ！？つてホントにいない！？！？」

「ほくら、はやくツ！」

既に大分離れてしまったリンとフェイトに向けて、なのはは足取り軽く駆け出す。

現在この瞬間も、抱えている問題や悩みも全然解決していないが、少しだけ……。

少しだけ、なのはは自分の心が軽くなった気がした。

暗い室内。

寸分の狂いもなく等間隔で並べられている液晶ディスプレイ類が  
普段、ほとんど人が利用しないことを物語っている。

その中で、足元の僅かな照明が室内に点在する複数の人影を投影  
させる。

「クソっクソツ！高町……なのはア……」

「ふざけた魔力量こめやがってエ……」

「本局のイヌの分際でエ……」

ギリリッ……歯ぎしりと共に室内に響くのは、複数の醜悪な声。

「落ち着きなよ。いくらバケモノじみてようが所詮魔法だけ。それ

「以外はたいして恐くない」

「まあな。俺らのやってることには気付いてねえし、ちょっと揺さぶりかけただけで真っ青な顔してたよな！」

「ロッカーに入れたやつか？あぁ、あの顔は傑作だったよな」

数にして、五人。

「でもまあ、これからが本番なんだけどね」

そう。何を隠そうこの五人、ついさっき、なのはと五対一の模擬戦で医務室送りにされた……

『なのはの教導を受けている地上本部の魔導師たち』に外ならない。

「平民の分際でえ……」

五人の中で唯一、照明で暗い室内で唯一、はつきりと顔かたちが浮かびあがる人間がいた。

金髪を伸ばし、ルックスとしても一般的に美形の部類に入る青年

は、憤怒の感情を隠しもせず、寧ろ露骨なまでに全面に押し出している。

「この僕の美しい顔に傷……き　　傷あああッ！」

顔に当てられている処置に触れた青年は激昂しながら怒りの感情そのままに、傍に並べてある液晶ディスプレイを床にたたき付け力の限り踏み付け、踏み付け、踏み付ける。

「ハア……ハア……」

最後に一つ、蹴りとばし、青年は呼吸を落ち着けた。

「進具合は……」

「あ、ああ……ばらまいた写真の反響はデカイな。」

「み、見た目だけはいいからな……」

「フン……。なら、あとは最終段階だね……」

「『ッ!?!』」

金髪の青年の一言に、残りの四人はざわめく。

「ほ、本当にやるのか?」

「……もしかして、怖じけづいたのか……?」

「い、いや……」

「なら、この僕の完璧な計画に異論があるのかい?」

金髪の青年は口を挟んだ青年を睨みつける。

「ま、まさか!」

睨まれた青年は勢いよく首を横に振り、否定を示す。

自らの保身のため。

「なら、いいんだ。お前らはどうなんだ？」

金髪の青年の圧力に、場は沈黙。

「相手はエースだろ？魔法使われたら終わりなんじゃないか？」

「ハッ！そんなことを心配していたのか」

意見を出した一人の青年に、金髪の青年は鼻で笑う。

「本局のイヌがどんなに魔法がバケモノじみてようと、むやみやたらに魔法を使うことができない。それが街中なら……なおさらだ……」

醜悪に歪む金髪の青年の顔に、誰もが息をのむが青年は狂ったように笑い続ける。

「後はどんなにバケモノじみてようが所詮は非力な女。増援を含めてこっちは二十人。勝負にもならないよ」

醜悪に歪んだ顔で、金髪の青年は液晶ディスプレイを起動させ、画像を展開させる。

「高町なのはを犯す！犯して犯して精神をブツ壊すまで犯して社会的に抹消してやる！ ……お前らも憧れのエース様をヤレるんだ！本望だろ！？アヒヤ ……アヒヤヒヤヒヤハハ ……！」

狂ったように金髪の青年は高らかと笑う、笑う、笑う。

「で、でもよ……万が一バレたら俺たち破滅……」

「バレやしないよ！例えバレたとしても！ ……僕のパパは少将なんだ……レジアス中将直轄の少将なんだぞおおああ！」

金髪の青年、名をジェルムルーク＝バルバツケンという。

父親は、管理局地上本部で少将の地位の持つ。

そんな彼、ジェルムルーク＝バルバツケンも21という若すぎる年齢で三佐という肩書きを持つ、いわゆるエリート街道を進む局員である。

ただ、彼自身の魔導師としての実力は、一般局員と同レベルかそ



れ以下しか備わっていない。

局員として大きな事件を解決した経験も無い彼が現在の地位を得ることが出来たのは、全てが親の権力と。

いわゆるワイロを積んで得たものだった。

ジェルムルーク・バルバツケンが、なのはに憎悪の炎を燃やすのは、全て独りよがりで身勝手な理由でしかない。

ただ単に、気に入らなかったから。

本局の魔導師に教導を受けることに加え、年下の小娘に教えを請わなければいけないという屈辱が彼は我慢ができなかった。

ただ、それだけのこと。

そこに、なのはの非は微塵も無い。

「俺らが言えた側じゃないけどさ……」

「まあ、仕方ないって。力が無い俺らには金と権力しか道が無いんだし」

ジェルムルーク・バルバツケンを遠目に、四人の青年は冷や汗が止まらなかった。

四人は入局当初は真面目な局員だった。

しかし、時間が経つにつれ、これといった特殊スキルや魔法の実力も無い彼らは次第に自らの未来に希望が感じられなくなっていた。

そんな時だった。

彼らがジェルムルーク・バルバツケンと出会ったのは。

そこから全てが変わった。

彼の取り巻きになることで彼の金や権力で出世の道に入ることができた。

今までも、ジェルムルーク＝バルバツケンの御零れにあやかり、弱い立場の女性局員を社会的に葬り去ったことも片手では数えられない数に及んでいる。

そうして、いつしか引き返すことも逆らうことも出来なくなり、彼らに残された道はたった一つだけになっていた。

ジェルムルーク＝バルバツケンとの一蓮托生。

それが 現在の彼らの姿に外ならないのだ。

「カクゴシロヨ……タカマチナノハアア……」

暗い室内で唯一強い光りを放つ液晶ディスプレイ。

展開されている教導隊制服に身を包む笑顔の高町なのは。

壊れたように笑い続ける青年。

狂気が、妄執が、行動として実行される。

無論、なのはは知らない。

自分の身に危険が迫っていることも。

企てているのが自分が教導をしている部隊内部の人間だということも。

「今夜、ヤル。準備しておけええッ！」

その時が、数時間後に迫っているということも。

数時間後、確実に、ジェルムルーク・バルバッケン以下20名の手によって、なのはは身も心も壊されてしまう。

単純だが、数の暴力は時に絶大な効力を発揮するものなのだから。

しかし、彼等は致命的なミスをしていた。

「いや〜……でもさ、多分それ、無理だと思っな〜。」

「……………あア？」

彼等がしてしまった致命的なミス ……それは、『慢心』。

全てが、金や権力でまかり通るといふ慢心は、他の全てを見えなくしていた。

自分たちがいる暗い室内のように。

「おい……………今……………僕の完璧な計画に対して、何か不快な言葉が聞こえたんだけど……………誰だい？」

慢心ゆえに気付くことが出来なかった。

この室内にいるのは、五人“だけ”ではないことに。

ジェルムルークバルバツケンが取り巻きに電気を点けるように命令し、室内の照明が一斉に点灯する。

彼らの目が光りに慣れた時、彼らから少し離れた出口付近の壁にもたれかかっている少年がそこにはいた。

「いやあ〜、最初っからず〜っと聞いてたけど、聞けばやれ犯すだのやれ計画だのと御大層な口上を並べてるけどさ、俺みたいな素人の気配にも気付けない奴にだよ？管理局が誇るエースオブエース、なのはさんが屈するとはとてもとても……」

おどけたように少年　： ヒロゥラインハートは肩をすくめながら小馬鹿にしたポーズを見せる。

「誰だあ？…お前は…」

無論、ヒロのことなど知らないジェルムルークバルバツケンと、その取り巻き達にとっては、大事な計画を知られてしまった異分子でしかない。

ジェルムルークバルバツケンの視線に、四人の取り巻きはゆっくりとヒロとの距離を縮め、囲みにかかる。

「ほ〜、もしかなくてもこれは口封じ、ってやつですかね？」

「まあ、やむを得ず、というやつだ。それに、君みたいな素性のわからない平民をわざわざ殺してやるんだ。世界の酸素の消費量が一人分減るんだから寧ろ感謝してほしいくらいだね」

「こわいこわい……」

「それでも僕は優しい人間だね。君を殺すまえにどうやって君がこの場所を嗅ぎ付けたのか御教授していただきたいのだけど？」

「偶然、ってというのは考えないのかねえ？」

「フン……。そんなことありえないね。ここは特定の日時、特定の時間帯……。つまり今この時間は、僕の権限で誰もこの部屋を使えないように予め根回しをしてあるんだよ！」

「なら、俺がここに目星をつけたのもそついうこと」

醜悪な笑顔を見せていたジェルムルーク・バルバツケンの顔が一瞬のうちに固まる。

「…………殺せ…………」

ジェルムルーク＝バルバツケンの命令で、四人の取り巻きたちがヒロめがけズンズン近づくが、追い詰められているはずのヒロはいえは涼しい顔。

表情には余裕さえ見える。

「え〜っつと、こづいうのって何て言うんだっけ？たしかさっ……  
さっ…………」

「殺人未遂の現行犯、だよ。ヒロ君？」

「『ッ！？！？』」

刹那、聞き覚えのない声に、ジェルムルーク＝バルバツケン以下五人が声のする方を向くと

「そ〜〜それ！さすがだね、『ギンガ』」



「フフツ……」

バリアジャケットを展開し、左腕にリボルバーナックルを装備済みの陸士108部隊所属、ギンガナカジマが机と机の死角から姿を現した。

「ジェルムルークニバルバツケン三佐、以下四名。貴方がたを殺人未遂の現行犯で……逮捕します。諸々の余罪についても今後明らかにしていきますので覚悟してください。」

「おおお〜！ギンガカツコイイ〜！」

「チョツ！ヒロ君！？ここ、大事なところなんだけど！？」

「『……………』」

こんなシリアスな場面にも関わらず、なんとも緊張感に欠ける雰囲気なのだが……。

「クフツ……アヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

ジェルムルークニバルバツケンだけは狂ったように笑い出した。

「お前ら、何にもわかってねえのな！僕のパパは少将なんだぞ！逮捕なんかしたって無駄無駄無駄なんだよおおッ！」

美形の部類に入る顔を醜悪に歪ませながら笑い続けるジェルムルークゥバルバツケンに、取り巻きですら啞然としてしまう。

「お前のような下っ端ごとき陸曹ふぜいが……エリートのを僕を逮捕だと？ ……クフツ ……ふざけるなよおおッ！?!?!」

ジェルムルークゥバルバツケンの激昂に、本能的にギンガは身構える。

追い詰められた犯人が自暴自棄になった瞬間こそが最も警戒しなければならぬ。

そういう輩は普段からは考えられない行動に出る可能性が高いからだ。

「あゝ……なるほど、そういう方向で来るのね……」

しかし、ただ一人……ヒロゥラインハートだけは、やけに冷静だ

った。

「階級社会の弊害だよね。まあ…その可能性も考えられなくもない」

「なら無駄なあがきは」

「だから、今日はこの人にも来ていただきました」

「やや高いテンションで」どろどろと出入口の扉に向け声を出すと、扉が開き……。

「おっす」

『ツ！？！？』

陸士108部隊の総責任者であり部隊長、管理局の『古狸』の異名を持つ、ゲンヤリナカジマが飄々としたノリで入って来た。

勿論、後ろに控えていたデバイス完全武装済みの108部隊員たちと共に。

「いや〜、どーしても緊急だつて頼まれて来てみればよお。何だかえらいことになってるんだが？」

「……これはこれはナカジマ三佐、お久しぶりですね。このようなところに、しかもそのように武装した局員を引き連れて。おや？おかしいですね……今僕に向けられているのはデバイスのようですが、これは何事ですか？」

「ほお……」

つい数分前と同一人物が疑ってしまうほどの変貌ぶりに、ゲンヤはニヤリと笑みを浮かべる。

「いやな、別にたいしたことじゃねーのよ。民間人からのタレコミでな、何でも教導隊の高町なのは一等空尉の身が危険に曝されてるつて聞いてな、ここに来たわけよ」

「はて、おかしいですね……私たちはここでごく私的な会話をしていたにすぎませんか？」

「ほほお……。それじゃあ、その液晶ディスプレイに映っている高町一等空尉の画像はなんだい？」

「ああ、コレですか？お恥ずかしながら僕は結構ミィハーなところ  
があります。実は高町一等空尉のファンクラブに入っているんで  
すよ」

「ほお……高町一等空尉のファンクラブ、ねえ……」

「ええ。その四人は私の友人で、高町一等空尉のファンクラブに  
も一緒に参加している同志です。それで、私的な会話の流れでフ  
ァンクラブの話になったから私が持つ“とっておき”を見せてい  
たんですよ。」

「なるほど、ファンクラブねえ……。お前さんがた、今の話しは本  
当かい？」

茫然と立ち尽くしていた四人はゲンヤの質問に壊れたブリキのオ  
モチャのように首を縦に振った。

「なるほど。それじゃあ高町一等空尉のことは……」

「ええ、大好きですよ。それはもう……独り占めしたいくらいに……」

余裕タップリに、ジェルムルーク「バルバツケン笑って見せる。

「過激な発言も聞こえた気がしたんだが……」

「ただの言葉遊びですよ。それともナカジマ三佐には、僕たちが高町一等空尉に何か危害を加えようとした確固たる証拠でもお持ちなのですか？」

「ん〜……そこんところはどうよ、ギンガ？」

「は、はい。」

デバイスで武装した108部隊員とジェルムルーク・バルバツケンの取り巻きを牽制していたギンガは警戒しながらゲンヤの下に歩み寄る。

「おと……部隊長。この室内には私があらかじめ設置しておいたサーチャーがあります。そこにはここでのやり取りの全てが映像、音声として記録してあります。これは十分な証拠になります！」

「ってなわけだが？」

「構いませんよ。ナカジマ陸曹の言うサーチャーを確認してもらっ

ても僕としては一切構いません」

おかしい……。ゲンヤ同様、ギンガも感じた。

明らかに追い詰めているはずで、追い詰められているはずなのに、その余裕じみた笑みは何なのか……。

(この…低能平民バアカどもがああ……まんまと引っ掛かりやがったあッ！)

何も知らずにサーチャーを取り外すゲンヤとギンガをポーカーフェイスで取り繕いながらも、ジェルムルークバルバツケンには、内心では笑いを堪えるのに必死だった。

無論、勝利を確信した笑いを、だ。

(こんなこともあろうかとなあ、僕はブラックマーケットから仕入れてたんだよおッ！サーチャーの機能を妨害する電波を発生させるブラックマーケット仕込みの装置をなあ！)

内心では笑みが止まらない。と同時に、どうやって報復してやるうかという邪悪な思考が働き始めていた。

(これで……終わりだああ……古狸も、その娘もよおお！)

ジェルムルーク「バルバツケンの視線の先では今まさにギンガがサーチャーの映像を再生しようとしていた。

(勝ったあああッ！)

悠々と、ジェルムルーク「バルバツケンが勝利の言葉を考えようと目を閉じた瞬間

『あ、ああ……ばらまいた写真の反響はデカイな。』

「アア……？」

反射的に素の声が出てしまった。

何故なら、その音声には覚えがあったから。

『本局のイヌがどんなに魔法がバケモノじみてようと、むやみやたらに魔法を使うことができない。それが街中なら……なおさらだ……』



( だ…… )

『後はどんなにバケモノじみてようが所詮は非力な女。増援を含めてこっちは二十人。勝負にもならないよ』

( ナンダ…… )

『高町なのはを犯す！犯して犯して精神をブツ壊すまで犯して社会的に抹消してやる！ ……お前らも憧れのエース様をヤレるんだ！本望だろ！？アヒヤ ……アヒヤヒヤヒヤハハ ……！』

( バカナ……アリエナイ…… )

『バレやしないよ！例えバレたとしても！ ……僕のパパは少将なんだ……レジアス中将直轄の少将なんだぞおああ！』

( キロクサレテイル……ワケガナイ…… )

『カクゴシロヨ……タカマチナノハアアア……』

(ナゼ……ダ……)

『今夜、ヤル。準備しておけええッ!』

「ナンダソレハアアアア!」

次々と再生されていく映像と音声。

間違いなくソレは、ジェルムルーク<sup>II</sup>バルバツケンたちが言った言葉だ。

一言一句、反論の余地も無く。

「あゝ、そういえば、あんた達がここに来る前にさ……」

怒りでワナワナ震えるジェルムルーク<sup>II</sup>バルバツケンの少し後ろから、今まで沈黙していたヒロが静かに口を開いた。

「実はちょーっただけ面白いモノ見つけたんだよね」

「ッ!?!?!」

「もうあんたは分かってるよな」

そう言いながら、ヒロがポケットから出したのは、砕けたプラグだったモノ。

「経験則でさ……疑いたくなるんだよね、どうしても。だから念のため室内の怪しいところ調べてみたら、上手い具合にアダプター類に紛れるように隠れてたの見つけたってわけ」

「なんだい兄ちゃんソレは……」

「たぶん、サーチャアの機能を妨害するための電波を発生させるモノだと思います。これ、ホントよく出来てますよ」

「ほお……。んじゃあそいつも一緒に解析に廻しとくか」

「よろしくお願いしますね」

「……びびびびびび……」

再度、ゲンヤは厳しい視線でジェルムルーク「バルバツケン」に問い掛ける。

「状況的な証拠だけでもお前さんの言い分は崩せたわけだが？」

「……………」

ゲンヤの視線で、108部隊員たちのデバイスを構える手に力が入る。

「あんまり手荒な真似はしたかねえ」

108という部隊を率いる部隊長の顔でゲンヤはジェルムルーク「バルバツケン」を諭す。

「…………後悔しますよ？僕には優秀な弁護人が控えていますし、なにより父が黙ってはいない…………」

「そりゃあ楽しみつてもんだ。んじゃあ全員、連れてつてくれや」

ジェルムルーク「バルバツケン」を含め五人全員がバインドで拘束

され、一人ずつ連れていかれる。

「……覚えておきなよ……いつか必ず……お前たちを……アヒヤ……アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

ジェルムルークゥバルバツケン は壊れたように笑う。

醜悪に顔を歪ませながら。

「……………」

狂ったように笑い続けるジェルムルークゥバルバツケンに、おもむろに近づいたギンガは、ゲンヤの方を向き

「……お父さん……………」

「な、なんだ……………」

「フフツ……………」

ニコリと笑みを一つ浮かべた。

刹那。

パアアアン！

「ゲギヤアアアッ?!?!?」

腰が入ったギンガの右ストレートがジェルムルーク「バルバツケ」の顔に叩きこまれる。

(イタアアッ?!?!?)

憐れむ余地など無いのは分かっているが、それでもヒロは目を背けずにはいられなかった。

美形な部類に入るジェルムルーク「バルバツケ」の顔はアッ!という間に右半分だけが痛々しく倍ほどに膨脹してしまう。

勿論、意識は無い。

「フウッ! スッキリした!」

対するギンガといえば、清々しさが満面の笑みとして顔に顕れていた。

（ストレス、溜まっていたのかな……）

（……日増しにクイントそっくりになってきやがる……）

かくして、ジェルムルーク・バルバツケンと、その仲間が企てた『高町なのは襲撃計画』は未然に防がれ、余罪を含め全面解決に向け、最初の一步を踏み出し始めた。

痛烈なギンガの右ストレートを合図に。

こんにちは、色々な意味で少しばかりグロッキーな白金です。

タイトルがPV50万アクセスなんてありますが、実はすでに60万アクセスを超えていたりします。ありがとうございます！

少し欲を言っつてよいなら原作【再の章】の応援も是非！よろしくお願ひします。

そしてこの番外編、私の完全な息抜きなので、読んで2828くらいがちょうどいいかな〜なんて……

はじめに、この番外編は本編の時間軸を進めていることを頭に置いてください。

一応、続きもあつたりしますが、不評なら番外編そのものを消す感じなので。

続きの要望などがあれば感想などに付け足してください。

それではどうぞ！



機動六課が発足して早くも五日目の朝を迎えた。

期限付きのモデルケースということもあるが成果次第では正式部隊になるかもしれない機動六課だが、そこはやはり新設の部隊。

発足したばかりということもあり、二日経っても尚、部署問わず24時間フル稼働している。

その中でも一番体力を使っているのは他でもない新人四人 フォワード陣だ。

スターズ分隊にはティアナ・ランスター、スバル・ナカジマ。

ライトニング部隊にはエリオ・モンディアル、キャロル・ルシエ。

一応は分かれてはいるものの、新人なうえに教導のカリキュラムも基礎固めな第一段階ということもあり、まずは四人で基礎のトレ

ーニングから始めている。

基礎固めということとで教えるのは高町なのは。

実力も知名度も言葉通り雲の上の存在ということもあり、教導を受けるフォワード陣のモチベーションは最高に高い。

「しかし、観てるだけでその……心から同情するよな……」

はずなのだが……。

「うっ……でもさ、なんだかんだで楽しんでるみたいだよ？」

「ここまで自分を追い込むなんて、俺は……絶対無理。尊敬するよホントに……」

どうにも一部外野の感想は違っていた。

単純な話した。

なのはの教導カリキュラムはとにかくハード。

朝の5時前から夜の22時まで走って走って走り込んだり、ひたすら魔法を使ったりの繰り返し。

局員の事務仕事などでインターバルが入るものの、ほぼ二十四時間勤務に等しいのが連日続いていて、驚くべきは休日すら未定という地獄のような環境なのだ。

「おつ、来た来た。お〜〜い！あと六周〜！ガ〜ン〜バレ〜〜！」

のんきに大きく手を振りながらリンは応援するのだが

「……………うつさいわよ！暇ならアンタらも走りなさいよ！」

ゼーゼー息を乱しながら不機嫌を隠そうともしないティアナが叫び、その少し後ろからは

「あいす〜……………うつ〜……………あ〜〜い〜〜す〜……………」

疲れがピークを迎え、思考がアイス一色になりながらもティアナを追うように走るスバルの姿。

さらにその後方からは仲睦まじく並走しながらのエリオとキャロ。

「あつ、兄さんとリンさん。おはようございます!」

「お兄ちゃん、リンお姉ちゃん、おはようございます。」

年齢が離れているためティアナとスバルよりは幾分か軽いものの、それでも体力的にはキツイはずなのにまだまだ余裕があるらしいエリオとキャロは律儀に走る足を止めて挨拶する。

「おはよう。朝から大変だなく。大丈夫か?」

「はい!全然。体力には自信があるんです!」

「わ、わたしも!」

(この二人……ホントに九歳?)

質問しておいてなんだが、思わず首を傾げたくなる衝動にヒロは  
駆られる。

「キャラ〜。辛かったらちゃんとお姉さんに言っただよ〜」

「は　フニアアアッ!？」

「ウンウン。愛い奴よのお〜」

「リンおねえ……そこ　ふぁあぁッ!？」

ウリヤウリヤ〜と勢いよく背後からキャラの肢体を、リンはトレーニングウェアの上からまさぐる。それはもうセクハラどころというより確実にアウトな手つきで。

「それにしても、今日も晴れそうだな〜」

「兄さんまさかのスルーですか!？」

「そついえば今日の朝ごはんは何だっけ」

「まさかの聞こえないフリ!？」

「エリオく。リンの胸はっか見て……お兄さんは将来が心配だぞくく?」

「ちょッ!兄さ」

「エリオ君の……エッチくッ!」

「フガラッ!?!」

「おおおッ!キャラのビンタでエリオが横三回転しながら吹っ飛ばされた!」

「エリオ君なんて……知らない!」

「キャラ……キャラお……」

涙目なキャラはそのまま猛ダッシュで去っていく。

残されたのは

「いやく青春のページだねえく」

キャラの肢体をまさぐった効果なのか、やけに肌がツヤツヤした  
リンと

「キャラは恥ずかしがり屋さんだな〜」

元凶？を作り出した本人のくせにお気楽な笑い声を挙げるヒロ。  
さらには

「ひ、ひどいですよに 兄さん！」

一番の被害者エリオが涙ぐむという、中々に混沌とした状況が残  
された。

「またキャラに……うう〜……」

「エリオよ……それはちがうぞ」

「……………え？」

「よく思い出してみろよ。さっきのキャラは確かに怒っていた。こ

れは間違いない」

「だからそれは兄さ」

「だがな！」

ガシツ！と、ヒロは勢いよくエリオの肩に手を置き、真剣な表情でエリオと見つめ合う。

「キャロ……エリオが『嫌い』なんて、言ってないだろ？」

「ッ！？」

「そしてよく思いかえしてみよ。キャロが怒ったときって、なにが原因だった？」

「それはその……」

「そう！答えはリンの胸をエリオが食い入るように凝視したからだ！」



「エリオのエツチい〜」

「だから違いますよ見てません誤解ですッ！」

ワガママバディを隠しながらニヤニヤなリンに顔を真っ赤にしながらエリオは抗議する。

「だがな、よく考えてみる」

「？」

「キャラはエリオがリンの胸を食い入るように凝視したことに怒ったわけじゃない。エリオの興味が必要以上に他の女の子に向いたことに我慢がならなかった。つまりこれは嫉妬だ！」

「しっ……と……。キャラ……が……僕……に？」

「今はまだそれがキャラ自身どんな感情かわかっていないから、キャラは行き場の無いモヤモヤをビンタという行為にあらわしてしまった。ここから導き出される可能性は」

「か、可能性……は……」



「そそそつですね……兄さん、ありがとうございます！」

言い終わるやいなや、律儀にも頭を下げてから走って行くあたりは流石に精神年齢の高さが輝くところかもしれない。

「いや〜、良い事するつてのは気持ちが良いもんだなあ〜」

「え〜。ちょっと悪ノリし過ぎじゃない？カワイソウだよ〜」

「そんなこと言ってるけどリン、顔 悪い顔してるぞ？」

「え〜？気のせいだよ〜」

朝も早くから往来の真ん中でニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべる男女二人。

不気味にもほどがある。

「…で、いつまでそのカッ」なの？」

「……」

不意打ち気味なりんの言葉に一瞬ドキッとしたのか、ヒロは観念したように万歳する。

「なんや、バレてたんかいなあ……」

刹那。妙な喋り口調と共に、ヒロの全身が輝き出し、身体が縮んでいく。

光りが消え、現れたのは白黒の騎士甲冑に、背中から白黒の翼を生やした機動六課の部隊長、八神はやて。

「もお〜。はやてちゃん！いくらなんでもやり過ぎですう〜！」

さらに、はやての肩に乗る同じく騎士甲冑姿の一見、美少女フィギュアにしか見えない全長約30センチなユニゾンデバイス、二代目祝福の風リインフォース。ツヴァイが姿を現した。

「いつから気付いてたんや？」

「最初っから」

「ムウ〜……リンとのユニゾンの変身魔法やからバレへん自信はあつたんやけどなあ〜……」

騎士甲冑を解除して、いつもの陸士用の制服姿に戻ったはやては悔しさを滲ませる。

「まあ、私がヒロとニセモノを間違えるなんてことなんて、はやてが巨乳になるくらいアリエナイって!」

「どづいつ意味や!?!」

「はやてちゃ〜ん……主旨がズレてますよお〜……」

「キヤーキヤーと終わりを迎えないであろう追いかけっこを始めた『ある意味似た者同士』なリンとはやてを観ながら

「まずはエリオとキヤロのフォローですね……今日も忙しくなりそうですう〜……」

二代目祝福の風は今日もマイスターのフォローに忙しくなるなど、ひそかに頭を悩ませるのだった。

自分のニセモノ（はやて）がまさか変身魔法で自分に化けた姿を使って、いたいけ純情ピュアハートな少年少女の芽吹く前の小さな恋を弄り倒しているなど知るよしも無い化けられた本人、ヒロゥラインハートは他の人たちより約一時間遅い朝の目覚めを迎えていた。

「……………眠い……………」

とはいっても、それでもまだ朝の6時5分前。

尋常ではないほどの眠気が彼を襲う。

そもそも民間協力者なヒロはそれほど時間に束縛されない身分になっっている。

立場は、多忙なフェイトの軽い補佐と、遊撃。

しかし、基本的には御人良しで極甘で責任感の塊なフェイトがだ、そもそもがヒロにハードな仕事を頼むわけもない。

寧ろヒロがフェイトの仕事を内緒で掠め取る日々という、なんとも奇妙な光景は、早くも六課での名物となりつつある。

とはいえ、品行方正かつエリートなフェイトの身内としては、いらぬ恥をかかせるわけにはいかないという隠れた事情も抱えているので、必然的に生活リズムは規則正しいモノにしたいわけだが

「……………起きます…か…」

無意味に夜更かしするのが何より趣味で、時には自分の研究に熱中すぎて夜が明けるときも多々あるくらいで、それはそれは難しい部類のミッションだったりする。

とりあえずは朝食まで時間があるので軽く散歩をしつつ朝の澄んだ空気でも吸っちゃってみようなどと思い付きで寮から出たところで、見知った人物が何やら神妙な面持ちで歩いているのが目に入る。

「……………ふむ？」

気になったヒロはとりあえず、神妙な面持ちの人物の後を尾行っ  
ぽい足取りで追うことにした。

「……はあ〜」

本日は朝から晴れだというのに、心は曇り空。

テンションは最悪に近かった。

「……はあ〜」

再度、深いため息が零れてしまう。

自分でもらしくないとは思っている。



どんなモノでも貫いてブツ壊す。それが自分なはずなのに、自分の決めたことに揺らいでしまっているのだから笑えてくる。

「らしくねえ……らしくねえぞ……あたしは鉄槌の騎士ヴィータだ！こんくらいのこと……出来ないでどうすんだ！」

「なにが出来ないんですか？」

「そりゃあアレだ！この　　って誰だ!？」

「おはようございます、ヴィータさん」

「な、なんだヒロかよ……驚かせんなよな……」

大声を出してしまったことが恥ずかしかったらしく、ヴィータの頬が赤みを帯びる。

「あと、あたしのことと呼び捨てでいいっての」

少しだけぶっきらぼうなのは彼女の特権でもある。

「それじゃあ……ヴィー……タ……」

「お、おう……」

「何か悩みごと、ですか？」

「な、なんでそう思うんだ？」

「なんかさっき難しい顔してたのを見たので」

「ウツ！……見られてたか……」

バツが悪そうにヴィータは口から目を逸らす。

「……あの、な……」

「ほ」

すう〜つと深呼吸。意を決して口を開く。

「男つてのは……」

「はい」

「……その……」

「はい」

「やっぱり……」

「はい」

「おっぱい大きいほうが好きなのか!？」

「はい ……はい?」

紡がれた言葉は、質問された側が思わず疑問で返してしまつぽど、突拍子もないモノだった。

PV50万アクセス突破記念番外編 〔とある幼女の一念発起〕

続く？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6862o/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS EX【, Us】

2011年11月16日22時35分発行